

SINCE 1965
2025

令和7年

舞鶴高専

創立60周年記念誌

60th
ANNIVERSARY*

SINCE 1965
2025

令和7年

舞鶴高専

創立60周年記念誌

60th
ANNIVERSARY*

創立60周年を迎えて

校長 林 康 裕



舞鶴工業高等専門学校（以下、舞鶴高専）が創立60周年を迎えることができました。本校創設期に尽力された関係者、文部科学省をはじめとして、京都府、舞鶴市、高浜町などの周辺の自治体や地域の皆様、国立高等専門学校機構本部、教育・研究の発展に尽力してこられた教員、教育研究活動を支えてこられた技術職員及び事務職員、本校の活動を支援していただいている後援会、同窓会、地域テクノアカデミアなどの関係企業の皆様など、すべての方々に、あらためて心より感謝を申し上げます。

舞鶴高専は、昭和40年（1965年）に、国立高等専門学校の第4期校の1校として舞鶴に創設されました。創設当時の社会的なトピックスやイベントをピックアップしますと、まず、「地球は青かった」で有名なガガーリンが、人類初の有人宇宙飛行を成功させたのは昭和36年です。アメリカの宇宙船アポロ11号が月面着陸に初めて成功したのは、昭和44年のことです。昭和38年に電力不足の解消・安定供給を目指した黒部ダムの完成、昭和39年には東海道新幹線が開通し、東京オリンピックが開催されています。昭和40年には名神高速道路が全線開通し、日本最初の超高層ビルとして有名な霞ヶ関ビルが着工されています。また、東京五輪開催後の不況を脱し、高度経済成長時代の好景気（いざなぎ景気）が始まろうとする時期でした。新・三種の神器（3C：カラーテレビ、車、エアコン）などが急激に普及していった時期でもありました。人口が1億人を超えたのは昭和42年のことです。昭和45年には日本万国博覧会が開催されています。令和2年に2020東京オリンピックが開催され、令和7年には大阪・関西万国博覧会が開催されるというイベントの酷似性はあるものの、テレビ業界自体が衰退しつつあったり、少子高齢化・人口減少が我が国の未来を左右する重要課題となったりしつつあり、状況は大きく変容しています。

舞鶴高専の10年誌を読ませていただくと、舞鶴高専の立ち上げに際して関係各位の熱い想いが伝わってきます。舞鶴高専の創設時、京都府や舞鶴市の積極的な誘致の成果として、文部省が11月に決定して、2月には現在の敷地を自衛隊が整地、入学試験実施、11人の初年度教員採用決定など、凄まじい勢いを感じます。現在なら、多くの手続やら調整で、このような迅速さと柔軟さを持った意志決定をできなさそうに思えます。形ばかり整えることにとらわれることなく、急激に変化する社会に適応していくために、本当に必要な改革を迅速に行っていく姿は、現在、見習うべきことが多くありそうな時代に思えます。また、舞鶴高専の立ち上げには京都大学が全面的に協力し、木村作治郎先生が12年にわたって初代校長を務められています。良い意味で、京都大学の「自由の学風」と、教職員の自治の精神が舞鶴高専に根付いたのではないかと想像しています。また、舞鶴高専の教職員の方々は、学校と学生のことを大切にする方々が多いのが文化となっていることも誇らしい点です。

創設期には、時代を反映して機械工学科2クラス、電気工学科1クラスでスタートした舞鶴高専ですが、京都府からの要望を受けて土木工学科が加わります。その後も幾度かの学科改組を経て、現在の機械工学科、電気情報工学科、電子制御工学科、建設システム工学科の4学科構成となっています。平成12年には専攻科が設置され、平成27年度から総合システム工学専攻に改組されて現在の3コース制となっています。

舞鶴高専50周年以降の10年間に目を移すと、第5期科学技術基本計画(平成28年(2016年)1月閣議決定)で、「サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会」として、情報化社会(Society 4.0)に続いてSociety 5.0が初めて提唱されました。また、平成30年には、いわゆる「働き方改革関連法案」が可決され、時間外労働の上限の厳格化が行われ、DX化を活用した生産性の向上が望まれるようになっていきます。近年、ChatGPTに代表される生成型AI、レベル5の自動運転車の実用化競争が活発化しています。社会から求められる技術も、舞鶴高専の創設期から60年経過する間に大きく変化してきました。定年延長が進む中、学生が舞鶴高専を卒業した後、技術者として活動する期間は50年以上になると考えられます。舞鶴高専は、これまで以上の社会や技術の変化に対応していかなければならないでしょう。半世紀を生き抜ける技術者としての姿勢や精神を学び、人生を楽しみながら豊かに生き抜いていけるエネルギーを充電できるような舞鶴高専にできればと考えています。

2019年には新元号「令和」となり、令和2年から日本ではコロナ感染症(COVID-19)が蔓延拡大し、世界的な流行となりました。国立高専の中でも最大規模の学寮を有する舞鶴高専の教育や学生生活だけでなく、学校運営そのものにも大きな影響を及ぼしました。教職員の精神的・肉体的負担は想像を絶するものであったであろうことは疑う余地がありません。コロナ禍の収束が見え始めた令和5年4月から着任した私でも、教職員の表情を見た瞬間からその一端は感じることができました。前述のように、コロナ禍の最中に2020東京オリンピックが開催されました。令和3年から始まったロシアのウクライナ侵攻に起因した原油高に伴うエネルギー価額の高騰、円安の進行、物価上昇と人件費の高騰、さらには人手不足も舞鶴高専の運営に影響を及ぼしはじめています。また、15才人口の減少や近隣自治体による私立高校も含む授業料無償化が、どんどん公立高校の定員確保を難しくしています。舞鶴高専では、特別選抜を70%に引き上げています。また、和歌山高専との間で結んでいた追選考制度を、令和7年度入試からは明石高専や奈良高専も含めた近畿国立4高専の間での追選考制度へと発展させました。近畿地区では、令和9年4月に大阪公立大学高専の中百舌鳥移転、令和10年4月に滋賀県立高専の開校、を控えています。今後、近畿国立高専間での幅広い連携を深めるとともに、舞鶴高専の魅力のさらなる増進と見える化が必要と考えています。

一方、学生が参加するコンテストも多くなっています。高専デザインコンペティション、高専ロボットコンテスト、高専プログラミングコンテストなど30年以上の歴史あるコンテストだけでなく、平成19年から英語プレゼンテーションコンテスト、令和2年からディープラーニングコンテスト(DCON)、令和4年からは高専GIRLS SDGs×Technology Contest(GCON)などが開催されはじめています。コンテストの運営は、アウトソーシングされる傾向にありますが、指導・引率する教職員の皆様の負担はますます増加傾向にあります。その一方で、自己点検・評価、高等専門学校機関別認証評価、舞鶴工業高等専門学校外部評価委員会による評価、数理・データサイエンス・AI教育プログラムの自己点検・評価、国立高専教育国際標準認定評価(KIS)などの評価などを実施して教育改善を行うこととされています。業務のDX化だけでは不十分で、業務の正しい取捨選択も含めた合理化を行ってきたつもりですが、さらなる働き方改革を行っていければと考えています。

舞鶴高専の最大の特徴である学寮には約7割5分の学生が生活していますが、希望学生を収容しきれないでいます。高浜町や舞鶴高専の後援会のご配慮により、令和8年度より高浜町の教職員宿舎を、舞鶴高専の学生用宿舎(14人収容)として利用させていただける見通しとなりました。今後も、舞鶴市をはじめとして地域の中心部においても学生が活動できる拠点を創出し、地域と共存共栄しながら活性化に貢献しつつ、今後の日本の未来を担える優秀な技術者を輩出していければと考えています。

■ 教育理念・教育方針

教育理念

広く工学の基礎と教養を身につけ、問題発見・解決能力、創造力を有し、地域・社会の発展に寄与できる国際感覚豊かな実践的開発型技術者を育成する。

教育方針

1. 実験・実習、演習、ものつくりを重視する
2. 基礎に立ち返って考えさせる
3. 自ら学ぼうとする意欲を育てる
4. 豊かな教養と国際性を育む

校章



金色の円弧は日本海に面する良港を表し、港湾工業都市として海と深く関わり合いながら発展する舞鶴を象徴している。円は円満の相で完全さを想わせ、港口の開きは積極性と向上発展を示している。

(京都工芸繊維大学 福永俊吉名誉教授考案)

ロゴマーク



中央のアーチはMAIZURU（舞鶴）の「M」を、その下は舞鶴湾を中心とした日本海を表しています。アーチの中心が舞鶴高専でありアーチは世界の架け橋を示しています。これは本校の教育理念である国際性・産業の繋がりを表しています。

(舞鶴工業高等専門学校 卒業生 竹野峻輔考案)

学校旗



学校紹介

舞鶴工業高等専門学校校歌

森田勝治 作詞
安部幸明 作曲

爽やかに (♩ = 108 ~ 112)



1. 鬼斧千年の荒磯に 咽ぶ親潮末遠く
七つの海に連りて 世紀の文化行き通ふ
西日本の北門に 学と人とを織りなして
絢爛の花培へる おゝうるはしの舞鶴高専
2. ときはの姿霧こめて めぐりの山は語らねど
妙なる黙示しげくして 悠けく潔く静かなる
不断の努力撓みなく 知識と技術を糾ひて
科学の粋を究め行く おゝかぐはしの舞鶴高専
3. 世代の光先駆して こゝ舞鶴の一角に
濁りにそまぬ清纯の 意気高らかに溘瀾と
朝に夕いそしみて 不拔の力錬へたる
誉は遠く輝きて おゝなぐはしの舞鶴高専

沿革概要

昭和39年12月28日	京都府舞鶴市に舞鶴工業高等専門学校を設置することが決定
昭和40年1月18日	京都大学本部に舞鶴工業高等専門学校設立準備会を設置
昭和40年4月1日	国立学校措置法の一部を改正する法律(昭和40年法律第15号)が公布され、機械工学科2学級及び電気工学科1学級を置く舞鶴工業高等専門学校を設置
昭和40年4月26日	開校式並びに第1回入学式を舞鶴重工体育館において挙行し、舞鶴市平の旧舞鶴引揚援護局の施設を仮校舎及び仮寄宿舎として開校
昭和41年3月28日	校舎、寄宿舎(第1期)工事竣工
昭和41年3月29日	仮校舎及び仮寄宿舎から本校舎及び本寄宿舎に移転
昭和44年4月1日	前期及び後期の2学期制、また低学年全寮制とし、寄宿舎を学寮と呼称
昭和45年3月18日	第1回卒業式を挙行
昭和45年4月1日	土木工学科1学級を増設
昭和50年10月18日	創立10周年記念式典を挙行
昭和53年5月10日	陸上競技場を(財)日本陸上競技連盟から第3種陸上競技場として公認
昭和55年3月31日	第2体育館新営工事、第2グラウンド整備工事(12,269平方メートル)及び武道場増築工事竣工
昭和55年4月26日	創立15周年記念式典を挙行
昭和56年9月30日	普通教室新営工事竣工
昭和60年10月13日	創立20周年記念式典を挙行
平成2年4月1日	機械工学科2学級を機械工学科1学級、電子制御工学科1学級に改組
平成5年3月31日	電子制御工学科棟新営工事竣工
平成6年4月1日	土木工学科を建設システム工学科に改組
平成11年3月29日	学寮(女子寮)改修工事竣工
平成11年5月31日	太陽光発電設備完成
平成12年4月1日	専攻科(電気・制御システム工学専攻、建設・生産システム工学専攻)を設置
平成12年4月7日	第1回専攻科入学式を挙行
平成13年1月22日	低学年棟・地域共同テクノセンター新営工事竣工
平成14年3月26日	専攻科棟新営工事竣工
平成14年4月1日	第1学年について混合学級を編成
平成15年2月24日	校舎改修工事竣工
平成16年4月1日	独立行政法人国立高等専門学校機構が設置する高等専門学校となる電気工学科を電気情報工学科に名称変更
平成16年12月22日	MIRECと学術交流協定を締結
平成17年2月9日	第1回舞鶴工業高等専門学校参与会を開催
平成17年4月29日	創立40周年記念式典を挙行
平成17年5月12日	教育プログラム「生産・情報基礎工学」がJABEEから認定
平成17年9月22日	全校TOEIC定期試験の導入
平成17年12月8日	学寮無線LANの新設
平成17年12月22日	タイ キングモンクット工科大学ラカバンと国際交流協定を締結
平成18年4月1日	建設システム工学科に都市環境系科目履修コースと建築系科目履修コースを導入
平成18年4月28日	韓国 高麗大学と国際交流協定を締結
平成18年9月8日	中国 大連職業技術学院と交流協定を締結
平成18年9月26日	台湾 国立高雄第一科技大学(現 国立高雄科技大学)と交流協定を締結
平成19年3月28日	京都大学大学院工学研究科と教育研究交流協定を締結
平成19年3月30日	京都工芸繊維大学と包括協定を締結
平成19年5月10日	大阪大学工学部・大学院工学研究科と教育研究交流協定を締結

平成20年3月3日	ベトナム交通運輸大学と学術交流協定を締結
平成20年3月11日	京都北都信用金庫と産学連携に関する協定を締結
平成20年9月15日	ベトナムハノイ建設大学と学術交流協定を締結
平成20年12月1日	JSTイノベーションプラザ京都と産学連携に関する覚書を締結
平成21年11月5日	教育プログラム「生産・情報基礎工学」JABEEの継続審査を受審した
平成23年9月13日	近畿4高専と成都2校との間に学術協定を締結
平成24年1月30日	北陸先端科学技術大学院大学と推薦入学に関する協定を締結
平成25年5月16日	丹後機械工業協同組合と産学連携に関する協定を締結
平成25年10月1日	舞鶴市と包括的連携協力に関する協定を締結
平成26年1月23日	社会基盤メンテナンス教育センター設置
平成26年3月28日	学寮(7号館)新営工事竣工
平成27年4月1日	電気・制御システム工学専攻と建設・生産システム工学専攻を総合システム工学専攻に改組
平成27年4月25日	創立50周年記念式典を挙行
平成27年5月15日	兵庫県立大学大学院シミュレーション学研究科と推薦入学に関する協定を締結
平成28年2月29日	学寮(2・3号館)改修工事竣工
平成28年3月31日	京都府、京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都学園大学、京都文教大学、京都大学と、地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)に係る連携・協力に関する協定を締結
平成28年5月20日	兵庫県立大学大学院応用情報科学研究科と推薦入学に関する協定を締結
平成28年12月1日	兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科と推薦入学に関する協定を締結
平成29年9月1日	近畿地区6高専と災害等における相互応援に関する協定を締結
平成30年4月1日	早稲田大学大学院情報生産システム研究科と推薦入学に関する覚書を締結
平成30年6月15日	和歌山大学システム工学部と第3学年次編入学の情報提供に関する協定を締結
平成30年10月10日	養父市と社会インフラ維持管理連携協力に関する協定を締結
平成30年12月19日	舞鶴市、KDDI株式会社との地域活性化を目的とした連携に関する協定を締結
令和元年11月1日	英国 ボーツマス大学と学術交流に関する覚書を締結
令和2年4月1日	京都府と就職支援に関する協定を締結
令和2年4月21日	学寮(4号館)改修工事竣工
令和3年2月26日	実習工場A棟改修工事竣工
令和3年3月31日	構内ライフライン工事(1期目)竣工
令和3年6月30日	福知山公立大学と包括的連携協力に関する協定を締結
令和4年3月31日	構内ライフライン工事(2期目)竣工
令和4年9月15日	国際協力機構(JICA)と道路アセットマネジメントに関する覚書を締結
令和5年3月10日	学寮(5号館)改修1期工事竣工 情報科学センター改修工事竣工
令和6年2月14日	ものづくりラボ運用開始
令和6年3月8日	建設システム工学科棟1階改修工事竣工
令和6年3月29日	学寮(5号館)改修2期工事竣工
令和6年4月2日	高浜町と包括的連携協力に関する協定を締結

■ 校舍全景写真





教育研究支援センター 西村 良平

■ 校内風景





創立60周年記念式典

4月7日、「創立60周年記念式典」を挙行了。式典は舞鶴高専第1体育館にて、令和7年度入学式に続けて行われ、出席者は新入生、保護者のほか、来賓、名誉教授、教職員等約450名が参加した。

記念式典では林康裕校長が、「北近畿の地域創生やSDGsを支える人財育成拠点・研究拠点として、企業様・自治体や住民の方々などとも協働して、舞鶴市や高浜町をはじめとした周辺地域だけでなく、我が国の持続的発展に貢献していく」と式辞を述べた後、舞鶴市長代理 副市長 福田豊明氏から祝辞が述べられた。

続いて、加登文学 創立60周年記念事業委員長から60周年記念事業の概要報告が行われ、舞鶴高専公式マスコットキャラクター「コウちゃん」のお披露目や、入試広報グッズについて紹介があり、同会場にて創立60周年記念「最近10年のあゆみ」ポスター掲示が行われていることについて報告があった。最後に、谷口功 独立行政法人国立高等専門学校機構理事長からの謝辞が代読された。

舞鶴高専公式マスコットキャラクター「コウちゃん」は、創立60周年記念事業の一つとして企画され、より多くの方々にPRし、愛着や親しみを持ってもらえるマスコットキャラクターの作成を目指して、在校生や教職員、卒業生から公募を行った。本校卒業生 山下真依さんの作品が最優秀賞として選ばれ、記念式典にてお披露目された。今後は、舞鶴高専の広報活動やイベントなど様々な場面で活躍していく。



式辞 林康裕校長



舞鶴高専公式マスコットキャラクター「コウちゃん」



入試広報グッズの紹介



創立60周年記念 「最近10年のあゆみ」ポスター掲示

巻頭言	舞鶴工業高等専門学校長 林 康裕
	教育理念・教育方針
	校章・ロゴマーク・校旗・校歌
	沿革概要
	校舎全景写真・校内風景写真
	創立60周年記念式典

目 次

第1章

創立60周年を祝して	後援会会長 竹原 貴美子	2
	同窓会会長 中地 俊元	3
	元校長 内海 康雄	4
	元校長 齋藤 福栄	5
	元校長 太田 泰雄	6
旧教職員の回想		7
本校卒業生教職員の回想		15

第2章 最近10年のあゆみ

1. 教務委員会	20
2. 学生委員会	24
3. 学寮委員会	28
4. 各部門各学科及び専攻科	32
5. 学術情報センター	46
6. 地域共同テクノセンター	48
7. 教育研究支援センター	50
8. 国際交流センター	52
9. クラブ・同好会のあゆみ	54
10. プロジェクト	70

【資料編】

年度別学生総数	80
日本学生支援機構奨学生数	82
研修旅行実施状況	83
就職状況	84
進学状況	86
年度別卒業者・修了者数	90
年度別入学者数卒業者数	91
入試・入学生の状況	94
在職者一覧	99
新任者・退任者一覧	100
教員構成人員の移り変わり	104
事務構成人員の移り変わり	104
役職教員一覧	105
後援会役員	106
科学研究費一覧・公開講座一覧	107
施設・財政等の状況	108

創立60周年を祝して

後援会会長 竹原 貴美子



このたび、舞鶴工業高等専門学校が創立60周年という大きな節目を迎えられましたことを、後援会を代表して心よりお祝い申し上げます。

昭和40年の開校以来、長年にわたり地域に根ざし、優れた実践的技術者を育成してこられた本校は、日本の産業界に多大な貢献をされてまいりました。その礎を築かれた歴代の校長先生をはじめとする教職員の皆様、学校運営に携わってこられた関係者の皆様、そして卒業生の皆様のたゆまぬ努力と熱意に、改めて深い敬意と感謝を申し上げます。

本校の学生の皆様は、専門分野における学びはもとより、クラブ活動や学校行事にも積極的に取り組み、充実した学生生活を送っておられます。その姿勢は地域社会の中でも高く評価されており、卒業後の進学や就職においても毎年非常に高い実績を残しておられます。これは、教職員の皆様の献身的なご指導と、学生の皆様の努力の賜物であると感じております。

後援会では、保護者の皆様からのご支援のもとに、学生の学習環境の充実や学校行事の支援など、さまざまな活動を行っております。近年では、保護者と学校との連携をさらに深めることを目的に、情報発信や意見交換の機会を積極的に設けるなど、より開かれた後援会づくりに努めております。これらの活動が少しでも学生の皆様の学びや成長の後押しとなれば、会員一同にとって何よりの喜びです。

また、60周年記念事業の一環として誕生した「舞鶴高専公式マスコットキャラクター」は、在学生や教職員、卒業生から公募し、高専祭での来場者投票を経て選ばれたものです。多くの方々に愛着と親しみを持っていただける存在として、本校の魅力を発信していくシンボルとなることを期待しております。

舞鶴高専はこれまで、地域との連携や産学官との協働を通じて、地域社会にも貢献してこられました。地元企業や自治体とのつながりを活かしながら、学生の実践力や課題解決力が磨かれていることは、後援会としても大変心強く感じております。

また、本校の卒業生の皆様が、各分野で活躍されていることは大きな誇りであり、これから社会に羽ばたく在学生にとっても大きな励みとなっています。今後ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

60周年という節目を迎えるにあたり、改めて本校の歩んできた歴史の重みと、その中で築かれてきた信頼と実績を大切にしながら、後援会としましても引き続き舞鶴高専の発展に微力ながら貢献してまいりたい所存です。

結びに、本校の更なる飛躍と、在学生・卒業生の皆様のご活躍を心より祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

創立60周年を祝して

同窓会会長 中地 俊元



本年、舞鶴工業高等専門学校が創立60周年を迎えられましたこと、同窓会員を代表し、心よりお祝いを申し上げます。

昭和40年(1965年)、舞鶴の地に産声を上げた舞鶴高専が、以来60年の長きにわたり、社会の変遷と技術革新の波を乗り越え、常に時代を先導する優秀なエンジニアを育成し、輩出してこられたことは、私たち卒業生にとって大きな誇りです。

私たち卒業生にとって、舞鶴高専は単なる学び舎ではありません。中学卒業後の多感な5年間という青春時代の思い出が深く刻まれた、大切な場所です。厳しくも温かい先生方のご指導のもと、当時全寮制の中で、毎朝歌った校歌「鬼斧千年の荒磯に咽ぶ親潮末遠く〜、おゝうるはしの舞鶴高専」は今も鮮明に記憶に残っています。学寮「鶴友寮」での集団生活、寝食を共にした仲間たちと切磋琢磨し、夢を語り合った日々は、今も色褪せることなく、私たちの心の奥底に鮮やかに蘇ります。

卒業生は、それぞれの専門分野で社会の第一線で活躍しており、その活躍は多岐にわたります。電気・電子、機械、建設などのあらゆる産業分野において、舞鶴高専で培った専門知識と実践力、そして何よりも「技術をもって社会に貢献する」という精神が、私たちの活動の根幹を成しています。母校の発展と卒業生の活躍は、私たち同窓生にとって大きな喜びであり、誇りです。

60年の歴史の中で、舞鶴高専は数多くの優秀なエンジニアを育成し、地域社会、そして日本の産業界の発展に大きく貢献してこられました。近年では、グローバル化や情報化の進展、そして持続可能な社会の実現といった新たな課題に対応するため、教育内容の改革や国際交流の推進、地域連携活動の強化など、常に進化を続けています。

母校が、時代のニーズを的確に捉え、未来を見据えた教育に取り組んでいることを、同窓会長として大変心強く感じています。

この記念すべき60周年を機に、私たちは改めて、舞鶴高専がこれまで築き上げてきた輝かしい伝統と実績を再認識し、未来へのさらなる発展を誓いたいと思います。同窓会としても、母校の発展のために、微力ながら最大限の支援を続けていく所存です。

在校生の皆さんには、舞鶴高専の歴史と伝統を誇りに、自信を持って学び、未来への扉を開いてほしいと願っています。

最後に、舞鶴工業高等専門学校の今後益々の発展と、教職員の皆様、在校生の皆様、そして関係者の皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げ、創立60周年のお祝いの言葉とさせていただきます。

創立60周年にあたりまして

元校長 内海 康雄



舞鶴高専の創立60周年、誠におめでとうございます。

これまでの卒業生、保護者、教職員ほかの関係の皆様のご努力のおかげであり、感慨深いものがあります。また機構本部の研究推進・産学連携本部におりながら、皆様と過ごした日々を、思い出しております。

コロナ流行の前には、学内外の催事と合わせて、学生と一緒に参りました後援会の各支部で、保護者の皆様と歓談しました。コロナ流行の際には、その対応がとてもしがしくなりました。学寮では、個室化、食事など、学生・保護者・教職員・食堂ほかの方々のご支援を頂きました。改めまして深く感謝申し上げます。

舞鶴高専の位置する北近畿地域は、綾部・福知山などの工業団地を含めて、GDPが5000億／年ほどあります。一方、人口の減少が進む中で、地域のステークホルダーが一つにまとまって、将来に向けて活動する必要があります。

具体的には、舞鶴市に防災のための舞鶴市総合モニタリング情報配信システムを設置して頂きました。現在、防災士養成講座が学生・市民・市職員に参加頂いて続いています。IT農業と地域振興を目指す「まいる未来の海プロジェクト」なども支援して頂きました。京都府中丹広域振興局により、中丹イノベーション推進プログラム－中丹CIP（Company Innovation Promotion）プログラム－が令和5年度から始まりました。参加された地域の方々の熱い思いに触れるにつけても、心強い限りです。

高専は、将来の地域と日本を支える学生を輩出しています。積上げ型の学習と共に、創立当初から続いているインターンシップなどを含めて、課題解決型の学習PBL（Project Based Learning）を行ってきました。卒業生の活躍のおかげで、産業界からの高い評価を受けています。

舞鶴高専をはじめとする各キャンパスの活動と共に、Society 5.0に対応する人材育成プロジェクトとして、GEAR/COMPASSが機構本部により行われています。その成果は令和7年度までに、横断的能力の涵養に対応できるようにMCCplusに落とし込まれます。今GEARプロジェクトの総括リーダーを務めており、文科省をはじめとする各省庁・財団・業界団体へ、高専の活動を説明して、ご支援をお願いしております。内閣府からは、活動全体を総合知の現れとして、評価して頂きました。これらが国の進めているアントレプレナーシップの醸成、スタートアップの実現へとつながっていくと思います。

世界が混沌としつつある中で、日本の人口は減少しています。国連の人口推移の予測によれば、今後はインドの台頭が見込まれています。また、世界と各国内で格差拡大の影響が懸念されています。将来の地域と日本を支える学生の皆さんには大きな期待がかけられています。技術が社会を動かす大きな力となっている現在、学生の皆様には、技術者としての倫理を考えて頂きたいと思います。

これまでに共に活動した皆様方に、重ねて感謝申し上げます。これからの舞鶴高専の発展をお祈り申し上げますと共に、少しでもご支援できればと思っております。

創立60周年を祝して

元校長 齋藤 福栄



舞鶴工業高等専門学校創立60周年を迎えるに当たり、心からお祝いを申し上げます。

2015年春、着任早々に創立50周年記念式典を開催したことを思い出します。高専制度の歴史、舞鶴高専の歩みを認識し、先人の努力に思いを致すよい機会となりました。記念講演の講師として来ていただいた卒業生の田中邦裕氏の起業されたさくらインターネット株式会社は、本格的なAI時代を迎え、益々重要性を増すデータセンター事業等で大きな飛躍を遂げられ、自らもAI戦略会議構成員として我が国の政策立案に参画されるなど多方面で活躍されています。高専卒業生の活躍が、メディアに取り上げられる機会も珍しくなくなりました。活躍されている卒業生の皆さんの姿は、優れた高専教育の証左であり、関係者に大きな勇気を与えてくれています。

在任時、「KOSEN（高専）4.0 イニシアティブ」事業が開始され、本校でも「インフラメンテナンスセンターの社会基盤を支えるメンテナンス技術者養成による地域創生への貢献」が採択されました。30年前の阪神・淡路大震災や昨年の能登半島地震を始め、日本は常に自然災害の脅威にさらされています。多くのインフラ施設は老朽化が進み、人口減少も相俟って、管理する自治体は対応に苦慮しています。当該センターは、その課題解決に先進的に取り組み、インフラメンテナンス大賞優秀賞も受賞しました。

地方創生の面では、前任の太田校長先生の下、全国に先駆けてCOC事業の取組が始まっていましたが、新たにCOC＋事業が開始され、近隣大学と連携し、より実効的な地方創生に資する取組を模索していました。現政権においても、地方創生は中核を成す政策として掲げられており、地方に所在する高専への期待は、益々大きなものとなっていくでしょう。

最も記憶に残るのは、学生たちの活躍する姿です。全国最大規模の寮を有していることによる豊かなコミュニケーション醸成の機会が、生き活きとした学生たちの在り方に影響を与えてきたことは間違いないでしょう。体育祭、文化祭などの校内行事はもとより、地域の人々にも親しまれていた校外での文化・表現活動など、様々な場面で、学業だけにとどまらない豊かな活動が息づいていたことが印象に残っています。短い在任期間の中で、高専課外活動の代名詞とも言える高専ロボコンの全国大会に出場を果たした皆さんを、国技館で応援する機会を与えていただけたことも幸いでした。

学生たちの活躍は、彼ら彼女らを支え、導いてくださる教職員の方々の献身的な努力なくしてはあり得ません。働き方改革も話題となっておりますが、昼夜を問わず、学生たちと真剣に向き合う教職員の方々の姿には、頭の下がる思いだったことが記憶に残っています。

永きに渡り積み重ねられた歴史と伝統を礎として、今後も舞鶴工業高等専門学校のすべての関係の皆様が、各々のフィールドで活躍し、希望溢れる未来へと飛躍していくことを心から期待しています。

創立60周年のお祝いに

元校長 太田 泰雄



創立60周年誠におめでとうございます。

着任1週間後に、校長室に交換留学のキングモンクット大学の学生数十人が来られたのには驚きました。舞鶴高専はグローバル展開が進んでいると思いました。平成26年に高専機構の依頼により京都で開催した、外国の大学長50名を招いてのフォーラムは良い思い出です。シンガポールの大学長が歌われた「恋するフォーチュンクッキー」をカラオケで歌う度に思い出します。

当時、主事の金山光一先生、三川譲二先生、脊戸柳実先生、産学交流をお助け頂いた新池一弘先生、平地克也先生、評価を担当頂いた金森満先生、何かと相談させて頂いた、小野伸一郎先生、西山等先生、中川重康先生、野間正泰先生、尾上亮介先生、玉田和也先生、加登文学先生、村上美登志先生、門川前市長の同時通訳をお願いした荒川吉孝先生、上杉智子先生などの多くの先生方には大変お世話になりました。

先日、現大阪大学の南裕樹先生に用事で連絡をしたところ、モルト・ボーノ・ニーナでの集合写真を送って頂きました。室巻先生、内海先生、井上先生、岡田先生、奥村先生方が写っており、懐かしくなりました。

事務の皆様にも大変お世話になり、柴田裕司課長(当時)、何でもご存じの嵯峨信子さんや小林薫里さん、当依頼を送られた三浦幸代さん方には、舞鶴高専で良く起こる絶体絶命のピンチを何度も救って頂きました。

私は元ヨット部のせいか、舞鶴の海の景色が忘れられず、「ほのぼの屋」や親海公園のレストラン「M's Deli」から見た夕焼けや春の桜は今も心に残っています。

思い出の舞鶴を出た後、長岡に1年のあと、信州大学(松本市)がもう大分長くなりました。最初は監事職、その後、学長特別顧問として、大学の将来構想や、新しいプロジェクトをやっています。

大学の予算規模は、高専機構全体が一つの大学の予算に近いぐらいですが、大学では求められる成果も世界規模で、病院経営も有りかなり大変です。高専はもう少し予算が必要だとは思いますが、教育に比重を置いた現在の運営が良いと思われます。

松本市は落ち着いた城下町です。週末には、安曇野の温泉や相変わらずのレストラン回りです。校長室に下手な安曇野のアルプスの絵を掛けていたら、不思議に来てしまいました。

拙い文章で恐縮ですが、これからの舞鶴高専様の更なるご発展をお祈り申し上げます。

旧教職員の回想

『舞鶴高専年報』の創刊について

名誉教授 三川 譲二



2003年度人文科学部門選出の広報委員であった私は、広報委員会の「学校概要等刊行物のあり方検討WG」のメンバーとなった。そのWGで「年報」の創刊が決まり、年報部会が立ち上げられた。私は、年報部会の部会長に選ばれた。

当時の校長は荻野文丸先生で、荻野先生には、独立行政法人化を見据えて機関別認証評価や外部評価に対応すべく学校運営に関する統一的な資料作りを行うというねらいがおりだった。実際に出来上がった年報は、「学校運営」「教育活動」「研究活動」「地域・社会活動」「報道記事」の5章からなり、各章には丁寧な報告文とデータがぎっしり詰まっていた。

原稿依頼から編集・発行に至るまで年報創刊に向けての意気込みや苦心などいろいろなことが思い起こされるが、今ここでそれらを辿るよりも、創刊号の「編集後記」を紹介させていただく方がより臨場感や真実味があるように思われる。以下である。

編集後記：

「夕桜家ある人はとくかへる」（一茶）。子供の待つ家に早く帰りたいのだが、なかなかそうはできない。花見の宴ではなく、「年報」の編集のために何度か夜更かしをし、そうこうしているうちに、いつの間にか、花の季節は過ぎていた。

振り返るに、「年報」の企画・編集は、季節の移ろいとともに進行していった。広報委員会の学校概要等刊行物のあり方を検討するWGにおいて、「年報」の発行が検討され始めたのは、うだる暑さがいっこうに治まりやまない夏休みの終盤のことであった。色鮮やかな紅葉が杉の木立の向こうに見え隠れする頃になり、同WGは、「年報」部会へと改組された。新年を迎え、雪が舞う中、路面の凍結を心配しながらの広報委員会で、「年報」の発行計画は承認を受けた。そして、いま、校正用の「年報」冊子が穏やかな春の陽射しを浴びている。

「年報」の発行の意義は、巻頭に荻野文丸学校長がお書きになっている通りである。情報の集中化と共有化、認証評価・外部評価の資料とすること、学科・部門スタッ

フ及び全スタッフ相互理解を促進することなどである。私見を呈せば、これらの重要な事柄に加えて、自己の教育・研究上の営為を全スタッフとの比較のもとに再確認したい、そして、それを記録にとどめたい、という願望をあげることができるかもしれない。いずれにせよ、「年報」発行についてのこうした意義は、わが舞鶴高専のスタッフのほとんどに理解されていたのではないと思われる。その証左に、原稿の収集・編集は、殊のほかスムーズに進んだ。独立行政法人化への対応をはからねばという危機感が共有されていたのかもしれない。しかし、それだけではないと思う。あたかも、「年報」の発行が、全スタッフにすでに望まれていたかのようにであった。

「年報」の企画・編集に当たって、荻野学校長からは、その都度、的確なアドバイスと温かい励ましを頂戴した。渡邊哲夫庶務課専門職員には、「年報」の発行に関わる全ての業務に対して全面的な支えをいただいた。川田昌克教官には、年度末の激務の最中に、表紙デザインを考案していただいた。その他たくさんの教官・技官・事務官の皆さんから「年報」の発行について真摯なご協力をいただいた。ここに記して、厚く御礼申し上げたい。

かくして、ようやく「舞鶴高専年報」の刊行に漕ぎつけることができた。「ものの芽のあらはれ出でし大きな」（虚子）「年報」創刊号の発行が、わが舞鶴高専の教育・研究の活性化と地域・社会への貢献の一助とならんことを部会員一同心より祈る次第である。（三川記）

創刊号のタイトルは、『舞鶴高専年報—2003年度の教育・研究活動—（創刊号）』（平成16年4月1日発行）、英名は、Annual Report 2003: Education and Research Activities Maizuru National College of Technology、である。発行者は、舞鶴工業高等専門学校広報委員会。編集は、舞鶴工業高等専門学校広報委員会「年報」部会。部会員は、伊藤直人先生（当時寮務主事）、生水雅之先生（当時助教授）、奥村幸彦先生（当時助教授）、奥田耕市氏（当時庶務課長）、そして私三川（当時助教授）であった。

私は、2005年度より寮務主事を拝命し、年報部長を降りることになった。だから、『舞鶴高専年報』の編集・発行に携わったのは、2004年の創刊号と2005年の第2号のみであった。

現在、年報は、デジタル版となり、舞鶴高専のホームページにアップされている。拝見すると、創刊号の骨格が維持されている。立ち上げメンバーの一人として感慨無量である。

運を味方にはんまり歩む

名誉教授 新池 一弘



創立60周年おめでとうございます。2005年4月に電気情報工学科教授として採用していただき、2016年3月の定年退職時には名誉教授の栄誉を賜り、感謝しております。最近の舞鶴高専のご活躍を耳にするたびに、貴高専に関わってきた者として嬉しく、そして誇りを感じております。赴任当初は新しい学科の一員として学生指導、校務に戸惑い、文部科学省等への提出書類の作成に忙しく動き回ったことを思い出します。また、校内役職としては、クラス担任、学科長、専攻科長、寮務主事などを経験させていただきました。

退職後は時間的に余裕ができと思っていたのですが、関西の大学2校様に拾っていただき非常勤講師として座学と学生実験を担当しました。非常勤講師は63歳から退職の70歳までの期間でしたが、座学のアナログ電子回路と電子デバイス工学は、高等専門学校での教科指導をベースに、最新の研究成果を学生に示すことができました。また、学生実験や卒業研究の下地となる科目では、学生の興味・関心そして想像力を引き出す工夫がされており、グローバル社会で活躍できる技術者や研究者を育成する教育のPDCAを実践することができました。

エネルギー学生の方々や接しているうちに、のんびりしようと思う気持ちが薄れ、現在は個人事業主として忙しい毎日を送っております。少なくなったとはいえ京都市内には伝統的な木造家屋がはんまりと連なる京町家が点在しています。そして、そこには独居の高齢者が多く住んでおられ、夏は蒸し暑さに悩まされ、冬は隙間風が頸のうしろにあたり背中がゾーゾーとする寒さを我慢しています。そこで、リフォームが必要となりますので、まず断熱効果を高め、次にウナギの寝床とも呼ばれる町家の照明改善および冷暖房機器の設置等を行っています。国民年金のみで生活されている方が多いため、事業主とはいえほぼボランティア状態ですが、ロードバイクに跨り1ヶ月に500kmを走破する充実した日々を送っています。

最後になりますが、貴高専の卒業生および修了生の社会的評価は大変高く、学生の皆様が色々なことに興味を持ち積極的に行動されることを期待しております。そして教育環境が更に改善され教職員の業務負担の軽減と教育・研究環境が向上し、ますます発展していくことを願っております。

回想

名誉教授 荒川 吉孝



舞鶴高専に着任したのは平成16年、50歳になった年だった。27歳の時に広島に赴任し22年間勤めたカトリックの女子短大がその前年に閉校になり、退職していた。一年間、県内の三つの大学で非常勤講師をしてしのいだが、長男が中学三年、次男が中学一年になり、これからという時に、暗澹たる思いだった。公募を検索しても、年齢のため条件に合わないところが多く、秋の深まりかけた頃に応募した本校から、暮れに電話があり、年明けに面接を受け、内定の返事をいただいた。

前任校は伝統があり、卒業生の就職や編入学は申し分ないものだった。しかし、女子生徒の四年制志向の波に抗えず、定員割れが3年続き、経営が続けることが困難になった。そのため、募集を停止し、最後の年は卒業生を送り出すことに専念した。

就職浪人中は、先の見えないトンネルを歩いているようで、いつ抜け出せるのか予想もつかなかった。その頃、授業の帰りに利用するJRの駅で「いい日旅立ち」の歌が流れ、「あゝ日本のどこかに私を待ってる人がいる」という歌詞が聞こえると、身につまされる思いがした。この「日本のどこか」が、舞鶴だったのかもしれない。

当時、ニュースで、全国の高専が一つの法人になるという話を耳にした。高専に再就職できるか分からなかったが、世の中が動いていることを感じた。翌2004年、法人化の年に着任したことになる。その後、先輩達から昔の高専の話を伺い、自分の知らない古き良き時代に想いを馳せた。一方、おそらく生き残りのため、スケール・メリットという耳慣れない経済用語が唱えられ、法人化の利点が謳われた。それに伴い、高専間の連携や活動が奨励され、本校もその一翼を担った。前任校は独立採算制で、入学金と授業料で運営され、定員割れは閉校につながった。その数年前には山一證券が廃業を発表し、世間を驚かせた。高専の場合は事情が違うが、やはり時代が曲がり角を迎えていたのだろう。

在任中は、定年まで13年間、再雇用を含めると15年間、なんとか恩返しできればと働いた。学生には、教えられることの方が多かった。幸い皆様に助けられ、微力ながら、大過なく勤めさせていただいた。

退職後も、今日まで非常勤で英語の授業を担当する機会を与えられ、もったいなく思う。一昨年、借家生活を終え、終の住み処^{ついで}に転居し、舞鶴に根を下ろした気持ちがする。

今は昔、バンカラな校風

名誉教授 垂谷 茂弘

人の記憶は当てにならない。ましてや、物覚えの悪い僕の記憶などは、思い出すたびごとに、都合のよい物語にと脚色しながら、定着する気がしてならない。ですから、この回想も、一老人の呆けた昔語りと聴き流してください。

着任したときは、まだ自由奔放でバンカラな校風が残っていました。男子学生が圧倒的に多く、校内の大規模寮のこともあり、部屋着姿、下駄やサンダル掛で受講する学生もいたように記憶します。当時、おもわず小説『人生劇場 青春篇』に漂う雰囲気をおこしたぐらいです。

案の定、着任3年目、はじめて担任となった32年前、「校歌しばき」が表沙汰となります。それは、消灯後、新入生を少人数ごとと呼び出しては、校歌が歌えない学生には鉄拳を下すという通過儀礼的な蛮習でした。この事件はNHKの夜7時のニュースでも全国に流れました。

学校は大騒ぎ！寮務委員と寮生会との大会議室会合で「先生たちでも自分の子どもの教育で手が出ることもあるでしょう」といった、指導寮生の大勢的な主張にも、まだまだ三分の理ぐらひは公にも残存しえた時代です。本校の教員会議でも、バンカラ風の名物教授によって、同様の「処分なし」の論陣がはられたぐらいですから。

翌年、寮の宿直教員から突然、家に電話がありました。2年生となった、うちのクラスの学生何人もが顔を腫らしているので、問いただしたところ、「休みなので、西舞鶴まで遊びに行き、チンピラのような人たちにからまれ殴られた」と説明するが、腑に落ちず、なお執拗に聴くと、「担任になら話しをする」とのことでした。

学校に急いで駆けつけたところ、嘘の理由については、「A君の原付を『しょぼい』と、みなでからかったら、運動場での『決闘』をA君の方から申し込まれ、ボコボコにやられました。ひどくからかった僕らが悪いのであって、A君の処分はしないで欲しい」とのことでした。

今回は、被害者も加害者も僕のクラスの学生で、両者の矜持は理解できるが、学校としての対応を図る必要性を説諭しました。この時も、バンカラ教授からの「無処分」の主張がでましたが、A君は「停学処分」となりました。

A君からは、卒業後何年もたち「哲学の大切さに目覚めたので、勉強したい」という、突然の便りが届きました。

このような『人生劇場』風の校風も、Windows95がでた1995年頃を境にしだいに消え失せていきました。

今にしても、一抹の寂寞と懐旧の情がわきおこります。

舞鶴高専での思い出

名誉教授 金山 光一



私は2001年7月に着任し2018年3月で定年退職、雇用延長2年を経て2020年3月に18年9ヶ月の勤務を終えました。在職中は、教務主事を8年間、副校長を3年間務めさせていただきました。着任当時は、高専の独立行政法人化、JABEE受審などが重要課題となっており、着任2年目に東邦夫校長から民間企業での経験を活かして教務主事を担当せよとの指示を受けました。

着任当時は進級や卒業認定などの重要事項は教員会議で審議決定されており、判定に長時間を要していました。JABEEなどの外部評価では成績評価などの教務システムの充実が求められており、教務主事として教務システムの整備とカリキュラム改正に着手しました。教務主事および副校長在任中に4人の校長先生をお迎えしました。どの校長先生もしっかりとした「自分流」を持たれていて、外部環境の変化にも対応しながら右往左往しながら業務遂行に努めた記憶があります。

私の採用は専攻科が設置されたことによる新規教員枠によるもので、2001年度は専攻科の新規科目の開講準備が主体業務であるとの説明を受けていました。しかし同年度中に、廣田哲也先生が体調を崩された為、後期からの授業代行、工学基礎研究、卒業研究、専攻科特別研究の学生指導を引き継ぐことになりました。私の研究テーマは、企業勤務時代に行ってきたものを基にしたアカデミックな展開を計画していましたが、学生との交流の中で、学生の興味を主体として自分の研究経験を学生の研究推進に活かす形に変更しました。その結果、研究テーマは多様化し、学生が自分自身の研究テーマとして取り組んだことにより、学会等で表彰される学生をも輩出することができました。

高専教員の醍醐味は、クラス担任を通じて学生とともに成長することであると先輩教員から聞かされてきました。気がつけば定年まで5年となっていたため、学科の先生方をお願いして3年生のクラス担任をさせていただきました。そして定年の前年に卒業生を送りだしてようやく高専教員としての実感を得ることができました。在職中のクラス担任は4年間となりました。

着任時の予想とは全く異なる高専教員人生となりましたが、私にとってどれも貴重な体験であり、お世話になった皆様に感謝を申し上げたい気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

舞鶴高専での15年を振り返って

名誉教授 平地 克也



大学を卒業後、電機メーカーに25年勤めました。後半の約10年は課長職でしたが、最も優秀な部下は舞鶴高専の出身でした。舞鶴高専は東大、京大の次ぐくらいに優秀な学校だろうと当時は思っていました。その後、縁あって舞鶴高専に勤務することとなり、学生の実力を知ることになりましたが、今でもかなり優秀と思っています。

＜授業＞

初めての授業は私の専門分野の科目だったので、電機メーカーでの経験を生かして入念に準備して専門的な授業を行いました。ふと気が付くと半分ぐらいが寝ておりました。その後は学生にとって魅力的な授業を目指して試行錯誤の繰り返しでしたが、未完に終わったようです。

＜研究活動＞

平地研究室の学生達の熱心な研究活動に支えられて、企業で行ってきたパワーエレクトロニクスの研究をさらに発展、深化させることができました。学生達は沢山の学会発表を行い、度々学会表彰を受けました。研究成果をまとめて専門書を2冊、電気学会から出版することができました。業界では評判が良く、増刷を重ねています。

＜地(知)の拠点整備事業＞

舞鶴高専は文科省の「地(知)の拠点整備事業(COC事業)」の採択校となり、平成25年度から毎年多額の予算をもらい、地域社会の知の拠点として、たくさんの地域志向の取り組みを行いました。私はCOC担当の副校長を拝命し、各学科・部門が円滑に活動できるように、仕組み作りや交通整理を行いました。COC事業を通じて、舞鶴高専地域テクノアカデミアの設立、出前授業・公開講座の大幅な増加、各学科が独自の地元の連携先を確保、学生の地域での活動の大幅な増加、などの成果がありました。舞鶴高専は教員も学生も地元出身者が少ない、という事情があり、必ずしも地域志向の高い高専ではありませんでしたが、COC事業を通じて、地域志向の取り組みが教育にも研究にも大きな効果があることを認識でき、舞鶴高専にすっかり定着したと思います。

＜退職後の活動＞

COC事業の社会貢献活動の1つとして、「舞鶴高専パワーエレクトロニクス公開講座」を年2回、合計10回実施しましたが、退職後は内容をさらに充実させて、一般社団法人日本パワーエレクトロニクス協会主催のセミナーとして毎年20回実施しています。また、舞鶴高専での共同研究先を中心に、顧問契約や技術コンサルタント契約

を結んで企業の製品開発のサポートを実施しています。

＜むすび＞

舞鶴高専には15年勤務しましたが、優秀な学生と教職員に支えられて充実した教員生活を送ることができました。深く感謝いたします。最後に、舞鶴高専の一層の発展をお祈りいたします。

未来に向けて

名誉教授 金森 満



新型コロナウイルスによるパンデミックが起こり、前代未聞の遠隔授業となり、教育の在り方が見直されました。公衆送信権が整備され、ネットワークやZoomを活用した教授方法が実行に移されました。このような状況で、皆様方のご尽力は、並大抵ではなかったものと拝察しております。学生の問題行動に対しても真摯に対応され、信頼回復に努めてこられたことに敬意を表します。

高等専門学校は、5年間の一貫教育により、専門分野における大学レベルの教育を念頭に創設されましたが、大学3年への編入が正式に認められたことで、短大レベル(準学士課程)であることが定まり、専攻科構想が浮上してきました。本校に奉職した当時は、「高専は教育機関であって、研究機関ではない。」と言われながらも細々と研究を続け、学位を取得しました。

その後、10ヵ月間の在外研究を終えて帰国してみると、専攻科設置の機運が高まっており、申請の準備や教育内容の準備が山積みでした。ようやく準備が整い、専攻科の設置が認められ、体育館に仮教室をつくり、そこで専攻科の授業が始まりました。専攻科棟が竣工したときは、大きな喜びにつつまれました。しかし、残念なことに「学士」の審査権は認められず、学位授与機構の論文審査を経て「学士」が授与されることになりました。その後、我が国のJABEE認定制度が確立し、専攻科を有する高専はJABEE認定が可能であることを知りました。そこで、全国に先駆けて試行審査を受審し、次いで本審査を受け認定をいただきました。これにより、「国際的な基準に適合した工学教育を実施している」ことを、世にアピールすることができました。

当初は「専科大学」の名称変更も謳われましたが実現せず、専攻科が設置されたものの学位審査権は認められず、専攻科の学生定員は依然として少ないという現状に、失望の感は否めませんでした。しかし、教員およびその教育の質保証、教育力や環境の整備については、着実な進歩・充実・発展があったことは確かであり、大変喜ばしいことであったと考えています。目まぐ

るしく進歩発展している工学・産業技術に対して、高専の位置づけは依然としてあいまいな一面を残したままです。皆様方の英知を結集していただき、本校が今後も益々充実し発展することを願って止みません。

ある回想

名誉教授 亀谷 睦



ここに記すのは、ホームページの学校紹介の沿革に
2000 (H12).4.1 専攻科を設置
2003 (H15).2.24 校舎改修工事竣工
2004 (H16).4.1 独立行政法人国立高等専門学校機構
が設置する高等専門学校となる

とある頃の思い出です。沿革の簡潔な記述の裏で、
実際何が起こっていたかというのがテーマです。

専攻科の設置を目指してまずなされたのは、専門学
科の教官の博士号取得率を高めるための、一般科目と
専門学科の間での教官の配置換えでした。一般科目の
博士号取得者を専門学科へ、専門学科の博士号未取
得者を一般科目へ、それぞれ配置換えしたわけです。
配置換え対象者は、それまで教えたことのない教科や
科目の担当を強いられ、教官としての誇りを傷つけられ
ました。

同じ頃、「教授懇談会」が開催されるようになりました。
校長の意図は、それまで教官会議で協議・決定され
ていた学校運営を自らの私的諮問機関に移して、運
営を私物化することでした。教授たちには懇談内容を
口外しないようにとの緘口令が敷かれたこともあって、
教官の中に分断が引き起こされました。

分断を一層助長したのが校舎改修工事でした。工事
に際し教官室についても校長は注文を出し、教授には
今まで通り個室研究室を与えるが、助教授以下には個
室の廃止と研究室の「職員室化」を提示しました。複数
の教官を同居させることが研究能力向上に資するのだ、
「教官の蔵書は10冊で十分だから、学生が通る廊下に
教官机を屋台のように並べればよい」などと主張し、助
教授以下の研究室を小・中・高校の職員室にも劣るも
のに変更しようとしていました。これに対し教授懇談会
では反対論は出なかったようでしたが、助教授以下には
反対する者が多く、有志で全学的な組織「校舎改修を
考える会」を結成して、校長案への対抗案を作成して
戦いました。その戦いは当該校長の在任時には決着が
つかず、次の校長が全教員に個人研究室の存続を認め
るとの「校長決裁」を出す形でようやく決着しました。

校舎改修工事は、高専における校長の暴走という構
造的な問題の存在を顕在化しました。そして暴走に対

する教員たちの集団的経験は、独立法人化の翌年の教
職員組合の結成に引き継がれることになります。

“我らの桜”は生きている!!

名誉教授 中川 重康



2024年、67才の夏、高専時代の有志が本校に集ま
った。卒業アルバムに掲載されている植樹の写真を見つ
けた。2代目校長である水渡英二先生と、同期の土木
科であった遊津一八さんがスコップを持って植樹してい
る写真である。周囲にはスーツ姿の卒業生が見守って
いる。写真を手に現場に行くと、植えた桜を特定する
ことができた。背景に第一体育館が写っていることと
枝ぶりから推測した。周囲の桜は青々としているが、“我
らの桜”は1mほどの枝一本にだけ葉が残っている。そ
れでも生きていることに感激し、よくぞ今日まで生き延
びてくれたと感謝する。

私は電気工学科9期(1973年入学)である。豊橋技
術科学大学の1期を経て26才で舞鶴高専に赴任し、
現在の非常勤講師を含め、ほぼ半世紀にわたり舞鶴高
専に関わっている。赴任当初は多くの恩師とともに楽し
く仕事をしていたが、高専が変革期に入ると、専門教
官は博士号を取得するように指示された。4代目校長で
ある若林二郎先生から「豊橋技科大へ行け」と言われ、
1994年から2年間の人事交流で異動し、「気象情報を
用いた日射量予測」の研究に出会った。

当時、周囲の教官からは「天気予報か、他人の研究
成果を利用しているだけで本質的でない研究だ」とあ
からさまに言われる状況だったが、この研究は私の大
雑把な性格に合っていた。1997年に“地球温暖化に関
する国際会議COP3”で京都議定書が採択され、翌々
年には本校を含め全国39高専に太陽光発電システム
が設置された。これらを20億円のまとまった実験設備
と見なしたテーマを、4高専の技科大同期生に呼びか
けて科研費を取得した(基盤研究B、高専に設置され
た40kW太陽光発電設備の発電特性評価とデータベー
ス化に関する研究、2001)。太陽光発電が社会的な後
押しを受ける時代となり、優秀な学生たちが何代も続
けて興味を持つようになった。遂には学生独自で書き
上げた論文が電気学会論文誌に採択された(太陽電池
の等価モデルを用いたI-V特性推定型MPPTの提案、
池野孝他、2018)。

「日射量予測」に取り組み始めてから20年も経過す
ると、周囲の状況が変わり、予測がお金になる時代が
到来した。電気学会誌特集記事にて、最初に取り組ん
だ研究者として私が紹介されたが、「その後、10年ほ

ど研究事例がなかった…」とも記載されたのは情けないことだった(太陽光発電の出力予測技術の開発動向、2017)。しかし、研究者としての私の感性が認められたようで、萎えかけていた人生への意欲が復活し、学生に積極的に接することができるようになった。

最近、個々の個性を重んじる優しい教育が拡大しているが、教育は“生の学生”を見ながら育成することが重要だと思う。流行りのAIを活用することで、学生の反応を教員の直感ではなく、定量的に計測しながら、個々の学生の能力向上を支援できるのではないかと考える。創設初期から培われた、学生に真に寄り添った「舞鶴高専の教育」こそが、50年を経ても母校を愛する人間を生み出し続けているのだ。“我らの桜”は、これからも母校を見守ってくれるだろう。

舞鶴高専のもっと昔

名誉教授 西山 等



舞鶴高専が創立60周年を迎えたこと、卒業生また旧教員として心よりお慶び申し上げます。私は創立10周年のときに本校入学、創立20周年のときに教員として採用され、以後40年間教職に勤しんできました。したがって、霊峰青葉山の麓、この白屋の地にどっぷりと浸かった半生でありました。

永きにわたりほぼ同じような環境にいるとはいえ、色々なことがありました。それらの出来事に想いをはせ、整理しまとめることは、私にとっては濃密すぎて記憶能力や処理能力を超えています。したがって色々な想い出は自分の心の中で楽しみたいと思います

時間の進展は早いです。ちょっと前のことも忘れ去られることも多いです。しかし舞鶴高専で過ごした人は、この白屋の地にまさしく足を着けているわけで、決して記憶から失われることはないでしょう。そこで、この地の歴史をたずねるべく、白屋の地の舞鶴高専のもっと昔を紹介したいと思います。

私が令和5年11月の舞鶴市の「広報まいづる」を見ていたとき、舞鶴ふるさと発見館(舞鶴市郷土資料館)で「白屋・長内の絵地図」の展示解説が行われる旨の案内に目が留まりました。本当に興味深かったので直接現地に行って昼一昼より十分に大きい展示品を鑑賞また解説を聴かせていただきました。この絵地図は明治6年頃のもので、舞鶴高専創立から遡って90年以上も前のものです。また、この絵地図はもともと白屋地区で庄屋をしていた御家からの寄贈品です。白屋地区と長内地区は現在の舞鶴高専とその東側に位置しており、昭和14年に海軍第三火薬廠建設のために軍に接収されました。

接収のことは多くのかたがご存じかと思います。

舞鶴高専創立10周年記念誌「舞鶴高専十年のあゆみ」で初代校長木村作治郎氏が創設期の色々なことを執筆されていますが、「敷地」は、青葉山を背景として、山で囲われた馬蹄形の山間地は旧海軍の火薬製造工場や土台が点々と残存する荒野であって、その中央を朝来川が貫流している傾斜地である旨記されています。工事は先ず、中央を貫流する河川敷を敷地の北側山沿いに迂回せしめるかけ替え工事、その後、整地工事で三段の平地に仕上げたが、旧川筋を埋める際に従来からの地下水の流下への配慮がなかったため、水はけが悪いことが付け加えられています。

舞鶴ふるさと発見館で「白屋・長内の絵地図」を見たとき、現舞鶴高専の敷地内にない旧河川が敷地の中央を斜めに貫流していることが確認できました。記憶は忘れ去られますが、記録として、大昔と昔そして今が繋がった気がして嬉しかったです。

「温故知新」のことわざのように、古い話や歴史を調べてみると、そこから新しい発見や学びが生まれるかもしれません。あらゆることは歴史の積み重ねです。60年間に培われた本校の年輪が、さらに数を増し、輪を拡げ、その幹が、ますます成長発展することを心から祈念します。

舞鶴高専開校60周年記念によせて

名誉教授 四蔵 茂雄

今更だが、高専では学生を学生と呼ぶ。しかし、高専は高等教育機関だから付随的にそう呼ぶのだ、と消極的に解釈してはならない。自主自立の精神を認め、責任と自由に対する理解と実践を求める。学生の本分は勉強することだが、主体的思考ができる人物像をその前段に据えた。これを中学校卒業してまもない若い成長途上の人間に求めた。そしてそれを前提とした教育理念、教育目標が定められ、高専の教育システムが作られた。この建学の思想/精神こそが、高専を高専たらしめているのだと理解すべきだ。文科省はこれを単線教育システムにもう一つの路線を引いたと自賛した^{注1)}。

昔を思い出すのに苦勞する年齢になったが、今でもあの時の驚きは鮮明だ。忘れもしない。舞鶴高専に赴任してまだ間もない頃だ。私は1冊の本を手にしていて。登山家の大蔵喜福氏の著作“彼ら「挑戦者」-新進クライマー列伝-”がそれだ。敢えて厳しい高峰・難峰に挑む先鋭クライマーたちにスポットを当て、彼らの登攀記録と登攀に対するこだわり、考え方、生き方等を

紹介した本だ。私が何に驚いたか？それは、この本で
取り上げられた、当時の日本を代表する若き先鋭クライ
マー 20数名のおよそ1/3が高専生だったことだ。平山
君が航空高専出身であることは既に知っていたが、他
にも第一線のクライマーに高専出身者がいたとは、驚
きでしかなかった。全国に50校ほどしかない高専から、
なぜ先鋭クライマーがこれほど出るのか。それは決して
偶然ではないはずだ。私は考えた。そして、その要因
が何か直ぐに思い至った。高専建学の精神が影響し
ているのは間違いないだろう。

しかし、残念だが、私が在籍した30年間の後半は、
その精神が薄れゆく、いわゆる管理教育が進展した時
代だったように感じる。ただ、それは高専が主体的に
変容したというよりも社会の変化に対する適応に過ぎな
かったのではないだろうか。高等教育機関の先輩、大
学においても同様な傾向にあると聞く。

私が担任した学生の一人に留学生がいた。彼/彼女
は、進級が危ぶまれる成績だった。担任なら誰でもす
るように、私も保護者にその旨連絡した。電話の向こう
で父親が言った、“彼/彼女は大人です。自分でマネー
ジできます。先生の心配は不要です”。私は返す言葉
がなかった。

少子化の時代である。教育機関としては困難な時代
を迎えている。しかし、責任を自覚し、自由な発想で、
主体的に仕事ができる。社会、企業が卒業生に期待す
る人物像は今後も変わらないだろう。相変わらず本校
卒業生に対する求人は熱いと聞かすが、それは、身に付
けた知識や技術もさることながら、本校卒業生に染み
込んだ技術者である人間としての素養が、まだまだ相
対的に高いからではないだろうか。教育機関としてこの
点を見失わない限り、次の60年も舞鶴高専の時代は続
くかと、密かに思っている。

以上、乱文ご容赦ください。最後になりますが、舞
鶴高専の教職員、卒業生各位、保護者の皆様、開校
60周年おめでとうございます。舞鶴高専と皆様の益々
の発展とご活躍を願っています。

注1：文科省、学制百年史、戦後の教育改革と新教育制度の発展、
第四節の四、高等専門学校制度の創設。

舞鶴高専での出会いに感謝

名誉教授 小野 伸一郎



舞鶴工業高等専門学校が創立60周年を迎えました
ことをお喜び申し上げます。

私は京都府立学校に勤務した後、本校に奉職し2024
年3月に定年退職となりました。お世話になった方々に

心より感謝申し上げます。

赴任して初めての入学式で、白石成人校長はスレート
ブルーが鮮やかなアカデミックドレスを纏い登壇され、
高等教育機関である本校の「自由」と「責任」の上に
立った学びの「可能性」を述べられました。ご自身が
留学された米コロンビア大学のドレス姿と式辞に強烈
な印象を持ったことを今も覚えています。

15歳の学生が親元を離れ学生寮での生活をし、都
市部の高専にはない大集団での生活の中で自我を確立
していきます。自由が暴走しないように教職員も保護者
も悩みながら支援しています。その中で、か細い新入
生が見る見るうちに生意気な学生となり、凛々しい青年
に変貌して卒業していきます。全学生の授業を担当し、
学生の成長の様をつぶさに確認できたことは教師冥利
に尽きます。

舞鶴はあの頃のままだす。時々原点の風景を思い
出してください。

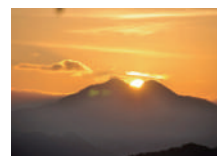
研究においては陸上競技指導論、熱中症事故予防
に加え、医学部への研修を機に東日本大震災の被災地
や高齢者施設など社会課題現場での活動をしました。
また、舞鶴市の教育や将来に向けた社会活動も貴重な
体験でした。素晴らしい研究者との出会いは宝となっ
ています。

私達の周りには様々な社会課題があり、科学技術で
しか乗り越えられないものもあります。本校で学ばれた
皆さまには技術と知識と熱意で、今の幸福と未来の幸
福に貢献していただけることを切に、切にご期待申し上
げます。

舞鶴工業高等専門学校が70、80周年に向けて益々
ご発展されることを祈念します。

舞鶴の60年、舞鶴高専の45年

名誉教授 野間 正泰



2024年3月末で無事に定年退職を迎えることができ
たが、再雇用を希望したため嘱託教授(短時間勤務)と
して残っている。短時間勤務は卒業研究や学寮宿日直
が免除されるため、実質的には個室付非常勤講師の扱
いである。2025年度は41年目に入る。

1985年4月から39年間にわたる教育研究のほか、同
窓会の仕事等、舞鶴市出身として母校にはもう十分に貢
献し尽くしたと思っていたが、まわりが許さず(頑張らな
い宣言をした上で)3回目の同窓会理事長を引き受けて
いる。本日はトランプ大統領就任式の日であるが、先ほ
どは1期生2名が来校され、事務局と2名で校舎案内を
含めて旧教員等の関連で対応した。初代校長の木村作

治郎先生の薫陶を受けた最後の卒業生(12期生)が対応して昔話を通じたのはよかったのだが・・・。

ところで、この春で舞鶴高専は創立60周年を迎えることになった。少子化の影響で教職員には入学定員を満たすための仕事が増えただけでなく、定年退職者の後を満たす教員採用が困難を極めている。定年退職者は若い頭脳に期待して余計な口出しをせずに静かに見守るのみである。

高等教育機関である高専で重要とされる研究活動では、1985年4月に小西経男先生の紹介により京都大学工学部機械工学教室潤滑油圧工学研究室(通称森研)の森美郎教授に入門して現在に至っている。昭和から平成の頃には週一日、研修日なるものがあり、朽木街道からは花折峠を越えて京都大学吉田キャンパスまで通っていた。すぐそばの吉田神社や真如堂界限はよく歩いたものだ。今は入門当時還暦を迎えられた師匠の年齢を超えてしまった。豊橋技術科学大学で専攻した製錬工学(溶融還元)とは異なる分野で研究を開始したため、2007年3月に博士(工学)〔論文博士〕の学位を取得するまでに22年を要した! 日本トライボロジー学会では、教育講習委員会委員(4期8年間)、論文賞選考委員会委員(2期4年間)、「超」を目指す軸受技術研究会幹事(2003年から21年間、1997年から2024年まで27年間はHP編集担当、昨年に担当者を交代)ほかを務めた。教育講習委員会委員のときは、東京タワー下の機械振興会館で年数回会議があり、会議前に東京スカイツリー建設の進捗状況を眺めることができたのは僥倖であった。日本機械学会では、機素潤滑設計部門運営委員会委員(6年間)、関西支部・機素潤滑設計部門代議員(4年間)を務めた。日本トライボロジー学会よりも歴史がある関西潤滑懇談会では、理事(2008年から現在まで、2009年から15年間はHP編集担当、昨年末に担当者を交代)を務めている。一方、論文関連の可視化情報学会では全国講演会の座長を担当した程度であるが、昨年末にシニア会員に推薦いただいたところである。数々の大学、高専、企業関係者と交流させていただき、自身を高めることができた。この場を借りて感謝の意を表したい。

白屋の蛸壺に籠らず、特に定年前の10年間には積極的に学生に学会発表をさせたこともここに記しておきたい。

定年後の昨年4月から低山(西舞鶴の愛宕山)に登っており、昨日で166回(11、12月には60回!)となった。山頂では50数年ぶりに出会う小学校の同級生も複数名おり、「継続は力なり」を実感。登山用に購入した靴の

トラクションと耐摩耗性の高さに感心、今さらながら実生活でのトライボロジーの重要性を再認識した。元旦にはすばらしい初日の出を拝むことができた。感謝。

実習への思い

元教育研究支援センター
技術専門職員 植田 邦明



創立60周年記念おめでとうございます。縁あって2014年に54歳で技術職員としてお世話になっております。以前は30年間ほど民間企業に勤め比較的高齢での再就職でした。当初、就職案内に記載されていた業務内容が、実習の機材の準備、補助と記載されており、学生達と対面することがない裏方の仕事をイメージし採用試験を受けたことを記憶しております。実際は工作実習の指導、創造設計の補助、卒業研究の補助と学生達と対面することが多いことがわかりました。舞鶴高専の学生の印象は、真摯で優しい学生が多いと感じています。挨拶も快く、いつも気軽に話しかけてくれます。正直、学生たちとの対面は、実に楽しく、やりがいを感じ、逆に教えられることも多く、力をもらいます。また、職場の教職員の方々の気配りも快く、今ここで働いていることを大変うれしく思います。

当初勤め始めたときの感想と実習への思いを少しばかり述べたいと思います。まず、実習工場の設備の充実に大変驚きました。高価な機械もあり民間であれば機械製作会社が一経営できるレベルの環境だと思いました。実習は、授業時間割、工作機械の台数、技術職員数と制限があり、工場内全ての工作機械を実習することはできません。当然、学生は全く経験がなく一からのスタートになります。実習期間を過ぎれば直ぐに即戦力の工作機械オペレータ、熟練工に達するものでもありません。そのような中、学生達に実習で何を伝えればいいのか、よく考えたものです。いつか自分が考えたものをかたちにする面白さ、楽しさ、凄さを体験する日が来ることを願っています。自分が設計、製作した機械、装置は正直です。不具合は必ず自分の設計に要因、原因があります。また、それを見つけたときは面白さ倍増です。それが自分の技術力にもなります。最後に12年間お世話になり記念すべき年を共に迎えられたこと光栄に思います。これからの皆様のご健勝とご発展をお祈りいたします。

本校卒業生教職員の回想

学生時代の思い出

建設システム工学科教授

山崎 慎一

(土木工学科 昭和61年3月卒業)



創立60周年を心よりお祝い申し上げます。私は昭和61年3月に本校土木工学科を卒業し、令和5年4月に建設システム工学科の教員として着任いたしました。舞鶴高専に今度は教員として戻ってこれとは思っていませんでしたが、後輩である学生との関わりに幸せを感じながら、残りの教員生活を楽しんで頑張っていきたいと思っています。

さて、思い返すと44年前、雪の降る中を父親に連れられて舞鶴高専を受験しました。私は幼少の頃からものを書いたり、作ったりすることが好きで、また人と違ったことをしたい性格もあって、舞鶴高専を選びました。入学当時は、高専の勉強についていけるか不安を感じながら、頑張って勉強していましたが、学年が上がるにつれて遊びやアルバイトにと行動範囲が広がり、勉強以外でも充実した青春時代を過ごしたと思います。

寮生活では、多くの友人と出会い、様々な経験をすることができました。現在の6、7号館の場所にあったグラウンドで、寒い日も毎朝全員整列して点呼を受け、校歌を歌って、ラジオ体操をして、演台に上がらされてスピーチをしたことを思い出します。この寮生活のおかげで、規範意識、忍耐力、自律心が身についたと思います。また、楽しいことばかりではなく、失敗や後悔したことも多々ありましたが、先輩からの助言や友人と助け合うことで乗り越えることができたと思います。この寮生活の経験は私のその後の人生の糧になっています。

学校行事の一大イベントである高専祭では、校舎の屋上からつり下げの大壁画、工夫を凝らした各科の展示、大盛況のステージイベントが思い出されます。他にも、低学年の時には何日も前から夜遅くまで市中パレードの櫓や張りぼてを作っている時に、先輩が夜食に持ってきてくれたチキンラーメンの味が忘れられません。また、高専から高浜町への山越え往復20キロのマラソン大会は辛かったですが、学校に何とか戻ってきたときの達成感は大きかったです。

まだまだ思い出は尽きませんが、本当に有意義な5年間を舞鶴高専で過ごすことができたと思います。その頃の未熟な私をサポートしていただいた教職員の皆さま、支えてくれた友人や家族に感謝です。最後に、これから

の少子化や後継者不足による課題、社会生活や地球環境の大きな変化への適用において、これから高専が果たしていく役割はとて大きいといえます。舞鶴高専のますますの発展に微力ながら尽力して参りたいと思います。

時代の移り変わり

電子制御工学科准教授

石川 一平

(機械工学科 平成13年3月卒業)

平成8年4月に舞鶴高専・機械工学科へ入学し、低学年時の担任は梅原康生先生、高学年時の担任は川勝邦夫先生でした。現在の舞鶴高専では、1・2年生は混合学級制を取っていますが、当時は1年生から各学科で分かれて授業を受けていました。私のクラスには女子はおらず、5年間男子だけという閉塞感もありましたが、今でも仲の良い一致団結の強い絆が生まれたのではないかと、と思っています。混合学級制も含め、昔と違うところを述べていこうと思います。今では当たり前のように、学生は自身の携帯電話を持っていますが、当時は、携帯電話は珍しかったため、学寮には公衆電話の電話当番というものがありませんでした。私は寮生ではなかったのですが、自宅に帰宅後、寮生と連絡を取りたいときには電話当番の学生に放送で呼んでもらうというシステムでした。同じような話で、今では一般的となったインターネットもあまり普及しておらず、図書館のパソコンでインターネットをしに行っていたことが思い出されます。クラスの窓際には、ボイラーによる温水ヒーターがあり、その真横だと暑すぎるし、逆に廊下側だと寒かった記憶があります。このボイラーも、もう今はありません。あとは、定期テストの試験中にトイレに行くことは許されず、腹痛を我慢した方も多かったと思いますが、配慮がなされて、今は行けるようになっています。そういった配慮も含め、学生指導については、昔より手厚くなっていると感じています。昔は、自由な校風のもと、今よりもっと自由に学生は活動していた気がします。今は、寮生活、部活動、高専祭、進路活動等、様々なシーンで教員の関与と、手厚い指導があるように思います。どちらが良いかは一長一短だと思いますが、時代の変化を感じるものがあります。時代の変化といえば、私の年代1980年生まれと比べて、現在1年生の世代(2008年生まれ)だと2/3まで減少し、さらに2024年生まれだと半分以上になっており、少子化が深刻化しています。(他にも影響はあるのかもしれませんが)少子化の影響を受けて、教育業界では入学者数の確保にいとまがない状況です。10年後、20年後、そして創立100周年を迎えられるように、これからも、舞鶴高専の発展と教育に貢献できるよう努めていきたいと思っています。

技術の変化

電気情報工学科講師

森 健太郎

(電気情報工学科 平成26年3月卒業)



私は2009年に電気情報工学科に入学し、専攻科、兵庫県立大学大学院を経て現職につきました。入学から16年の時が経過しましたが、この16年で感じたのはAI技術の発展についてです。私は高専在学中に画像解析の研究に取り組み、大学院では医療画像解析や医療データ解析の研究に取り組んでいました。これらはAI技術の発展の影響を特に強く受けた分野かと思います。本稿ではAI技術の発展とそれとともなう舞鶴高専の変化についてお話させていただきます。

昨今、AIブームと言われていますが、このブームは第三次AIブームと呼ばれ、2000年代ごろから現在まで続いています。このブームは機械学習という技術の実用化からはじまり、2010年以降は深層学習という技術の実用化によって更なる盛り上がりを見せています。近年のAI技術の社会活用は、この深層学習技術の実用化による貢献が非常に大きな役割を担っています。私が学生として舞鶴高専に在学していた2009年から2016年ごろまでの間は、まだ機械学習技術が主流で深層学習技術もまだほとんど実用化されていませんでした。当時私は高専で信号機の発光色を画像から検出するという研究に取り組んでいましたが、機械学習すら利用せずに画像解析に取り組んでいたと記憶しています。学内全体を見ても、機械学習を活用して研究を行っている学生は数名程度だったかと思います。私が大学院へ進学した2016年以降、深層学習技術も徐々に一般化されるようになりました。私が大学院で取り組んでいた医工学の分野におきましても、深層学習技術は大いに活用され、私自身もこのころから深層学習技術を活用するようになりました。その後、2020年には舞鶴高専に教員として戻ってきたのですが、この頃には学生が当然のように深層学習技術を活用する時代になっていました。私が在学中に取り組んでいた信号機検出の研究も、学生が深層学習を用いて実施していました。私のころよりもはるかに高い精度で成果を発表しており、自分の学生時代を思い出しながら感動いたしました。また、ちょうどこの原稿の執筆中に、2024年度の工学基礎研究、卒業研究、特別研究基礎、特別研究の発表会が行われましたが、情報系の研究に取り組んでいるほとんどの学生が当たり前のように深層学習を活用していました。研究以外でも授業や実験、公開講座、出前授業でも深層学習技術を利用するようになっており、舞鶴高専を通してAI技術の発展を痛感いたしました。これから10年後、AI技術がどのよう

に進化し、舞鶴高専でどのように活用されるのか、舞鶴高専の教員として楽しみにしております。

日々勉強

教育研究支援センター

技術職員 高本 優也

(建設システム工学科 平成24年3月卒業)

(建設・生産システム工学専攻 平成26年3月修了)



はじめに、舞鶴高専創立60周年を迎えるにあたり、心からお祝いを申し上げたいと思います。

私は、平成19年に舞鶴高専建設システム工学科に入学しました。中学時代も高専時代ですが、学業においてはそれほど優秀ではなく、高専の入試も推薦をもらえず、学力選抜での合格でした。今でもよく合格できたなと入試のシーズンに入ると振り返るものです。運といえますか縁があったのだなと思っています。

学業においては、優秀ではないものの順調に進級することができのですが、5年生の卒業間際に少し足踏みをしました。この足踏みは、建設システム工学科の慣例行事だと聞いていたのですが、今ではこの慣例もなくなっているみたいです。最後の期末試験である科目の単位が取れずクラスの半分近くが再試を受ける。そんな時代もあったのだなと振り返っています。

専攻科に進学することになるのですが、これもまた、学業的には優秀な席に座っていなかったのも、大学編入を試みるも推薦ももらえず、学力でも全て失敗で、併願していた専攻科に進み、7年の高専生活に足を踏み入れるということになります。専攻科では、いろいろ鍛えていただきました。本科の5年間は模範的なことをしてこなかったのも、なんか1つくらいやってやろうと専攻科でメインの研究や研究室での活動を頑張っていました。

専攻科の修了後は、就職をし、現場管理の仕事に就きました。勤めた会社では、人間的にさらに鍛えていただきました。何を鍛えていただいたかというところ「コミュニケーション能力」です。精神的に辛い部分もありましたが、社会人としての基礎力、人間力、を底上げしていただきました。そして、成長していく企業に勤められたことを誇りに思っています。

高専に戻ってくるきっかけとなったのが、社会人4年目の年末、恩師の尾上教授からの1本の電話でした。技術職員として、建設システム工学科の建築コースを卒業して専攻科を修了している者を迎えたいとのことでした。ちょうど現場管理の仕事が続けるか悩んでいた時期と重なっていたこともあり、ほぼ二つ返事で採用試験を受けました。

そんなこともあり、なんだかんだで、技術職員として7年の月日が経って、舞鶴にも随分長く拠点を構えているわけであります。

舞鶴高専では、勉強の習慣というのを身につけられたのかなと思っています。学生時代より、今の方が勉強しています。大人になったら勉強しなくていいというのは大間違いです。大人になってからも勉強を続けている姿勢を学生たちに見せるべきだと思っています。

最後に、変化の時代に打ち勝つ人材を育成するには、舞鶴高専もっと変わるべきだと思っています。そのためには、ここで働く大人たちがもっと勉強して、社会の変化に対応していく。新しいもの取り入れていく、挑戦してくチームであってほしい。それこそ学生にとって最高の教育だと望んでいます。

技術職員となって

教育研究支援センター

技術職員 蔭山 海一郎

(電気情報工学科 平成26年3月卒業)



平成21年に電気情報工学科に入学しました。プログラミングに興味があり、部活動ではプログラマーズコミュニティ部に所属し、仲間とともに新しい技術やプロジェクトに挑戦する日々を過ごしていました。当時iPhoneとAndroid端末が出始めた頃で、スマホアプリを作ることが流行りで、私はAndroidのアプリを作るためにJava言語を学んで楽しんでいました。部活動ではプログラミングだけでなく、制作物を外部に発表する機会も多くありました。全国プログラミングコンテストでのプレゼンテーションやポスター発表を通じて、自分たちの成果を伝える必要があり、その中で専門外の方にも分かりやすく伝える力を磨けたことが、今でも大きな糧となっています。

そんな学生時代を過ごしていましたが、就職の際にはお客様と直接関わる業務に興味を持つようになり、サービスエンジニアとして勤務していました。この仕事にも大変満足していましたが、コロナ期間中に流行っていたオンライン飲み会を当時のクラスメイトとやっていた時に、偶然にも舞鶴高専の技術職員に公募がかかると耳にして、転職の舵を切りました。

技術職員として母校に戻ってきたときに感じたのは、情報分野の移り変わりの速さでした。私たちが学んでいた頃はCやJava言語が主流でしたが、現在はPythonを使った開発が主流となり、AIやデータ分析といった高度な応用までカバーされています。これは単なる技術の移行ではなく、時代が求めるスキルやアプローチが

変化し続けていることを実感させられるものでした。

しかし、このような環境の変化があっても、学生たちが持つ「こんなものを作りたい」という純粋な熱意は今も変わりません。自由な発想でアイデアを形にしようとするその姿勢は、私にとっても大きな刺激となっています。私自身も、学生たちと関わる中で技術を学び直す必要があり、一緒に成長していくことで、彼らの熱意を支えたいと考えています。

私が定年を迎えるころには丁度100周年を迎えることができそうですので、そのころまで頑張っていきたいと思います。

舞鶴高専60周年に寄せて

学生課教務係 櫻井 真人

(電気情報工学科 平成21年3月卒業)



舞鶴工業高等専門学校創立60周年誠にありがとうございます。縁あって令和6年4月より舞鶴高専で勤務しております。私が入学した平成16年度は電気工学科から電気情報工学科へ変更された節目の年でした。パソコンやプログラミングの勉強をしたくて高専を志した私にとってはうれしい変更でした。学科名は変更となりましたが、本格的なカリキュラム変更がされたのは、私が4年生になったころでした。当時、友人達と1年生のシラバスを見て羨ましがっていたことを憶えています。

現在教務関連の業務に携わるようになり、カリキュラムを維持管理する立場となり、変えるにはかなりの労力が必要なことを実感しております。

学生時代を振り返ると部活中心の生活でした。当時、私は吹奏楽部に所属しており、夏の演奏会に向けて、土日は朝から夕方まで練習、演奏会直前になると毎日夜9時まで練習するなど、かなりハードな部活だったと思います。

冬は関西の高専が集まって行う演奏会があり、寒空の下、楽器を抱えながら、始発で練習場所だった他高専を目指したのを今でも鮮明に憶えています。一緒に部活をしていた友人達とは出会って20年以上経ちましたが、未だに毎年集まっては他愛のない話をします。今は地域も仕事も異なるのでなかなか集まるのは難しくなりましたが、かけがえのない存在です。学生達も何10年経っても相談し合える友人を作ってもらえたらと思います。

本校に採用が決まるまではシステムエンジニアとして、大手メーカーの基幹システムの運用保守を経験した後、結婚を機に地元である舞鶴に戻りました。転職先は中小企業でよくある一人情シスの状態でOA機器全般の面倒をみていました。これまで実務経験のなかったネット

ワークやサーバー構築、セキュリティなど未経験の連続でした。何とか乗り越えられたのも幅広く基礎的なことを学べた高専のカリキュラムのおかげだと思います。

システムエンジニアから他業種である事務職員への転職は本校で学んだ内容を活かすきれないのではないかと葛藤はありましたが、働いてみると業務をシステム化が出来ることや業務効率化が出来るものもありそうです。高専職員1年目、まだまだ知らないこともありますので、気が付いたことがあれば改善して、学生生活へ反映できればと思います。

これまでを振り返る

教育研究支援センター

技術職員 依藤 遼

(機械工学科 平成21年3月卒業)

(建設・生産システム工学専攻 平成23年3月修了)



舞鶴高専60周年に先立ち、このような機会を頂きましてありがとうございます。ほとんど自己紹介になってしましますが、一筆書かせていただきます。

私は車や機械いじりが好きだったことから、本科の機械工学科と、専攻科の建設・生産システム工学専攻にて計7年在籍しました。地元も舞鶴であり、通学生でした。

言ってしまうと少し複雑な気分ですが、学業の成績は中の下くらいです。本科1年の時にはバレーボール部に入っていましたが、学業に専念するという謳い文句で年度を跨がず退部しました。無事卒業・修了はできていますが、部活を辞めたからではなく、運よく賢い友人が手助けしてくれたからだだと思います。交流は減りまし

たが、一部の友人とは今も繋がっています。卒業研究は海の水質調査、特別研究では橋のモデル作成に取り組みました。

専攻科修了後は大学院へ進学。京都の一条寺で下宿し、ラーメン激戦区で2年戦いました(そのついでに勉強もしました)。研究は繊維複合材料のリサイクルについて。

修了後は民間企業に就職します。プラント(発電所など)のメンテナンスを主体とする会社で、施工管理業務に就きました。いわゆる現場監督です。

約7年舞鶴で監督さんをやったり、時にはドローンを飛ばしたり。その後転勤で舞鶴を離れ、3年ほど横浜市民となって首都圏で勤務しました。

令和6年初めの地元に戻って来る事になったタイミングで現職の募集を目にし、令和6年6月からお世話になっています。今は機械工学科・電子制御工学科の機械工作に関する実習指導と、実習工場の管理運営に関する業務に携わり、主として(学生の時に触れる機会がなかった)マシニングセンタとにらめっこする日々を送っています。

振り返ると、あれがしたい、これがしたいという大きな想いの無い生活を送っていたなと感じます。ですが、そのおかげで少しずつ違う分野をかじる事ができ、堅い言葉ですが、見識を広められたとは思います。

学生の皆さんも将来やりたい事がある人、そうでない人、それぞれだと思いますが、こんな人もいるんだなと思ってもらえれば、少しは気が楽になるのではないのでしょうか。

末筆になりますが、学生の為、また、学校の繁栄の為に業務へ取り組みたいと思いますので、今後ともよろしくお願い致します。



舞鶴高専公式マスコットキャラクター「コウちゃん」

教務関係のあゆみ

はじめに

創立50周年記念誌発行以降の10年の間には著しい少子化や全世界を襲ったコロナ禍への対応など、教務関係においても大きな変化が求められるものであった。ここでは、教育課程・カリキュラムの編成、教育の質保証に関する取り組み、入試制度改革と入試広報、そして新型コロナウイルス感染症への対応について主に概観する。

1. 教育課程・カリキュラムの編成

● 三つの方針の策定

平成28年に学校教育法が改正されたことに伴い、高等教育機関として三つの方針（卒業認定の方針「ディプロマ・ポリシー」、教育課程編成および実施の方針「カリキュラム・ポリシー」、入学者受入方針「アドミッション・ポリシー」）を定めることが義務化された。本校では三つの方針について教務委員会を中心に検討を重ね、平成29年2月の運営会議で決定された。令和2年には高専機構としてのディプロマ・ポリシーについての案が示されたことなどを受け、三つのポリシーの見直しが行われ、新しいポリシーは令和4年度入学生から適用されている。

● カリキュラム改革

平成19年度入学生から適用されてきたカリキュラム（「旧カリキュラム」とする）について、学修単位の導入、PBL型授業やアクティブラーニングの時間の拡充、専門共通選択科目の見直しなどを図るため新しいカリキュラムの検討が平成28年度から開始された。同時に、高専機構では平成30年度以降に入学したすべての学生にモデルコアカリキュラムを導入した教育を実施することとなり、このことも意識して本校では令和元年度入学生から新カリキュラムを導入することが決定された。新カリキュラムでは、特に低学年で余剰単位を無くし進級認定を分かりやすくすること、時間割に余裕をもたせ、学生の自主的な活動時間を増やすことなどを基本的な考えとし、ほとんどの科目を必修化した。さらに、学習に対するモチベーション向上や実践的な学びを推進するために、各種団体や協会が実施する資格試験による知識・技能審査に係る単位認定を大幅に改定した。

また、新カリキュラムは旧カリキュラムからの変更が大きいため、混乱なく移行するために平成30年度入学生適用の準新カリキュラムを整備した。

● モデルコアカリキュラム

令和6年度時点での各学科のカリキュラムは高専機構の示す改訂版モデルコアカリキュラム（MCC）に対応したものとなっており、MCC（コア）分野別専門的能力の分野としては、機械工学科は機械系分野のみの単独学科であり、電気情報工学科は電気・電子系分野と情報系分野、電子制御工学科は機械系分野と電気・電子系分野、建設システム工学科は建設系分野と建築系分野のそれぞれ融合複合学科となっている。

● 教務関係諸規則の改定

平成27年度から令和6年度までの10年間で教務関係の諸規則のうち、特に学年修了に関するものと単位未修得者に対する再試験に関するものの改定が行われた。改定の主な理由は、複雑になった制度を整理することであるが、本校の重要な検討事項の一つである原級留置率や退学率の改善も意識されていた。改定後の規則ではそれまで定義されていた仮進級という制度が廃止され、学年修了と進級に必要な単位数を定義した。学年修了単位数と進級単位数は基本的に同一であるが、3年生のみ進級単位数が85単位に対して、高等学校の標準的な単位数などを参考に、学年修了単位数は79単位と設定とした。

● 数理・データサイエンス・AI教育プログラム

令和3年度から始まった文部科学省が認定する「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」に対して、各学科で対応する科目を決定するとともに、実施体制や規程の整備を進め、令和5年8月に「舞鶴工業高等専門学校 数理・データサイエンス・AI教育プログラム」がリテラシーレベルに認定された。令和4年度以降に準学士課程第1学年に入学するすべての学生が対象となり、必要な単位を修得することで、リテラシーレベルの数理・データサイエンス・AI教育プログラムの修了認定が行われる。さらに、令和6年度には電気情報工学科のプログラムが応用基礎レベルに認定された。

残り3学科についても応用基礎レベル認定のための準備を進めているところである。

● グローバルエンジニア育成事業

高専機構の推進するグローバルエンジニア育成事業に対して、本校では令和6年度にグローバルエンジニア育成推進室を設置し、学生の海外活動を促進させることを目的に、グローバルマインドの育成、専門分野での英語力、TOEICスコア向上を主な取り組みとして進めている。

● 「国立高等専門学校間単位互換」制度

令和4年度から国立高等専門学校間での単位互換制度が開始された。基本的に遠隔授業で実施され、本校では、自由科目の扱いとしているため、本制度で修得した単位を卒業単位数に含めることはできない。一方で、本校からは令和4年度、令和5年度は「映像メディア工学」（電気情報工学科開設科目）、令和6年度は「材料力学Ⅱ」（機械工学科開設科目）を提供科目とした。

2. 教育の質保証に関する取組

高専機構では、第4期中期計画（令和元年度～令和5年度）に合わせて質保証6項目（①～⑥）に対する目標が立てられた。本校での主な取り組み内容や成果を記す。

① ポートフォリオ教育の実施

令和2年度から様々な試行を重ね、令和4年度から、単位修得状況やディプロマ・ポリシーに対する到達状況を確認できる到達度確認表、学生ごとに実習の成果物（加工品、図面など）などを保管できるポートフォリオフォルダ（SharePoint上に配置）、半期ごとに学習等の成果を振り返るリフレクションシートなどを組み合わせて、本校のポートフォリオ教育として実施している。

② 実験スキル計測の実施

実験スキルの計測については、高専機構でも先行して取り組まれており、本校では平成30年度1年生から段階的に導入され、令和5年度にはすべての学科・学年で実験スキル計測の仕組みが完成した。各学科の実験実習項目に対して、実験スキル評価シートを用いて、学生に自己評価をさせ、担当教員が結果の分析と公表をする仕組みとなっている。また、これらの結果は評価資料として電子データで保管することとした。

③ 分野横断的能力の育成の実施

分野横断的能力の育成を科目と対応させることにについて、令和2年度から各学科で実施しているPBL型科目の分析を行うとともに、分野横断的能力を数値的に

確認することを目的として、令和3年度に複数の高専で導入を開始していたジェネリックスキル計測のためのPROGテスト（河合塾・リアセック）の受験を一部の学年・学科に対して試行した。PROGテストでは学生の自己分析に活用できること、教員は全体傾向を把握し教育内容にフィードバックできること、などといった効果が期待できることが確認され、令和4年度からは本科2年生と4年生の全学生を対象に実施することが決定され、以降、後援会から費用面での補助を得て実施されている。

④ データに裏付けされた教育改善の実施

従来から行われてきた国立高等専門学校学習到達度試験に代わり、平成30年度からCBT（Computer Base Test）が実施された。本校では数学（3年生）、物理（2年生）、化学（1年生）を受験することとした。令和元年度から専門科目のCBTにも参加し、電気情報工学科と電子制御工学科の4年生が電気電子系のCBTを受験した。以降、受験学年や対象科目の若干の変更を伴いながら、継続して実施されており、その結果は個人レベル、学科・クラスレベルで分析され、フィードバックされている。令和4年度からは「④データに裏付けされた教育改善の実施」が「教学マネジメント」に発展的移行となった。これに伴い、令和5年度には、教学マネジメント推進のために必要不可欠なIR（Institutional Research）データを扱う部署として教学IR室が設置され、様々なデータ収集と解析を行っていくこととなった。

⑤ ピアサポーター育成の実施

ピアサポーター育成の実施については学生相談室が中心となって取り組んでいる。ピアサポーターに対する学生の理解や意識の向上を目的として、平成28年度に新入生を対象にPEER（学生同士の支えあい）プログラムを初めて実施し、平成30年度からは新入生合宿研修で実施している。また、令和3年度に、本科1・2年生を対象として定期試験前に実施されている放課後教室に、TAとして専攻科生を配置する試みを始めた。放課後教室は令和4年度以降も継続して実施されている。

⑥ 学生情報の集約および共有の実施

学生情報の集約と共有について、本校では「学生カルテ」を運用している。学生カルテは令和2年度に試行され、令和5年度からはSharePointを利用し、アクセス権限を管理した上で共有できるようにした。また、令和3年度からは教務システム上に保存されている成績等の学生情報の共有も開始した。

3. 入試制度改革と入試広報

令和3年度に実施される本科入学者選抜から、制度の変更を行った。変更の主な内容は、①募集人員の割合について、特別選抜を50%から60%に、学力選抜を50%から40%にそれぞれ変更する。②特別選抜に「地域創生型」と「一般推薦型」を設ける。③特別選抜の出願資格を地域創生型は中学校3年間の内申点合計が108以上とし、一般推薦型は成績の数値を明記せず、優秀であることとした。さらに、令和6年度入試からは特別選抜の割合を70%に変更した。

令和5年度入学試験からは「提携高専による追選考制度」を導入した。追選考制度は定員割れとなった場合に提携している他の国立高専（提携高専）の学力検査選抜を受験して合格とならなかった者を対象として追選考を行う制度である。提携高専として令和6年度までは和歌山高専のみであったが、令和7年度入試からは明石高専と奈良高専が加わった。

● 入試広報活動

入試広報については従来入試広報ワーキング（平成28年度まで）を中心に実施されてきたが、平成29年1月に入試委員会の下に入試広報部会が設置され、以降の入試広報活動の中心を担っている。この10年間は特に近畿北部地域での少子化が著しく、入学生確保のための広報活動は肥大化していったため、教職員の負担も相当なものであった。取り組まれた広報活動の主なものは、プレオープンキャンパス、オープンキャンパス、中学校訪問、中学校主催学校説明会への参加、入試説明会、あやべ理工系ことはじめ教室、先どりサイエンス教室、女子中学生を対象としたイベント（女子カフェトークなど）、高専祭キャンパスウォークなどである。



令和5年度オープンキャンパス

● 入学前ICT教育

令和4年度入試から特別選抜（地域創生型）の導入により、選抜時期が早期になることから、入学予定者を対象とした入学前ICT教育を実施することとなった。Moodleに設けられたコンテンツやZoomやTeamsによる遠隔講義の受講に加え、在校生との交流など1月から3月にかけて毎年度、全8回程度の取組が行われている。

4. 新型コロナウイルス感染症への対応

令和2年1月に国内で初の感染者が確認されて以降、新型コロナウイルス感染症への対応は本校でも混乱を極めた。令和元年度の学事日程は何とか後期期末試験まで実施することができ、卒業式は時間短縮、参列者限定で実施された。状況が深刻さを増し、令和2年度の年度当初からの授業実施は困難となり、5月8日から遠隔授業で学期スタートとなった。ほとんどの教員にとって遠隔授業の経験はなく、教務委員会では勉強会などを実施して遠隔授業の準備を進めた。ここで得たノウハウや作成した授業コンテンツはその後の授業においても活用されることとなった。

本校の特性上、学校再開（対面授業の開始）は学寮の再開なしにはあり得ず、2人部屋の寮室には医療用カーテンを取り付けて個室扱いとし、食事や入浴は時間制として感染のリスクを避けるなど、十分な対策を取ったうえで、対面授業を6月15日から再開した。登校再開後も授業や教室での感染症対策、学生・教職員の毎日の健康状態の確認など、緊張が解けることはなかった。さらに、例年行われる多くのイベント（入学式、高専体育大会、夏季インターンシップ派遣、研修旅行など）は中止となった。

令和3年度も流行の波が数回あり、まん延防止等重点措置および緊急事態措置の発令期間には、本校も臨時休校、遠隔授業の実施、学事日程の変更などの対応を行った。一方で、高専体育大会や高専祭は感染症対策を十分にとったうえで実施された。普段の体育大会であれば当たり前への応援や掛け声も制限されるなど、まだまだストレスのかかるものであった。写真はコロナ禍での入学式の様子である。



コロナ禍での入学式（令和3年度）の様子

令和4年度は、コロナがまん延したときには、いきなり学校閉鎖をするのではなく、まずは学年閉鎖や学級閉鎖を行うという方針で運営した。結果として、令和4年度は、学年閉鎖を2回ほど行い、その間は遠隔授業を実施した。

令和5年度も前期中は感染症対策のため、学寮食堂では交代制としていた。そのための昼食時間の確保や通学生のパスの運行時間などを考慮して、前期中は85分授業を継続した（令和2年度の学校再開後からは70分授業、令和2年11月から80分授業、令和4年度前期中間試験後からは85分授業としていた）。後期からは学寮での対策が緩和されたため、従来の90分授業が再開できた。

令和5年5月8日に学校保健安全法施行規則の改正が施行され、新型コロナウイルス感染症は第2種の感染症（インフルエンザと同等）に追加された。医師の証明書により、出席停止期間は公欠として扱い、ワクチン接種に伴う欠席については、公欠とはしないこととした。

以上が本校における新型コロナウイルス感染症対応の主な内容である。詳細については各年度の年報に掲載されている。また、この間の学校運営に対して、多くの方々に多大なるご支援を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。

5. その他

● 英語デー

平成20年度より毎年度、英語デーを継続して実施している。内容は英語能力を測る外部テストの受験である。低学年では平成30年度まではACEの受験、令和元年度以降はTOEIC Bridgeの受験を実施している。高学年はTOEIC IPの受験を実施しており、令和6年度は3・4年生および専攻科1年生は後援会の補助を受けて全員受験としている。

● 研修旅行

コロナ禍前（令和元年度まで）は海外研修旅行として学科ごとに海外の大学や日系企業の施設を訪問した。各学科の行先は機械工学科・電気情報工学科・電子制御工学科・建設システム工学科の順に平成27年度はベトナム・北海道（韓国の予定であったがマーズ感染拡大懸念のため変更）・台湾・ベトナム、平成28年度は台湾・韓国・ベトナム・台湾、平成29年度はベトナム・台湾・台湾・ベトナム、平成30年度は台湾・マレーシア・ベトナム・台湾、令和元年度はマレーシア・ベトナム・台湾・ベトナムである。令和2年度と令和3年度はコロナ禍で研修旅行は中止とした。令和4年度からは国内で研修旅行を実施している。



令和6年度研修旅行の様子

● 地域志向教育の推進

学生が地域社会での活動を通じて社会貢献を行い、実践的な経験を得る機会を提供し、その成果を評価して学業との連携を促進することを目的に令和5年度に「地域連携・地域貢献活動の履修等に関する規程」を定めた。本規程は令和6年度入学生から適用されている。

● スタートアップ人材育成

令和5年度に令和4年度大学改革推進等補助金（高等専門学校スタートアップ教育環境整備事業）の一環として、3年生を対象に全5回の講習および1回の講演会を実施した。また、2年生を対象に企業の協力を得てアイデアソンを実施した。令和6年度には対象を2年生として全4回の講習と4週にわたるアイデアソンを全学科で実施した。令和5年度には「ものづくりラボ」も開所し、学生が自由な発想でものづくりにチャレンジできる環境が整えられてきた。今後のスタートアップ人材育成の充実が期待される。

● 電子化の推進

学生の出欠確認（所在確認）の厳格化が求められ、平成29年度からMicrosoft365を使用した学生の出欠確認システムを段階的に導入した。令和2年度にはコロナ禍での健康管理も加わり、1年生から4年生では朝のショートホームルームを導入し、電子版出席簿も本格運用を始めた。これにより、学生・担任・保護者の三者で出席状況を確認できるようになり、安否確認にも利用できるシステムが構築された。

また、シラバスや試験成績などの成績評価資料は従来紙ベースで保管されていたが、令和元年度からは電子ファイルを保存することとなった。

● 修学支援

本校の特別支援教育に係る必要な協議及び具体的な特別支援活動については、平成24年度に設置された特別支援教育連絡協議会を中心に活動してきた。さらに、平成28年度には学生相談室の活動を中心として、カウンセラー、学校医、担任などが一体で学生のケアに取り組むことを目的として「こころと体の支援部会」を設置した。令和2年度からは特別支援教育連絡協議会を廃止し、修学支援室が新たに設置され、特別支援のスーパーバイザーやカウンセラーと連携し特別支援に関する有機的・効果的な対応策などを検討・実施している。

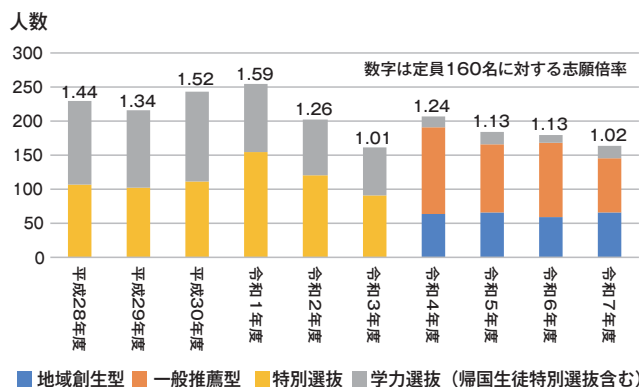


図 入試志願者の推移

(加登 文学)

学生委員会関連のあゆみ

学生委員会関連について2015年度～2025年度までの歩みについて振り返る。

1. コロナ禍について

この10年を振り返るなかで、コロナ禍については避けて通れない事象であった。教務委員会、学寮委員会とともに、その対応に追われ、学生委員会管轄では、登校、健康調査に関するシステム作成が1番の課題となった。まず、毎朝の健康調査システムを作成し、学生は毎朝健康調査についてWeb上で回答した後、登校するが、未回答のまま登校した学生にはショートホームルームにおいて担任が健康状態を確認していた。また発熱などにより出席停止の場合は、授業対応について担任等から連絡指示が行われ、それに沿って受講を行った。また、コロナ禍によって、高専祭、スポーツフェスタ等のイベントを中止、もしくは代替イベントを開催することがあった。

ただし、これらを機に、コロナ禍後の学校生活を行うにあたって、今までとは違う形で学校生活を再開することが出来た。欠席登録に健康調査の要素を取り込むことで、その後の、インフルエンザやコロナ流行時にも対応することが可能になった。オンデマンドやリモート授業を行ったことで、その後も登校停止学生への対応が可能になった。新入生合宿研修再開時には、新入生校内研修で実施したドミノ競技を新たなイベントとして取り入れることで、学生同士のコミュニケーションの活性化が可能になった。前期の休日に開催していたスポーツフェスタを見直し、球技大会に変更し、後期に実施していた球技大会とあわせて年2回の開催に変更することで、学生の参加率が向上した。高専祭再開時に、ミニゲームコーナーを作ることで、参加して頂いた家族連れの満足度が向上した。



球技大会

このように、コロナ禍は全てがマイナス要因ではなく、その後の学校生活においてプラス要因に貢献した部分もあった。



新入生合宿研修（ドミノ競技）



高専祭

2. 学生の指導について

2005年度から開始した、校内禁煙を図るための教職員巡回指導は、2025年度も継続しているが、コロナ禍で一旦停止したこともあり、2025年度現在は、開始当初よりも巡回回数は減らしている。

交通事故の防止と安全運転意識向上のため2006年度から義務づけた車両許可証の車内掲示や、2010年度から開始した駐車場利用の違反者にロックを掛けて反省を促す対応は2025年度現在も継続している。15年も指導を継続していることもあり、ロックを掛けるような違反者は、現在ではほとんどいなくなっている。

高専だけでなく、高校等も含め全国的な懲戒等の処分についての見直しが求められるなか、本校でも懲戒に関する規定を定め、2024年度から学生便覧に記載し、運用を行っている。10年前に比べ、学生に関する問題も変化してきていることもあり、今後も時代に合わせた懲戒、特別指導等の運用を柔軟に対応させていくことが必要であろう。

2013年度から開始された午後10時以降の学生による校内施設の使用制限に加え、2023年度からは、年末年始の教職員不在に合わせ、終日使用制限を行っている。また、課外活動は原則、18時30分まで（ロボコン等の製作活動で、どうしても延長する場合は、大会2週間前から申請許可形式で20時30分まで延長する場合がある）とし、その後、各教室等の施錠を行うことで、校内の安全を図っている。

また、年4回開催される中丹高校補導連絡協議会に、学生主事が出席することで、中丹の高校、各機関との連携を図るとともに、中丹地域で起こっている出来事を学内で共有することができている。これにより、学生が事件などに巻き込まれることを防ぐことができている。

3. 学生生活の支援について

新入生に対しては、4月に新入生合宿研修を若狭湾青少年自然の家で実施していたが、コロナ禍で一旦停止した後、校内開催を行った。現在は、若狭湾青少年自然の家での1泊2日の形で再開している。また、4月にはクラブ活動紹介を行うことで、課外活動の促進や、新入生パートナーシップを行うことで、新入生が担任以外の教員とつながりやすい工夫を行うことで、新入生が本校に早くから適応できる活動を行っている。



クラブ活動紹介



新入生パートナーシップ

2007年度から開始した英語デーによって、英語力向上を図っている。現在では就職、進学等でTOEIC点数が必要な場合があり、進路活動における補助の役割が大きくなっている。

寮生に関しては、寮務委員会が中心となって日々の生活をサポートしている。一方、下宿生は、その生活の様子が見えにくいこともあり、夏季休暇前に下宿生全員と面談を行い、一部の学生について、下宿に教員が訪問する下宿訪問を実施することにより、下宿生の様子を見る体制を取っている。



下宿訪問

現在の災害時対応として、防災訓練時にWebによる安否確認を全学生および全教職員に対して実施している。時代に応じ、利用システムを変更し、教務関連等での連絡の役割も果たしている。

奨学金等に関しては、高等学校等就学支援金をはじめ、2024年度は61件を告知している。告知の方法は、学内掲示板、HP等を利用しており、学生だけでなく保護者にも広く告知できる体制を取っている。

学生が安心・安全で学校生活を過ごせるように、学生委員会では講習会を担任の協力のもとに実施している。

実施している講習会と対象学年

講演会名	対象学年
ネット犯罪被害防止講演会	1年
いじめ防止に関する講演会	1年
性被害者・性加害者とならないための講演会	1年
メンタルヘルス講演会	2年
消費者講演会	3年
薬物乱用防止講演会	全学年



講演会の風景

4. 行事と課外活動について

大きな行事として、2023年度に「第20回全国高等専門学校デザインコンペティション2023in 舞鶴」を本校が主幹校になり、舞鶴市総合文化会館および舞鶴赤れんがパークで開催した。また、2024年度は「高専ロボコン2024近畿地区大会」を本校が主幹校になり、舞鶴文化公園体育館で開催した。特に、「第20回全国高等学校デザインコンペティション」では、主幹校として開催しただけでなく、空間デザイン部門で、最優秀賞（日本建築家協会会長賞：1位相当の受賞）を獲得することができた。その他にも課外活動では優秀な成績を収めているが、それらにはついては、各クラブ活動報告に譲ることにする。

クラブ活動以外でも、学生会が中心となって、舞鶴市で開催される「わがまちトーク」への出席、松尾寺駅でのボランティア清掃、舞鶴赤れんがハーフマラソンでのボランティア等に参加したり、学科の教員の協力のもと、各種コンテスト等へ参加・応募したりすることで、課外活動の幅を広げている。

2022年より各部活動の月間スケジュールをホームページに公開している。これにより、部員だけでなく、保護者も活動内容を把握できるようになっている。



創造技術研究会 TV取材対応



松尾寺駅清掃ボランティア



第20回全国高等専門学校デザインコンペティション2023 in 舞鶴



赤れんがハーフマラソンボランティア



高専ロボコン2024近畿地区大会

5. 進路指導について

進路指導については、進路指導委員会が中心となって、1年生のときから進路ガイダンスを行い、3年生からは、学校主催のキャリアセミナーへの参加、外部団体が開催するセミナーへの参加を促すとともに、大学説明会を開催し、就職、進学ともに手厚いサポートを行っている。特に、学校主催のキャリアセミナーを開催している高専は少なく、3年次に、このキャリアセミナーに参加することで進路への意識が高まっているよ

うに感じる。また、実際の履歴書作成、面接練習に関しても、担任を中心に、研究室の教員、学科の教員には多大なる尽力を頂き、就職希望学生の就職率はほぼ100%で、10年間推移している。



進路ガイダンス



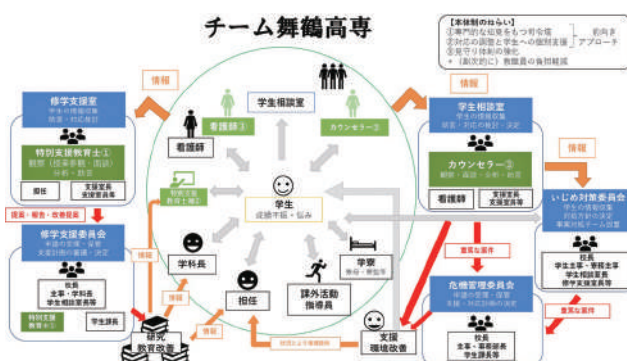
キャリアセミナー



進学ウィーク

6. 学生相談について

学生相談については、学生相談室、修学支援室、いじめ対策委員会が中心になって学生のメンタルヘルス等のサポートを行っている。学生の様子を把握する為に、年2回の学校適応感尺度調査、年4回の学生の心のアンケートを行い、これに基づいて、学生相談室が中心となり面談等を行っている。また、近年は、学生相談室が、学生同士、学生と教員の繋がりを広める為に、天体観測等のメンタルヘルスに留まらないイベントを開催している。



学生支援組織図



学生相談室

7. 最後に

この原稿を4ページで依頼され、多いな、前回をそのまま踏襲するのではなく、現代のニーズに合わせてページ数を検討してもらえればと思うと同時に、来年度は現代の学生に応じてレポートの項目を検討しようと思ったように、学生委員会活動も現代のニーズや状況に応じて、活動内容や、学生への接し方等を柔軟に対応させていく必要性がある。

(山田 耕一郎)

学寮のあゆみ

1. 鶴友寮の変遷

本校学生寮（鶴友寮）は、寮生が集団生活をとおりて協調性や社会性を育み、自律した技術者となるべく、学業および課外活動に勤しむための拠点である。遠隔地からの学生が多いこともあり、全国でも屈指の大規模寮となっている。全学生数の7割にあたる約580名が1号館から7号館まで、1人部屋もしくは2人部屋で生活している。この60周年記念誌では50周年記念誌以降、つまり平成27年度から令和6年度までの10年間について鶴友寮の歴史を記す。

大規模寮であるがゆえに学寮運営に寮生の協力は欠かせない。学寮運営においては一貫して、自主性と協調性を養うことを理念としてきた。令和2年度からは新型コロナウイルス感染症への対策が最優先事項となり、規則の遵守、安心安全確保、規制強化が学寮運営において不可欠となり、寮生はかなり窮屈な生活を余儀なくされたが、寮生会および指導寮生会を中心として、自主性と協調性を発揮し、コロナ禍を乗り切ることができた。

● 学寮棟・施設について

近年、女子学生数が年々増加しており、この傾向は今後も続くものと想定される。それに伴い、女子寮の改修、あわせて老朽化した棟の改修もおこなわれてきた。大規模な改修から簡易な改修まで、その変遷は以下のとおりである。

- ・平成28年度
女子寮生の増加に伴い、1号館2階の洗面所・シャワー室、ラウンジを改修し、寮室4部屋を新設。
- ・平成29年度
女子寮生の増加に伴い、1号館2階の補食室を改修し、寮室1部屋を新設。また女子寮の環境改善のため、1号館4階にシャワー3基、留学生用寮室2部屋にキッチンを新設。
- ・平成31年度
老朽化に伴い、4号館の改修に着工。また6号館1階の4人部屋を分割し、2人部屋へと改修。
- ・令和2年度
4号館の改修工事が終了。これにより全室個室となり、4号館を女子寮として運営開始。
- ・令和4年度
5号館（西）の改修。次年度に予定される5号館（東）の改修に備えて、6号館の1人部屋を2人部屋に改装。7号館2～4階までのシャワー・給湯設備を更新。
- ・令和5年度

5号館（西）を女子寮として運営開始。5号館（東）の改修。

- ・令和6年度

5号館（東）を男子寮として運営再開。

新棟を建設できるほどの敷地がないため、上記のとおりに、既存の建物を改修することで寮生数の増加に対応してきた。改修工事中は当然ながら寮生を入寮させることができないため、必然的に入寮定員が大幅減となった。例年以上に入寮選考が厳しくなり、入寮を希望しても通学圏内に実家がある学生には入寮を断るなどの対応を余儀なくされた。

今後も女子寮生が増加していくと、女子寮の拡張あるいは男子寮との入れ替え等を検討することになるだろう。また1号館、6号館、食堂の老朽化が進んでおり、改修を見据えて運営していくことになる。

● 食堂業者について

最長で3年に一度の入札を経て決定され、長年、コンパスグループ・ジャパン（ユーレストジャパン）への委託が続いていたが、令和5年度からは魚国総本社へと変更となった。令和4年に異物混入問題と賞味期限切れ食品の提供問題、令和6年にアレルギー事故が発生し、寮生および保護者にはご心配とご迷惑をおかけした。特にアレルギー事故では寮生2名が救急搬送される事態となり、食堂業者にはあらためて再発防止とアレルギー食対応への改善に取り組んでもらっている。また年2回の給食検討委員会にも参加し、寮生との意見交換をとおりてメニュー改良にも取り組んでもらっている。令和6年度現在、平日の昼食と夕食はメインを2種類から選択できるようになっており、体調不良者にはおかゆやうどんの提供にも対応している。また寮生のリクエストに応じてクリスマススペシャルメニューや新春力餅大会でのお餅の提供にも協力してもらっている。

● 指導体制について

この10年間で指導体制に大きな変化はない。約580名の寮生を教職員だけで指導することはできないため、寮生活を自主的に運営する目的で、寮生会と指導寮生会を組織している。寮生会長と副寮生会長のほかに、書記、会計、生活委員長、文化報道委員長、企画委員長、車両委員長、防災委員長を役員として、メンバーは学寮の管理・運営に貢献している。また指導寮生長、副指導寮生長、女子寮長をトップとして約50名の指導寮生が各フロアの取りまとめ役として日々の寮生活をサポートしている。

学寮委員会のメンバーはそれぞれ担当フロアが割り当てられ、フロアミーティングの開催、フロアの学生からの相談や寮生間のトラブルに対応している。また、閉寮・開寮の際は全寮生が一斉に帰省・帰寮するため、ほぼすべての学寮委員会メンバーが寮室チェックや鍵の返却・受け渡しに対応している。年2～3回実施される寮室点検でも、寮生が寮室にいない授業時間中に、抜き打ちで一斉に全寮生の部屋を点検するため人手が必要となる。多くの学寮委員会メンバーに加え、寮務係（職員）の協力も得て実施している。準備に手間もかかるうえに、実施負担も大きい業務ではあるが、寮生が禁止物品を持ち込んでいないか、寮室を適切に使用しているかを確認するための重要な機会である。令和6年度には清掃指導にも力を入れ、寮室点検の意義において、不正に対して減点を申し渡すだけの「注意」から、点検後の「指導」へと力点を移行させる試みがあった。全寮生の意識を高めるほどには至っていないが、日頃から整理整頓を心がけ、美しい生活環境を維持できるようになれば、自ずと学生生活の充実につながるものと期待できる。10年後の70周年にむけて、この取り組みが一つのターニングポイントとなるかもしれない。その他にも、1年生を対象とした栄養講座、全寮生を対象とした防災避難訓練などを開催しており、寮務主事補を中心に運営をおこなっている。この10年間、学寮運営および寮生指導で中核を担ってきた歴代の主事、副主事、主事補を表1に示す。

表1

	主事	副主事・主事補			
H27	仲川 力	上杉智子 伊藤 稔	生水雅之 徳永泰伸	井上泰仁	
H28	仲川 力	牧野雅司 伊藤 稔	上杉智子 徳永泰伸	生水雅之 井上泰仁	
H29	仲川 力	牧野雅司 清原修二	上杉智子 徳永泰伸	生水雅之 丹下 裕	
H30	仲川 力	畑恵里子 高木太郎	牧野雅司 毛利 聡	村上信太郎 丹下 裕	
H31	仲川 力	豊田 香(副) 喜友名朝也	牧野雅司 村上信太郎	山根秀介 清原修二	
R2	豊田 香	木村健二(副) 喜友名朝也	荻田みどり 村上信太郎	宝利 剛 仲川 力	清原修二
R3	豊田 香	芦澤恵太(副) 村上信太郎	児玉圭司 高木太郎	荻田みどり 毛利 聡	木村健二
R4	児玉圭司	芦澤恵太(副) 高木太郎	荻田みどり 毛利 聡	木村健二 豊田 香	豊田 香
R5	児玉圭司	野間正泰(副) 豊田 香	荻田みどり 井上泰仁	山根秀介 高木太郎	木村健二 毛利 聡
R6	藤田憲司	山崎慎一(副) 毛利 聡	喜友名朝也 熊谷大雅	森健太郎	

なお、令和2年度から4年度にかけてのコロナ禍については後述するが、学寮運営に主事・副主事・主事補の並外れた尽力があったことを特筆しておく。

宿日直体制について、17:00から翌朝8:30までの宿直にはA寮監（教員）、B寮監（男性非常勤職員）、管理当直（常勤職員）の3名を基本として、月1～2回は女子寮に女子寮監（女性教員）が入るという体制、そして土日祝日の8:30から17:00までの日直にはA寮監と管理当直の2名が入るという体制が長らく維持されてきたが、令和2年度、新型コロナウイルスの世界的流行により、女子寮の宿直対応を強化するためにC寮監（女性非常勤職員）

が追加された。以降、5年弱その体制が維持されてきたが、令和6年度に働き方改革の一環として、10月から宿日直の負担軽減策を試行した。日直体制に変更はないが、A寮監による宿直を17:00から21:30までの半直へと短縮し、さらに管理当直を廃止したことで、21:30以降の宿直者はB寮監とC寮監の2名体制となった。緊急時には寮務主事・副主事が対応にあたることでバックアップ体制を確保している。教職員からは大きな負担軽減になったという反響があり、大きなトラブルもないためこのまま本運用へと移行し、この体制が今後のスタンダードとなるだろう。

2. 行事と日課

コロナ禍には多くの行事が中止となり、日課の変更もあったが、例年、学寮で開催している行事、そして寮生活を送るうえで必要となる日々の活動自体に大きな変化があったわけではない。コロナ禍で中断していたイベントも令和6年度にはすべて開催することができた。その意味では年単位での学寮の「平常」を取り戻した。そして、コロナ禍が点呼、起床、食事、入浴、消灯就寝といった寮生活に必要な活動を中断させることなくあった。時間の変更や実施方法の変更を経て、一日単位でも新たな「平常」が構築されている。

● 行事について

年間スケジュールはおおむね表2のとおりである。

表2

4 5 月	開寮・入寮式 駐輪場清掃 フロアミーティング	9 11 月	開寮 1年生部屋替え フロアミーティング 寮室点検
6 月	寮室点検 新入生歓迎会 栄養講座 防災避難訓練	12 月	寮生総会 交換寮生 クリスマスイベント 寮室点検 閉寮
7 月	七タイイベント	1 月	開寮 新春力餅大会
8 月	閉寮 オープンキャンパス（学寮見学）	2 月	入寮選考結果発表 閉寮

寮生が自主的に企画・運営をおこなうイベントは新入生歓迎会、七タイイベント、クリスマスイベント、新春力餅大会である。新入生歓迎会はクイズ大会やビンゴゲームなど新入生から5年生まで入り混じって交流できる機会となっている。平成31年度まではサマーフェスティバルが開催されていた。軽音部の演奏やダンスを楽しむ夏のイベントであったが、コロナ禍に中止となり、令和5年度からは七タイイベントにとってかわった。7月7日前後になる



七タイイベント

と1号館1階ロビー前を色とりどりの短冊で彩られた笹が飾り付けられる。クリスマスイベントでのビンゴゲーム景品やケーキの配布は寮生の楽しみの一つである。この日ばかりは摂取カロリー度外視の夕食スペシャルメニューに全寮生が満足感でいっぱいになる。令和5年度からは新たな企画として新春力餅大会が開催されるようになった。つきたてのお餅を楽しむことができるだけでなく、腕相撲大会では白熱した闘いが繰り広げられる。

他高専との交換寮生は10年以上実施していなかったが、令和6年度には津山高専と寮生の相互派遣がおこなった。津山高専からは女子学生2名を受け入れ、本校からは次年度以降に指導寮生としての活躍が期待できる男子学生2名を派遣した。わずか数日のこととはいえ、良い刺激を得られたようだ。後日、開催された報告会では、鶴友寮にはない日課として、津山高専の「寺子屋」について発表があった。上級生が1年生の自学自習をサポートする制度で、1年生は週に3日21:00から22:00まで必ず参加しなければならないとのことであった。

● 日課について

令和6年度現在、日課表は表3のとおりである。

表3

日課	月～金	土日(祝日)
起床	7:00	7:45
洗面・清掃	7:00～7:20	7:45～7:50
点呼	7:20～7:30	7:50～8:00
朝食	7:30～8:30	8:00～9:00
登校	8:35	
昼食	12:00～12:55	12:00～13:30
夕食	18:00～19:30	
入浴	男子 18:00～21:30 女子 18:30～22:30	
自習時間	19:30～20:40	
門限	20:45	
点呼	20:50～21:00	
清掃	点呼終了時より適宜	
消灯就寝	23:00	

ちょっとした時間の違いはあるものの、令和4年度から現行の日課表にしたがって、寮生は生活を送っている。以前は、男子は22:00、女子は21:30に夜の点呼をおこなっていたが、コロナ禍に門限を早めたことを機に、それにあわせて点呼時間も現行の時間となった。

点呼は寮生の所在を確認するための必要不可欠な日課である。長らく指導寮生がバーコードリーダーを利用して対面点呼をおこなってきたが、平成31年度の途中から、アットリーフ社の学寮オンラインシステムを利用した点呼に切り替わり、令和6年度現在に至っている。指導寮生が対面で実施するスタイルに変わりはないが、寮生本人が外泊と欠食をシステムに入力できるため利便性が向上した。ただ、令和6年4月末、点呼システムに情報漏えいのリスクが発覚し、高専機構本部からシステムの使用を停止するように指示があった。システム復旧が9月の夏休み明けとなり、寮生および保護者にはご不便をおかけした。

3. コロナ禍とコロナ後

この騒ぎは数週間、つまり5月から6月にかけて続いた。人々の通行を阻止するために道路に柵を設置するという政府の命令が出されるという噂や、感染を持ち込む恐れがあるためロンドンからの人々の通行を道路沿いの町が許可しないという噂が広まったため、騒ぎはさらに続いた。しかし、これらの噂はいずれも根拠のない、想像上のものでした。

(Daniel Defoe, *A Journal of the Plague Year*)

令和2年度は新型コロナウイルスの影響で開寮することができない状態で新年度を迎えた。授業はすべて遠隔授業となったため、鶴友寮には留学生を除いて寮生は誰もいないという異様な光景が3か月近く続いた。5月、2人部屋には間仕切りカーテンを設置し、寮生を迎え入れる準備をした。6月、高学年から低学年まで3段階に分けての開寮となり、最終的に新入生が入寮できたのは6月27日であった。

人が免疫を獲得していない未知のウイルス、まだワクチンも開発されていない未知のウイルスに対して、思いつく感染症対策はおそらく洋の東西や時代を問わず普遍的なものだろう。たとえ根拠に基づく確証を得られなくとも、想像のレベルでたどり着ける対策が隔離と遮断である。鶴友寮のような大規模寮で、マスク着用、手洗い、換気、他室への立ち入り禁止、ラウンジの使用禁止がそれぞれどれほどの効果を発揮するのか正確に計測できるものではない。それでも寮生の安全を守るためには、寮生に窮屈な生活を強いてでも、できることをすべて実施するしかなかった。発熱者および濃厚接触者の隔離用に各フロアに一定数の空き部屋を確保した。寮生をグループ分けすることで食事時間と入浴時間を分散させた。学寮食堂では座席数を減らして対面で着席できないようにし、黙食を推進した。規制に次ぐ規制で重苦しい雰囲気は充満する中でも、寮生は「黙食パネルコンテスト」にユーモアあふれるパネルデザインを投稿するなど、規制に対して前向きな姿勢で協力してくれた。

コロナ禍に感染拡大防止策の一環として開始された日課がコロナ後もそのまま活用されて、学寮運営のための新たなスタンダードとして定着しているものもある。



黙食パネル

令和3年度から、感染拡大防止と「安心して清潔な学寮」という運営方針により、夏休みや春休みの長期休業期間中は部屋の荷物をすべて搬出してもらうようになった。コロナ後の令和6年度現在でもこの運営が続いており、この期間を利用してエアコン清掃、害虫駆除、メンテナンスなどを集中的におこなっている。コロナ禍には全学生が毎朝検温を実施し、Microsoft Formsで発熱や体調

不良の有無を回答した。コロナ後の今でこそ、回答を要求することはなくなったものの、そのシステムは欠席情報登録フォームとして活用されている。入力された情報はシステム上で寮務係にも共有され、体調不良者のケア・サポートをおこなっている。コロナ禍に運用されていた発熱者および濃厚接触者の隔離および帰省に関するルールについて、令和5年5月に新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行したことに伴い、条件は緩和されたものの、依然として38度以上の発熱者への隔離と帰省は基本方針として維持している。コロナに限らずインフルエンザやマイコプラズマ肺炎などの感染症対策としても有効であるため、今後もこの対応が続くだろう。

コロナ禍の制約から生まれた慣習を継承しながら、新たな生活のスタンダードが構築されつつある一方で、コロナ禍に利便性が向上したこともある。令和4年度には学寮インターネット設備を外部委託し、各フロアにWi-Fi環境を導入した。導入に際して、寮生および保護者にアンケート調査をおこない、学寮諸経費1か月あたり1,600円の値上げでの導入に賛同があった。運営に関しては深夜の利用を助長するわけにはいかないため、1:00から5:00まではWi-Fiが停止する仕様となっている。

4. 最後に

この10年間で学寮は様々な変化を経験してきたが、変わることなく連綿と続いていることもある。

● 自然との共生

鶴友寮で生活すると、立地上どうしても否応なく野生生物や虫との共生を迫られる。新入生が入寮すると、「毎晩のように女性の悲鳴が聞こえる」と申し出てくることもある。都市部で生まれ育った新入生はシカの鳴き声を聞いたこともないので、間違えるのも無理はない。イノシシ、サル、ときにはクマを目撃することもある。セミ、トンボ、ホタルはまだしも、ムカデやヤスデなど害虫との戦いを避けては通れない。害虫対策をとってはいるものの自然の力に完全に抗えるわけではない。多湿な環境ゆえに黒カビとの戦いも避けられない。

教員と寮生との間で展開される会話に年月の移ろいを感じることもない。時はコロナ前、まだ平成だったころ、次のような会話があった。

学生「先生!部屋にゴキブリが出ました!」

主事「人間の遠いご先祖様や。丁重に山に帰してやり!」それから数年が経ち時は令和。いつも冷静沈着な留学生在がA寮監室に助けを求めて飛び込んできた。

学生「部屋にエイリアンが出ました。」

寮監「エイリアン?なにそれ?」

学生「わかりません。部屋に戻れません。」

部屋に行ってみると、ベッドにこれまで見たこともない大きさのゲジゲジがいた。真っ黒な目、体長15cmほどの体には不気味な縦縞があり、その両側に細長い脚が無

数に並び、見た目はたしかにエイリアンのようだった。

寮監「動かないね。死んでいるのではないかな。」

学生「どうしよう?触りたくないです。」

その数年後、寮内巡回中の主事がバチバチバチという小さい何かが大量にぶつかり合う音と学生の「ギャー」という悲鳴を聞きつけた。

主事「どうした?」

学生「殺虫剤を天井にスプレーしたら通路が通れなくなりました。」

階段を上がると目の前には緑のカーペットが広がっていた。よく見ると通路をふさいでいたのは大量の緑カメムシだった。きっと10年後の70周年でも虫との共生は続いていることだろう。

● 寮生を包み込むやさしさ

学寮での生活に不満をもつ寮生も決して少なくはない。毎年、同室者とのトラブル案件は発生するし、共同生活からくるストレスで心身に不調をきたす寮生も必ず現れる。校長と学生とのフリートーキングでは毎年のように学寮に対する意見(ほぼ無理難題と苦情)が提出される。コロナ禍以降の規制強化の流れを寮生の視点からすると、たしかに寮生活の自由度や快適性は低下しているように見える。改修や間仕切りカーテンの設置により、一人当たりの面積が狭くなったことに加え、荷物の搬入・搬出コストが増えることから、デスクトップパソコンの持ち込みは禁止となった。四輪車については令和6年度の5年生を最後に全寮生が車両登録できなくなった。3年生以上が許可される二輪車についても車両登録できるのは排気量125ccまでとなった。

遵守しなければならない規則は多く、違反すると減点となるうえ、寮務主事から注意や指導を受けることもある。学寮運営への不満が完全になく



間仕切りカーテン

なることはないだろう。それでもこの10年間で全寮生が感謝の思いしか抱くことのない存在がある。親身になってサポートしてくれる寮務係および寮母である。事務手続き、郵便物・宅配物の受け渡し、設備に不具合があった場合の対応など、いつも丁寧に対応してくれる。体調不良の際は配食もしてくれる。通院の送迎に対応してくれることもある。申請漏れ、申請遅れ、ICカード紛失・破損など、「しっかりしろ!」と注意したくなるような状況でも、やさしく、親切に対応してくれる。どのような状況であろうと、どのような寮生であろうと、つねにやさしく、丁寧に対応してくれるその存在は、寮生にとって安心感の源となっている。間違いなく今後も鶴友寮のすみずみまでやさしさを送り届ける大動脈であるだろう。(藤田 憲司)

人文科学部門のあゆみ

1. はじめに

50周年記念誌刊行からの2015年度から2024年度の10年間に、人文科学部門において最も大きく変化したのは、その構成員である。以下にその動向を示す。

- ＜着任＞・畑恵里子教員（2015年4月）
 ・牧野雅司教員（2015年4月）
 ・藤田憲司教員（2016年4月）
 ・山根秀介教員（2016年10月）
 ・荻田みどり教員（2019年4月）
 ・大内真一郎教員（2019年4月）
 ・KHAN SAMIA HASEEB教員（2019年4月）
 ・平尾恵美教員（2020年4月）
 ・Jimmy Aames教員（2021年4月）
 ・岡下朋世教員（2021年11月）
 ・武田悠希教員（2024年4月）
 ・竹内大樹教員（2024年4月）
 ・任雅楠教員（2024年4月）

＜退職（特任・嘱託を含む）＞

- ・宮崎操教員（2015年度末）
 ・村上美登志教員（2016年度末）
 ・松井信義教員（2016年度末）
 ・荒川吉孝教員（2018年度末）
 ・畑恵里子教員（2018年度末）
 ・吉永進一教員（2019年度末）
 ・垂谷茂弘教員（2019年度末）
 ・KHAN SAMIA HASEEB教員（2019年度末）
 ・Jonathan Kay教員（2020年度末）
 ・Jimmy Aames教員（2022年度末）
 ・田村修一教員（2023年度末）
 ・児玉圭司教員（2023年度末）

前回の50周年記念誌発刊の際の教員が、この60周年記念誌を刊行する現在において一人もいない。教員の入れ替わりにより組織が絶えず新陳代謝を行うことができていることは喜ばしいことである。特に、研究・教育活動についての新たな知見や動向、それぞれが担っている学問分野の新しい成果が導き入れられることは、本校の成長に不可欠のものである。一方、情勢の変化や業務の多忙化により、学内のあらゆることが変化してきたが、そこに関わった教員がいなくなっているため、その変化の経緯がわかりづらくなっている。また、短期間での入れ替わりの理由の一つである年齢構成のかたよりは、未解決のまま残されている。意識的な記録の作成と継承が、今後も重要となるだろう。創立50周年記念誌発行以降の10年の間には少子化の進行や全世界を襲ったコロナ禍への対応など、教務関係においても大きな変化が求められるものであった。ここでは、教育課程・カリキュラムの編成、教育の質保証に関する取り組み、入試制度改革と入試広報、そして新型コロナウイルス感染症への対応について主に概観する。

2. 教育研究活動について

この10年間で本校の教育活動も大きく姿を変えた。2019年度より新カリキュラムがスタートし、開講される科目や時間数・単位数も大きく変化した。様々な意味でのスリム化が目指されたように記憶している。

そして、2020年度は新型コロナウイルス感染症対策により、それまで当たり前に行われてきた授業や行事に制限がかかるようになった。また、遠隔授業など新しいかたちの授業も行われるようになった。教員が使ってこなかったパソコンの機能に遭遇して右往左往し、知恵を出し合って立ち向かった景色も、この10年間の特徴と言えるかもしれない。

教育活動に対する変化をもたらした要因は様々あるにせよ、教員はむしろこの変化を好機ととらえ、学生の成長に資するために研鑽を重ねてきた。また、従来行われてきた取り組みも、情性で続けるのではなく、ブラッシュアップを行ってきた。こうした姿勢は今後も続けられていくことであろう。

● カリキュラムについて

先述のように、2019年度よりスタートしたカリキュラムは、それまでのものよりもスリムなものとなった。

特徴的な変化としては、「人文特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の開講が挙げられる。これは4・5年生向けの選択科目であった「国語国文」「ドイツ文化論」「現代社会と宗教」「地域学」などを整理・再編して、5年生向けの選択科目に改めたものである。「人文特論」という科目名の曖昧さは、科目担当者や内容を固定せず、担当教員に応じて内容を変えられるようにするためである。これにより、科目名に授業の内容や担当者を縛られることがなくなり、科目担当教員の専門性を授業に反映させやすく、かつ人員構成の変化にも柔軟に対応できるようになった。世知辛い昨今の情勢を鑑みた際、この柔らかさや緩さが効力を発揮することがきっと出てくるだろう。

また、「日本史」「地理」「世界史」を、高等学校の学習指導要領の改訂にあわせて「歴史総合」「公共」に変更した。時代の求めるものを感じ取りながら、自らを変えていくこと



「地域学」で行った第三海軍火薬廠跡の調査の様子

は当然必要である。一方、旧来の科目名をあえて残したのも多い。そのため、一見してカリキュラムに「新しさ」が見られず、また、その名前の曖昧さにいらだちや物足りなさを感じる向きもあるだろう。しかし、各科目の内容は、教科担当者の手によって常に工夫が施され、変わり続けている。授業の質的向上を絶えず続けていくこの姿勢を、今後も続けていきたい。

● 特色ある授業・取り組みについて

学校における授業や様々な取り組みにおいて、学生の能力を向上させることは第一義的に重要であり、そのための方策を各教員とも常に模索し、実行しているところである。それに加えて、その学生の良さを引き出す活動も重要である。そのため、人文科学部門では様々な取り組みを行うことで、学生が培った能力を存分に活用する場を提供してきた。

英語においては、英語科が実施運営主体となり、クラス担任などの協力を仰ぎながら、英語デーを実施している。日ごろの学習の成果や英語の能力を評価する目的で、TOEICやTOEIC Bridgeの団体受検を行っている。学校行事として本校の学事日程のなかで定着したことは喜ばしいことである。

また、英語プレゼンテーションコンテストへの参加も続けられている。毎年、学生が自らの考えを練り上げ、試行錯誤を繰り返してプレゼンテーションを行い、英語能力とプレゼン能力の双方を高めている。各回とも本校から学生が出場し、英語教員全員でその指導にあたってきた。本校が主幹校であった2020年度は新型コロナウイルス感染防止のために遠隔開催であった。

国語においては、2016年度から2018年度において、日本語能力検定の団体受検を行った。その実施結果により、2017年には「大学・短期大学・高等専門学校の部」において「平成28年度第2回日本語検定団体受検東京書籍賞優秀賞」を受賞した。

2017年度から2018年度においては、3年生向け科目「総合国語Ⅱ」の授業の取り組みとして「伊藤園おーいお茶新俳句大賞」への団体応募を行った。両年度とも本校学生の作品が佳作を受賞しており、学生の能力の向上とその成果を世に出すことができた。

国税庁主催の「税に関する高校生の作文」への応募も継続して行われている。それぞれの年において、本校学生の作品が様々な賞を受賞している。

● 教員の研究活動について

本校が高等教育機関である以上、研究活動を行っていくことが教員に課せられた使命の一つと言える。研究活動については、各教員が自らの専門分野で盛んに活動を行ってきた。

まず外部資金の獲得状況について触れておきたい。文系であるがゆえに企業などとの提携がしづらく、外部資金を得ることは難しい。一方で、科学研究費助成事業については多くの教員が採択されている。この10年間、間断なく採用され続けていることは評価すべきである。

また、それぞれの研究分野でその成果を評価されることもあった。2019年度には山根秀介教員の執筆した論文「ウィリアム・ジェイムズにおける宗教的な経験と実在」（『宗教哲

学研究』第36号、57-70頁、2019年3月）が、第7回宗教哲学学会奨励賞を受賞した。2021年度においては、平尾恵美教員の研究発表「従属節発話における文脈と慣習性—「単純な」／「慣習化された」主節省略の分析から—」（日本語用論学会第24回大会、2021年12月18日、オンライン開催）が、日本語用論学会第24回大会 大会発表賞を受賞した。

本校は規模が小さいがゆえに、教員間の距離が近いことが一つの特長である。そのため、コミュニケーションがとりやすく、門前の小僧ではないが、他分野の研究にも自然と詳しくなり、そこから新しい知見を得たり、共同研究のアイデアが生まれることもあった。しかし、業務の多忙化や新型コロナウイルス感染症などにより、教員同士のコミュニケーションが疎になった感がある。また、この10年の間に鬼籍に入られた先生もあり、共同研究の夢が果たせず、悔しい思いもした。

先述のように、この10年間でスタッフが入れ替わり、雰囲気も新たになった。互いに刺激を与え合い、良い研究成果を生み出すことができることを願う。

3. 産学連携・地域貢献活動について

産学連携という点では目立った成果はないものの、地域貢献活動・官学連携という点での活動は充実していた。

2015年度・2017年度には「国際ソロプチミスト クラブ・ユース・フォーラム」に参加し、本校学生がプレゼンテーションやディスカッションで活躍した。2020年10月に開催された舞鶴市郷土資料館企画展「こどもが出会う丹後伝説——AIで広がる“海辺の京都 浮世絵コレクション”」において、萩田みどり教員が展示企画の協力を行い、その一角でポスター展示を行った。このなかで、3年生「総合国語Ⅱ」において、AIの力を借りながら糸井文庫のくずし字を解読していく授業を行ったときの様子や、体験した学生の声を、実物の本とともに紹介した。この授業実践は、その後1年生「古典」で引き続き行っている。



AIを用いたくずし字解読に取り組む学生（総合国語Ⅱ）

人文科学部門では、「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」に関する講義として「現代社会と宗教」「現代日本の政治・経済と法」「地域学」が開講された（現在は「人文特論」として改称・整理）。この事業の一環として、15年度・16年度には京都工芸繊維大学において「地域学」に関する出前授業を行った。また、吉永進一教員は2017年には「巡礼と聖地：その伝統と現代」と題するシンポジウムを、翌年には馬場紀寿（東京大学）「釈宗演のセイロン留学—伝統知と近代知のはざまで—」と題する講演会を開催した。

（牧野 雅司）

自然科学部門のあゆみ

1. はじめに

自然科学部門の準学士課程(本科)における教育課程は、高等学校の第1学年から大学の第2学年に相当する数学、理科、体育で構成される。

数学や理科などの自然科学の科目では、技術者として活躍するために必要な工学の基礎を確実にとらえ、さらに自ら発展させることができる力を身に付けさせるために、科学に関する一般教育と基礎教育を行っている。また体育では、第1学年から第5学年までの本科の全学年にわたって、体力と技能を向上させ、生涯にわたってスポーツに親しむための基礎を培っている。

2. 自然科学部門の構成について

令和6年度現在、自然科学部門の教員の構成は以下の通りである。

数学：奥村昌司、岡田浩嗣、喜友名朝也、熊谷大雅、馬越春樹

理科：上杉智子（物理）、宝利剛（物理）、小島広孝（化学）

体育：木村健二、小野伸一郎

表1に、平成27年度から令和6年度までの10年間の教員構成の変遷をまとめた。

表1 自然科学部門における常勤教員（H27年度～R6年度）

	H27年度 2015年度	H28年度 2016年度	H29年度 2017年度	H30年度 2018年度	H31年度 2019年度	R2年度 2020年度	R3年度 2021年度	R4年度 2022年度	R5年度 2023年度	R6年度 2024年度
小松 幸恵	教授									
梅垣 浩二	准教授									
宮野 敏男	教授	教授								
亀谷 陸	教授	教授	教授	教授						
宮崎 昭仁	准教授	准教授	准教授	准教授	准教授					
背戸柳 実	教授	教授	教授	教授	教授	教授	嘱託教授	嘱託教授		
小野伸一郎	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	嘱託教授
奥村 昌司	准教授	准教授	准教授	准教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授
上杉 智子	准教授	准教授	准教授	准教授	准教授	教授	教授	教授	教授	教授
岡田 浩嗣	准教授	准教授	准教授	准教授	准教授	准教授	准教授	准教授	教授	教授
木村 健二		講師	講師	講師	准教授	准教授	准教授	准教授	准教授	准教授
喜友名朝也		講師	講師	講師	講師	講師	講師	講師	准教授	准教授
宝利 剛				講師	講師	講師	准教授	准教授	准教授	准教授
小島 広孝						講師	講師	講師	准教授	准教授
熊谷 大雅						助教	助教	講師	講師	講師
馬越 春樹								助教	助教	助教
高倉 克人				准教授 (人事交流)						

3. 教育の取り組み

● 数学基礎力診断テスト

本科の1年生を対象として、4月に数学基礎力診断テストを実施している。このテストにより、中学校3年間における数学の基礎力を診断し、基礎力が不足していると考えられる学生については、担任や低学年担当教員に情報共有を行い、授業担当者が配慮して学習指導を行っている。

● 学習到達度試験向け学習指導

国立高等専門学校機構では、全国の高専生の学力の到達度を把握するために、本科の3年生を対象に数学と物理の学習到達度試験を実施していた（平成29年度まで）。自然科学部門では学習到達度試験に向けて、数学と物理のそれぞれで学習指導を行った。

数学では、第1学年から第3学年の10月までの学習の成果を確かめるために、模擬試験を実施した。模擬試験では過去の学習到達度試験の問題を解答させた。試験実施後に数学教員が共同で作成した「解答と解説」を配付し、また答案返却時には、受講者各自の学習領域ごとの試験成績に

ついて、学年内及び学科内の相対順位を記した「個人成績結果」を配付するなどして、学生たちの今後の学習意欲の動機付けになるように工夫し、また学習領域ごとの得点分布を次年度以降の授業の改善のための資料とした。

物理では、第1学年と第2学年の各学習領域から精選した60題の問題の解答と解説を記した「学習到達度試験物理問題集」（物理教員が共同作成した冊子）を学生に配付し、学習内容の復習をうながした。その後、この問題集に含まれる問題の類題30題を出題して、マークシート形式で解答させる模擬試験を実施した。模擬試験後、学年内および学科内の順位などを記した「個人成績結果」を学生に配布すると共に、学習領域ごとの試験結果分析を行い、次年度以降の授業の改善に利用した。

● 放課後教室

平成28年度より、人文科学部門と自然科学部門が合同で、学生に学習する習慣を身につけてもらうこと、学生が教員に接しやすい環境を整えることを目的として「放課後教室」を実施した。定期試験の約2週間前から週に2回程度、放課後に人文・自然の教員が数名待機する教室に学生を集めて予復習や試験勉強の学習支援を行った。



放課後教室：勉強に集中する学生達

● 入学前の事前課題

数学では、入学予定者に対して高専入学後の学習に備えさせるために、平成31年度の新入学生から「高専数学の準備演習」と題した数学の宿題を入学説明会で配布している。中学校3年間の数学の練習プリントと、数学の答案の書き方のガイド、ギリシャ文字の書き方のガイドを含む冊子となっており、入学後に宿題として提出させている。これにともない、数学基礎力診断テストの内容を「準備演習」の内容に準じたものに改めた。

● CBT (Computer Based Test)

平成30年度より国立高等専門学校機構では学習到達度試験に代わって、パソコンを使ってオンラインで試験を行い、学生たちの学習到達度を確認するCBTを実施している。CBTでは受検後すぐに採点結果と解説が表示され、学生が自らの学習のモデルコアカリキュラムに基づいた到達度をチェックすることができる。本校では、数学・物理・化学のCBTを第1学年から第3学年の学生に受験させて、客観的な学習の到達度を把握させている。また、CBTの結果は各科目の授業改善の資料として参考にしていく。

● 理科実験室の整備

平成31年度に物理実験室・準備室を整備し、令和2年度に化学実験室・準備室の整備を行い、理科系科目における実験の充実を図っている。また、放課後に理科好きの学生

たち、数学好きの学生たちを実験室に集め、それぞれ、理科教員と数学教員の指導のもと、理科と数学に係る活動を行っている。

● 入学前ICT教育

翌年度新入生を対象とした入学に向けての学習準備のための取組みとして、令和3年度より、入学予定の中学生を対象にICT授業を行っている。自然科学部門では、人文科学系科目を含む一般科目の紹介、理科をテーマとしたクイズ形式のオンライン授業や、数学をテーマとしたオンライン授業を実施してきた。

4. 地域貢献・学校広報

● オープンキャンパス

人文科学部門と共同での教科書や教材の展示のほか、授業の板書の抜き書きや曲面模型の展示を行っている。POPなどはハンドメイド同好会の協力を得た。

● 公開講座・出前授業

科学の楽しさを伝えるため、数学・理科が好きな小中学生を対象に、「遊んで、学ぶ。不思議なパズルとフィボナッチ数列」「遊んで、学ぶ。計算機と平方根」「太陽を観察しよう」「確率がつくる不思議な家」「いろんな計算機で平方根を計算しよう」「カラフルLEDランタン」「カレンダー魔法陣」「発見！折り鶴の卵!?!」「光で遊ぼう」「箱カメラをつくろう」「ブラックホールとは何か」「太陽を観察しよう」「折り紙と数学」「確率がつくる偶然の形とその性質」「黒谷和紙とプログラミングで電子行灯を作ろう」「いろんな計算機で平方根を計算しよう」「液晶分子の色を観察する」「ストロー多面体」「発見！折り鶴の卵!?!」などの講座や出前授業を実施した。



公開講座
「遊んで、学ぶ。不思議なパズルとフィボナッチ数列」



公開講座
「遊んで、学ぶ。計算機と平方根」

● こじまはかせの有機物ラジオ

令和5年度より、本校学生や地域の方に理科に興味を持ってもらうことを目指して、本校理科教員によるラジオ番組「こじまはかせの有機物ラジオ」（FMまいづる）の放送を月1回行っている。

5. ジュニアドクター育成塾の取り組み

平成31年度（令和元年度）に採択されて実施している、科学技術振興機構の行うジュニアドクター育成塾の事業の取り組みにおいて、自然科学部門では、数学のテーマ「再帰性と数学」、理科のテーマ「身近な現象のしくみを学ぼう」「宇宙について調べよう」で受け入れ、課題研究の指導を行った。受講生は研究フォーラムにおいて、スライドを用いた成果発表とポスター展示を行い、第二段階育成プログラムを修了することができた。

（奥村 昌司）

機械工学科のあゆみ

創立50周年以降の機械工学科のあゆみを記す。

1. 教育活動について

近年の授業カリキュラムの変更として、学生が自ら考え創造する授業の導入、企業との連携授業が進んだ。以下にその例を記す。

● 実習・演習系科目について

2015年度から、3年生に入門機械電気電子情報工学を新規開講し、メカトロニクス技術の基礎技術を体得できるようにした。2021年度からは、ものづくり演習へと改変し、デジタルファブリケーションに関する内容の拡充をおこなった。日本設計工学会誌表紙デザインコンテストやプレデザコンAMデザインフィールドへの応募も行っている。図1、2に作品例を示す。

また4年生の創造設計製作では、2014年度までは製作課題を「軸継手」としていたが、2015年度からは1グループ6、7人で、草刈り機用のエンジンもしくはモーターを使った一人乗りの自動車の設計製作をおこなうようになった。



図1 表紙デザイン入賞作品



図2 プレデザコン入賞作品

● 製図系科目について

1年生から5年生までの各学年で製図系科目を開講している。1年生は手描き製図、2年生から2次元CAD (AutoCAD®) を始め、3年生から3次元CAD (Inventor® または SolidWorks®) に取り組み、4～5年生ではものづくりの課題を通して、修得した製図技術の利用方法を学ぶ。2020年度より学生が個人所有のPCを授業に持ち込んで使用するBYOD (Bring Your Own Device) を進め、自宅でも製図作業ができるようにしている。2020年度のオンライン実施期間中は図3に示すようにオンデマンド形式の授業を実施した。

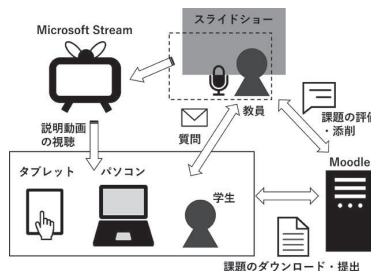


図3 コロナ期間中のオンデマンド

4年生の設計製図Ⅳでは、地域企業と連携したPBL型授業を実施している。2016年度に、オムロン株式会社綾部事業所の協力を得て、簡便自動化に関する解決設計の課題が始まった。続いて、2017年度に株式会社椿本チエイン京田辺工場の協力を得て、「人・社会を幸せにする未来の新商品創造」課題が始まった。さらに、2019年度からは、株式会社イシダの協力を得て、機器のメンテナンスに関する課題も始まっている。図4、5に各取り組みの様子を示す。



図4 オムロン(株)との連携授業の様子



図5 (株)イシダとの連携授業の様子

2. 工場見学について

2016年度よりCOC+事業および見学先企業の援助により多くの工場見学を行うようになった。2016年度から2019年度に行った工場見学の見学先を表1に示す。

工場見学を行うことにより、学生の進路に関する意識が高まったと思われる。また残念なことであるが、2020年度以降は、コロナ禍の影響により工場見学は行わなくなった。

表1 2016年度より行った工場見学

工場見学先
【2016年度】(株)日進製作所、(株)椿本チエイン
【2017年度】(株)イシダ、(株)椿本チエイン、キリンビバレッジ(株)、一志(株)、(株)ダイゾーエアゾール、オークマ(株)、村田機械(株)、グンゼ(株)
【2018年度】関西電力(株)舞鶴発電所、(一社)日本血液製剤機構、海上自衛隊舞鶴基地、村田機械(株)、(株)椿本チエイン、三菱ロジスネクスト(株)、ケンコーマヨネーズ(株)、(株)堀場製作所、(株)イシダ、(株)ナベル、一志(株)、キリンビバレッジ(株)、キリンビール(株)、ジャパンマリンユナイテッド(株)、丸玉木材(株)
【2019年度】三菱重工工作機械(株)、三菱ロジスネクスト(株)、(株)イシダ、海上自衛隊舞鶴地方隊、SECカーボン(株)

3. 学生の進路について

2015～2024年度卒業生の(卒業時の)進路について記す。

● 就職について（企業名後の数字は2名以上の就職者数）

アイング(株)、旭化成(株)、旭国際テクネイオン(株)、アドバン(株)、(株)イシダ4、エース設計産業(株)、(株)エクセディ2、(株)荏原製作所、王子イメージングメディア(株)、鳳工業(株)、オークマ(株)3、(株)オージーケーカブト、大阪ガス(株)、大阪シーリング印刷(株)2、オムロン(株)4、(株)カシフジ、(株)河合楽器製作所、川崎重工業(株)、関西電力(株)、(株)カンセツ、関電プラント(株)、キヤノン(株)2、キヤノンマシナリー(株)2、キヤノンメディカルシステムズ(株)、京セラ(株)、極東開発工業(株)4、キリンビバレッジ(株)2、(株)クボタ4、グンゼ(株)3、京阪電気鉄道(株)、(株)神戸製鋼所、(株)小松製作所4、沢井製薬(株)、サントリープロダクツ(株)5、サントリーホールディングス(株)2、(株)シーアールイー2、(株)ジェイエムエンジニアリング、(株)ジェイテクト2、シキボウ(株)2、島津プレシジョンテクノロジー(株)3、(株)シマノ、ジャパンマリンユナイテッド(株)2、シャープ(株)、(株)瑞光、住友化学(株)、第一精工(株)2、ダイキン工業(株)6、(株)ダイゾー、大鉄工業(株)、太陽工業(株)、太陽ファルマテック(株)、(株)タダノ2、(株)椿本チエイン2、電源開発(株)、東海旅客鉄道(株)3、東芝エレベータ(株)、東レ・カーボンマジック(株)3、東和薬品(株)、トヨタ自動車(株)3、(株)ナカサク、ナブテスコ(株)、(株)日産オートモーティブテクノロジー4、日東精工(株)2、日本オーチス・エレベータ(株)、(一社)日本血液製剤機構、日本たばこ産業(株)2、日本電産シンボ(株)、日本電産テクノモータ(株)、日本ビラー工業(株)、任天堂(株)2、ハードロック工業(株)、パナソニック(株)3、パナソニックエナジー(株)、(株)バンダイ、日立建機(株)2、日立造船(株)2、ファナック(株)、富士重工業(株)、二九精密機械工業(株)、(株)プレジール、兵神装備(株)、ホソカワミクロン(株)2、(株)堀場製作所3、本田技研工業(株)5、(株)牧野フライス製作所2、(株)松浦機械製作所、マルホ発條工業(株)5、三浦工業(株)、三井造船(株)、三菱重工業(株)2、三菱重工工作機械(株)、三菱電機(株)6、三菱電機エンジニアリング(株)、三菱電機ビルソリューションズ(株)、三菱電機ビルテクノサービス(株)2、三菱電機プラントエンジニアリング(株)、三菱パワー(株)、三菱日立パワーシステムズ(株)3、村田機械(株)2、(株)村田製作所3、(株)メンバーズ2、森永乳業(株)2、ヤマザキマザック(株)、ヤマハ発動機(株)、ヤンマーエネルギーシステム(株)、ヤンマーホールディングス(株)、(同)ユー・エス・ジェイ、(株)吉野工業所、理研ビタミン(株)、レンゴー(株)、ロート製薬(株)、ANAラインメンテナンステクニクス(株)、daigasガスアンドパワーソリューション

(株)、DIC(株)、DMG森精機(株)、ENEOS(株)2、(株)GSユアサ、IDEC(株)、(株)IHI環境エンジニアリング、(株)JALエンジニアリング、(株)JERA、JMUディフェンスシステムズ(株)、JX金属(株)、JX日鉱日石金属(株)、KYB(株)2、(株)NTTフィールドテクノ、(株)SUBARU、TOWA(株)

● 大学、専攻科への進学について（学校名後の数字は2名以上の進学者数）

東北大学、筑波大学、信州大学、長岡技術科学大学9、岐阜大学8、静岡大学、名古屋工業大学、豊橋技術科学大学24、金沢大学4、三重大学4、滋賀大学、京都工芸繊維大学6、大阪大学、島根大学、岡山大学5、香川大学、九州大学2、九州工業大学、佐賀大学2、兵庫県立大学、東京都市大学、立命館大学4、舞鶴工業高等専門学校専攻科36、奈良工業高等専門学校専攻科2、近畿大学工業高等専門学校専攻科2

4. 設備更新について

2020年度に材料実験装置の更新が行われた。そのときに更新された主な機器を記す。

- 高速衝撃試験機
島津製作所 ハイドロショット HITS-PX
- 圧縮ねじり試験機
島津製作所 TTM-10kN・mX
- 断面試料作製装置
日本電子 クロスセクションポリッシャ
IB-19530CP

5. 教員人事

創立50周年(2015年)以降の機械工学科教員人事について記す。

2018年3月	生水 雅之	教授	定年退職
2018年3月	須田 敦	助教	奈良高専に転出
2020年3月	野毛 宏文	准教授	退職
2020年5月	山本 昌平	助教	着任
2022年3月	山本 昌平	助教	退職
2023年3月	西山 等	教授	定年退職
2023年4月	西山 等	嘱託教員	再雇用
2023年9月	中村 丞	助教	着任
2025年3月	西山 等	嘱託教員	任期満了退職

また、この10年間の学科長と機械工学科5年担任を表2に示す。

表2 学科長と機械工学科5年担任

	学科長	5年担任
2015年度	生水 雅之	小林 洋平
2016年度	生水 雅之	豊田 香
2017年度	谷川 博哉	村上信太郎
2018年度	谷川 博哉	室巻 孝郎
2019年度	篠原 正浩	山田耕一郎
2020年度	山田耕一郎	西山 等
2021年度	西山 等	谷川 博哉
2022年度	西山 等	篠原 正浩
2023年度	篠原 正浩	村上信太郎
2024年度	谷川 博哉	豊田 香

(谷川 博哉)

電気情報工学科のあゆみ

1. はじめに

● 沿革・概要

近年は、情報分野における社会の動向も考慮しながら、情報分野における教育やその他の活動への本学科に対する社会からのニーズに対応してきた。電気情報工学科の教育は、電気・電子分野、情報・通信分野の4分野を柱としている。情報分野教育の発展やそれに関係する活動の充実が著しい。情報系授業科目導入、実験実習においては先端の情報技術教育が行われている。本学科はいち早く数理・データサイエンス・AI教育プログラムにおいて応用基礎レベルと認定された。舞鶴高専プロコンをはじめ、公開講座などでも情報分野教育に関する地域貢献活動にも積極的に取り組んできた。

● 教員の異動

表1に教員の異動を示す。2016年3月に新池一弘教員が定年退職された。2018年3月に平地克也教員と金山光一教員が定年退職された。平地教員は、副校長、学科長、テクノセンター長などを務められた。金山教員は長らく教務主事、副校長などを務められた。2018年4月に“パワーエレクトロニクス”を専門とする七森公碩教員を迎えた。2019年5月に“フレキシブルデバイスの電子物性と応用”を専門とする廣芝伸哉教員を迎えたが、2021年3月に大阪工業大学に転出された。2020年4月に“情報科学技術による医療診断支援システムの開発”を研究テーマとする森健太郎教員を迎えた。2021年3月に学科長、専攻科長などを務められた中川重康教員が定年退職された。2023年3月に芦澤恵太教員が静岡理工科大学に転出された。芦澤教員は、進路指導委員長、寮務副主事を務められた。

表1 教員の異動

西暦(年度)	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	備考
新池一弘											定年退職
平地克也											定年退職
金山光一											定年退職
中川重康											定年退職
片山英昭											
竹澤智樹											
松本英岳											
内海淳史											
芦澤恵太											静岡理工科大学に転出
丹下 裕											
井上泰仁											
廣芝伸哉											大阪工業大学に転出
七森公碩											
森健太郎											

教授 准教授 講師 助教 特任教授

(令和5・6年度学科長 竹澤智樹、丹下裕 編集)

2. 教育研究活動

● カリキュラム

舞鶴高専では、2022年以降の第1学年に入学するすべての学生に対し、リテラシーレベルの数理・データサイエンス・AI教育プログラムを実施するのにつき、2023年以降に電気情報工学科の第1学年に入学する学生に対し、応用基礎レベルの数理・データサイエンス・AI教育プログラムを実施している。応用基礎レベルを修了することで、自らの専門分野に数理・データサイエンス・AIを応用するための大局的な視点を身につけられる。

本学科ではMCC(モデルコアカリキュラム)を満たすようにカリキュラムが設定されているが、2023年に改定された新MCCに対応するために、各学科の授業科目と新DP(ディプロマポリシー)との対応表が必要となり、対応表を作成することで、新MCCと新DPの対応関係が満たされていることが確認された。

● 特色ある授業

この10年間の特色ある授業について紹介する。

【電気情報概論】

1年生の「電気情報概論」では、「身近にある電気・情報」をテーマに座学と実験を行い、これから学習する内容と身近な現象との関連を学ぶ。実験の一例として、Raspberry Piと呼ばれる超小型コンピュータを用いたIoT体験、WinSCPと呼ばれるソフトウェアを用いたファイル操作やサーバ接続体験、TeamsやMoodleなどのシステムについて学習する。

【プログラミング実習】

3年生の「プログラミング実習」は、2021年に開講された科目である。2年生で学習する「C言語」の基礎知識を応用して、数値計算、自然言語処理、可視化技術、人工知能、画像圧縮、ディープラーニング等の様々なアルゴリズムを学ぶ。多様化する情報社会に対応するため、時代に沿ったプログラミング言語「Python」で実習を行っている。

【回路実習】

3年生の「回路実習」は、2021年に開講された科目である。コンピュータと周辺機器の接続、制御方法などを理解し、その基礎技術の習得を目指している。実習では、「簡易システム」の設計・製作・評価を行っている。

【創造工学】

4年生の「創造工学」は、学生が習得した電気・電子工学、情報・通信工学の知識や技術を生かし、地域課題の解決を目指す課題解決型授業(PBL)を行っている。4名程度の学生で構成されるチームでアイデアを出し、それを具現化する電気電子装置やソフトウェアを約10週間で開発している。観光者向け双方向型プロジェクションマッピングやイルミネーション、福祉施設での使用を目指した電動車い

すなどを開発している。第2週目に行われるコンセプト発表会や、第14週目に行われる成果発表会を通して、プレゼンテーション能力を身に付ける。

● 10年間で導入した施設、設備について

平地教員と金山教員の定年退職に伴い、2020年に電気工学実験室(A-224)の設備を基礎電気実験室(A-104)に移動した。これにより電気情報工学科の実験室がA棟1階に集約された。

● 学生の進路

ここ10年間では、コロナ禍の後に一時的に就職が増えた年があったものの、平均すると就職60%、進学40%の傾向が続いている。2016年からは企業選考の開始時期が2カ月前倒しされたこともあり、就職希望の多くの学生は7月までに内々定を獲得している。

(船木英岳、森健太郎 編集)

3. 産学連携・地域貢献活動

● 公開講座、出前授業

2017年までは年に1回であった公開講座も、児童・生徒の要望に応えるかたちで、2018年からは年に複数回実施するようになり、2023年では20回弱の実施となっている。小中学生向けの公開講座では、クリスマスツリーやリース、雪だるまなどのオブジェとフルカラーLEDを組み合わせた講座を毎年実施している。LEDを点灯させる回路はPICマイコンなどを用いて製作し、フルカラーLEDの色や点灯時間はプログラムで制御している。ここ数年は、教育用マイクラフトを用いたプログラミングの講座が人気となっている。また平地教員が在職中には、リカレント教育の一環として、社会人向けにパワーエレクトロニクス講座を実施している。

出前授業では、小中学校からの依頼により、学習指導要領の「プログラミング」などに関する項目に対応した内容だけでなく、児童や生徒が理系に興味をいだくような内容を実施している。実施場所では、学校からのみでなく、図書館や公民館、自然の家などからの依頼に応じている。また船木教員を中心として、舞鶴支援学校の教員向けに、プログラミングや工作の出前授業も実施している。

● 共同研究・受託研究

共同研究および受託研究の数を表2に示す。2020年度以降では共同研究の数が増えている一方で、受託研究の数が無くなっている。

表2 年度ごとの共同研究・受託研究数

年度	共同研究数	受託研究数
2015	1	1
2016	1	2
2017	2	1
2018	4	1
2019	4	2
2020	5	0
2021	2	2
2022	4	0
2023	6	0
2024	3	0
合計	32	9

● 地域貢献活動

小・中学校のプログラミング教育必修化によって多くの関心が集まっているプログラミングの普及のために、小中学生の発想力、表現力、技術力および、発信力の向上を目指し、2021年より、舞鶴高専杯プログラミングコンテストを開催している。このコンテストは、舞鶴市、舞鶴市教育委員会をはじめ、カナデビア株式会社、KDDIアジャイル開発センター株式会社、インフォニック株式会社のご協力をいただいております。産官学連携したコンテストとなっている。募集部門は、Scratchなどによるゲーム制作を行う「ゲーム部門」、システム開発・SDGsの解決方法を提案する「アイデア部門」となり、舞鶴赤れんがパークで実施する本選では、小・中学生の能力を活かしたアイデアやゲームを見聞し、参加者と来場者の熱い拍手で包まれるのが印象的なイベントとなっている。表3に各部門の応募作品数を示す。それぞれの小・中学校での「総合的な学習の時間」や「探究学習」でも取り組んでいるため、今後も小・中学校と連携して引き続き行っていきたい。

表3 各部門の応募者数

年度	ゲーム部門	アイデア部門	合計
2021	8 作品	18 作品	26 作品
2022	7 作品	16 作品	24 作品
2023	6 作品	10 作品	16 作品
2024	7 作品	3 作品	10 作品

● 特色のある取り組み

2014年から2019年にかけて、舞鶴市からの受託研究として、東舞鶴駅前ロータリーを中心としたイルミネーション設置業務を実施した。このプロジェクトでは、3年生が複数のチームに分かれ、展示物の製作および設置を行った。製作された作品は装飾に留まらず、イルミネーションを活用したゲームなど体験型のイベントも含まれ、来場者から高い評価を得ていた。

2022年以降は、1年生および2年生を中心に、学内でのイルミネーション設置活動を実施している。活動は夏と冬の2回に分けて行われ、夏は七夕、冬はクリスマスなどをテーマにしたイルミネーションを製作・展示した。この活動を通じて、低学年の段階からものづくりの楽しさに触れる機会を提供し、時には学年や学科を越えた協力を通じて成果を上げる場ともなっている。

● 学生実験室を利用した放課後活動

2016年からは学生の自主的な活動を支援するため、放課後に学生実験室を開放している。この活動の一例として、第二種電気工事士の資格取得がある。資格取得のためには、筆記試験だけでなく実際に電気配線を行う技能試験に合格しなければならないため、学生らはしっかりとした技能を身に付ける練習の場として利用している(図1参照)。毎年資格取得を目指して10名前後の学生が練習して、合格している。学科では資格取得のサポートとして実験室だけでなく、工具と電材を提供している。



図1 第二種電気工事士の技能練習
(片山英昭、内海淳志、井上泰仁、七森公碩 編集)

電子制御工学科のあゆみ

1. はじめに

創立50周年（2015年）以降の電子制御工学科の教員の変遷について振り返る。表1に10年間の教員の変遷と校務分担をまとめたものを示す。

平成30（2018）年3月、本校OBであり教務主事や専攻科長などの要職を務められた金森満が定年退職され、名誉教授になられた。同年4月、同じく本校OBである奥村幸彦が香川大学へ転出された。同年4月、後任として、東北大学出身でロボット工学を専門とする若林勇太を助教として迎えた。令和2（2020）年3月、本校OBである町田秀和が退職された。同年10月、後任として、明治大学出身で制御工学を専門とする藤司純一を助教として迎えたが、令和3（2021）年10月に民間企業へ転出された。令和2（2020）年5月、京都大学より酸化物エレクトロニクス、電子回路、半導体工学を専門とする西佑介を准教授として迎えた。令和5（2023）年4月、教務主事や専攻科長などの要職を務め、電子制御工学科長も務められた川田昌克が北九州高専へ転出された。令和6（2024）年3月、本校OBであり電子制御工学科長などを務められた野間正泰が定年退職され、名誉教授となられた。なお、同年4月からも嘱託教授として、機械分野の一部の科目を引き続き担当している。そして、同年4月、奈良先端科学技術大学院大学より制御工学と数理最適化を専門とする花田研太を准教授として、京都工芸繊維大学出身でロボット工学を専門とする古殿幸大を助教として迎えた。

つづいて、本学科に関連した校務分担を振り返る。学科長は、平成27度からの3年間を川田、平成30年度からの5年間を野間、令和5年度からの2年間を伊藤が務めた。学級担任は表1に示す通りである。また、本校において主要な校務である教務主事を平成27年度から2年間を金森、令和2年度から3年間を川田が務めた。同じく主要校務の一つである寮務主事を平成27年度から5年間を仲川が務めた。川田については、平成30年度から2年間は専攻科長も務めている。

2. 教育研究活動について

電子制御工学科の教育研究活動について振り返る。

● カリキュラムについて

この10年間で、学校全体でカリキュラムの見直しが段階的に行われ、令和元（2019）年度の入学生から新カリキュラムが導入された。新カリキュラムの導入前、第1学年における「工学基礎（制御での担当は川田）」や高学年における共通選択科目など、所属学科の枠を超えて履修可能な専門科目が開設されていたが、そのような科目は廃止された。本学科では、一部の科目において科目名の変更、内容の見直し、開設時期の変更などを行った。表2に科目名の新旧対照表を示す。

表1 教員の変遷

西暦	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	備考
和暦	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	
金森 満	教務主事	教務主事									H30.3 定年退職（名誉教授）
奥村 幸彦	4S担任	5S担任									H30.4 香川大学へ転出
町田 秀和	5S担任										R2.3 退職
川田 昌克	学科長	学科長	学科長	専攻科長	専攻科長	教務主事	教務主事	教務主事			R5.4 北九州高専へ転出
野間 正泰	3S担任	4S担任	5S担任	学科長	学科長	学科長	学科長	学科長			R6.3 定年退職（名誉教授）
仲川 力	寮務主事	寮務主事	寮務主事	寮務主事	寮務主事	3S担任	4S担任	5S担任		3S担任	
伊藤 稔			3S担任	4S担任	5S担任				学科長	学科長	
清原 修二		3S担任	4S担任	5S担任					3S担任	4S担任	
石川 一平					3S担任	4S担任	5S担任				
高木 太郎				3S担任	4S担任	5S担任					
若林 勇太							3S担任	4S担任	5S担任		
藤司 純一											R3.10 民間企業へ転出
西 祐介								3S担任	4S担任	5S担任	
花田 研太											
古殿 幸大											

教授 准教授 講師 助教 嘱託教授

表2 科目名の新旧対照表

旧カリキュラム	新カリキュラム
工学基礎	メカトロニクス演習Ⅰ
情報リテラシー	情報基礎
デジタル電子回路	電子回路Ⅲ
論理回路	電子回路Ⅳ
情報処理Ⅰ	プログラミングⅠ
情報処理Ⅱ	プログラミングⅠ
情報処理Ⅲ	プログラミングⅡ
情報処理Ⅳ	プログラミングⅢ
計算機工学Ⅰ	組込みシステムⅠ
計算機工学Ⅱ	組込みシステムⅡ
メカトロニクス演習	メカトロニクス演習Ⅱ
CAD演習ⅠA	製図基礎
CAD演習ⅠB	CAD演習Ⅰ
CAD演習ⅡA	制御系設計演習
CAD演習ⅡB	回路設計演習
CAD演習ⅡC	CAD演習Ⅱ
ロボット工学Ⅰ	ロボティクスⅠ
ロボット工学Ⅱ	ロボティクスⅡ
アクチュエータ工学	ロボティクスⅢ
画像処理	ロボットビジョン

● 教員の研究活動について

各教員の専門分野において活発に論文発表や学会発表が行われている。この10年間（原稿執筆時点では平成27年から令和5年度までの9年間）では、著書5件、解説5件、査読論文36件、国際会議50件、学会発表151件、その他31件の発表があった。外部資金の獲得状況については、科学研究費補助事業25件（分担7件含む）、受託研究7件、共同研究15件、寄付金15件、その他助成金3件であった。また、学会や研究会などにおいて理事や委員として活躍する教員も少なくない。

● 国際交流について

令和元（2019）年6月、本校の協定校であるタイ王国・キングモンクット工科大学（KMITL）から学生1名の研修生を受け入れた。研修内容は、「ベーシックFA学習キットを用いたシーケンス制御技術の習得」、「レゴマインドストームを用いたプログラミング（基礎）の習得」および「レゴマインドストームを用いたロボットハンド、ロボットアームの製作」であり、高木と若林が担当した。また、コロナ禍以前の平成27年（2015年）から令和元年（2019年）までは、海外研修旅行として台湾やベトナムにある協定校（台湾國立聯合大學、国立高雄第一科技大学、ハノイ交通通信大学）を訪問し学生交流を行っていた。

● 学生の進路

本学科では、この10年間（原稿執筆時点では平成27年から令和5年度までの9年間）で、合計293名の卒業生を送り出している。卒業生全体の約56%が民間企業などに就職し、約43%が大学や専攻科に進学している。就職先の傾向として、製造業を中心に、サービス、インフラ、情報通信に関連した企業などに就職している。また、数は少ないが官公庁（防衛省、舞鶴市）へ就職する卒業生もいる。進学先の傾向として、進学者の約95%が国立大学または本校の専攻科に進学している。もっとも多い進学先は、豊橋

と長岡の技術科学大学であり、両校を合わせると進学者全体の約43%であった。つぎに多い進学先は本校の専攻科であり約23%であった。

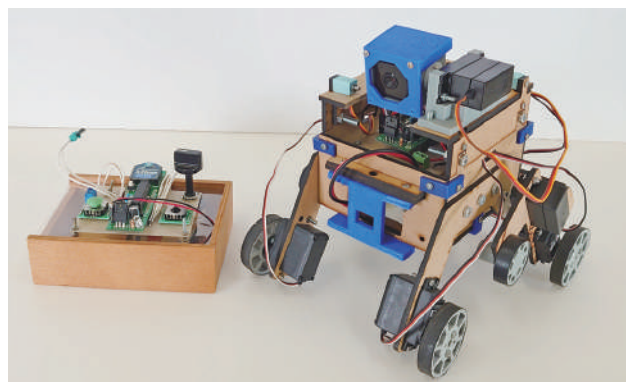


図1 学生が製作したロボット

3. 産学連携・地域貢献活動について

電子制御工学科の産学連携・地域貢献活動について振り返る。

● 公開講座、出前授業について

各教員の専門性を活かした公開講座や出前授業が数多く実施されている。この10年間（原稿執筆時点では平成27年から令和5年度までの9年間）では、公開講座80件、出前授業46件であった。代表的な公開講座としては、和歌山県で開催されている「全日本小中学生ロボット選手権」の地区予選を兼ねたロボット製作と競技会を行う公開講座（R6担当は若林）がある。この公開講座には、毎年、多くの小中学生が参加しており、本学科に在籍する学生にも参加経験のある学生が少なくなく、本学科の教育内容のPRにも重要な公開講座となっている。

● 共同研究、受託研究について

共同研究と受託研究の件数については、教員の研究活動に記載した通りである。直近の共同研究としては、清原が豊橋技術科学大学で行った「超精密切削用ダイヤモンド工具のER酸素イオンビーム加工による性能の改善」、西が豊橋技術科学大学で行った「導電性ダイヤモンドライクカーボンを用いた抵抗変化素子の作製および評価」などがある。

● 地域貢献活動について

本校では、令和元（2019）年度に科学技術振興機構が行っている事業「ジュニアドクター育成塾」に採択され、令和5（2023）年度までの5年間、北近畿地方の小中学生を対象とした育成プログラムを実施した。本学科からは石川が実施担当者としてロボットの課題学習などを担当した。

4. おわりに

本学科にとって、半数以上の教員が入れ替わる変化の大きい10年間であった。また、社会の転換期として、生成AIなどの人工知能技術、データを活用したDX技術、IoT技術などの普及も急速に進んだ10年間でもあった。このような社会情勢のなか、電子制御工学科の教育内容を時代に合わせアップデートし、これからの10年に備えていく必要がある。

（伊藤 稔）

建設システム工学科のあゆみ

1. はじめに

舞鶴工業高等専門学校が開校された1965年(昭和40年)から5年後の1970年(昭和45年)に土木工学科が増設された。その後、1994年(平成6年)に、土木工学科から建設システム工学科への改組が行われた。そして更なる学科の変革のため、建築系教員の確保をしつつ、2006年(平成18年)には、4年次から都市環境コースと建築コースの2コースに分かれて各専門分野の知識や技術等を修得する改組を実施した。現在、都市環境コースと建築コースの2コース制による卒業生(2010年)を輩出してから15年が経過し、社会的認知も定着し、両コースとも有力企業への就職や難関大学への編入が進んでいる。

専攻科について、2000年(平成12年)には、電気・制御システム工学専攻と建設・生産システム工学専攻の2専攻から構成される専攻科が設置され、学士課程の技術者教育が行われるに至った。さらに、2015年(平成27年)より、“総合システム工学”の1専攻3コース(電気・電子システム工学コース、機械・制御システム工学コース、建設工学コース)に基づいた専攻科課程のカリキュラムが実施されることになった。ここでは、建設システム工学科が単独の1コースを担当することになり、“土木工学”と“建築学”の学士号を授与することができる教育研究体制となっている。

過去10年間は「2コース制の安定期」であったと言える。資格試験の要件とカリキュラムの調整など地道な対応を継続し学生の資格試験への挑戦を喚起し、1級建築士、2級建築士、技術士補など在校中の資格獲得者も輩出する

ようになった。

2019年の年末より約3年間継続したコロナ禍による影響は大きく、学生と教員が共に協力し合いながらこの大禍を乗り越え、学業と進路において遜色ない結果を出せたことを誇りに思いたい。コロナ禍の遺産として、MoodleとWEB会議の積極活用があり、現在でも授業や進路活動で活用されている。コロナ禍による変化として、海外研修旅行は国際情勢やリスク管理の面から国内の研修旅行として実施している。また、2012年(平成24年)より、毎年、舞鶴市の市政記念館において、一般社会人向けの「土木・建築フォーラム」を開催していたが、3年生、4年生を対象とした「土木・建築フォーラム」として校内で開催するようになった。

2. 教職員の変遷

過去10年における教職員の変遷一覧を表1に示す。高谷富也教授におかれましては、1985年5月に本校土木工学科に着任以降、長きにわたり学生の教育、学術研究ならびに校務にご尽力されました。かねてより病氣療養中のところ、2020年5月、62歳にてご逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。

四蔵茂雄教授が定年退職され、本校の卒業生である山崎慎一氏が高知高専より転入された。また、建築学を専門とする今村友里子氏、土木工学を専門とする中尾尚史氏、平子遼氏が新たに加わった。技術職員として、本校の建築コース卒業生である高本優也氏が着任した。

表1 教員の変遷

西暦	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	都市環境	建築	備考
和暦	平成27	平成28	平成29	平成30	令和1	令和2	令和3	令和4	令和5	令和6			
	専任教員	教授	准教授	講師	助教	*：学科長							
高谷 富也											○		病没
四蔵 茂雄	*	*	*								○		定年退職
三輪 浩											○		鳥取大学へ転出
宮元 健次											○		自己都合退職
玉田 和也										*	○		
尾上 亮介						*	*	*	*		○		
加登 文学				*	*						○		
徳永 泰伸											○		
渡部 昌弘											○		
毛利 聡											○		
今村 友里子											○		
上野 卓也											○		自己都合退職
岩木 真穂											○		任期満了
中尾 尚史											○		
山崎 慎一											○		高知高専から転入
平子 遼											○		
	技術職員												
西川 隼人													福井工業大学へ転出
西村 良平													
高本 優也													

3. 教育研究活動について

● カリキュラムについて

高専機構によるモデルコアカリキュラムへの対応や舞鶴高専としてのカリキュラム改訂を継続して実施してきた。これにより必須教科を増やすことで学生の集中的な取組と放課後の時間確保を目指している。過去20年から過去10年までの10年間の卒業生の平均人数が33.9名に対し今年10年間の卒業生の平均は36.8名であり、その成果を確認することができる。

カリキュラムについての模索は継続する必要がある、成績不振学生へのフォロー、クラス運営等、学科一丸となって取組んでいく。加えて、数理・データサイエンス教科の導入、測量学におけるDX化への対応など時代の変化に応じたカリキュラム改訂を進めていく予定である。

● 進路状況について

2015年から2024年の10年間の進路状況を図1に示す。就職と進学割合は平均して就職が6割、進学が4割で大きな変化はない。団塊世代のリタイヤによる技術者不足は当分続くため、両コースとも就職に関しては順調に推移していくと思われる。

1970年の土木工学科増設時の地域からの要望に応えるべく、学科として地元への就職、特に官公庁への就職について斡旋を進めてきたが、過去10年間で33名（卒業生の約9%）が入庁したに過ぎない。自治体職員の不足は看過できない社会的問題であり、引き続き対応していく必要がある。

一方、この10年間で建築系就職先の開拓が進み、ゼネコン、インフラ系、公務員、建築事務所、工務店、ハウスメーカー、建築設備、不動産開発など多岐にわたる企業に就職し活躍しており、1級建築士の取得の報告も定常的に届いている。

進学について、北海道大学、東北大学、東京大学、九州大学などの難関大学に編入する学生が現われ、後輩たちへの良い刺激になっている。建築コースの進学先の開拓も順調に進み、京都工芸繊維大学、奈良女子大をはじめ、多くの大学への編入を果たしている。また、専攻科、両技科大への進学も順調に推移しており、学科としての教育内容と教育活動が適正に行われている証左であると言える。

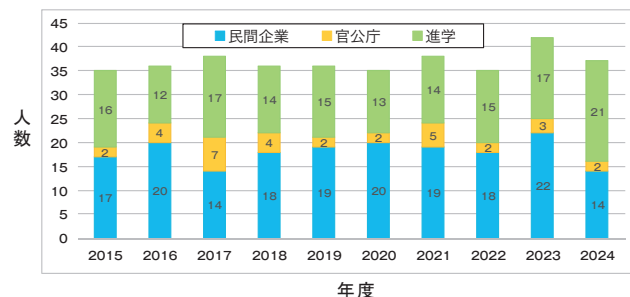


図1 進路の推移

● 教育研究活動について

建設システム工学科では、4年生からの2コース制のため、都市環境コースと建築コースでそれぞれ授業を実施するため、教員の担当授業数は他学科に比べて多くなる。その一方で、1コース20名の少人数での教育が実施できるため各教員は、質の高い教育を提供できている。

2020年から専門AL（アクティブラーニング）が導入され、

低学年では実験・実習や製図の自学自習に活用している。また、4年生の専門ALでは、実社会で活躍している先輩方の講演、教員の研究講演や特別補講、就活に必要なスキルの講習などを実施している。多くの卒業生が在校生に向かってプレゼンテーションを繰り広げており、4年生の進路選択や就活・進学の心得に役立っている。

建設システム工学科における2015年から2024年の10年間の科研費獲得は平均約1件であり、活発であるとは言えないが、近年、若手の教員が増えたことにより、科研費獲得件数は増加傾向になると思われる。

一方、科研費以外の外部資金の獲得は、年平均約7件あり、地域に密着した受託研究や共同研究等を推し進めている。なお、2023年5月舞鶴市制施行80周年記念式典が開催され、式典において、長年舞鶴市居住促進住宅の測量、設計、施工管理に関わり、舞鶴市の空き家問題の解決の一方策を見出すとともに、舞鶴市の都市計画や景観をはじめとするまちづくりに貢献したとして尾上亮介教授が表彰された。同じく、市のインフラの維持管理や修繕等に対応できる人材の育成に貢献したとして玉田和也教授が表彰された。

4. 産学連携・地域貢献活動について

過去10年間にわたり建設システム工学科では「住まいの設計」と題する出前授業を中学の家庭科の一環として継続的に取り組んでいる。白糸中学校をはじめ城北中学校、城南中学校、青葉中学校などに教員・技術職員が出向き、中学2年生全員を対象に授業を実施している。教員・技術職員の負担は大きいものの、推薦入試の面接時に出前授業への言及がしばしばあり、苦勞が報われる瞬間を味わっている。

2022年から舞鶴市が開催する「舞鶴市民向け防災士養成講座」を教員に加えて防災士の資格を有する学生も参加して実施している。近年の地震等の自然災害の激甚化を受け市民の防災意識の向上もあり、定員がすぐに埋まる状況にあり、今後も舞鶴市と連携して地域の防災力向上に貢献していく。

2018年の京都府港湾局を皮切りに近畿地整舞鶴港湾事務所、近畿地整福知山河川国道事務所、舞鶴市建設部、舞鶴市産業振興部、舞鶴市政策推進部等と連携した授業を展開しており、実践的な教授をいただいている。

社会基盤メンテナンス教育センターによる学生や地元技術者へのインフラメンテナンス教育も継続して実施している。

5. 教育・研究施設

過去10年間の教育・研究施設について、まず水理実験室の実験水路の撤去と新設を行い、学生実験の安全性が向上した。また、建設棟の地盤、材料、構造、水理実験室および廊下の改修が行われ、同時に万能試験機も更新された。

マスタープランで要望していた携行型X線分析装置が導入され、本科や専攻科の研究に使用されている。

6. まとめ

この10年間のうち3年間はコロナ禍との戦いであった。それに打ち勝つ技術も開発され、それが日常となった。

生成AIやDX技術等のツールが爆発的な進化を遂げる中において、建設システム工学科として学生に何を教授していくのか、真剣な議論を行い次の10年に備える必要がある。

（玉田 和也）

専攻科のあゆみ

1. はじめに

平成12年4月1日に本校の専攻科は創設され、平成13年春に授業を行う専攻科棟が竣工した。以後、社会ニーズに対応したカリキュラム改正、海外インターンシップ等によるグローバル教育、JABEE認定による教育の質保証、新たな学位の審査方式の適用など、専攻科教育は着実に充実してきた。さらに平成27年度には、本校専攻科の再編が行われ、新しい歩みを始めることになった。この再編は専攻科を大きく変える出来事であったため、その経緯をここで説明しておく。

本校の専攻科は、平成27年度まで本科電気情報工学科と電子制御工学科の上に電気・制御システム工学専攻が、機械工学科と建設システム工学科の上に建設・生産システム工学専攻の2専攻が設置されていた。建設システム工学科では平成18年度から、都市環境コースと建築コースの2コースが設置されたため、専攻科のカリキュラムが改正され、土木工学に加えて建築学の区分でも学位申請ができるようになった。その結果、建設・生産システム工学専攻では、機械工学、土木工学、建築学の3つの区分で学位申請を行うことになり複雑化した。この問題を解消するために、2専攻制（電気・制御システム工学専攻、建設・生産システム工学専攻）から1専攻3コース制（総合システム工学専攻、電気電子システム工学コース、機械制御システム工学コース、建設工学コース）に再編したのである。本稿では、再編され総合システム工学専攻となってからの10年のあゆみを記す。

2. 入学の状況

本校総合システム工学専攻の定員は、1学年あたり16名、2学年を合わせた全体で32名である。専攻科の入学試験は、推薦特別選抜、学力検査選抜（前期日程、後期日程）および社会人特別選抜がある。入学試験について、この10年の間に行ったいくつかの変更を挙げる。まず、入学者の確保と入学人数の適正化のため、令和3年度専攻科入学試験（令和3年4月入学）から、一般学力検査選抜（前期日程）をA方式（専願）とB方式（併願）の二方式に変更した。また、令和4年度入試（令和4年4月入学）からは、英語の筆記試験に替えてTOEICスコア（TOEIC IPを含む）による評価にした。令和7年度入試（令和7年4月入学）から後期選抜をなくし、学力検査選抜を年1回の実施にした。

図1にコース毎の志願者数と志願者倍率の推移を示す。この間の志願者倍率は、2倍を中心に変動している。令和2年度入試は、志願者倍率は急増し3倍を超えた。なお、新型コロナウイルスの流行は令和元年12月以降であるため、令和2年度入試の志願者増との関係はない。図2にコース毎の合格者数と合格者倍率の推移を示す。この間の合格者倍率は、1.4倍を中心に変動しているが変動は少ない。図3にコース毎の入学人数と定員充足率を示す。この間の定員充足率は、およそ1.2倍であった。コース毎の入学人数の推

移を見ると、平成27年度入試から平成29年度入試までの間は電気電子システム工学コースへの入学者が多かったが、平成30年度入試以降はコース毎の入学人数の差は小さくなった。

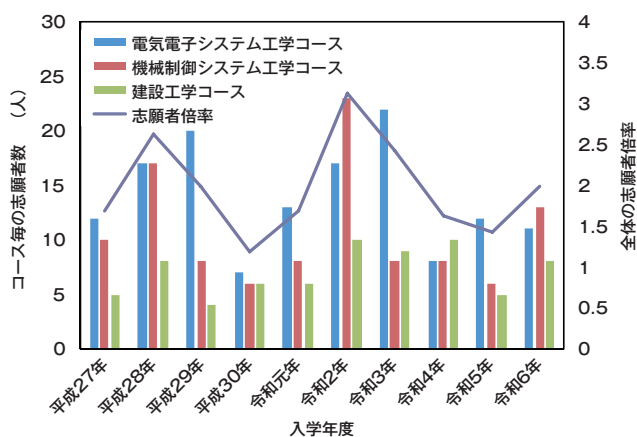


図1 コース毎の志願者数と志願者倍率

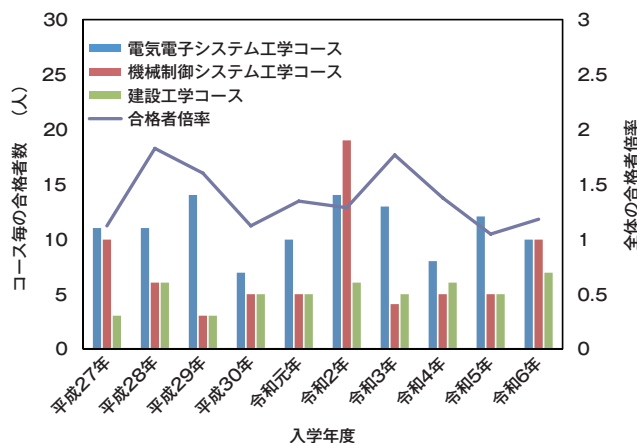


図2 コース毎の合格者数と合格者倍率

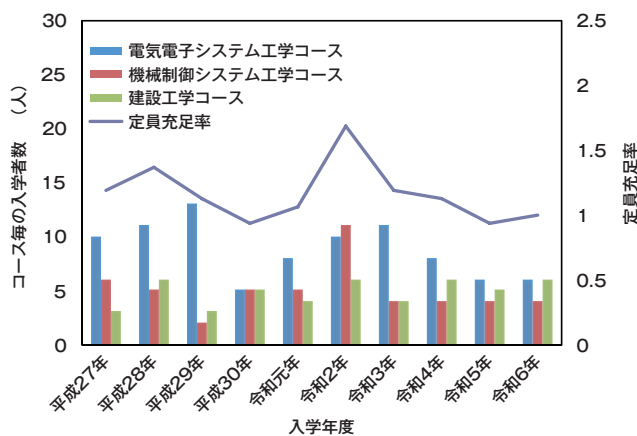


図3 コース毎の入学人数と定員充足率

3. 就職・進学状況

図4に、就職者数と進学者数の推移を示す。全体として就職者数と進学者数の割合は7対3で、就職者の方が多い。なお、令和2年度修了生は就職者数と進学者数の比率が半分に近かった。

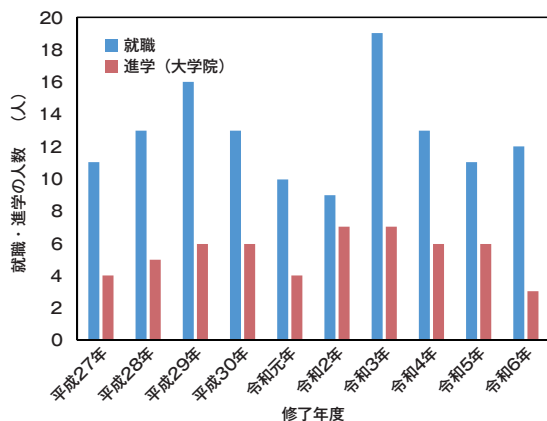


図4 就職者数と進学者数の推移

4. 学生教育

4.1 研究成果の発表

専攻科では、学生が自身の研究成果を積極的に学外で発表することを奨励している。研究発表の技術を涵養するためだけでなく、学外で客観的な評価を受けることによって、研究に関する新たな発見や今後の方向性に繋げるためである。また、優秀な発表として学会から表彰された学生もあり、本人だけでなく、他の学生のモチベーションの向上にも寄与している。この10年間の発表件数は、国内学会と国際会議を合わせて、160件を超えた。

第3ブロックの専攻科生が集まり研究発表をする第3ブロック専攻科研究フォーラムにも積極的に参加をしてきた。この研究フォーラムは専攻科生が日頃の研究成果を発信し、議論・情報交換することで第3ブロック全体の研究を推進し、向上することを目的として毎年実施されているものである。参加校は、第3ブロックの国立高専各校（富山・石川・福井・岐阜・豊田・鳥羽商船・鈴鹿・舞鶴・明石・奈良・和歌山）、近畿大学高専及び大阪公立大高専である。研究フォーラムでは、各校の口頭発表は1件と限られているが、ポスター発表は7件～12件の発表を行ってきた。令和3年度と4年度の研究フォーラムは舞鶴高専が主査校として開催した。令和3年度は新型コロナウイルスが流行していたため、オンライン形式で実施した。令和4年度は名古屋国際センターにて対面形式で実施した（図5を参照）。

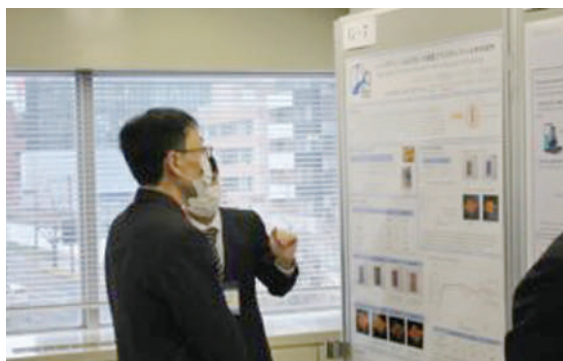


図5 令和4年度第3ブロック専攻科研究フォーラムの様子

4.2 海外インターンシップ

国際性とグローバル・コミュニケーション能力を高めるため、専攻科生を対象にした「海外インターンシップ制度」を平成21年度から開始した。この制度は、専攻科生を夏季休暇中に日本企業の海外拠点や協定大学等へ派遣するプログラムである。派遣先は、タイ国立キングモンクット工科大学ラカバン校、タイ日進などで計18名が参加した。この10年間について見てみると、国際情勢の悪化や新型コロナウイルスの流行によって、海外への直接派遣が中止された年もあったが、継続的にプログラムを実施することができた。今後、研究者やエンジニアは海外で活躍する機会が増えるため、専攻科におけるグローバル人材育成の重要性はさらに増すものと考えられる。

5. 特例による学位授与申請

平成26年度から、大学評価・学位授与機構において特例による学位申請制度が施行された。本校専攻科においては、平成26年度入学生（平成27年度2年生）から特例による学位授与の申請を開始した。特例による学位授与申請を行うにあたり、本校専攻科は特例適用専攻科として認定を受けている。特例による学位授与申請では、学修総まとめ科目（専攻科2年生の特別研究）の履修計画書、その成果の要旨および単位修得状況などを学位授与機構に提出し、その審査を経て「学士」の学位が授与される。

6. JABEE教育プログラムの認定終了

本校専攻科のJABEE教育プログラム認定についてであるが、平成16年度に日本技術者教育認定機構（JABEE）より専攻科の「生産・情報基礎工学」教育プログラムが認定された。平成21年度には第1回目の継続認定審査を受け、平成24年度には中間審査を受けた。また、平成27年度には改組にともなう「総合システム工学」教育プログラムへの変更があった。その後、令和3年3月31日で認定有効期間が終了するのにもない、「総合システム工学」教育プログラムの運用を終了した（令和3年度修了生まで適用）。

7. おわりに

本校専攻科は設立以来、時代の変遷や要求に対して柔軟に対応しながら進歩・発展してきた。この10年を振り返ると、改組とそれにとまなうカリキュラム改正、そしてJABEE認定の終了など、非常に大きくその形を変えたことがわかる。一方で、社会が専攻科生に求めることを常に考え、イノベーションを起こすことができる創造力、グローバルに活躍できるコミュニケーション力を備えた人材を育成するべく、学外での研究発表や海外インターンシップなどに継続的に取り組んできた。これまでの10年の変化を受け止めた上で、これからの10年でどのように進歩発展できるのか、舞鶴高専専攻科の今後に大いに期待したい。

最後にこの10年の専攻科長であるが、三輪（平成27年度～平成29年度）、川田（平成30年度～令和元年度）、加登（令和2年度～令和4年度）、内海（令和5年度～令和6年度）が務めた。

（内海 淳志）

学術情報センターのあゆみ

1. はじめに

令和元年(2019年)度から、それまでは別組織として運営されてきた情報科学センターと図書館の機能が一つに統合され、学術情報センターとして運営が開始された。本センターの目的は、舞鶴高専における教育・研究の推進を支援するとともに、本校の広報および学外との学術情報の交流と地域文化の発展に寄与することである。本稿では、学術情報センターの誕生した令和元年度以降における歴史を振り返る。はじめに、この10年間における図書館長、情報科学センター長、学術情報センター長を表1にまとめ示す。図書館長は平成27年度が人文科学部門の垂谷茂弘、平成28年度から平成30年度までを建設システム工学科の尾上亮介が務めた。情報科学センター長は平成27・28年度を電子制御工学科の野間正泰、平成29・30年度を電気情報工学科の片山英昭が務めた。令和元年の初代学術情報センター長は片山英昭が務め、令和2年度から令和6年度までの5年間を電子制御工学科の伊藤稔が務めた。

2. 学術情報センターについて

学術情報センターは、主に図書館と情報科学センターの機能を統合し誕生した組織である。統合以前の図書館運営委員会の役割を受け継ぐ「図書部門」、情報科学センター年報や広報委員会で刊行していた紀要や学校概要などの刊行物の編集・出版を行う「編集・出版部門」、情報科学センターで行なっている学術交流にかかる講演会や公開講座を行う「教育・研究部門」、教育用電子計算機システムの管理・運用や校内ネットワークシステムの管理・運用および情報機器関連の運用に関する技術的支援などを行う「機器運用部門」の4つの部門で構成されている。ここでは、学術情報センターの誕生

表1 歴代センター長と図書館長

和暦	西暦	図書館長	情報科学センター長
平成27	2015	垂谷 茂弘	野間 正泰
平成28	2016	尾上 亮介	野間 正泰
平成29	2017	尾上 亮介	片山 英昭
平成30	2018	尾上 亮介	片山 英昭
和暦	西暦	学術情報センター長	
令和1	2019	片山 英昭	
令和2	2020	伊藤 稔	
令和3	2021	伊藤 稔	
令和4	2022	伊藤 稔	
令和5	2023	伊藤 稔	
令和6	2024	伊藤 稔	

した令和元年度以降における各部門の主な活動を中心に振り返る。



図1 図書館だより

2.1. 図書部門

図書部門の主な活動は、各学科・部門の教員による推薦図書、ブックハンティング(令和2年度からコロナ禍により中断していたが令和6年度に5年ぶりに実施)などによる学生用図書の選定、学生図書委員会による図書館だよりの発行(図1)などである。なお、ブックハンティングは、学生図書委員と専攻科生、留学生が参加し、教職員とともに京都市内の大型書店に赴き学生自身の手で本校にふさわしい図書を選ぶ作業である。また、図書館では、研修支援サービスとして、教職員向けに電子ジャーナルや学術情報サービスの提供も行なっている。図書館の環境整備の一環として、令和2年度にトイレの改修を行った。機器だけでなく、壁や床も綺麗になり、大きな鏡も設置され雰囲気も明るくなった。図書館の業務システムは、長岡技術科学大学附属図書館が全国高専と連携し管理・運用している統合図書館システムを利用しており、現在は令和5年度に更新された第4期のシステムが稼働している。対外的な活動としては、隔年開催の近畿地区高等専門学校図書館連絡協議会(平成28年度は本校が取りまとめ校)にて、図書館業務に関する議論や意見交換を行なっている。

2.2. 編集・出版部門

編集・出版部門の主な活動は、舞鶴高専年報(以下、年報)、学校概要、学校案内、学校だより、舞鶴工業高等専門学校紀要(以下、紀要)などの刊行物の編集・出版などである。年報および学校概要、学校案内、学校だよりについては、総務係と協力しながら編集・出版を行なっている。紀要については、この10年間の投稿数は63件であった。学生を含むファーストオーサの所属の分布は、機械工学科14件、電気情報工学科8件、電

子制御工学科3件、建設システム工学科17件、人文科学部門14件、自然科学部門1件、校長6件であった。なお、投稿数の減少や研究発表の媒体としての紀要の位置付けなどの諸問題により、令和5年度に刊行した第59号を最後に廃止した。

2.3. 教育・研究部門

教育・研究部門の主な活動は、毎年秋に開催している学術情報センター講演会（以下、講演会）、学生向け情報セキュリティ教育の実施などである。講演会は、新任教員に講演を依頼し自己紹介を兼ねて研究内容について講演いただいている。主に本校の教職員と学生が聴講し、研究領域の異なる教員間の情報交換の場としても役立っている。この10年間の講演タイトルを表2に示す。なお、講演者の職階は講演当時のものである。講演者の分布は、機械工学科1名、電気情報工学科2名、電子制御工学科2名、建設システム工学科5名、人文科学部門5名、自然科学部門3名であった。学生向け情報セキュリティ教育は、年度はじめに全学生を対象としたネットワーク利用講習を行なっている。この数年は、新入生向けには対面での講習会を実施し、2年生以上はeラーニングにより実施している。

2.4. 機器運用部門

機器運用部門の主な活動は、教育用電子計算機システムの管理・運用、校内ネットワークシステムの管理・運用、および、情報機器関連の運用に関する技術支援などを行なっている。教育用電子計算機システムは平成28年度末および令和5年度末にシステムの更新を行った。令和6年度より稼働しているシステムでは、物価上昇や為替レートなどの問題による機器やソフトウェアなどの価格上昇により、演習室を4部屋から2部屋に削減することとなった。このため、学校全体として学生個人の端末を授業で利用するBYOD (Bring Your Own

Device) を推進することとなった。校内ネットワークシステムは平成30年度末および令和5年度末にシステムの更新を行った。システム更新のたびに学内のサーバを整理し、メールサーバやDNSの外部サーバ化、各種クラウドサービスへの移行など行い、現在のシステムは物理サーバ3台構成で運用している。高専機構全体で一括調達される高専統一ネットワークシステムは、2017年および2022年に更新作業を行い運用している。本統一システムには、本校のBYOD推進に必要な無線AP（アクセスポイント）も含まれている。現在は次期統一システムに向けて作業が開始されたところである。国立情報科学研究所（NII）が構築・運用している学術ネットワーク「SINET」へ接続しており、2015年にSINET5、2022年にSINET6への切替えを行った。

2.5. その他

情報科学センターの環境整備として、2020年にトイレ改修と女性用トイレの新設を行った。また、2022年にセンターの建屋全体の改修も行った。これらの改修により、女子学生および女性教職員の利便性の向上と、センターの利用者の快適性を向上することができた。2020年から2023年のコロナ禍における遠隔授業のサポートとして、情報科学センターでは、LMS (Learning Management System) Moodleのストレージ増強、学生への貸与用のノートパソコンとタブレット端末の整備、遠隔授業やWeb会議用の大型電子黒板の整備などを行った。情報科学センターの対外的な活動として、毎年開催の近畿地区高等専門学校情報処理教育連絡協議会（2020年は本校が取りまとめ校）にて近畿地区の国立高専、公立高専、私立高専のセンター長と各高専の情報業務に関する議論や意見交換を行なっている。以前は対面での実施であったが、コロナ禍の2020年からオンラインでの開催が定着しつつある。

（伊藤 稔）

表2 この10年間の学術情報センター講演会

年度	回	学 科	職 階	氏 名	タイトル
2024年	48	機械工学科	助 教	中村 丞	金属材料の特性を決定する微細組織
		電子制御工学科	助 教	古殿 幸大	ネコから学ぶ4脚ロボットの歩行制御
2023年	47	建設システム工学科	助 教	平子 遼	災害で後悔しない資産形成セミナー ～リスクマネジメント編～
		人文科学部門	准教授	荻田みどり	読み継がれてきた『源氏物語』
2022年	46	自然科学部門	助 教	馬越 春樹	現代数学に於ける非線形反応拡散方程式系の解析学 ～位相の紹介を中心に～
		建設システム工学科	講 師	中尾 尚史	激甚化する災害における橋の対策 ～地震及び津波に対する橋の戦略～
2021年	45	自然科学部門	助 教	熊谷 大雅	偏微分方程式と粘性解
		電気情報工学科	助 教	森 健太郎	情報科学による不妊症診断支援
2020年	中止				
2019年	44	建設システム工学科	助 教	上野 卓也	舞鶴市志楽川の浸水対策に関する取り組み
		電気情報工学科	助 教	七森 公碩	電気自動車のはじまりから現在
2018年	43	電子制御工学科	助 教	若林 勇太	ロボットシステムの実用化と研究～作業支援システムの紹介～
		人文科学部門	講 師	山根 秀介	「哲学」とはどのような学問か
2017年	42	人文科学部門	准教授	牧野 雅司	"明治5年、丹後国加佐郡神崎村・作兵衛親子の漂流"
		建設システム工学科	助 教	今村友里子	イサム・ノグチのランドスケープ作成
2016年	41	人文科学部門	准教授	藤田 憲司	「生」のアクチュアリティー プリーモ・レーヴィの証言を読み解く
		自然科学部門	講 師	喜友名朝也	Bernoulli数とゼータ関数
2015年	40	建設システム工学科	助 教	毛利 聡	建築物の長寿命化のために
		人文科学部門	准教授	畑 恵理子	糸井文庫の浦島伝説と天女伝説

地域共同テクノセンターのあゆみ

1. はじめに

1995年(平成7年)5月国立高等専門学校学校施設設備委員会による報告書「高専における学内共同教育研究センターのあり方について」が提出され、本校でも上記の報告を受けて、学生の「ものづくり」技術教育の工夫と充実、教員の共同研究の活性化と推進、地域産業の発展に貢献すること、そして技術を通じての国際交流を目的とする「総合技術センター」の設置を立案することになった。

総合技術センター(仮称)設置検討委員会では、センターの基本構成を

- ①創造工房部門(ロボコン・ロボリンピア等)
- ②材料・機能試験部門(材料・機能の受託研究等)
- ③教育研究部門(学生(含む専攻科)教育等)
- ④産学共同開発部門(共同研究、リカレント・生涯教育)
- ⑤国際交流部門(技術教育研修等(専門教育者の派遣、留学生・研究員の受け入れ))

として、講義と実験実習を包括した新たな授業展開が可能で、さらに産学連携の取り組みができるスペースを確保することを必須条件として立案された。

そして、1999年(平成11)年12月、第2次補正予算により低学年棟・地域共同テクノセンターの設置が決定し、2001年(平成13)年1月に本センターが完成した。そして2001年(平成13)年3月、低学年棟・地域共同テクノセンター竣工式が挙行された。

地域共同テクノセンターが設置された当初、地域共同テクノセンターは、「構造解析システム支援部門」「情報システム開発支援部門」「技術相談部門」の3部門からなり、各部門に部門長を配置した。

2005年度(平成17年度)より、地域共同テクノセンターの活動は「連携部会」「研究特許推進部会」の2本柱となった。「連携部会」では、従来からの技術相談に加え、それまで不十分であった地域共同テクノセンターやシーズの情報発信を各種展示会でこまめに実施するようになり、産学官連携を促進するようになった。「研究特許推進部会」では、研究特許の推進活動を行っていた。

2. 現在の地域共同テクノセンター

地域共同テクノセンターの目的は当初から変更しておらず「産学官の共同研究の推進及び地域産業との連携並びに発展に寄与するとともに、本校における教育研究の向上発展に資すること」を目的としている。一方、時代の変化とともに、地域共同テクノセンターの業務内容は変遷を経て、現在は下記のとおりとなっている。

(1) 地域産業界等との共同研究、技術交流推進に関すること。

(2) 地域に開かれた体験教育等に関すること。

(3) 総合技術開発能力のある学生の育成に関すること。

(4) 学科の枠を超えた横断的な研究及び協力支援に関すること。

(5) 知的財産の教育に関すること。

(6) 社会基盤メンテナンス教育センターの重要事項に関すること。

(7) スタートアップ人材育成センターの重要事項に関すること。

(8) その他センターの管理運営に関すること。

業務内容に記載の通り、地域共同テクノセンターの配下に「社会基盤メンテナンス教育センター」、「スタートアップ人材育成センター」、「ナノテクノロジー教育センター」、「地域エネルギー・防災教育研究センター」が設立され活動を行っている。

また、2013年度に採択されたCOC事業を契機として、地域産業界と舞鶴高専との、連携・交流を深めることにより、地域社会の発展に寄与すると共に、舞鶴高専との教育・研究を振興することを目的として設立された「舞鶴高専地域テクノアカデミア」の運営も担っている。

加えて、地域共同テクノセンター委員は「知的財産委員会」と「生命倫理委員会」の委員を兼務しており、舞鶴高専の研究推進に係る案件に対応している。

3. 活動実績

3.1 舞鶴高専地域テクノアカデミア

舞鶴高専と地域産業界の連携強化のために2014年3月に設立された企業団体であり、地域共同テクノセンターはその活動推進に貢献している。総会と高専の教員による講演会、関連企業の工場見学会を実施している。コロナ禍によりWEB会議での総会の開催や工場見学の廃止などの影響がある一方、2020年度から会員企業の社員を対象とする「教養講座」を始めた(図1)。

また、3・4年生と専攻科1年生に配布する会員企業紹介冊子(図2)の作成も行っており、テクノアカデミア会員企業の魅力を紹介している。



図1 教養講座チラシ



図2 企業紹介冊子

3.2 企業技術者等活用プログラム

企業技術者等活用プログラムは企業技術者の優れた実践的技術を高専教育に活用するために設けられた国立高専機構のプログラムであり、毎年国立高専に公募される。舞鶴高専では企業技術者の直接の指導の元に学生が新製品の開発業務を体験する取り組みを2016年まで行った。

3.3 研究推進

研究推進事業として、2019年度から2022年度まで科研費説明会を開催した。本校教職員を対象とし、3回に渡って科研費を取得した経験をもつ本校教員を講師として開催し、応募準備と書類作成について各先生が工夫されている点をわかりやすく説明するとともに、研究テーマの整理方法や研究グループ作りなど、科研費応募に向けた準備に関しても説明を行った。

より活発な外部資金の獲得と教育研究を含む研究を推進するために、「研究グループ形成支援事業」を創設し各分野あるいは分野を横断したメンバーから構成される研究グループを構築した。

2023年度からは、科研費に造詣の深い校長主導による科研費申請のアドバイス制に移行し、科研費獲得が飛躍的に向上した(図3)。

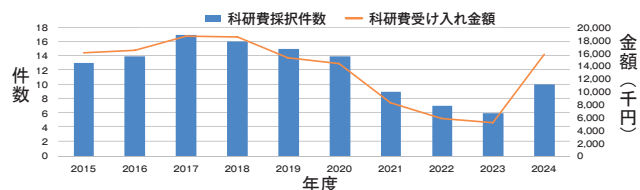


図3 科研費採択数と受け入れ金額の推移

3.4 公開講座・出前授業

舞鶴高専では公開講座と出前授業は地域貢献の重要な手段として積極的に取り組んでいる。また近年は、入試広報委員会と連携して中学生への訴求も見据えた運営を行っており、公開講座のチラシ(図4)を9.5万枚印刷し、近隣の中学生全員に配布するなど活性化に向けた取り組みを行っている。図5に公開講座・出前授業の開催回数の推移を示す。



図4 公開講座の告知チラシ

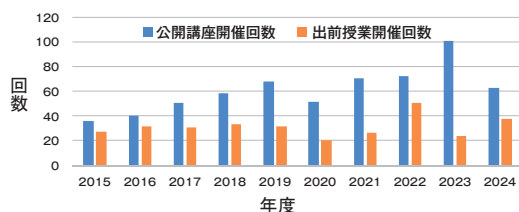


図5 公開講座・出前授業の開催回数

地域共同テクノセンターは公開講座・出前授業を管轄しており、その推進のために環境を整備している。コロナ対策として、検温カメラ、アクリル板、CO2モニターの購入を行った。また、必要書類のforms化による教員負担の軽減等の対策を進めた。

3.5 広報活動

舞鶴高専の地域貢献と研究開発への取組を外部に発信するため、展示会等への学校ブースの出展を行っている。「近畿地区7高専産学官マッチングフェア」「ビジネス・エンカレッジ・フェア」「京都ビジネス交流フェア」「建設技術展in大阪」などへの出展をコロナ禍期間を除き継続的に行っている(図6)。また、2018年度までは舞鶴高専技術通信を発刊していたが、訴求効果を鑑み廃止した。



図6 展示会出展の様子

3.6 ナノテクノロジー教育センター

IoT時代を迎えた現在、ナノテクノロジーの基礎となる知識と技術が高専においても必要とされており、舞鶴高専地域共同テクノセンター内に「ナノテクノロジー教育センター(ntec)」を立ち上げた(2018年度)。ナノテクノロジー教育センターには、真空蒸着装置、走査型電子顕微鏡(電子ビーム描画可能)、走査プローブ顕微鏡などの装置がクリーンルーム(クラス1000)内に設置されている。現在、4つの研究室が使用しており、得られた研究成果は、国内外の学会で発表し、優秀ポスター賞やプレゼン大会準優勝などの成果を定常的にあげている。

3.7 科研費以外の外部資金獲得状況

科研費以外の共同研究、受託研究、委任経理金の獲得状況を図7に示す。

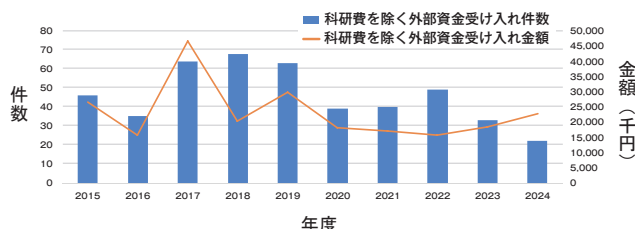


図7 科研費以外の外部資金獲得の推移

4. おわりに

COC・COC+事業により地域貢献への機運を高めることができたが、コロナ禍の影響は如何ともしがたいものがあつた。次の10年に向けた地域貢献・研究推進に係る地域共同テクノセンターとしての役割を模索する時期に来ている。

(玉田 和也)

教育研究支援センターのあゆみ

1. はじめに

教育研究支援センター（以下、センター）は、本校の技術職員が所属する組織である。実践的技術者の育成を教育理念とし、実験・実習、演習、ものづくりを重視する本校において、技術に関わる専門的な業務を担っている。教育および研究を支援するという大きな役割を果たしながら、公開講座や出前授業、自治体等への技術協力・受託研究などを通して地域貢献にも力を入れている。また、各種学務業務のためのシステム作成・運用など、学校運営への技術的な支援も行っている。

開校60周年を記念する本誌では、おもに50周年以降の10年間の技術職員の取り組みを中心に、センターのあゆみを記す。

2. 組織と人事

本校設立当初、技術職員のための組織は存在せず、実習工場および学科付きの職員として位置づけられていた。昭和44年、事務部に庶務課実習係が設置され、教室系技術職員は実習係に属することとなる。昭和47年の学生課新設と同時に学生課実習係となってからは、長期に渡りこの組織構成で主に各学科の実験や実習を支援してきた。時は流れ、平成9年の文人給第195号により、平成10年度には高等専門学校に技術専門職員の配置が認められた。これを受け、技術職員の職務および待遇の改善を図り、かつ専門的業務を組織的・効率的に行うとともに、能力と資質の向上および優れた人材の確保のため、平成10年4月に「教育研究支援センター」が設置されることとなる。さらに、独立行政法人化等の時代の流れとともに、平成20年4月の事務部再編に併せて事務部から独立し今日に至る。センターは専門的業務を組織的かつ効率的に行うため、第1部門および第2部門の2部門を柱としている。設立当初はセンター長を筆頭に技術長、部門長、部門主任、部門員から構成されていたが、平成20年度の事務部からの独立に併せ、新たに副センター長を設け、総務課長をもって充てられることとなった。これは、事務部総務課が技術職員の人事を掌握していることと、就業規則や給与規則等が事務職員と同じ処遇であることなどから、事務部との連携を密にするためである。さらに同年、実習工場の管理・運営を担っている本センターと、実習工場と関係の深い機械工学科との連携を密にするため、実習工場長のポストを設け、機械工学科長をもって充て

られた。平成26年4月からは、実習工場長を補佐するため、教授または准教授のうちから推薦される、副実習工場長が置かれることとなった。歴代センター長を表1に、歴代技術長（総括、副技術長）を表2に示す。

表1 歴代センター長

H10.4 ~ H15.3	川勝 邦夫	機械工学科 教授
H15.4 ~ H16.3	岡 昭二	建設システム工学科 助教授
H16.4 ~ H19.3	奥村 幸彦	電子制御工学科 教授
H19.4 ~ H23.3	中川 重康	電気情報工学科 教授
H23.4 ~ H27.3	野間 正泰	電子制御工学科 教授
H27.4 ~ H29.3	西山 等	機械工学科 教授
H29.4 ~ H31.3	篠原 正浩	機械工学科 教授
H31.4 ~ R 2.3	高谷 富也	建設システム工学科 教授
R 2.4 ~ R 7.3	谷川 博哉	機械工学科 教授

表2 歴代技術長（総括、副技術長）

H10. 4 ~ H12. 3	永井 武 技術長
H12. 4 ~ H14. 3	山内 哲夫 技術長
H14. 4 ~ H15. 3	白猪 浩司 技術長
H15. 4 ~ H16. 3	瀬野 丑雄 技術長
H16. 4 ~ H19. 3	阿波 和利 技術長
H19. 4 ~ H21. 3	野瀬 佳正 技術長
H21. 4 ~ H23. 3	森内 基隆 技術長
H23. 4 ~ H25. 3	眞柄 賢一 総括
H25. 4 ~ H26. 3	釣 健孝 総括
H26. 4 ~ H28.11	福井 繁雄 総括
H28.12 ~ H29. 9	福井 繁雄 副技術長
H29.10 ~ R 4. 3	福井 繁雄 技術長
R 4. 4 ~ R 6. 4	北代 浩次 副技術長
R 6. 5 ~	北代 浩次 技術長

3. 様々な取り組み

センターは実験・実習を中心とした教育研究支援以外にも、様々な取り組みを続けてきた。近年では校務に関わる委員会への積極的な参画に加え、FD・ICT分野、安全衛生および危機管理分野、事務部を含めたあらゆる情報分野への技術的支援など、部門の枠を超えて学校運営に関わることが多くなってきている。

3.1 地域貢献（公開講座・出前授業）

本校における地域貢献活動の一つとして、公開講座や出前授業が挙げられる。現在ではワーキンググループを作り、年に3回ほどの公開講座、出前授業を行っている。この10年間にセンター主体で実施した公開講座、出前授業は合わせて30回以上となっており、その他学

科支援のものを合わせると更に多く実施していることとなる。センター主体で令和6年度に開催した公開講座および出前授業の一覧を表3に、その様子を写真1に示す。

表3 令和6年度公開講座・出前授業一覧

8月19日	公開講座「イライラ棒を作って遊ぼう」
8月26日	公開講座「webサイトを制作してみよう」
11月17日	出前授業「水中UFOキャッチャー」
12月9日	公開講座「Minecraftでプログラミングを学ぼう」



写真1 出前授業の様子

3.2 表彰・受賞

職員表彰は、業務改善、教育支援業務・研究支援業務・学生支援業務等において、特に高く評価できる成果が認められる職員を表彰することにより、職員全体の職務遂行意識の高揚を図ることを目的として、平成23年度から実施されている。

表4 表彰・受賞

R4	石井貴弘	令和4年度独立行政法人国立高等専門学校機構職員表彰理事長賞 【表彰題目】各種学務業務用システムの構築と運用による業務の効率化
R5	西村良平	令和5年度独立行政法人国立高等専門学校機構職員表彰若手奨励賞 【表彰題目】ドローンをを用いた広報活動および地域貢献

4. 実習工場改修について

センター所属の技術職員のうち数名は実習工場に常駐し、その運営保守を含めた日々の業務を遂行している。本校の実習工場は、機械工学科と電子制御工学科の工作実習並びに、各学科の実験科目や卒業研究、自動車部や創造技術研究会（S研）をはじめとするクラブ活動、高専祭などの学生活動、事務部からの依頼品の加工などに広く利用されている。

実習工場は2棟あり、A棟には旋盤やフライス盤、ボール盤などを設置し、B棟には溶接機、炭酸ガスレーザ加工機、マシニングセンタなどの工作機械を設置している。工作機械については漸次新しいものに更新してきたが、建物自体の老朽化の対策のため、令和2年度の後期には実習工場A棟の改修工事を施工した。

工事期間中はA棟内から工作機械や大量の鋼材を含めた全ての物品を工場外に出す必要があり、それらのほとんどは外部の倉庫に預けることとなった。そのた

め、各学科及び学生課教務係と協議のうえ、工作実習を前期に前倒して実施し、後期には構内のプレハブ小屋に移設した数台の旋盤とフライス盤、ボール盤を使用して一部の工作実習と卒業研究の対応を行った。新型コロナウイルス感染症の影響による休校という予期せぬ出来事とも重なり、授業日程の調整にはさらに苦慮することとなったが、どうにかカリキュラム通りの工作実習を開講することができた。

改修内容としては、床が全面鉄筋コンクリート張りとなり、天井を低くしてLED照明を設置、壁や窓は断熱の効いたものとなり、電気設備の増設とエアコンの新規設置が行われた。また、屋根や外壁の大規模な再塗装により、外観も美しくなった。改修工事の完了後、工作機械等の再設置を行い、令和3年3月23日には竣工式（写真2）が行われた。その後今日に至るまで、工作実習やクラブ活動等において実習工場A棟を利用する学生には、明るく快適な環境を提供することができている。



写真2 竣工式の除幕式の様子

5. おわりに

取り組みからも分かるように、実験実習等を重視する本校において、センターとしての技術職員組織は、ますます重要性を増しているように感じられる。

この10年のうち、最も影響が大きかった出来事は、新型コロナウイルスの感染拡大であったと思われる。感染拡大の初年度、4月中は休校となり、5月から6月下旬までは遠隔授業となった。実験・実習をメインに担当している技術職員としては、難しさを感じながらもコンテンツ作りを行い、遠隔授業への対応を行った。対面授業への移行後は、マスク着用の徹底やこまめな消毒、3密を避けるなどの感染症対策をしっかり行いながら実験・実習を継続した。その後も社会全体の流れと同じく、研修会等はほぼオンラインになるなど、ニューノーマルへの対応を余儀なくされた。

そのような時期もありながら、変化に対応し、学生のため、学校のため、社会のために技術職員が果たすべき役割を考え、日々の研鑽を重ねて幅広い業務に当たっている。今後も社会のニーズに応えられるよう革新を続け、70周年、80周年記念誌には更なるセンターの活躍が執筆できることを期待してまとめたい。

（西村 良平・石井 貴弘・櫻井 一樹・高本 優也）

国際交流センターのあゆみ

お元気ですか? また大内さんの英語のクラスに参加したいです。Student Ambassadorが本当に懐かしいです。時々、私たちが一緒に遊んだクラブでのゲームのことを考えると、笑顔になります。すべてに感謝します。

敬具、スカイ

1. 国際交流の意義

過去10年の国際交流センターの活動を振り返るにあたり、2024年度のセンター長の任にある執筆者としては僭越ながら、その活動を象徴するものとして留学生から貰った手紙について触れることから始めたい。スカイは23年度のサマートレーニング(例年5月～7月に実施)に参加したタイ王国キングモンクット工科大学(以下KMITL)の学生である。コロナ禍による中止期間を挟み、実に四年ぶりのKMITL研修生の受け入れであった。好青年を絵に描いたようなスカイは瞬く間に本校のアイドルとなり、短い間ではあったが、外部からの刺激に乏しい舞鶴高専の学生に強いインパクトを与えた。4名の受け入れとなった18年度以降、中止もしくは人数確保の困難が続いていたにもかかわらず、彼の口添えもあって、24年度は枠の上限である4名の学生を再び迎えることができた。上述の手紙はスカイが彼らに預けていたものである。彼はかなり日本語を理解していたが、書くのは不慣れであることは筆跡を見ると察せられた。帰国する留学生たちに託した返信では当方がタイ語文字に挑戦したが大変で、なおさら心遣いが胸に沁みた。

当センターの存在意義は、こうした海を越えた交流にある。10年の間にコロナ禍の影響もあり海外研修旅行の伝統が途絶えてしまうなど、本校の国際交流は停滞を余儀なくされたが、細々とではあれ、個人間の繋がりが生まれたことは慶賀すべきである。国際交流は学校全体への費用対効果は大きくないかもしれない。しかし他国に赴いた際、留学生に関わった学生や教職員が、海外の地で信頼できる友人を持っていることの意味は一生継続く。24年度、KMITL インターンシップに参加した専攻科生たちは、数ヶ月前に歓待した留学生と旧交を温め、また本科生の中にもこまめに連絡を取り合って、再会の計画を立てているという話も聞く。国際交流センターとしては交流の意義という初心を忘れずに学生活動をサポートする所存である。

2. KMITL との協定に基づく研修事業

KMITL との協定に基づく受入(サマートレーニング)と派遣(専攻科インターンシップ)についてまとめておく。2005年以降、舞鶴高専は様々な海外の高等教育機関と

協定を結び、連携を行なってきたが、記念すべき第一号がKMITLである。KMITLと本校がお互いに1ヶ月程、学生を相互に派遣するというシステムは2007年から概ね継続的になされ、現在に至る。

受入においてKMITL留学生は本校の青葉会館もしくは学寮に宿泊し、専門学科にて研修を受けるかたわら、クラブ活動、一般科目授業への参加により学生交流を行い、報告会を行って研修を終える。一方、本校がKMITLへと専攻科生を派遣するインターンシップ(例年8月)では、参加者は専門分野に応じて各々研究室に配属される。最終週に英語でプレゼンテーションを行い、修了証を得た学生たちは帰国後、本校にて報告会を行い、単位認定を得る。

受入・派遣ともに、本校学生にとって文化・学業両面における貴重な経験の場となっている。日本語に習熟した国費留学生とは異なり、英語で会話をしなければならないKMITL学生と、短い間ながら学寮・学校において濃密な異文化交流を行い、またKMITLでは全てを英語でこなさなければならない。今後もKMITLとは意義深い交流が続けていけるように努力したい(実施詳細は表1)。

3. コロナ禍の影響、その他の変化

コロナ禍を境目として国際交流活動は停滞を余儀なくされた。20年から22年の間、KMITL留学生の受入が中止され、派遣も実現していない。幸い、KMITLとの交流は復調したが、一方で2006年から行われてきた本科4年全員を派遣する海外研修旅行はコロナ以降円安による渡航費の高騰もあり、22年以降、国内に切り替えられた(実施詳細は表2)。センターとしては残念だが学年全体を海外派遣する形での再開の目処は立っていない。またコロナによる渡航レベル制限のため、本校最初の「トビタテ! 留学JAPAN」高校生コースの採択者2名(21年)の留学も断念されている。

その他の点でも10年の間に大なり小なり変化があったため、沿革の一部として記録しておく。舞鶴高専が主導する形で2009年より開催していた中部日本海高専会議(石川、富山、長岡、福井、舞鶴)はKMITL学生の受け入れや国際会議・インターンシップ派遣の協働を目的としていたが、各高専でノウハウが蓄積されたこともあり、18年度を持って終了した。また19年7月には英国ポーツマス大学の副学部長が本校を訪問し、同年11月パートナーシップの了解覚書(MOU)を取り交わした。しかし実質的な学生交流が実現しないまま、失効となっている。

4. SA活動と留学支援事業

2019年、国際交流活動を支援する有志の学生団体、Student Ambassador (学生大使、通称SA) を創設した。留学生との交流に関心のある学生がメンバーとなり、KMITLサマートレーニングにおける留学生のサポートや、高専祭での演し物 (英語早押しクイズ大会、英語カフェ、高専祭PR映像作り)、学内情報誌のSA Journalの発刊など幅広く活動している。2020年、21年にはSA所属3名が東舞鶴高校において留学生交流会にも参加するなど他校との交流も行なっている。

2023年、学生の海外活動促進を目的として「留学スタートアップ支援プログラム」を創設した。学生が主体的に長期休暇中に行う短期の留学計画を作り、その申請内容に対して委員会が選考を行い、支援金を給付する仕組みである。帰国後、各学年のHRなどを利用して報告会を行うことを義務づけており、全学的に留学に対する関心を高めるサイクルが生まれつつある。スタートアッププログラムによる派遣学生数は、23年春季には6名、24年春季には8名 (春季11名予定) と順調に増加し、東南アジア、北米、欧州までバラエティに富んだ渡航先における海外経験を本校にもたらしめている。また、短期だけではなく、22年から24年にかけてAFS留学プログラムを利用し、各年1名ずつ、1年間の長期留学に旅立っている。

2024年、本校としては初めて「トビタテ! 留学JAPAN」を利用して留学を実現した学生が誕生した (高校生コース1名、大学生コース1名)。帰国後の報告会の反響は大きく、例年をはるかに上回る数の申請希望者が集まった。今後採択者が増えることを大いに期待したい。

若年世代の内向き志向が指摘されるようになって久しいが、こころざしある学生たちはグローバルな意識を着実に育んでいることが実感される。国際交流センターとして、今後も多種多様な国際交流活動の支援に尽力していきたい。

表1 協定校との研修事業および企業インターンシップ

年	KMITL 学生の受入 (学科・研修)	専攻科生派遣 (大学、企業)
2015	4名 (建設)	2名 (MJIT)
2016	4名 (機械)	中止 (MJIT)
2017	4名 (電気)	2名 (KMITL) 1名 (タイ日進)
2018	4名 (二部門・日進製作所、 日東精工株式会社)	3名 (KMITL)
2019	1名 (制御・日進製作所)	4名 (KMITL) 1名 (マレーシア TOYO)
2020	中止	中止
2021	中止	中止
2022	中止	1名 e-internship (KMITL)
2023	1名 (建設)	1名 (KMITL)
2024	4名 (機械)	3名 (KMITL)

表2 四年生海外研修旅行

年	学科：訪問先
2015	M,C: ベトナム、E: 北海道、S: 台湾
2016	M,C: 台湾、E: 韓国、S: ベトナム
2017	M,C: ベトナム、E,S: 台湾
2018	M,C: 台湾、E: マレーシア、S: ベトナム
2019	M: マレーシア、E,S: ベトナム、C: 台湾
2020	中止
2021	中止 (22年以降は国内での実施へ切り替え)

(大内 真一郎)



KMITL 留学生SA 歓迎会にて

クラブのあゆみ

陸上競技部

陸上競技部は現在40名弱の部員数で構成されている。活動曜日は月、火、木、金、土となっており、活動時間については、平日が16時20分から18時まで、土曜日は9時30分から12時まで活動している。また、現在の陸上競技部では主に短距離ブロックと長距離ブロックの2つのブロックに分かれている。

短距離ブロックではトラック種目である100mや110mハードル、200m、400mを専門とする選手のほか、投擲や走り幅跳び、走り高跳びや槍投げのようなフィールド種目を専門とする選手もいる。またトラック種目とフィールド種目どちらも器用にこなす選手も多くなっている。短距離ブロックの種目は高い専門性を有する場合が多いため、種目ごとに分かれる種目練習も毎週水、土曜日に実施されている。ただ、全選手に共通して速く走るのに必要な基本的な動き方などは同じため、動きづくりと言われるウォーミングアップや補強の筋肉トレーニングや体幹トレーニングなどは短距離選手全体で行なっている。

長距離ブロックではペースを守って6kmほど走るペース走を基礎として体力づくりに励み、更に大会前は週に2回ほどスピード練習に取り組んで持久力とスピードの両立に励んでいる。長距離ブロックでは、小さな目標をコツコツこなして成長していくことを意識して練習に取り組んでいる。例えば大会に向けて目標を決めると、それに対してどのような練習に取り組むと良いかを自分で考えて、計画を立てる。この様にして、個人の目標と計画を持ちつつも、長距離選手全体での練習にも取り組んでいる。また、長期休暇の期間は閉寮されて学校での練習ができない学生が多いため、地元で自主的に練習できる選手が多く在籍している。

短距離・長距離の各ブロックに於けるこれらの練習成果が実り、2024年度は全国大会に出場することができた。更に、ハーフマラソンでは本学の陸上部員が歴代高専記録を更新する快挙を果たした。

表1 近年の近畿地区高専大会 陸上競技の部 個人戦入賞者

年度	学生名	年度	学生名
2015	宇部 潤一 牧野 太一	2020	コロナによりなし
	田中 健太 石津 憲人	2021	田中 もえ 藤澤 栄介
2016	松田早也香	2022	武川 真緒
	岡 高志 岡 健太郎		安田 聡子 田中 もえ
2017	前川 寛太	2023	和泉 穂花
	岡 高志 谷口 涼太		渡邊 璃子 馬場 兆佳
2018	岡 健太郎 小松 幹昂	2024	田中 もえ 和泉 穂花
	松田早也香 河崎 慈愛		岩崎 正悟 横山 暁史
2019	熊谷 鷹 河崎 慈愛		渡邊 璃子 馬場 兆佳
	小松 幹昂 内橋 拓斗		田中 もえ 和泉 穂花
	森 真澄 河崎 慈愛		前山 晴華 高松 凛
	村上奈々美		

毎年11月に開催される高専祭では、露店でのクレープづくりが陸上部の恒例行事となっている。毎年4種類ほど売っており、仕込み、焼き、巻き、会計の4つのチームに

分かれて販売するため、チーム間の連携が大切になってくる。これは横や縦のつながりが強い陸上部だからこそ成し遂げる事ができるものだと自負している。

陸上部はそれぞれの目標に向かって日々練習を行いながら、高専祭などのイベントにも精力的に活動している、学生間の雰囲気の良い部である。部活動を通して一人一人が成長できるよう、今後も努力していく。

文責：中川馳充、中島大晴（陸上部代表）
校正：馬越春樹（陸上部顧問）



2024年度近畿地区高専大会にて

男子バスケットボール部

男子バスケットボール部は、本校創設時から現在に至るまで活動を継続している。平成27年度～29年度では、山田耕一郎教員が主たる顧問およびコーチを務め、平成30年度以降は、新たに着任した若林勇太教員とともに指導を行っている。

年度	顧問名（*：チーフ顧問）
H27	*山田耕一郎 篠原正浩 尾上亮介
H28	*山田耕一郎 篠原正浩 尾上亮介
H29	*山田耕一郎 篠原正浩 尾上亮介 芦澤恵太
H30	*山田耕一郎 篠原正浩 芦澤恵太
H31/R1	*山田耕一郎 若林勇太
R2	*山田耕一郎 若林勇太
R3	*若林勇太 山田耕一郎
R4	*若林勇太 山田耕一郎
R5	*若林勇太 山田耕一郎 篠原正浩
R6	*若林勇太 山田耕一郎

第44回全国高等専門学校体育大会(平成21年度)以降、全国大会出場を逃しているが、平成27、28年度、令和3、5、6年度においては、近畿地区大会3位の成績を収めている。特に令和5年度近畿地区大会では、近畿地区から2校の全国大会出場枠があり、1枠を巡って明石高専と激戦を繰り広げ、わずかに1点差で全国大会を逃す悔しい経験をした。また例年、12月末に開催される男子西日本女子全日本高等専門学校バスケットボール大会にも出場しており、1～5年生の部員が一丸となって、全国大会を目指し、鋭意活動に取り組んでいる。

また、高等学校体育連盟関連の試合については、現京都府高校教師の山下良先生らが本科3年生時代に初めて出場されて以降、現在も年間主要4大会（インターハイ京都府予選両丹代表決定戦、両丹高校夏季大会、ウィンター

カップ京都府予選両丹代表決定戦、京都府高等学校新人大会 両丹代表決定戦)に毎年出場している。特に令和3年度には、創部初めてインターハイ京都府予選両丹代表決定戦を勝ち抜き、京都府大会に出場した。再度、府大会への出場を目指し、1～3年生の部員が一丸となって活動に取り組んでいる。

(若林 勇太)



令和3年度インターハイ京都府予選 府大会の様子

女子バスケットボール部

以前は、女子学生数が少なかったこともあり、あまり活動できていなかった時期もあるが、この10年間については、男子バスケットボール部と同等の活動を行うことが出来ている。この10年間の大会参加・結果は以下(表1)の通りである。

表1 女子バスケットボール部参加大会

年	大会	結果
2015	第52回近畿地区高等専門学校体育大会	3位
	第6回女子全日本高等専門学校バスケットボール大会	16位
2016	平成28年度舞鶴市バスケットボール選手権大会	1回戦敗退
	第69回全国高等学校選手権大会 両丹代表決定戦	1回戦敗退
	第53回近畿地区高等専門学校体育大会	予選敗退
	第7回女子全日本高等専門学校バスケットボール大会	15位
2017	平成29年度舞鶴市バスケットボール選手権大会	1回戦敗退
	第70回全国高等学校選手権大会 両丹代表決定戦	1回戦敗退
	第54回近畿地区高等専門学校体育大会	3位
	第8回女子全日本高等専門学校バスケットボール大会	10位
2018	平成30年度舞鶴市バスケットボール選手権大会	1回戦敗退
	第71回全国高等学校選手権大会 両丹代表決定戦	1回戦敗退
	第55回近畿地区高等専門学校体育大会	3位
	第9回女子全日本高等専門学校バスケットボール大会	10位
2019	平成31年度舞鶴市バスケットボール選手権大会	1回戦敗退
	第72回全国高等学校選手権大会 両丹代表決定戦	1回戦敗退
	第56回近畿地区高等専門学校体育大会	3位
	第10回女子全日本高等専門学校バスケットボール大会	5位
2020	令和2年度両丹バスケットボール選手権ブロック大会	2勝
	第40回京都府高等学校選手権大会 両丹代表決定戦	7位
	第68回京都府高等学校新人大会 両丹代表決定戦	1回戦敗退
	第11回女子全日本高等専門学校バスケットボール大会	3位
2021	令和3年度全国高等学校総合体育大会 両丹代表決定戦	予選敗退
	第58回近畿地区高等専門学校体育大会	準優勝
	第69回京都府高等学校新人大会 両丹代表決定戦	7位
	第12回女子全日本高等専門学校バスケットボール大会	6位

2022	令和4年度全国高等学校総合体育大会 両丹代表決定戦	予選敗退
	第75回全国高等学校バスケットボール選手権大会 両丹代表決定戦	7位
	第13回女子全日本高等専門学校バスケットボール大会	9位
2023	令和5年度舞鶴市バスケットボール選手権大会	1回戦敗退
	令和5年度全国高等学校総合体育大会 両丹代表決定戦	予選敗退
	第60回近畿地区高等専門学校体育大会	準優勝
	第71回京都府高等学校新人大会 両丹代表決定戦	1回戦敗退
2024	第14回女子全日本高等専門学校バスケットボール大会	
	令和6年度舞鶴市バスケットボール選手権大会	1回戦敗退
	第61回近畿地区高等専門学校体育大会	準優勝
	第77回全国高等学校選手権大会 両丹代表決定戦	5位
	第72回京都府高等学校新人大会 両丹代表決定戦 (合同チームで出場)	5位

近年、京都北部では、高等学校におけるバスケットボール人口が減り、参加チームや部員が減少しているなか、大会に参加し、頑張ってくれている(写真1)。また、それらの高体連の結果を、近畿地区高専大会の結果に繋げてくれている(写真2)。創立以来、近畿地区高等専門学校体育大会で優勝し、全国大会に出場していない為、今後、悲願の全国大会出場を目指して活躍していきたい。

(山田 耕一郎)



写真1 令和4年度全国高校総合体育大会両丹代表決定戦



写真2 第60回近畿地区高等専門学校体育大会

男子バレーボール部

男子バレーボール部は、令和3年度までは児玉圭司教員がチーフ顧問としてチームをまとめ上げ、令和4年度以降は渡部昌弘教員がチーフ顧問を務めている。また、顧問の体制は、令和4年度までは男女別々の顧問が指導してきたが、令和5年度以降はバレーボール部としてチーフ顧問のみ固定し、男女兼任の顧問が通常練習および引率指導に当たっている(表1)。

また、令和3年度まで外部コーチとして米田裕史氏に指導を仰ぎ、実践的な練習方法が導入されることになった。

表1 最近10年間の顧問一覧

年度	顧問（○：チーフ顧問）
H27	○児玉圭司、田村修一、金森満
H28	○児玉圭司、田村修一、金森満
H29	○児玉圭司、田村修一、金森満、渡部昌弘
H30	○児玉圭司、芦澤恵太、丹下裕、田村修一
H31	○児玉圭司、田村修一、渡部昌弘
R2	○児玉圭司、田村修一、渡部昌弘、大内真一郎
R3	○児玉圭司、田村修一、渡部昌弘
R4	○渡部昌弘、田村修一、熊谷大雅
R5	○渡部昌弘、熊谷大雅（兼任）、上杉智子（兼任）、仲川力（兼任）、中尾尚史（兼任）、学生委員
R6	○渡部昌弘、上杉智子（兼任）、仲川力（兼任）、中尾尚史（兼任）、山崎慎一（兼任）、任雅楠（兼任）

平成28年度から勝負に拘る学生の意向に応える形で、強豪校を意識した練習へと変貌した。平成30・31・令和5・6年度には近畿地区高等専門学校体育大会において3位以上、特に平成30年度および令和6年度には準優勝している。平成29年度以降、全国高等学校体育連盟（以下、高体連）関連の大会では、決勝・準決勝で両丹地域の強豪校と対戦する機会も増えてきた。平成29・30・31・令和3・4・5年度には府大会に進出した（表2）。

表2 最近10年間の戦績

年度	大会名	結果
H28	第54回舞鶴バレーボール6人制男女選手権大会	3位
	平成29年度両丹高等学校バレーボール春季大会	3位
H29	平成29年度両丹高等学校バレーボール選手権大会	3位
	平成29年度両丹高等学校バレーボール夏季大会	優勝
	平成29年度全日本高等学校バレーボール選手権大会両丹予選会	2位
	第55回近畿地区高等専門学校体育大会	準優勝
	第56回舞鶴バレーボール6人制男女選手権大会	3位
H30	平成30年度両丹高等学校バレーボール春季大会	2位
	平成30年度両丹高等学校バレーボール選手権大会	準優勝
	平成30年度両丹高等学校バレーボール夏季大会	優勝
	平成30年度全日本高等学校バレーボール選手権大会両丹予選会	準優勝
	第56回近畿地区高等専門学校体育大会	3位
H31	第103回近畿地区高等専門学校バレーボール男子交歓大会	3位
	令和元年度全日本高等学校バレーボール選手権大会両丹予選会	3位
R3	令和3年度両丹高等学校バレーボール夏季大会	3位
	令和3年度全日本高等学校バレーボール選手権大会両丹予選会	3位
	令和4年度両丹高等学校バレーボール夏季大会	3位
R4	令和4年度全日本高等学校バレーボール選手権大会両丹予選会	2位
	令和4年度両丹高等学校バレーボール新人大会	3位
	第60回近畿地区高等専門学校体育大会	3位
	令和5年度両丹高等学校バレーボール春季大会	3位
R5	令和5年度全国高等学校総合体育大会バレーボール競技の部両丹予選会	3位
	令和5年度両丹高等学校バレーボール夏季大会	2位
	令和5年度全日本バレーボール高等学校選手権大会両丹予選会	2位
R6	第60回近畿地区高等専門学校体育大会	2位

上記の年度では、京都府および兵庫県の高体連関連の強化練習会に参加する機会も増え、着実に実力を上げている。また、個人の技術を評価される機会も増え、ベスト6に選出される部員も増えている（表3）。

今後も、よりよいプレーができるチームとなるべく、研鑽を積むよう努めていきたい。

（渡部 昌弘）



令和6年度第60回近畿地区高専大会準優勝時の記念撮影

表3 最近10年間の個人表彰

年度	大会名	区分
H28	平成28年度全日本高等学校バレーボール選手権大会両丹予選会	ベスト6：勝 万葉 ベスト6：早藤 司
	平成29年度両丹高等学校バレーボール選手権大会	ベスト6（センター）：坂本龍哉
H29	平成29年度全日本高等学校バレーボール選手権大会両丹予選会	ベスト6（レフト）：小川哲汰 ベスト6（センター）：湯原義輝
	平成29年度両丹高等学校バレーボール新人大会	ベスト6（レフト）：小川哲汰
	平成30年度両丹高等学校バレーボール選手権大会	ベスト6（センター）：湯原義輝 ベスト6（レフト）：田中英吉
H30	平成30年度全日本高等学校バレーボール選手権大会両丹予選会	ベスト6（レフト）：小川哲汰 ベスト6（レフト）：田中英吉
	令和元年度全日本高等学校バレーボール選手権大会両丹予選会	ベスト6（センター）：中村聡介
H31	令和元年度両丹高等学校バレーボール新人大会	ベスト6（レフト）：増茂和志
R2	令和2年度全日本バレーボール高等学校選手権大会両丹予選会	ベスト6（ウイングスパイカー）：今江志隆
	令和3年度全国高等学校総合体育大会バレーボール競技の部両丹予選会	ベスト6（アタッカー）：佐々木翔瑠
R3	令和3年度全日本バレーボール高等学校選手権大会両丹予選会	ベスト6（アウトサイドヒッター）：植村 琉
	令和4年度全国高等学校総合体育大会バレーボール競技の部両丹予選会	ベスト6（レフト）：植村 琉
R4	令和4年度全日本バレーボール高等学校選手権大会両丹予選会	ベストサポーター賞 ベスト6（レフト）：植村 琉
	令和4年度両丹高等学校バレーボール新人大会	ベスト6（センター）：玉村柊汰
R5	令和5年度全日本バレーボール高等学校選手権大会両丹予選会	ベスト6：玉村柊汰 ベスト6：松山侃生

女子バレーボール部

女子バレーボール部は、平成8年4月に女子学生の増加を背景に同好会として創設された。創設当初から福井高専との交歓試合を実施し、平成10年度には第6回全国高等専門学校女子バレーボール大会に出場した。当時は全国高専体育大会の競技に女子バレーボールは含まれておらず、高専女子バレーボール独自の全国大会が行われていた。その後、平成11年度に女子バレーボールが全国高専体育大会の正式種目に加えられたことを契機に、部活動へと昇格し、近畿地区大会への参加が始まった。

近年の活躍としては、2021年度に近畿地区大会で初優勝を遂げたことが挙げられる。その後も2022年度と2024年度の準優勝、2023年度の優勝と、近畿地区大会で安定した好成績を収めている。また、全国大会では2022年度の第11回全日本高等専門学校バレーボール選手権大会と2023年度の第58回全国高専体育大会においてともに3位という輝かしい成績を残している。

現在、女子バレーボール部は1年生6名、2年生3名、3年生4名、4年生1名、5年生2名の計16名で活動している。部員数は創設当初に比べて大幅に増加しており、部活動としての基盤が強化されている。また、2021年度から高体連に準加盟し、高体連主催の大会にも参加するなど活動の幅を広げている。

女子バレーボール部は、その歴史とともに着実に実績を積み重ねてきた。現在では本校を代表するクラブ活動の一つとして確固たる地位を築いている。今後もさらなる飛躍と発展を目指し、部員一同努力を続けていく所存である。

(熊谷 大雅)



近畿地区高専大会 初優勝の記念写真
(2021年度 第58回大会)

ソフトテニス部

ソフトテニス部は、現在35名(5年生:5名、4年生:9名、3年生:6名、2年生:7名、1年生:8名)で活動をしている。部内の風通しもよく、低学年生から部長に対して練習メニューの要望が提出され、それを取り入れるなど、非常に良い雰囲気である。水曜日と日曜日を休みとして、それ以外の週5日を練習日とし、日々練習に励んでいる。

練習場所は本校北側のテニスコート4面の内、2面のクレーコートを使用している。ここ5年ほど力を入れてコートを整備し、草が生え荒れ放題であったクレーコートを綺麗に整備した。しかし、水はけの悪いコートのため、雨天時は休みとしている。そのため、雨天時には戦略の考案や基礎体力トレーニングなどを各々が行っている。

最近10年間の顧問を表に示す。近畿地区高専体育大会で主管校を任されたときのみ顧問の数が増えているが、それ以外は基本的に2～3名の顧問で、クラブ活動を支援している。

年度	顧問名
H27	室巻孝郎、三輪 浩、児玉圭司
H28	室巻孝郎、三輪 浩、宮野敏男
H29	竹澤智樹、室巻孝郎、三輪 浩
H30	竹澤智樹、喜友名朝也
H31	喜友名朝也、室巻孝郎、七森公碩、木村健二
R2	喜友名朝也、七森公碩
R3	七森公碩、喜友名朝也
R4	七森公碩、森健太郎
R5	七森公碩、森健太郎
R6	七森公碩、森健太郎

近畿地区高専体育大会では、平成26年度から入賞が無かったが、令和4年に8年ぶりとなる団体3位入賞を果たした。また、令和6年においても団体戦で3位に入賞した。個人戦は、2回戦に勝利するも3回戦で敗退し、入賞には至っていない。

福井高専との交歓試合は、令和6年は実施できなかったものの、ここ数年は実施している。今後も学生の練習成果確認として、継続して実施できればと考えている。

新たに始めた取り組みとして、高専祭の露店での収益の一部をバス代に充て、他高専への練習試合を行った。令和5年度から計画し、令和6年に神戸高専と練習試合を

実施した。実施時期が近畿地区高専大会の直前となってしまうものの、大会前のモチベーションの向上や課題点の確認などの観点から非常に実りのあるものとなった。来年度からも継続して実施していく予定である。

その他大会への参加は主に、舞鶴市長杯、舞鶴選手権、インドア選手権に積極的に参加している。コロナ禍を経て、本校の体育館利用は屋内部活の利用のために最適化された。そのため、インドアの練習は東体育館を予約して練習をするなどして日頃より工夫しながら練習に取り組んでいる。

最後に保護者の方からテント1式をご寄贈いただきましたこと、この場をお借りして感謝申し上げます。(七森 公碩)

卓球部

卓球部は、2024年12月現在、30名の部員(1年生:8名、2年生:2名、3年生:7名、4年生:5名、5年生:8名)がいて、第2体育館で週5日活動しています。

直近10年間の大会成績は下記の通りです。とりわけ、第55回近畿地区高等専門学校体育大会における川上春菜さん(当時建設システム工学科4年)の個人戦(女子シングルス)優勝と、第59回近畿地区高等専門学校体育大会における大藤文佳さん(当時電気情報工学科3年)の個人戦(女子シングルス)準優勝が特筆すべき成績として挙げられます。彼女達は、その年の全国高等専門学校体育大会に出場することができました。また、第60回近畿地区高等専門学校体育大会は、本校が主管校として開催し、教職員や部員の協力により、無事に大会を成功裏に終えることができました。

10年後の「70周年記念誌」で、今回以上の良い報告ができるように部員一同、日々努力してまいります。(喜友名 朝也)

年度	大会名	区分と成績：氏名
平成28年	第53回近畿地区高等専門学校体育大会	個人戦(女子ダブルス) 3位：森田結衣・川上春菜
平成29年	第54回近畿地区高等専門学校体育大会	個人戦(女子ダブルス) 3位：森田結衣・川上春菜
平成30年	第55回近畿地区高等専門学校体育大会	団体戦3位：男子卓球 個人戦(女子シングルス) 1位：川上春菜
	第53回全国高等専門学校体育大会	個人戦(女子シングルス) 3位決定トーナメント進出：川上春菜
令和元年	第56回近畿地区高等専門学校体育大会	団体戦3位：男子卓球 個人戦(男子シングルス) 3位：小林優暉 個人戦(男子ダブルス) 3位：小林優暉・大西成侍 個人戦(女子シングルス) 3位：川上春菜
令和2年	令和2年舞鶴卓球選手権大会	一般女子シングルスA級 3位：大藤文佳・安田聡子
令和3年	第58回近畿地区高等専門学校体育大会	団体戦2位：男子卓球 個人戦(男子シングルス) 3位：小林優暉 個人戦(女子シングルス) 3位：安田聡子
令和4年	第59回近畿地区高等専門学校体育大会	団体戦2位：男子卓球 団体戦3位：女子卓球 個人戦(女子シングルス) 2位：大藤文佳 個人戦(女子シングルス) 3位：安田聡子
	第57回全国高等専門学校体育大会	個人戦(女子シングルス) 出場：大藤文佳
令和5年	第60回近畿地区高等専門学校体育大会	団体戦3位：男子卓球 団体戦3位：女子卓球 個人戦(女子ダブルス) 3位：安田聡子・根来真由
令和6年	第61回近畿地区高等専門学校体育大会	団体戦3位：男子卓球 団体戦3位：女子卓球

※ 第57回近畿地区高等専門学校体育大会は、新型コロナウイルスの影響により、中止となりました。



第60回近畿地区高等専門学校体育大会（令和5年6月）

柔道部

柔道部は、舞鶴高専開校当初より活動している部活動のひとつです（『舞鶴高専 十年のあゆみ』参照）。現在は、武道場にて週3回、2時間程度の活動を行っています。最近10年間の部員数は、2016年度の14名が最大で、2024年度の7名が最小となっています。多くの部員が小学校や中学校での経験者ですが、中には高専から柔道を始め、5年生までに初段（黒帯）を取得した者もありました。日々の練習の様子を写真1に示します。練習では、互いに技を教え合うなど和気あいあいとした雰囲気がありますが、試合形式の練習で投げられると悔しがるなど真剣に柔道に取り組んでいる様子が見られます。大会には、高等専門学校体育大会の他に、高体連に加盟していることからインターハイ、選抜大会の両丹予選、京都府予選や松谷杯柔道大会といった地域のオープン大会に出場しています。加えて、京都地区の昇段・昇級試験にも参加しています。最近10年間の試合成績のうち、高等専門学校体育大会のものを表1に示します（2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため大会中止）。試合数は決して多くは無いのですが、勝負の場で勝つ喜びや負ける悔しさを味わうことは高専生活において有意義なものになると考えています。



写真1 練習の様子（2024年7月10日撮影）

表1 最近10年間の成績（高等専門学校体育大会）

年度	大会名	区分	結果
2017	近畿地区高等専門学校体育大会	男子初心者部 林 幹之	3位
		女子63kg級 河原 未祐	1位
		男子66kg級 川端 遼	3位
2018	全国高等専門学校体育大会 近畿地区高等専門学校体育大会	女子63kg級 河原 未祐	3位
		男子団体	3位
		女子63kg級 河原 未祐	1位
2019	全国高等専門学校体育大会 近畿地区高等専門学校体育大会	女子63kg級 河原 未祐	3位
		男子団体	3位
		男子73kg級 藤原 雅也	3位
		女子63kg級 河原 未祐	2位
2022	全国高等専門学校体育大会 近畿地区高等専門学校体育大会	女子57kg級 石田 彩珠	2位
		女子57kg級 石田 彩珠	2位
2023	全国高等専門学校体育大会 近畿地区高等専門学校体育大会	女子57kg級 石田 彩珠	3位
		男子66kg級 栗野 貴博	3位
		男子初心者部 山口 雄大	3位
2024	近畿地区高等専門学校体育大会	男子初心者部 五十棲智紀	2位

この10年間で特筆すべき出来事として、女子学生の活躍があります。本校に入学する女子学生が増えたことに伴い柔道部に入部する女子学生も増えていきます（現在4名在籍）。中でも、河原未祐（2016年～2020年）と石田彩珠（2021年～）は、全国高等専門学校体育大会での入賞を達成しました。一方で、部員の確保が年々難しくなってきました。特に、いわゆるコロナ禍の最中であった2020年度以降、部員数が減少していききました。この傾向は日本における柔道人口の減少と同様であり、しばらくはこの状況が続くかもしれません。これまでは柔道経験者の部員が大半でしたが、これからは未経験者が楽しく柔道ができる部としていく必要があるかも知れません。

顧問としては、背戸柳実先生（ご退職）、奥村昌司先生、豊田香先生、木村健二先生、室巻孝郎先生、高木太郎先生、山根秀介先生、喜友名朝也先生、馬越春樹先生にお世話になっています。外部コーチとしては、2021年度まで畠山一男師範（現舞鶴柔道連盟会長）にお世話になりました。

（毛利 聡）

剣道部

剣道部は本校開学当初から活動していたようです。過去の近畿地区高専大会では、昭和42、45、51～53年に男子団体で2位の成績をおさめました。なお54年までは近畿のA地区（国立4高専）という区分に属していたようです。昭和55年以降、近畿地区高専大会は現在の国公立私立7高専で開催されるようになり、本校は56年、61年に準優勝、57年に優勝というすぐれた成績を残しましたが、それ以降は男子団体の部で上位に入れていません。男子個人の部に関しては、平成16年に中山昌樹選手が、平成20年、21年に中嶋啓太選手が近畿地区大会3位に入賞しました。女子個人の部では平山まい子選手が平成21年、23年、25年に優勝、22年、24年に準優勝という輝かしい成績をおさめました。（上記はあくまで私が記録を確認できた限りでの記述です。漏れや間違いがありましたらご教示願います。）

ここ10年間で、本校剣道部が近畿地区高専大会で上位入賞をしたということは多くありません。レベルの高い近畿地区の他高専の選手たちに押されているというのが正直なところです。ただ令和6年度は女子が団体と個人の部（森下風紗選手）でいずれも準優勝という優れた結果を残すことができました。男子の方も女子に引っ張られるように、上位を目指して頑張っているところです。

現在、稽古は基本的に週に3度行っており、そのうち1回は舞鶴剣道連盟の斎藤康男先生に指導をしていただいています。高専大会の他には、主に舞鶴市民剣道大会、猿渡杯争奪剣道大会に参加し、また毎年福井高専剣道部との交歓試合を行っています。高体連に加入していないので試合数は多くありませんが、少しでも上達して大会で好成績をおさめられるように、日々部員同士で工夫して鍛錬を積んでいます。

ここ数年、本校剣道部の部員数は10名前後を推移しています。それほどの大所帯ではありませんが、他高専や高校の剣道部、さらには日本全国の剣道人口の著しい減少傾向を考えると、まだ団体戦のチームを組めるだけの人数

が在籍し、部活を維持できているだけでもありがたいことだと感じます。

なお、顧問は平成28年に梅垣浩二先生から須田敦先生へ、平成30年に山根へと引き継がれています。（山根 秀介）

サッカー部

2025年（令和7年）1月現在、舞鶴高専サッカー部は36名で活動をしている。年に1回の近畿地区高専体育大会サッカー競技（近畿高専大会）が、唯一の全メンバーが目標として取り組むターゲット大会として存在している。その大会での成果を目指して、学生たちは年間を通して活動に励んでいる。高体連に準加盟している学生の活動内容としては、全国高校総体京都府予選、全国高校サッカー選手権大会京都府大会、高円宮杯JFA U-18サッカーリーグ京都と年間に多くの試合機会があり、楽しみながらも真剣にサッカーに取り組む環境ができてきたと感じている。なかなか日常的にサッカーをすることはできないが、それぞれが時間を工面しながら大好きなサッカーをするという行動が見られるようになってきた。

サッカー部のクラブモットー（信条）は、「1に学修、2にサッカー、3、4が無くて、5にサッカー」である。つまり、舞鶴高専で工学の学びを修めながら、大好きなサッカーをするという学生生活を選んだ者が部員として認められる。今後このクラブモットーの基、サッカー部員が楽しんで学生生活を過ごしていってくれることを願っている。

最後に近畿高専大会の結果について、当時の様子と共に振り返ることにする（表1）。2017年度（主将：E科 中村駿介）は、0-1で和歌山に負けた、スコア的には惜敗の様であるがシュートは1本で試合後に2年生GK宮崎利郁が「どうやって勝つんですか?」と言っていたのが印象的であった。2018年度（C科 田中甫）、奈良と互角の戦いであったが、後半アディショナルタイムに1点を取られ惜敗。2019年度（E科 渡邊駿太）、和歌山との激戦を突破、準決勝で神戸に敗れ全国大会出場は逃した。試合後の振り返りで5年生MF山本のどかが「（みんな）ネガティブなことは言わない（でくれ）」と名言を残す。2020年度（E科 宮崎利郁）と2021年度（C科 水野峻輔）はコロナ禍のため縮小した大会運営になった。個人的には両大会は最も全国大会に近づいた大会であったと考えるが、神戸高専、近大高専の壁は高かった。2022年度（4C科 梅宮丈瑠）は舞鶴開催で学生たちは運営も経験することができた。以降、2023年度（梅宮丈瑠）、2024年度（E科 三原煌夜）でも頑張って試合に臨んだが、未だ全国大会出場までは遠い。次年度の目標は「全国出場」になった。学生たちの奮闘に期待しながら、サポートを続けていきたい。

（木村 健二）

表1 近畿地区高専体育大会のあゆみ

年度	近畿地区大会会場	戦績
2017	神戸総合運動公園補助競技場	▲0-1 和歌山
2018	J-GREEN 堺	▲2-3 奈良
2019	名張市メイハンフィールド	○1-1(0-0PK4-3) 和歌山、▲0-2 神戸、▲0-2 奈良
2020	明石高専 ＊コロナ禍のため独自大会	○1-0 奈良、▲1-2 神戸
2021	上富田スポーツセンター	○1-0 和歌山、▲0-2 近大
2022	舞鶴市伊佐津川運動公園	▲0-7 近大
2023	兵庫県フットボールセンター明石グラウンド	▲0-3 大阪公立
2024	神戸総合運動公園補助競技場	○5-0 大阪、▲1-1(PK2-4) 明石、▲1-2 神戸

硬式野球部

2008年に舞鶴高専に着任して以降、野球部の顧問をしております石川です。創立50周年記念誌発行以降の10年間で部長は、芦澤、片山、山本と代わっていき、現在は石川が務めています。また、2017年度に本校の職員として、田中智也氏が着任され、2021年度からは監督としてチームを育てています。この10年間の野球部の主将と京都大会の成績は次表の通りです。表にして眺めてみるとどの世代も懐かしい限りですが、夏大会で特に印象に残っているのは、2018年の花園戦で、9回裏2アウトで2点差だったものの逆転負けを喫し、惜敗となったことです。その後も、2020年には、コロナ禍により辞退することとなり、惜しまれる年でした。一方で、2024年には、延長タイブレークの末に勝利を納めることができました。夏大会で初戦を突破するのは、2008年の城南高校戦の勝利以来、16年ぶりの快挙となりました。近年では、全国的に野球人口が減ってきており、舞鶴高専も例外ではない状況になっている。今後部員数を確保しつつ、より良い雰囲気ของทีมづくりを目指していきたい。

（石川 一平）

年度		主将	京都大会の対戦校	試合結果
H27	2015	川崎 敦也	京都八幡	6-0●
H28	2016	山口 宏仁	同志社	●0-7
H29	2017	村上 順哉	東舞鶴	●1-8
H30	2018	藤井 幹	花園	●4-5
R1	2019	山内 佑悟	京都八幡	9-1●
R2	2020	影井 悠人	コロナ禍により辞退	
R3	2021	岡本 天	綾部	12-0●
R4	2022	弓削 蓮斗	東山	10-0●
R5	2023	前 吾一	木津	16-7●
R6	2024	川中 滉平	田辺	○6-3
			同志社国際	22-0●

ハンドボール部

本校のハンドボール部は、全19名の部員で構成されています。学年別の内訳は以下の通りです：

1年生：6名、2年生：2名、3年生：4名、4年生：1名、5年生：6名 部員の多くが中学校時代にハンドボールを経験しており、高い技術レベルと競技への情熱を持って活動しています。練習場所は限られており、主に体育館を使用していますが、その使用頻度は不定期です。他の部活動との調整が必要なため、練習時間の確保に苦心しているのが現状です。しかし、限られた練習機会を最大限に活用し、効率的な練習を心がけています。近隣にハンドボール部を持つ学校が少ないため、対外試合の機会は限られています。主な競技の場は高専大会のみとなっていますが、この大会に向けて部員一同が一丸となって準備を進めています。部の運営は主に上級生が中心となって行っています。特に注目すべき点として、3年生の平野桜太さんが部長を務め、チーム全体のリーダーシップを発揮しています。2年生の鈴木薫さんと1年生の森下風紗さんがマネージャーとして、部をサポートするために新規に入学してくれました。3年生の佐川陽菜さんもプレイヤーとしての経験のあるマネージャーとして重要な役割を担っています。

練習環境と試合機会の制限は大きな課題ですが、部員たちは創意工夫を重ねて技術向上に励んでいます。体育館が使用できない日には、屋外でのフィジカルトレーニングや

チームビルディング活動を行うなど、時間を有効活用しています。高専大会での好成績を目指すとともに、地域のスポーツイベントへの参加や他校との練習試合の機会を模索するなど、活動の幅を広げる努力も続けています。限られた環境の中でも、部員たちの情熱と団結力が本校ハンドボール部の強みとなっています。今後も技術と精神面での成長を続け、高専大会での活躍が期待されます。

(小林 洋平)



バドミントン部

小職がバドミントン部の顧問に就任してから早くも3年が経過しようとしている。バドミントン部は遅くとも平成5年には設立されていたようであるが、50周年記念誌には、当時の顧問であられた野毛先生の『なぜ舞鶴の時代は来ないのか?』と嘆きが刻まれているのを畏れ多く拝読した。幸いにも、その後の数年の間は前顧問である高木先生のご尽力もあり、本校バドミントン部にもささやかな春が訪れていたようである。しかし、時間の流れは一瞬であり、コロナ禍を経て小職が顧問に就任する頃には元の平常運転に戻ってしまった。それでも「仲良く楽しく」をモットーに掲げる現バドミントン部は、春先には新入部員が集って賑わいを見せている。しかし小職も競技経験がなく、コーチもない現状では練習にも限界がある。単調なメニューを繰り返していても上達には程遠いのが現実である。毎年胸をお貸ししている福井高専バドミントン部との交歓試合では、大所帯の相手方の壁打ち相手ぐらいにはなっている。此方とはいうと、その状況であっても「楽しく」プレーできているので言うこともあるまい。しかし、近畿地区高専大会での他校



第42回全日本高等専門学校
バドミントン選手権大会
(平成30年8月)

との実力の違いは看過できないものがある。もはや競技だけでは立ち行かないため、トレーニングも兼ねて地元に恩返しすべく松尾寺駅の清掃なども始めた。最後に、野毛先生が十年前に寄稿された激励の言葉を再び焼き付けておきたい。『練習が終われば、何の反省も無くして次の練習を迎えるのは成長に欠ける。練習後に何が良くて、何が悪くて、今後はどのようにすればよいのかを各自が考え、メンバー同士で意見交換するべきである。(中略)「結果」を残すための努力から逃げないでほしい。是非、皆で共通の目的を共有し、各々が試行錯誤しながら練習に取り組み、精神面、技術面で成長を遂げることで、(中略)舞鶴高専の栄光を勝ち取ってほしい。』

(小島 広孝)

表1 最近10年間の成績

年度	試合名・区分	結果
27	第52回近畿地区高等専門学校体育大会 男子複 岡田拓巳・清瀬 涼 男子単 岡田拓巳	3位 3位
	第4回舞 My チャレンジオープン大会 男子複 野山倫太郎・横道圭人 女子複 中川瑞穂・村尾 瞳	2位 2位
	第53回近畿地区高等専門学校体育大会 男子 団体 女子単 堀尾香那子	3位 3位
	第5回舞 My チャレンジオープン大会 中高生下級男子単 浦川周馬 中高生下級男子単 藤川祐一郎	1位 2位
29	第54回近畿地区高等専門学校体育大会 女子複 村尾 瞳・鈴木彩夏	3位
	第6回舞 My チャレンジオープン大会 中高生下級女子複 小山夏実・鈴木彩夏 中高生下級女子単 橘 敦子	1位 1位
	第55回近畿地区高等専門学校体育大会 男子 団体 男子複 藤川祐一郎・浦川周馬	3位 1位
	第42回全日本高等専門学校バドミントン選手権大会 男子複 藤川祐一郎・浦川周馬	出場
30	第32回高浜町バドミントン協会会長杯大会 女子2部リーグ 団体	2位
	第56回近畿地区高等専門学校体育大会 男子 団体 男子複 糸島 幹・浦川周馬 女子単 橘 敦子	3位 3位 3位
	第55回舞鶴バドミントン級別個人選手権大会 男子D級単 小西翔大	2位
	第58回近畿地区高等専門学校体育大会 男子 団体 女子 団体	3位 3位

水泳部

現在の水泳部は、1992年度に同好会が結成されたことからスタートし、1999年度から水泳部に昇格した。2024年度は同好会結成から32年、水泳部への昇格から25年を経たことになる。

ここでは2015年度以降の様子を見ていきたい。学生たちの活動としては、春はプール掃除から始まり、夏の近畿地区高専大会、全国高専大会、そしてオフシーズンは筋力トレーニング、11月の高専祭での模擬店が挙げられる。細かなところの変化を述べると、学事日程の関係や学生の多忙化にともなって、泳ぎ出しがゴールデンウィーク明けや中間試験明けにずれ込むことが多くなった。また、オフシーズンになると学校周辺に熊が出没するようになり、学校の外周をランニングすることが難しくなった。

大きな変化では、2020年度の新型コロナウイルス感染症の流行にともない、練習時間やメニュー、活動のあり方が大きく変化した。この年は6月まで学校が再開されなかったため、プール掃除を部員が行わないという珍しい年ともなった(この年のプール掃除については体育の木村健二先生にご尽力いただいた)。

この間、2017年度と2024年度の2度、本校が近畿地区高専大会の会場校となった。前者は舞鶴水泳協会、後者は福井県の水泳協会の協力を得て開催することができた。準備から当日まで、学生たちが大会の運営に携わり、活躍してくれた。2017年度は、大会開催直前にプールの水が濁ったために水の入れ替えを行わなければならない、東舞鶴高校のプールをお借りして練習をするという珍事もあった。

成績としては、2020年度以外、毎年個人種目での全国大会出場を果たしている。日々の練習の賜物である。(表1)

全国的な傾向を見れば、学校の施設としてプールの維持

を諦めるところが増え、水泳というスポーツをめぐる環境は確実に悪化している。それに対し、本校は多くの方の協力もあり、プールの活用を維持することができている。学生の成長の場の一つとして、水泳部の活動が続いていくことを願わずにおれない。

(牧野 雅司)

表1 近年の近畿地区高専大会 入賞者

年度	学生名			年度	学生名		
2015	*廣瀬	仁一		2019	*北野	開靖	藤田 秋翔
2016	*廣瀬	仁一	黒田健太郎		吉川	優	志賀 亘造
	坪井	一将	廣瀬 仁一		惣司	朝也	大浦 真人
2017	*廣瀬	仁一	*久保田龍祐	2021	坪井	一将	杉山聡一郎
2018	今岡	凜太	北野 開靖		大森	彩音	*森脇 優斗
	*久保田龍祐		和田 洗希		芦田准一朗		藤田 秋翔
	吉川	優	今村 恒規	2022	志賀 亘造		上野 直人
	志賀 亘造		黒田美智子		南 薫俊		井貝 比翼
	惣司 朝也		大浦 真人		*森脇 優斗		*藤田 秋翔
2023	坪井	一将		2023	上野 直人		森川 瑠久
					森脇 優斗		南 薫俊
*は、全国高専体育大会出場				2024	*森脇 優斗		南 薫俊
					秦 陸斗		下林 玲温



2024年7月の高専大会後の一コマ

テニス部

本校テニス部は、1970年代前半（昭和40年代後半）に小西経男先生を初代顧問として同好会が発足し、その後、部に昇格してテニス部として活動してきました。現在の部員数は21名（男子15名、女子6名）で、第2グラウンド横のハードコート2面で練習を行っています。私が本校に着任してテニス部顧問になったのが1998年（平成10年）であり、そこから現在までの出来事を中心に報告していきます。

最も大きな出来事としては、2006年（平成18年）に本校主幹で全国大会を開催したことが挙げられます。それまでも出場選手の引率で全国大会を経験したことはあるものの、大会運営側の業務はまったくの未知数で、まずは事務職員2名と一緒に前年の長野大会に視察に行くことから始まりました。1年かけて、予算案の策定、業務の役割分担、地元の舞鶴市テニス協会への協力依頼、大会進行表の作成を行い、大会直前には大会パンフレットの作成、大会中も代表者会議の司会進行や懇親会の準備など、当初の想像以上に大変な作業量だったと記憶しています。

次に大きな出来事としては、2021年（令和3年）の近畿地区大会で29年振りに男子団体戦で優勝して、全国大会に出場したことです。前年はコロナ禍のため高専体育大会自体が中止となり、2年振りの地区大会でした。決勝戦の相手は前回近畿地区および全国大会でも優勝した近畿大学高専で、試合はシングルス2は敗れたもののダブルスで勝利して、最後はシングルス1の勝敗に委ねられました。タイブレークまでもつれ込む接戦となりましたが、松村選手がなんとか勝ち切ってくれました。この年は個人戦でも、女子ダブルスで2組が決勝に進出し、本校同士の対決とな

りました。個人戦女子で本校が優勝したのは初の快挙でした。仙台で開催された全国大会は3日間の開催予定でしたが、現地に移動した後に緊急事態宣言発令のため急遽日程が2日間に短縮されたものの、帰路の飛行機チケットの関係上、完全に1日オフの日ができてしまいました。本来なら観光にでも行きたかったところですが、学生主事から「ホテルで待機!」との指示が出て、ホテル内で卓球大会が繰り広げられたのが良い思い出です。

近年は6大会連続で全国大会に出場しており、今後も練習に励んで、良い成績を残して欲しいと思います。

以下に、全国大会の出場記録を記載しますが、1992年の記録に関しては私の着任以前のため、当時の顧問から伝え聞いたものとなっています。

(鈴木 英彦)

全国大会の出場記録

開催年	主幹校	種目	成績
1992年	茨城	男子団体戦	不明
		男子シングルス	不明
		男子ダブルス	不明
2000年	函館	男子ダブルス	3位
2001年	広島商船	男子ダブルス	3位
		男子団体戦	初戦敗退
2006年	舞鶴 (開催校枠での出場)	男子シングルス	初戦敗退
		男子ダブルス	初戦敗退
		男子団体戦	初戦敗退
2014年	香川（詫間）	女子ダブルス	初戦敗退
2018年	大分	男子シングルス	ベスト8
2019年	宇部	男子ダブルス	初戦敗退
		男子団体戦	2回戦敗退
2021年	仙台	男子ダブルス	3位
		女子ダブルス	初戦敗退
		女子団体戦	初戦敗退
2022年	阿南	男子シングルス	初戦敗退
		男子ダブルス	ベスト8
		女子ダブルス	初戦敗退
2023年	東京	男子シングルス	初戦敗退
		男子ダブルス	ベスト8
		女子ダブルス	初戦敗退
2024年	苫小牧	男子シングルス	初戦敗退



2021年全国大会（仙台）の出場メンバー

弓道部

部員数28名（5年生4名、4年生6名、3年生4名、2年生8名、1年生6名）で、火・木・土の週3回活動しており、月2～3回の頻度で福田登紀男師範の指導を受けています。近畿地区高等専門学校弓道大会や昇段審査が主な活動目標です。2018年度までは練習場所として第二体育館を利用していましたが、2019年度からは第二グラウンドに建てられた射場を利用しています。この他、舞鶴市や綾部市の弓道場に出向いて練習を行うこともあります。



第二グラウンドでの練習

最近10年間の成果として、2016年度に開催された第49回近畿地区高等専門学校弓道大会 男子団体の部（渡邊、尾松、増田、森、名田）において優勝したことが挙げられます。近畿地区代表として第3回全国高等専門学校弓道大会に出場し、団体予選では10チーム中6位となりました。

表1に、最近10年間の部長と外部コーチの一覧、表2に、最近10年間の顧問の一覧を示します。部長は3年生が務めており、顧問は3～4名の時期が多かったのですが、最近は2名体制となっています。

(室巻 孝郎)

表1 最近10年間の部長と外部コーチ

年度	クラス	学生名	外部コーチ
2015	3S	岩佐 青熙	福田登紀男
2016	3C	多田 知樹	福田登紀男
2017	3S	谷貝まひる	福田登紀男
2018	3E	水口 朝陽	福田登紀男
2019	3E	足立 雄信	福田登紀男
2020	3E	下村 匠	福田登紀男
2021	3C	渡部 妃麗	福田登紀男
2022	3C	藤井 勇気	福田登紀男
2023	3C	竹井 翼	福田登紀男
2024	3M	木下 元喜	福田登紀男

表2 最近10年間の顧問

年度	顧問名			
2015	内海淳志	室巻孝郎	岡田浩嗣	井上泰仁
2016	内海淳志	室巻孝郎	岡田浩嗣	井上泰仁
2017	室巻孝郎	内海淳志	岡田浩嗣	井上泰仁
2018	室巻孝郎	渡部昌弘	内海淳志	毛利 聡
2019	室巻孝郎	渡部昌弘	山根秀介	毛利 聡
2020	室巻孝郎	渡部昌弘	大内真一郎	
2021	室巻孝郎	渡部昌弘	篠原正浩	岩木真穂
2022	室巻孝郎	篠原正浩	岩木真穂	
2023	室巻孝郎	篠原正浩		
2024	室巻孝郎	花田研太		



全国大会会場前にて

空手道部

空手道部は、男子15名、女子9名の総勢24名で毎週月曜日に金曜日に武道場で活動を行っています。

指導は、日本スポーツマスターズ空手道競技において8回の優勝(2025年時点)という実績をお持ちの内田慎一郎氏にコーチを委嘱しています。

部員らは、舞鶴市空手道大会、近畿地区高専親善大会に向けて日々練習をし、また部員全員が黒帯を取ることができるように精進しています。様々な流派の空手を習っており、自信の流派の型を磨くのはもちろん、他の流派の型を互いに教えあったりもしています。組手も一緒に練習しています。流派の違いに限らず、高校まで空手道をしたことがなかった学生も、多く入部しており、初心者・経験者関係なく練習を行っています。

5学年全員で練習を行っているため、学年の違いがあっ



ても、全員で仲良く、また、切磋琢磨しあいながら練習しています。

女子部員も多く入部していますが、体格差があるため組手の時は男女で分け、型の際は、合わせて練習を行うなど臨機応変に練習をしています。

(清原 修二)



フリースタイル部

個人競技でもあり自分のペースで練習に励むフリースタイル部は、2003年に同好会からはじまり、2007年に部に昇格した。創設には現在も近畿高等学校スポーツライミング大会本選のルートセッターを務めている奥井健吾氏のご尽力があった。東京五輪から採用されたこともあり今でこそ老若男女に広く知られているが、クライミング人口が少なかった当時は画期的な挑戦であったことは想像に難くない。

コロナ禍では50名以上の部員同士の密回避に種々苦労したが、2年前より幽霊部員が一掃され現在は20名以下の少数精鋭となり、部員の顔と名前がようやく一致するようになりつつある。高専に限定されない全国大会に出場する可能性が現実的である、本校では稀少な運動部でもある。2015年以降の近畿高等学校スポーツライミング大会京都府予選の成績は下表の通りである。

近年のスポーツライミング大会京都府予選の成績

年	成績	氏名
2015年	男子 1位	上田 貫太
2016年	男子 1位	吉岡 祐明
2017年	男子 3位	吉岡 祐明
2018年	男子 3位	村上 龍司
	4位	小林 侑司
	6位	小谷 洋平
	女子 3位	平地 燎
	5位	稲田 遥香
2019年	男子 4位	小谷 洋平
	6位	長瀬 元成
	6位	内田 智己
	女子 2位	稲田 遥香
	3位	平地 燎
2020年	コロナ禍のため開催中止	
2021年	コロナ禍のため出場辞退	
2022年	男子 4位	谷本 航汰
	6位	山元 幹太
2023年	男子 3位	谷本 航汰
	4位	友田幸太郎
	5位	山根 元乙
2024年	男子 5位	田畑 宥大
	6位	宮本 幹大

2017年以前は全国大会への出場を果たしたものの、近年は他府県の競技水準が向上していることもあり、京都府予選では入賞しても本選では苦戦が続いている。

本選の開催会場にもなる大阪のとある私学では、15mもの高さで急勾配を擁する本格的なクライミング設備で日々練習している。一方、建築基準法に怯えつつ専攻科棟の

非常階段の一角を占める高さ3mにも満たない本校伝統の手作り合板壁は、限られた予算内でものつくりを志す部員達の涙ぐましいMagicの結晶であり、年数回の部内コンペのたびに顔を変える柔軟なダンスホールでもある。

また、高専祭において、5m以上のリード壁でクライミング体験ができたのも遠い昔、狭隘なブース内での接触事故予防のため顧問が常に張り付く必要がある、安全最優先の時代でもある。高難度の練習場所は何かと制約の多い校内には不要、ケセラセラとSoranjにて...

近場のボルダリングジムに通ったり、これが王道と岩場で修行を積んだり、環境や時代の壁を乗り越えつつ部員達は「私は最強」と言わんばかりに、今日も楽しく工夫を凝らしている。

(西 佑介)

自動車部

自動車部は、昭和42年に自動車同好会として発足しました。現在の自動車部の主な活動は、1996年にエコラン（主に50ccのエンジンを備えた一人乗り自動車を製作し、定められたコースを決められた平均時速以上で走行し、ガソリン1リッターあたり何km走行できるかを競う大会）に参加したいと集まった学生が、1997年に、ホンダエコノパワー燃費競技関西大会に参加し、それ以来は毎年エコランに参加することです。それ以前にも自動車部はエコランに参加していたことがありますが、一旦途絶えてしまい、1996年からエコランをするクラブとして再出発をしました。

この10年もコロナ禍で大会が行われなかった2020年を除いて、毎年Hondaエコマイレージチャレンジに参加しています。

この10年の戦績は、

2015年 グループⅢ（大学・高専・専門学校の部）とニューチャレンジクラス（150cc以下50cc以上の部）に1台ずつ参加し、グループⅢが8位、ニューチャレンジクラスは昨年(2014年)に引き続き1位でした。



2015年ニューチャレンジクラス優勝マシン

2016年 例年Hondaエコマイレージチャレンジ鈴鹿大会に参加していたが、この年は、鈴鹿大会が前期中間試験の直前ということで、Hondaエコマイレージチャレンジもてぎ大会に参加しました。結果は、グループⅢが9位、ニューチャレンジクラスは1位でした。

2017年 この年はグループⅢに2台出場し、6位と10位、ニューチャレンジクラスはリタイアでした。

2018年 この年もグループⅢに2台出場し、7位とリタイア、ニューチャレンジクラスは2位で、この年以降はニューチャレンジクラスには参戦していません。

2019年 グループⅢに1台出場し、結果は残念ながらリタイアでした。

2020年 コロナ禍のため大会中止。

2021年 コロナ禍でパドックへの入場制限のもと大会が行われ、グループⅢに1台出場、6位でした。

2022年 グループⅢに1台出場、リタイア。

2023年 グループⅢに1台出場、リタイア。

2024年 グループⅢに1台出場、リタイア。となっています。

また、最近の10年の出来事として、2014年以降毎年女性部員がいることです。2019年度は初の女性部長、2021年度は初の女性ドライバーでした。

(谷川 博哉)

アマチュア無線部

当クラブのアマチュア無線局としての正式名称（総務省申請名）は「国立舞鶴高専アマチュア無線クラブ」であり、コールサインは JA3YOF である。学校だより「舞鶴高専」第58号(平成3年12月5日発行)の記述によれば、創設されたのは昭和42、3年ごろである。主な活動内容は、アマチュア無線局の運用、電子回路の試作、関ハムへの参加である。なお関ハムは、大阪府の池田市民文化会館で毎年開催される「関西ハムフェスティバル」のことである。同時実施される臨時アマチュア無線技士国家試験を受験して無線従事者免許を取得することができるため、無線従事者免許未取得の部員は積極的に参加している。

最近の活動トピックスとして、2022年6月にJARL京都府支部にクラブ局として登録したことを挙げる。JARL京都府支部では定期的にクラブ代表者会議が開催されており、各クラブの活動状況報告など情報共有を行っている。クラブ局として登録したことによって、次に示す記念局を運用する機会を得ることができ、通常の無線局の運用も活性化した。

・JARL京都府支部発足50周年特別局8J3KL 273局交信
(運用期間2023年2月9日～16日)

・関西ハムフェスティバル記念局8J3XXVII 184局交信
(運用期間2023年6月20日～22日)

・関西ハムフェスティバル記念局8J328A 74局交信
(体験運用5名、運用期間2024年4月15日～18日)

この10年間の顧問であるが、金山光一先生（ご退職）、中川重康先生（ご退職）、丹下裕先生、宝利剛先生にお世話になった。なお、チーフ顧問は平成30年に金山先生から内海が引き継いだ。

(内海 淳志)



JARL 京都府支部発足50周年特別局の運用

吹奏楽部

本校の合宿研修所を練習場所として、1年生から5年生までの15～20名の部員で活動している。主な活動は、毎年の定期演奏会、入学式および卒業式における演奏、高専祭における演奏、舞鶴市吹奏楽連盟の「サマーコンサート」、近畿地区の7高専の吹奏楽部による合同演奏会「関西高専合同演奏会」である。2024年度には、舞鶴高専が運営に携わった「高専ロボコン近畿地区大会」においてOB・OGや引退した5年生の協力も得て演奏を行った。

吹奏楽の編成としては小規模ではあるが、積極的な演奏活動を行っている。



「サマーコンサート」(2024年6月22日)

(1) 定期演奏会

2024年度の定期演奏会は第40回という節目であった。OB・OGにも協力を頂き、普段の編成よりも大きな編成で演奏することができた。2022年度にはコロナの感染者が急増したため舞鶴高専の部活動が停止することとなり、当初予定していた7月から10月に延期して開催した。



第40回定期演奏会 (2024年6月30日)

(2) 関西高専合同演奏会

近畿地区7高専の吹奏楽部による合同演奏会である。年度末の3月に開催している。2018年度(2019年3月)と2023年度(2024年3月)は舞鶴高専が主幹校を務めた。

コロナ禍の影響により、2019年度(2020年3月)～2021年度(2022年3月)に予定されていた合同演奏会は中止となり、2022年度(2023年3月)から再開することができた。

(奥村 昌司)



第47回 関西高専合同演奏会 (2024年3月30日)

プログラマーズコミュニティ

プログラマーズコミュニティは、毎年、「全国高等専門学校プログラミングコンテスト(以下、高専プロコン)」に参加しています。

高専プロコンは、学生の発想力と情報処理技術の発表を通じて、高専における創造教育に資する取り組みとして、1990年に京都市で開催されました。1990年の記念すべき第1回大会で、舞鶴高専は自由部門で優秀賞を獲得しました。翌年の1991年に、高専プロコンに出場するために、プログラマーズコミュニティが創立され、創成時に高専プロコンでは優秀な成績を収めていました。10年間の期間で見ると、高専プロコンでは、優秀賞(2回)、特別賞(1回)、企業賞(2回)を拝受しました。また、起業家甲子園は2回の出場権を獲得しました。

2020年と2021年の2年間は、コロナウィルス感染症拡大防止のため、プログラマーズコミュニティ部の日常の活動、高専プロコンの開催にも大きく影響を与えました。

2020年は、本来であれば10月に、苫小牧高専主管のもと、苫小牧市民会館で実施することで計画されていたものの、感染症拡大防止のため、オンラインでの開催は中止となりました。課題部門と自由部門のみを、オンラインで実施されました。オンラインで実施することもあり、予選通過校数も減らす必要もあったようで、選考も厳しく、1チームも参加できませんでした。

翌年の2021年には、「高専プロコン」に、秋田高専主管で実施されました。この年も、感染症拡大防止のため、この年の高専プロコンでは、課題部門、自由部門、競技部門の3部門がオンラインで実施されました。本校は、課題部門、自由部門、競技部門に、それぞれ1チームずつ、本選へ進むことができました。オンライン開催のため、学生は部室から参加しました。課題部門では、宇賀遥貴さん、大垣光希さん、渡邊凌矢さん、政次春輝さん、清水俊平さんの5名(応募当時、4年生)が参加し、「安全仕事人—体験型情報セキュリティ学習システム—」を提案しました。セキュリティに対する知識を身に付けるために、単に問題を解くのではなく、実際に手を動かしながら体験することにより深い理解を得られる新しいシステムを開発しました。高専プロコンと連携関係にある国立研究開発法人情報通信研究機構のメンターの方の目に留まり、総務省とNICTが2022年3月に主催する「令和3年度 起業家甲子園」への出場権が与えられました。

2024年は、部員が、「1年に1回はコンテストに応募すること」を目標に取り組んでいます。高専プロコンに応募する以外にも、ハッカソン



校内からの高専プロコンの参加

「Hack U」、「ヒーローズ・リーグ」、AIの活用アイデアを競う「DCON」などにも積極的に応募するなど、以前よりも勢力的に活動をしています。

(井上 泰仁)



舞鶴市優秀文化賞の授賞式

創造技術研究会

2015年度以降のいわゆる「高専ロボコン」について振り返る。

2015年「輪花繚乱」では「鶴空」「光鶴」が出場し、「光鶴」が近畿地区ベスト4へと進出したが、残念ながら全国大会出場は叶わなかった。

2016年「ロボット・ニューフロンティア」では「鶴THE塔」「先鶴者」が出場し、「鶴THE塔」が準優勝となり、推薦により全国大会出場を決めた。全国大会では近畿地区大会決勝で敗れた奈良高専と再戦したが、リベンジとはならず、残念ながら敗退となった。

2017年「大江戸ロボット忍法帳」は舞鶴高専主管での大会となり、地元開催での優勝が期待された。前年に出場したロボットを振った「鶴THE刀」と「不鶴定」が出場し、「鶴THE刀」が近畿地区大会最速17秒での勝利をたたき出した。しかし、マシントラブルでベスト4での敗退。それでも推薦により2年連続での全国大会出場となった。なお、近畿地区大会当日は台風が直撃、大荒れの中での大会実施となった。

2018年「Bottle-Flip Cafe」へ「鶴THE搭」「鶴律→鶴帝」が出場した。「鶴律→鶴帝」が強さを見せたが、予選リーグで優勝校と当たり、敗退。強さでは全国レベルであったが、3年連続となる全国出場は叶わなかった。

2019年「らん♪ RUN Laundry」へ「洗練卍鶴」「洗干屋」が出場したが、何れも予選リーグ敗退となってしまった。

2020年「はぴ☆ロボ自慢」へ「#鶴散希望」「舞花」「emPeror」が出場。2021年「超絶機巧」へ「fighting鳥」「まいづる鶴激団」が出場。この2年間は新型コロナウイルス感染症の影響により、オンライン開催となり、パフォーマンス対決となった。当時は顧問でなかったがコロナ禍で寮生が多い舞鶴高専ではロボコンの活動もままならなかったのではないかと推察する。

2022年「ミラクル☆フライ ～空へ舞いあがれ!～」へ「鶴定演出」「C:Gegangener」が出場した。3年ぶりに対面で行われた大会であったが、予選リーグ敗退となった。

2023年「もぎもぎ!フルーツGOラウンド」へ「鶴壺」「鋼鶴天翔」が出場した。「鋼鶴天翔」がテストランで強さを見せて期待されたが、本番では緊張による操作ミス等で予選リーグ敗退となってしまった。

2024年「ロボたちの帰還」へ「アポロ計鶴」「系群五鶴」が出場した。本大会は舞鶴高専主管で実施されたが、予選リーグ敗退となった。近年、結果を出せていないが、部活動として礼節や感謝を忘れず、人間性を成長させてくれることを願うばかりである。

(高木 太郎)

華道部

華道部は、平成16年に同好会として発足し、平成19年にクラブへ昇格した。発足の契機は舞鶴高専50周年記念誌に詳しい記述があるが、数名の女子学生が初代顧問の教官室前の共用机を使用して自主的に開始した活動に由来する。発足当初から一貫して嵯峨御流・舞鶴司所の先生をお招きし、本格的な華道の稽古が行われてきた。当時は活動場所が限られていたが、後に学校の許可を受けて青

葉会館の二階にあった茶道室に拠点を移し、継続的な課外活動として定着したため平成19年にクラブに昇格した。

創部以来女子部員の割合が高かったが、近年では男子部員が増加し、令和6年度には男子部員のみ8名で活動が行われている。在学中に嵯峨御流初伝を取得する学生も現れるなど、部員たちは華道に対する深い理解を目指して研鑽を重ねている。

クラブの主な年間行事として、大覚寺で春に開催される華道祭の見学や高専祭での作品展示を行っており、タイ王国キングモンクット工科大学からの留学生への華道体験提供も恒例となっている。本年度は、高校生が主体となって赤れんがパークで開催された地域イベント「KARAYAB」にも作品を出展し、活動の幅を広げている。

華道部は創部から今日に至るまで部員が情熱を持ち続け後進へと伝えている。今後も部員たちの精進と共に、その歩みが続くことを期待する。

(村上 信太郎)



高専祭での作品展示

デザコン部

建設系学生を対象とした「全国高等専門学校デザインコンペティション」は、1977年に明石高専と米子高専の建築学科による交流会として始まった建築シンポジウムに端を発します。そして2004年に第1回の全国高等専門学校デザインコンペティション(デザコン)が開催され、現在に至っています。

デザコン部は、様々なデザインコンペティションに取組む部活動として活動しています。ここでは、2015年度からの10年間を振り返ります。まず、10年前の50年記念誌のデザコン部の最後の段落には次のように書いていました。

『10年後の「60周年記念誌」で最優秀賞受賞の報告が出来るように部員、顧問、サポーターの皆様が一丸となって活動していきたいと思っています。10年後を楽しみにしててください。』

この10年間の最大の出来事は、デザコン2023舞鶴において最難関の空間デザイン部門で「最優秀賞」を獲得したことです! 10年前の約束が果たせて本当に良かった。中心となって取組んだ学生、サポートに回ってくれた学生、それらを指導・叱咤・激励してくださった先生方、作品を制作する環境づくりに協力していただいた多くの方に感謝申し上げます。

また、建築甲子園への挑戦においても「優勝」することができました。選手とそのサポーターに加え監督の頑張りが優勝に繋がりました。

過去10年間の受賞成績を下記に示しますが、残念ながらここに記載していない多くの作品が部室やパソコンの中にあります。それらの作品にも、思いを込めて取り組んだ幾多の部員の想いや努力が詰まっています。無駄ではなかった!と信じて次の作品に取り掛かることにしましょう。

(玉田 和也)

【デザコン受賞成績】

デザコン2015 和歌山

空間デザイン部門 審査員特別賞

「Bicycle Station —自転車がつなぐ地域の未来—」
(予選応募作品 139、本選通過作品 12、受賞作品 6)

構造デザイン部門 審査員特別賞

「バケモノの弧」

(本選作品 55、受賞作品 7)

デザコン2017 岐阜

創造デザイン部門 企業賞

「健輪のムコウ」

(予選応募作品 47、本選通過作品 10、受賞作品 6)

デザコン2018 北海道

創造デザイン部門 優秀賞

「舞鶴行動」

(予選応募作品 35、本選通過作品 11、受賞作品 6)

空間デザイン部門 審査員特別賞

「眺める味わう感じる。わたしたちはこれからもカバタと生きる。」

(予選応募作品 151、本選通過作品 12、受賞作品 5)

デザコン2020 名取

空間デザイン部門 本選通過

「居場所の原風景」

(予選応募作品 156、本選通過作品 16、受賞作品 6)

デザコン2021 呉

構造デザイン部門 優秀賞

「おちねえわ」

(本選作品 35、受賞作品 7)

創造デザイン部門 企業賞

「自然も体も元気に!水路がつなぐ!陸のめぐみを海へ」

(予選応募作品 33、予選通過作品 9、受賞作品 6)

デザコン2022 有明

構造デザイン部門 優秀賞(日本建設業連合会会長賞)

「継手の濃厚接触」

(本選作品 54、受賞作品 6)

デザコン2023 舞鶴(図1)

空間デザイン部門 最優秀賞

「サンドイッチ・アパートメント 3人の単身高齢者と5世帯の家族が暮らす家」

(予選応募作品 136、本選通過作品 10、受賞作品 8)

図1 デザコン2023舞鶴 空間デザイン部門
最優秀賞 受賞作品

構造デザイン部門 優秀賞(日本建設業連合会会長賞)

「白銀の応力」

構造デザイン部門 日刊建設工業新聞社賞

「押しの弧」

(本選作品 54、受賞作品 6)

創造デザイン部門 優秀賞

「PLA っと農業」

(予選応募作品 22、本選通過作品 8、受賞作品 5)

【建築甲子園成績】

2017年第8回 高校生の建築甲子園

準優勝

「空き家の価値よ、永遠に。～時代に寄り添う空き家のカタチ～」

奨励賞

「いこうよ!あきやのもり」

(全国79校より153作品が応募)

2019年 第10回 高校生の建築甲子園

奨励賞

「交流木」

(全国64校より117作品が応募)

2021年第12回 高校生の建築甲子園 (図2)

優勝&まちづくり委員長特別賞

「融解と浸透」

(全国57校より87作品が応募)

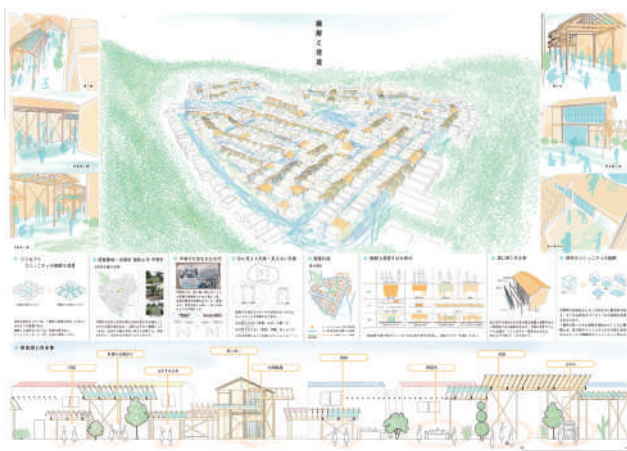


図2 第12回建築甲子園 優勝作品

2024年第15回 高校生の建築甲子園

まちづくり委員長特別賞

「循環 DIYがつなぐ街と職人」

(全国68校より115作品が応募)

軽音楽部

軽音楽同好会として発足、平成23年度に軽音楽部へと昇格を果たした。舞鶴高専では規模の大きな部活動の一つである。この10年で部員数は一時期100名近くにまでなったが、ここ数年は70名ほどに落ち着いている。月～金で各バンドの練習時間を確保することが難しくなっており、現在のところ、部室におけるバンド練習、少人数教室でのパート練習、自宅自室での自主練習など、時間と場所と形を工夫しながら日々活動している。

部に昇格させてからは、校内でライブを行う機会を増やしてきた。部長はじめ幹部陣とともに実施時期などを試行錯誤しながら、ここ10年では、新入生歓迎ライブ(4月)、サマフェス・ライブ(7月)、高専祭ライブ(11月)、卒業ライブ(2月)に落ち着いている。

コロナ禍では、校内ライブや地域イベントはことごと



軽音楽部 2024バンド・ロゴ

く中止となってしまった。開催できたとしても、何らかの制限が終始つきまとった。開催するが観客は入れない。観客は入れるが声は出させない。ステージと観客最前列・となり同士の間隔を空ける、……。バンドとオーディエンスが一体となって盛り上がる、というライブ本来の形態からはかけ離れたものになってしまった。また、普段の何気ない練習風景も一変した。マスクの着用、ドアや窓の開放、部室内人数の制限、コーラスの禁止、マイクのグリルボール交換、使用機器の清拭、……。この当時の活動は本当に辛く厳しいものであり、いったいいつになったら終わるのだろうか、と不安に思う日々であった。

コロナ禍が明けてからは、校内ライブも制限なしで実施できるようになり、地域イベントにお誘いいただく機会も増えてきた。これまでに参加してきた松尾寺駅舎での「夕涼みコンサート」は、時期を6月から10月に変更して、軽音楽部のみ「高専祭プレミニコンサート」という形で引き継いでいる。残念ながら、試験など年間行事との兼ね合いで、仕方なくお誘いをお断りしているイベントもいくつかある。

発足から今日に至るまで紆余曲折ではあったが、ライブでは機材の運搬・セッティングなどの準備から、音響・照明による演出、そして後片付けにいたるまで、部員たちが連携・協力して取り組んでおり、頼もしく感じている。今後も、軽音楽部での活動を通じて、仲間たちとしっかり話し合い、友情や信頼関係を築きながら、バンド内だけで閉じた社会を作らず、同学年のバンド間で、また先輩バンドや後輩バンドとの交流によって、多くの刺激を受け積極的に活動してほしい。

(岡田 浩嗣)



2019年8月31日(土)
令和元年度 第1回近畿北陸高等学校軽音楽コンテスト
舞鶴市長賞

fool cool : 佐藤 一貴(3年、ボーカル) 加藤 礼(3年、ギター)
菊田 潤(3年、ギター) 向林 洋(3年、ベース) 諏訪 悠仁(3年、ドラム)



2021年8月6日(金)
東京オリンピック2020聖火リレー ミニセレブレーション
(2020年延期、2021年中止、代替記録動画)

秋保 雛乃(部長、4年、ドラム) 梅原 梨緒(4年、キーボード) 鮫島 美雪(4年、ボーカル・ギター) 佐々木 海舟(3年、ベース) 澤村 晃平(3年、キーボード)

HANDMADE 部

HANDMADE同好会は、平成27年に電気情報工学科の3年生を中心に結成された。学生総会で設立が認められ、正式に同好会となった。設立の際に書いた顧問所見には、学生の同意のもとで「同好会設立後、3年間に於いて活動実績が伴わない場合は廃部でも構いません。また、部室や予算の提供は不要です。」と記載してしまった。予定では、3年間で廃部になるはずであったが、クラブ活動の充実やメンバーの勧誘活動により部員数を確保でき、存続することができたため、廃部の危機は免れた。平成31年には、HANDMADE同好会は部に昇格した。部室は得られなかったものの、クラブ予算は獲得でき、新たなモノづくりにチャレンジできる資金が整った。

クラブ部活動としては、切り絵やペーパークラフト、模型、レジンなどが主な活動内容であった。初代メンバー(平成27年～平成29年)は、アニメ「アイドルマスター」のオープニン



図1 活動の様子1
(レジンによるアクセサリづくり)

グを切り絵で製作する壮大なプロジェクトに挑戦した。夏休みに製作に関わったメンバーは、部長から90秒間で約2200コマの切り絵をノルマとして与えられ、厳しい管理と指導のもとに製作が行われた。最終的には未完成ながらも、展示できる動画作品が完成し、平成27年度の高専祭ではクラブ活動部門最優秀賞を受賞した。その後、活動は校内に拡がり、例えば1つ挙げるならば人文科学部門の依頼によりOC用の教科書ポップ・等身大ポップ制作にも関わった。夜を徹して文字や絵をすべて切り絵にするなど、こだわりの強い作品を作り上げた。作品はとても好評であり、HANDMADE同好会の存在感をアピールすることができた。平成30年～令和4年は、各個人やグループ活動は勿論であるが、学校や地域に貢献するような活動を進めてきた。平成31年には第八管区海上保安本部からの依頼で海難事故防止のための動画制作、令和3年は京都大学芦生研究林からの依頼で芦生研究林の魅力を伝えるVR動画の制作、令和4年は舞鶴市のまなびあむにおける多世代交流を目的としたガンブラ講習会などに関わった。令和4年4月からは、長い歴史を持つシビックデザイン同好会と鉄道研究会の2つのクラブと合併し、現在に至る。合併した際には、クラブ活動部としての考え方の違いにより衝突が起きることもあったが、現在はその垣根を越えて一体となって活動を行っている。

(丹下 裕)



図2 活動の様子2
(イラスト講習会)



図3 活動の様子3
(毎年恒例の鉄研旅行)

文学研究会

平成21年度からチーフ顧問を務めていた田村修一教員の定年退職に伴い、令和5年度より萩田みどり教員が顧問を務めることになった。

創立50周年記念誌で名前が挙げられた中川草太さんや青谷拓海さん（現・明治大学助教）らが本校を卒業、または専攻科修了したのち、研究会は西村健士朗さん（電気情報工学科）、言美龍二郎さん（同）、藤森帆乃花さん（建設システム工学科）、古久保惇さん（同）らに引き継がれ、映画鑑賞や文学散歩などの活動が続けられた。令和2年度からコロナ禍に巻き込まれ、活動の縮小を余儀なくされたが、令和元年度に入学した米原悠海さん（建設システム工学科）を中心に、競技かるたや創作活動、部誌の刊行などの活動が導入され、研究会活動はむしろ充実していった。人数が多かった米原さんたちの代の卒業後も、加川直澄さん（電気情報工学科）、堀内陸生さん（同）らがそれを引き継ぎ、令和5年度以降、唯一の同好会になった中で、大らかかつ着実に活動を繋げていっている。

部誌「稔—minority—」は令和4年5月に創刊し、毎年2号ずつ刊行している。毎号部内で設定したテーマに沿って、小説やエッセイ、詩などを投稿する。投稿された原稿の意見交換から印刷、製本、各教室への配布まで、すべて学生だけで行っている。バックナンバーの刊行年月とテーマは以下の通りである。

令和4年5月「であい」	10月「愛だの恋だの」
令和5年6月「花と眠り」	11月「祭り」
令和6年6月「傘」	10月「月と、」

恒例の文学散歩は、コロナ禍で令和2・3年は中止を余儀なくされたものの、年1回のペースで文学にゆかりのある地へ出かけ、その土地の空気や歴史を体感し吸収している。



文学散歩の様子

平成27年度	丹後半島方面（成相寺、浦嶋神社、経ヶ岬）
平成28年度	福知山市方面（日本の鬼の交流博物館、天岩戸神社、与謝野町立江山文庫）
平成29年度	丹後半島方面（成相寺、浦嶋神社、経ヶ岬）
平成30年度	若狭方面（山川登美子記念館、羽賀寺、明通寺、若州一滴文庫）
令和元年度	兵庫県豊岡市出石町・城崎町
令和4年度	福井県小浜方面（山川登美子記念館、明通寺）
令和5年度	京都市内（京都南座夏の舞台体験ツアー、八坂神社、漢字ミュージアム）
令和6年度	兵庫県朝来市（竹田城跡、史跡 生野銀山）



高専祭での部誌展示の様子

高専祭では、部誌の展示のほか、本紹介や創作体験スペースの設置等、試行錯誤が続いている。

（萩田 みどり）

ピタゴラ同好会

ピタゴラ同好会は、2010年頃から準備を整え、2012年に同好会として設立されました。NHKのピタゴラスイッチという番組のなかのピタゴラ装置を自分たちで制作しようという同好会です。「可能性は無限大、発想力・構想力・演出力を磨き、達成感を感じ取る」をモットーに活動する同好会です。

2015年5月28日我々ピタゴラ同好会は、本家NHKの取材を受けました。事前の打ち合わせの後、前日から準備を行って、いろんな機材やレポートがやってきて収録が始まりました。同好会としてピタゴラ装置の制作風景を見せたあと、今まで作ってきたピタゴラ装置が稼働しているところを取材してもらいました。



取材の状況



収録後の記念撮影



高専祭での展示風景

ピタゴラ同好会では、数人がチームを作り、装置の構成を考えピタゴラ装置の作成を行います。全体が完成すると動画を撮影・編集・音付けを行い映像作品が完成します。毎年高専祭では作品展示を行い、作品の動画をDVDに焼いて販売して資金を調達するなど活発に活動していましたが、チームによる作品制作ということもあって、新規部員の参入がなくなり残念ながら2021年に同好会は解散しました。現在でも作品はYouTubeで見ることができます。約12年間の活動でしたが、素敵な仲間と楽しめた時間は最高でした。みんな元気になっているかな？ありがとうございます。

（玉田 和也）

マルチ・メディア・リサーチ同好会

2000（平成12）年に、学生が、「アミューズメントパークの研究やゲームの開発をしたい」と吉永進一先生に相談され、当時流行していた「マルチメディア」というキーワードを同好会の名前として採用されました。「活動は自由、目標は必要」という方針を立て、毎年高専祭での出展を行っていました。毎年、スピーカーの新作を製作することが恒例となっていて、バックロードホーン、ダブルバスレフ、バスレフ、トーンゾイレなどの様々な形式のスピーカーを製作し、展示を行いました。校内で手作りのスピーカーが置いてあれば、その時の名残です。同好会の会員も全て卒業したため、廃会の承認を学生総会でしていただき、マルチ・メディア・リサーチ同好会は幕を閉じることとなりました。

（井上 泰仁）

ESS

平成8年ごろ、大学進学を目指す学生たちの勉強会という位置づけで「英語研究会」が発足、平成18年度には「ESS」と名称変更された。

顧問教員の指導のもと、全国英語プレゼンテーションコンテストに参加してきたが、その後メンバー数は減少し、令和2年度の活動を最後に廃部となった。

（岡田 浩嗣）

ボランティア同好会

本同好会は社会貢献や地域社会づくりに貢献することを目的とした、学生の自主的な活動の場であり、地域のニーズに対応し有志で立ち上げた経緯があったとのことである。近年、舞鶴ハーフマラソン給水係、松尾寺駅清掃、松尾寺音楽祭等、大人数のボランティア活動となり、本同好会だけでは対応できなくなった。令和4年度より、同同好会の活動を発展的に行うために学生会が地域局を立ち上げ引き継いでいる。

（小野 伸一郎）

鉄道研究会

2016年4月に鉄道研究会顧問を吉永進一教授（当時）から引き継いだ。

夏休み中の8月18日（木）に5年生1名、3年生3名、1年生1名とともに京都鉄道博物館を見学した。この博物館は梅小路蒸気機関車館を改修し、4月29日に開館したもので、鉄道ファンの聖地と言っても過言ではない。

1Fには蒸気機関車から0系新幹線までの貴重な車両と鉄道施設、工夫を凝らした数々の展示があった。また、ファンには垂涎の20両もの蒸気機関車が扇形車庫に勢揃いする姿は圧巻であった。煤煙の匂いを嗅ぐとあの頃が蘇るのだ。

2Fには鉄道ジオラマ、運転シミュレータ、指令所などの体験型の展示があった。

3Fのスカイテラスに出ると目の前を走る東海道新幹線から東寺の五重塔までワイドな眺望が広がっており「京都と鉄道」を学生とともに満喫することができた。（野間 正泰）



フットサル同好会

フットサル同好会はその活動の幕を閉じた令和3年度まで、長きにわたり学生たちに親しまれ多くの思い出を刻んできた。週1～2回、第2体育館を拠点に夕方から夜にかけて行われた活動は、学生たちの心を繋ぎ運動の喜びを分かち合う貴重な場として機能していた。

活動内容は、その日に集った部員たちを即席のチームに分け勝ち残り形式でゲームを回していくという単純なものであった。しかしながら、その自由さ・気軽さこそがこの同好会の真髄であった。サッカー部と兼部し技術向上を目指す真剣な学生もいれば、競技としてではなくサッカーの楽しさを純粹に味わいたい者や、日常の中で少し身体を動かしたいという者まで、幅広い学生が自然と集まる場になっていた。活動日に出席が強制されるわけではなく、気軽に参加できるという特性は多くの学生にとって魅力であり、時には部員数30名を超える賑わいを見せていた

顧問もときに学生たちとともにチームの一員としてゲームに参加し、若者の機敏な動きに翻弄されながらも活動を楽しんでいた。ごくまれにだが、市の体育館で行われる試合に参加したり地域のチームを招いての練習試合が行われることもあり、地域との交流にも貢献した。

しかしながら、時代の流れとともに環境は変化した。夜間のクラブ活動の縮小や体育館の利用割り当ての逼迫という現実が、この同好会の歩みに終止符を打つこととなった。令和3年度をもって活動を終了した同好会は、惜しまれながらもその歴史に幕を下ろした。（村上 信太郎）



活動時の記念撮影

COC・COC + 事業

1. はじめに

COCはCenter of communityの略称で、「地域の拠点」を意味するものである。

COC事業は、2013年度（平成25年度）から始まった、地域に向けた教育・研究・社会貢献を推進する大学等を支援するための文部科学省の事業である。舞鶴高専はこの事業に京都工芸繊維大学と共同で応募し、採択された。

COC事業の実施にあたり、2013年（平成25年）10月に舞鶴市と連携協定を締結し、さらに2014年（平成26年）3月に舞鶴高専地域テクノアカデミアを設立し、地元自治体および地元企業との連携体制を強化した。推進主体として学内「COCプロジェクト推進会議（プロジェクト長：校長）」を設け、その下に教育・研究・社会貢献の各部会を設け、校長のリーダーシップのもと、全学一丸となって取り組む体制を整えた（図1）。



図1 COCプロジェクト推進体制図

1.1 教育分野

教育の分野では、27の「地域志向科目」を設け、地域に関する学習を行う授業、地域の企業技術者を講師とする授業、地域課題の解決に取り組む授業などを実施した。これらの授業は地域社会からも注目されており、頻繁に新聞報道された。

1.2 研究分野

研究の分野では、近年大きな社会問題となっている橋梁などのインフラ設備の老朽化対策を研究し、メンテナンスを実施できる技術者の育成を行うために「舞鶴高専社会基盤メンテナンス教育センター」を設立した。自治体や地元企業の多数の技術者を対象に、メンテナンスに関する実践的な講習会を実施し、高く評価されている。

1.3 社会貢献

社会貢献の分野では、地元の小中学校、一般市民、企業技術者などを対象に多数の出前授業と公開講座を行い、地域の人々から高い満足度を得ている。図2に示すように、出前授業・公開講座の実施回数はCOC事業開始以降大幅に増加した。（2020年度、2021年度はコロナ禍の影響）



図2 出前授業・公開講座実施回数

2. COC事業の成果

5年間のCOC事業を通じて、舞鶴高専では地域志向の取り組みがすっかり定着した。各学科はそれぞれ密接な連携先を持ち、教育・研究・社会貢献の3つの分野で地域志向の取り組みを進めている。これらの取り組みは、地域への貢献を実現するだけでなく、学生のモチベーションの向上に役立つと同時に教員の研究活動の推進にも役立っている。文部科学省のCOC事業は平成29年度で終了したが、本事業を契機として舞鶴高専は今後も地域との連携を大きな柱として諸活動を展開・継続していく。

2.1 地域志向科目の充実と深化

地域を志向し、地域産業界に貢献できる人材を育成するため、「地域学」や「まちづくり学」をはじめ、「メンテナンス工学」、「エンジニアリング・デザイン演習」など、合計27科目の地域志向科目を開設し、教育内容のさらなる充実と深化を行った。これらの科目では、地域社会との連携を深め、地域社会から提案された課題や問題に対して、学生と教員が一体となって取り組み、問題解決能力や創造能力を育むとともに、技術者に必要な人間力や汎用的技術力を涵養できた。

2.2 舞鶴高専地域テクノアカデミア設立

舞鶴高専地域テクノアカデミアは、COC事業の開始を契機として、地域の企業に本校の教育と研究を支援していただくため、2013年度（平成25年度）に設立した。舞鶴高専が地元企業との連携を深めることにより、地域貢献活動を強化することを目的としている。

設立以来、年1回の総会、役員会の開催のほか、毎年会員企業の工場見学会や本校教員による講演会等を実施し、多くの会員企業の皆様に参加いただいている。また、会員企業との共同研究や会員企業の講師による授業なども実施している。文部科学省のCOC事業の終了後も、舞鶴高専地域テクノアカデミアは舞鶴高専の産学連携活動の拠点として今後ますます活動を強化し、会員企業を増やしていきたい。

2.3 舞鶴の古民家を題材とした移住者促進住宅の提案

近年、地方都市において人口減少や少子高齢化に伴う空き家の増加が問題視される中で、舞鶴市においてもUIJターン者を対象とした移住促進の取り組みが進められ、有効な活用提案が求められている。

舞鶴市のこれまでの移住促進事業では、農村部が中心となっており、まちなかにおける取り組みが行われていなかった。そこで、建設システム工学科尾上研究室が中心となり、舞鶴市に現存する古民家を対象とした、まちなかにおける移住者促進のための施設提案を行うことになった。

地元の課題と課題に対する問題解決に向けたプロセスの中で、市役所や住民の方々との交流や意見交換を通して、学生たちは地域に根差す建築技術者のイメージを喚起することができた。

2.4 社会貢献を通して地域社会を学ぶ

小中学生の理科離れを防ぎ、工学への関心を高めるための取り組みとして、2013年度（平成25年度）より、地域の小学生・中学生や、教職員の方々を対象とした出前授業・公開講座を継続して実施してきた。小学生・中学生を対象とした公開講座としては、「楽しく学べるモノづくり公開講座」と題した科学工作（図3）や、iPadでプログラミングを行う公開講座などを実施してきた。さらに、ナノテクノロジー体験講座や、空気抵抗の小さな浮子やルアーの作製などが加わり、2015年度（平成27年度）以降は、3次元CADを利用した3Dモデルの組立の体験講座なども行っている。また、出前授業については、理科クラブを対象とした電気工作や、建築について学ぶ出前授業などを周辺の小学校・中学校で行っている。



図3 公開講座の一例

3. COC+事業について

文部科学省は2015年度（平成27年度）から「COC+事業」を進めている。「COC事業」は個々の大学や高

専が「地（知）の拠点」となって地域振興に貢献する事業であるが、「COC+事業」はCOC事業の成果を活用し、複数の大学や高専が府県単位で協力し、地方の人口流出防止に貢献するための事業である。地域に貢献できる能力を有し、地域を志向する人材を育成し、その結果県内（府内）企業への就職率向上を目指すもので、期間は2015年度（平成27年度）から5年間である。京都府では京都工芸繊維大学をリーダーとし、京都府立大学、京都学園大学、京都文教大学、舞鶴高専をメンバーとしてCOC+事業を進めた。

舞鶴高専では、COC事業で築いた地域とのつながりを生かし、3つの事業の12のプログラムを実施することにより学生の地域志向マインドを向上させ、地域を担う人材育成を推進した（図4）。

事業①は地域の企業や自治体と連携して地域を担う人材育成を推進することを目標としており、6つのプログラムを主に専門学科が担当して推進した。

事業②は地域の学習と研究を通じて学生の地域志向マインドを向上させることを目標としており、この分野の専門知識を有する人文科学部門の教員が学生を指導して3つのプログラムを推進した。

事業③は地域への公開講座を通じて学生の地域志向マインドを向上させることを目標としており、3つのプログラムで多数の学生が公開講座の講師を務めた。



図4 公開講座の一例

4. COC+事業について

舞鶴高専が、「Center of community」となるべく2013年度から2019年度までの7年間取り組んだ「COC・COC+事業」によって舞鶴高専の教員・学生が地域に目を向け地域に貢献する大きな契機になった。また、この7年間で総額約76,000千円の外部資金の導入により、公開講座や出前授業のコンテンツ開発や講座運営のノウハウを得ることができた。

「COC・COC+事業」の成果を育みながら「知の拠点」として地域との係わりを引き続き深めていきたい。

（玉田 和也）

KOSEN-REIM事業

1. はじめに

舞鶴工業高等専門学校社会基盤メンテナンス教育センター（iMec）は、2014年1月23日の開設以来、“地元のインフラは地元で守る”をモットーに、地域インフラを守る建設技術者のメンテナンス技術力向上を目指し、社会人の学びなおし（リカレント）教育に取り組んでいる。2015年度からは、eラーニングとアクティブラーニング形式の講習とを組み合わせた“e+iMec講習会”を開催しており、橋梁点検に関する基礎編・応用編の講座を中心に、延べ1843人（2025年1月31日時点、iMecのみ）に受講されている。文部科学省、内閣府、国土交通省の受託・補助等の事業費、企業・公益法人等からの寄附・研究助成等により、産官学民連携によるプロジェクトや研究開発を実施しており、これらの活動成果や地域に根差す技術者育成が評価され、インフラメンテナンス大賞を2回受賞（2017年度国土交通省優秀賞、2024年度国土交通大臣賞）した。

2. KOSEN型産学共同インフラメンテナンス 人材育成システムの構築(KOSEN-REIM 事業)について

KOSEN-REIM事業は、文部科学省「持続的な産学
共同人材育成システム構築事業」(2019～2023年度)
の中核拠点の取組として選定された。「インフラメンテナ
ンス技術者の育成」と「実務家教員の育成」を両輪に
据え、「全国の高専へリカレント教育拠点の展開」を目指
す事業として実施した(図1)。取組推進の主体となった
“REIM産学連携コンソーシアム”には、舞鶴、福島、長
岡、福井、香川の5高専を中心に、産官学15機関と5
地域の連携協議会が参画(図2)し、地域に軸足を置く
産官学プラス地域共同インフラメンテナンス人材育成シ
ステムを構築した。



図1 KOSEN-REIM事業概念図



図2 REIM産学連携コンソーシアム

- インフラメンテナンス技術者の育成（リカレント教育プログラムの開発・実施）

4つの専門特修講座（橋梁長寿命化対策、構造物の詳細調査、施工技術と施工管理、建設ICT）と橋梁診断技術者認定講座（橋梁診断）で構成する橋梁診断技術者育成課程を開発・実施した。既に開講中の橋梁点検技術者育成課程と組み合わせることで、初学者・異分野技術者から、より高度な技術資格取得を目指す技術者ニーズに応えるステップアップ型リカレント教育プログラム体系を構築した（図3）。連携5高専で橋梁点検技術者育成課程を、舞鶴高専で橋梁診断技術者育成課程を開講した（写真1）。2019～2023年度の講座受講者は延べ1070人であり、リカレント教育講座受講者数は順調に伸びている（図4）。また、各課程では、国立高等専門学校機構による技術資格（准橋梁点検技術者、橋梁点検技術者、橋梁診断技術者、いずれも国土交通省登録資格）を認定しており、認定登録者数は、2023年度末時点で758人に達した（図5）。



図3 ステップアップ型リカレント教育プログラム体系



写真1 講座実施状況(基礎編、構造物の詳細調査)



図4 リカレント教育講座受講者数の推移(連携校含む)

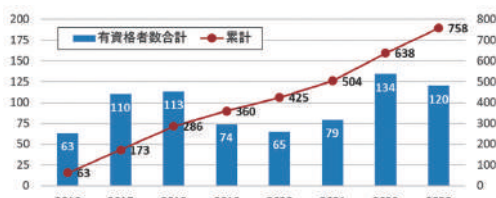


図5 技術資格認定登録者数の推移(連携校含む)

● インフラメンテナンス分野の実務家教員の育成 (実務家教員育成研修プログラムの開発・実施)

KOSEN-REIM事業では、高専におけるインフラメンテナンス分野のリカレント教育や建設業界における人材育成・技術継承の担い手を育成する実務家教員育成研修プログラムを開発・実施した。このプログラムは、実務家として自らが培った実務経験や技術力を言語化し、伝えることができる“実務家教員”を育成するもので、2021年度に開講した(図6)。対象(受講者)は、インフラメンテナンス分野において高い実務能力と10年以上の実務経験を有する技術者であり、7講座、合計90時間(eラーニング30時間、講習会60時間)で構成される実践的なプログラムを通して、教えるための技術の修得を目指す(図7)。

2024年度迄に37人が受講しており、プログラムの全課程を修了者には、専門教士(建設部門)認定基準に基づく審査を経て、実務家教員の称号『専門教士(建設部門)』を付与する。2024年度末時点の称号付与者は30人である。



図6 実務家教員育成研修プログラムの概要



図7 実務家教員育成研修プログラムのカリキュラム

● 一般財団法人高専インフラメンテナンス人材育成推進機構(財団KOSEN-REIM)の設立

高専を核とするインフラメンテナンス人材育成システムの持続的運営とリカレント教育拠点の全国展開を支援するため、REIM産学連携コンソーシアムに専門部会を設置し、一般財団法人の設立へ向けた検討を行った。5高専が中心となる設立準備室を置いて準備を進め、2023年6月30日に、43団体(行政11、法人32)の賛同を得て、一般財団法人高専インフラメンテナンス人材育成推進機構(理事長:西川和廣氏)を設立登記した(図8)。2023年7月20日に設立記念フォーラム(後援:文部科学省・国土交通省・京都府)を開催(対面・オンラインで約130名が参加)、2023年11月18日には設立記念誌を発行した。2024年度から、各高専への支援事業の他、財団主催フォーラムの開催や建設業界への情報発信等の活動を開始しており、現在の会員数は66団体(行政会員13、法人会員53)である。



図8 財団KOSEN-REIMの組織及び事業概要

3. 内閣府戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)による研究開発について

2023年度から、内閣府SIP「スマートインフラマネジメントシステムの構築」のサブ課題C「地方自治体等のヒューマンリソースの戦略的活用」として、異分野登用された地方自治体職員等を対象とした建設分野の専門基礎講座の開発と社会実装及びアウトリーチ方策の立案と検証に取り組んでいる。専門基礎講座は、建設分野の専門教育を受けていない技術者に対して、建設分野の専門分野の基礎に係わる知識・技術(構造力学、土質力学、水理学、建設材料、土木施工等)をリスクリングするもので、スマートインフラの世界へ参入する際の障壁を下げ、技術人材の確保・育成に寄与する(図9)。

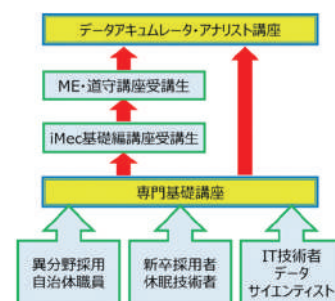


図9 専門基礎講座イメージ

4. おわりに

iMecの活動は、多方面からの支援と沢山の方々の尽力に支えられている。その根底には、地方のインフラメンテナンスへの危機感がある。未来の世代に素敵なインフラを残すため、今後も活動を継続し、新たな挑戦を続ける。最後に、運営スタッフの皆様へ心から御礼を申し上げる。

(玉田 和也)

スタートアップ人材育成事業

1. はじめに

日本政府により、新しいビジネスを創出するスタートアップ企業を支援するための産業生態系を創出し、第二の創業ブームを実現するため、2022年11月28日に「スタートアップ育成5か年計画」が決定された。このスタートアップ育成5か年計画において、日本で起業家を増やすために、若い時期からスタートアップの起業を志す人材の育成の必要性が示されている。また、スタートアップに対する事業化支援や施設提供、起業家教育を実施している高等教育機関の割合は依然として少ないことが指摘されている。それに伴い、令和4年度文部科学省により、大学改革推進等補助金「高等専門学校スタートアップ教育環境整備事業」の公募が行われた。

本公募に申請するために、学校長・教務主事・総務担当副校長、学科長・部門長によるプロジェクト会議を開催した。それに伴い、申請に必要な次の事項である、

- ①アントレプレナーシップ教育や社会課題解決などの実践型教育に取り組む計画
- ②学年・学科を問わず全学生が主体的に使える起業家工房の設置スペースの確保

を順次決定した。

また、社会課題解決に取り組む内容を学科に募集し、

- 仮想現実(VR)と現実をつなぐものづくり
- 組み込み・IoT技術を用いた地域課題解決
- 最先端のGPU環境を利用したAI・データサイエンス教育の推進と社会実装
- 先進的なロボットアーム開発環境による課題解決
- 地域連携による環境改善活動

と決定した。これに基づき、必要な機器などの選定を行った。

次に施設マネジメント委員会にて、合宿所、T棟1階、図書館1階などの中から、起業家工房(ものづくりラボ)として適切な場所を検討した。ラボは学内の1箇所にまとめることが公募要領に記載されていたことより、コロナ対策や長期休暇の合宿対策など検討すべきことが多くあったが、授業に影響が少ない合宿所を改修することとなった。

入札および機器の調達の関係により、本ラボには設置される機器のすべてがそろっていなかったが、令和6年2月14日(水)に「ものづくりラボ」の開所式を挙行了。写真1は加登教務主事、市原学生会長、日東精工株式会社 布川貴英人事総務部長、京都府中丹広域振興局 岡田宏一農林商工部長の4名により行われた除幕式の様子である。



写真1 ものづくりラボ開所式の様子

2. 組織について

公募申請時の組織図を図1に示す。地域と連携をはかるため、地域共同テクノセンターの配下に実施体制を置くこととなった。ただし、講演会や講習会を実施するため、教務係や教務委員会とも連携をはかっている。

● スタートアップ人材育成センターについて

令和5年度は、このセンターを組織化ができず、プロジェクト会議により必要な事項を決定した。令和6年度のテクノセンターにおいてスタートアップ人材育成センターの設置が決定した。なお副センター長は特命教授でなく、テーマ担当責任者となっている。

● ものづくりラボ推進会議について

ものづくりラボを有効活用し、スタートアップの知識を持った人材育成を推進するためには、外部の有識者によるサポートが必要である。そこで、以下の内容などを検討する会議を開催することとし、令和6年の地域共同テクノセンター会議において承認された。

- 講演会実施時の適切な講師の推薦および依頼
- 地域課題の発見、課題の解決、事業化プロジェクトへの参加サポート
- 学生・教職員の地域企業等の活動へのサポート
- ものづくりラボの資金獲得などのサポート

図1に示すとおり、申請時はアドバイザーボードであったが、より適切な名称として、ものづくりラボ推進会議とした。

令和6年度は全体会議を実施することができなかった。しかしながら、舞鶴市様と日本政策金融公庫様とは上記の項目について協議を重ねている。

● 本校卒業生起業家のサポート

スタートアップを支援する組織として、起業経験者がメンターとなり、助言を行っていくことが不可欠であると言われている。そこで、本校においても起業を検討する学生へのメンターとして、本校卒業生の起業家に依頼を行っているところである。

◎ メンター了解済:

田中 邦裕氏

(さくらインターネット株式会社代表取締役社長)

◎ 2024年度中にメンター依頼予定:

田中 俊彦氏 (株式会社アイモバイル代表取締役会長)

吉崎 亮介氏 (株式会社キカガク創業者)

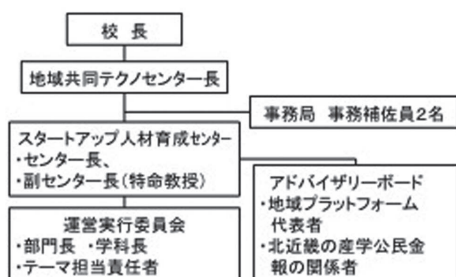


図1 申請時の組織図

3. 取組について

公募申請書には、以下の取組段階 (STEP1～STEP3) を記している。ここでは、STEP1とSTEP2について記載する。

STEP1 全ての高専生が将来の選択肢として「起業」を知る

STEP2 高専生が自由な発想でコト作りに挑戦

STEP3 高専生のスタートアップ成果：起業の参加体験

● STEP1について

起業に関する基礎的な知識を学生が得るために、講習会を実施した。(表1、表2) 令和5年度は3年生を対象として開催したが、他機関と連携してものづくりを実施する学年を考慮し、令和6年度は2年生を対象として開催した。また一度に多くの知識を修得するのではなく、必要な時期に必要な知識が得られるように、2024年度は開催回数を減らしている。

また本校卒業生の起業家による講演会を毎年実施している。(表3) 起業に関する体験を先輩から伺う良い機会となっている。本校卒業生の起業家には限りがあるため、他の高専とも連携をはかり、継続実施体制の構築が必要である。

さらに、実際に企業で抱える課題を学生達が解決策を検討するアイデアソンを実施している。これにより、起業とならなくても、企業内で新たな組織やプロジェクトを立ち上げる経験を体験してもらうためでもある。学生達の反応が非常によく、満足度も非常に高い。

● STEP2について

令和6年度より日本政策金融公庫様に講習会を実施してもらっている。その折に、日本政策金融公庫様が主催する「高校生ビジネスプラン・グランプリ」の案内があり、本校学生1名がアイデアを応募した。ファイナリストには選ばれなかったが、応募プラン数5,151件の中、「ベスト100」に入賞した。

令和5年度はものづくりラボの整備を実施するだけであったため、学生の利用はほぼなかった。令和6年度は、部活の学生を中心に、ラボを利用して製作を行う学生が増えてきている。例えば、HANDMADE部はオープンキャンパスで参加生徒に渡すキーホルダーを作成している。

また高専プロコンや廃炉ロボコンに出場するための製作物にラボが利用されている。写真2は学生達が参加したコンテストの様子である。

各学科の授業においてスタートアップテーマを実施し、成果がでてきている。その成果の一例として、DCONの参加チーム数が昨年度より増えており、2次審査通過チーム数は昨年度の1チームから2チームと順調に増えている。

地域の課題解決への取組数も増えてきている。舞鶴市の課題の解決案を検討したアイデアを、高専起業家サミットに応募し、出場38チームの中に選ばれている。また舞鶴市からの依頼により学生達が製作した作品が、「舞鶴引揚記念館 次世代による継承を考える平和未来フォーラム」で実践発表として展示される予定である。

(片山 英昭)

表1 2023年度に開催した講習会一覧

	日 時	内 容	講師
第1回	6月26日	✓ イントロダクション ✓ 講習会の全体のスケジュール など	本校教員
第2回	7月10日	✓ 工程の全体と関係する分野の解説 ✓ 経営的な視点の必要性 など	本田技研工業
第3回	10月2日	✓ 起業に関する必要知識 ✓ 起業学習用の e-Learnig 教材 など	本校教員
第4回	10月23日	✓ 知的財産に含まれる権利 ✓ 意匠権・商標権・特許権の違い など	日本弁理士会
第5回	11月23日	✓ 舞鶴市の課題 ✓ 舞鶴市の課題解決事例 など	舞鶴市 KDDI

表2 2024年度に開催した講習会一覧

	日 時	内 容	講師
第1回	7月1日	✓ イントロダクション ✓ スタートアップの流れ ✓ 講習会の全体のスケジュール など	本校教員
第2回	7月16日	✓ 舞鶴市が抱える課題 ✓ アイデア発想法 ✓ アイデア発想練習 など	舞鶴市 日本政策金融公庫
第3回	7月22日	✓ 知的財産に含まれる権利 ✓ 意匠権・商標権・特許権の違い など	日本弁理士会

表3 本校卒業生による講演会一覧

年度	内容等
2024	日時と場所：1月15日／本校視聴覚教室 演題：起業しないと知らなかったこと 講師：吉崎 亮介氏
2025	日時と場所：10月22日／オンライン 演題：高専時代に最初の一步を踏み出そう 講師：田中 邦裕氏



写真2 ものづくりラボで製作物（コンテスト参加）

ジュニアドクター育成塾

1. はじめに

ジュニアドクター育成塾は、科学技術振興機構（JST）が実施している理系の次世代人材育成事業の一つで、理系の優れた能力を秘めた児童・生徒を発掘し、その能力を育てることを目的とした事業である。平成29年度から令和4年度までの間、年度毎に新規実施機関の募集が行われており、本校は、平成31（令和元）年度より「多自然居住地域における理工系人材の発掘と世界に羽ばたく人材育成プログラム」という企画名でこの事業に採択され、5年間、JSTからの支援を受けながら、地域の小中学生を対象として、科学技術との触れ合いや高度な研究課題への取り組みの機会を提供する活動を行ってきた。ここでは、主にJSTからの支援期間である5年間の取り組みについてまとめる。

2. 実施組織

実施組織「ジュニアドクター育成塾推進会議」の構成員を中心として企画・運営を行った。推進会議構成員以外の講座担当者については本記事の末尾に記載している。

表1 ジュニアドクター育成塾推進会議 構成員

	構成員
教員	校長（実施責任者）、上杉智子（実施主担当者）、宝利剛、谷川博哉、内海淳志、石川一平、加登文学、金山光一（R1）、上野卓也（R2）
事務部	事務部長、総務課

3. 育成プログラム

受講生の育成プログラムは二段階に分かれている。毎年、受講生の応募を行い、応募者から約40名の受講生を選抜して、受講1年目に第一段階の育成プログラムを実施する。第一段階の取り組みを修了した受講生のうち、特に優秀な受講生を10名程度選抜して、受講2年目より第二段階育成プログラムを実施する。

令和2年度から令和5年度までは、前年度までに受け入れた受講生に対する第二段階の育成プログラムと、新たに受け入れた受講生に対する第一段階の育成プログラ

ムを並行して実施した。

● 第一段階育成プログラムについて

第一段階では、まず、入塾式に続いて、必要な基礎知識を学ぶための基礎講座を2回実施し、続いて様々な分野に関わるテーマについて学ぶ総合的学習（全2回）、コース分けをして課題解決型学習を行う課題学習（全3回～4回）を実施する。その後、研究者・技術者による招待講演と研究者倫理、成果発表の準備、留学生との交流（または施設見学・科学イベント参加）を行う講座を2回で実施し、最後に成果発表会を行い、発表を行った受講生に修了証の授与を行う。取組全体を通して、本校学生がメンターとして受講生の活動サポートを実施する。

令和元年度は全10回、令和2年度から令和5年度までは、全11回で第一段階育成プログラムを実施した。

第一段階のプログラムのうち、課題学習については、初年度（令和元年度）は、受講生を4つのコースに分けて、コース毎に異なるテーマの課題解決型学習を全3回で実施したが、テーマによって、必要とされるスキルにかなり差があると思われたため、受講生に幅広いスキルを身につけてもらうために、2年目以降は2つのコースに分け、それぞれのコースで2つのテーマの課題解決型学習に取り組みせるようにプログラムを変更して実施した。

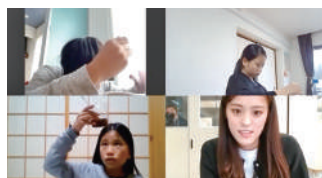
取組2年目となる令和2年度からは、新型コロナウイルス感染症の影響を受けながら取り組みを行った。令和2年度は、入塾式と共に実施する初回の講座のみを対面講座で実施し、それ以降は感染症対策のため、成果発表会を含む全ての講座をオンラインで実施した。令和3年度以降については、オンラインでも実施できる形で講座を準備しつつ、なるべく対面で講座を開催する方針とした。その結果、令和3年度は全11回中2回をオンラインで実施し、令和4年度は初回の1回のみをオンラインで行った。令和5年度については、全て対面で講座を実施することができた。



初年度入塾式の集合写真



総合的学習の様子 (R4)



遠隔での実験指導 (R2)

各年度の第一段階育成プログラムの応募人数と、選抜された受講生数、プログラムの修了生数等は以下の表のとおりである。

表2 第一段階育成プログラムの応募者数・受講生数等

	R1	R2	R3	R4	R5
応募者数 (人)	94	75	63	46	75
受講生数 (人)	42	40	43	40	41
修了生数 (人)	40	38	37	37	37

表2から分かるように、第一段階については、いずれの年度についても、募集人数である40名を上回る応募があり、選抜により40名以上の第一段階受講生を受け入れており、多くの受講生が最後の成果発表まで取組を行い、育成プログラムを修了している。

● 第二段階育成プログラムについて

第一段階育成プログラムを修了し、さらに二次選抜を通過した受講生に対しては、第二段階育成プログラムとして、研究室配属による個別指導のもとで、さらに発展した研究や探求学習を実施した。個別研究指導のほか、招待講演への参加や、第二段階受講生同士の交流会や中間発表などを行い、最後に研究フォーラムでの成果発表を実施し、修了証の授与を行った。第二段階についても、本校学生がメンターとして受講生の活動サポートを実施した。

令和2年度から令和5年度までの、第二段階育成プログラムの応募人数と、選抜された受講生数、プログラムの修了生数等は表3のとおりである。

表3 第二段階育成プログラムの応募者数・受講生数等

	R2	R3	R4	R5
応募者数 (人)	31	31	27	32
新規受講生数 (人)	15	14	11	12
継続受講生数 (人)	-	7	8	11
受講生数 (人)	15	21	19	23
修了生数 (人)	13	20	19	20

いずれの年度についても第一段階修了生の多くが第二段階に進むことを希望しており、選抜により10名以上の第二段階受講生を受け入れて育成を行った。また、第二段階についても、ほとんどの受講生が最後の研究フォーラムでの発表を行って育成プログラムを修了している。

4. 育成の成果

修了生の動向として、理系の進路の一つである高専への進学については、令和5年度までに中学校を卒業した受講生のうち、約4割(30名)が高専に(本校27名、他高専3名)進学している。その他、令和6年度には修了生1名が、高校生を対象とした次世代理系人材育成事業であるグローバルサイエンスキャンパスに参加している。

また、令和2年度から令和5年度までは、毎年受講生の代表2名がJSTの開催するサイエンスカンファレンスで研究発表を実施している。そのほか、表4のとおり、受講生、修了生が各種コンテスト等にも参加・活躍している。

表4 各種コンテスト等参加実績 (R1～R5)

年度	コンテスト等への参加・受賞	参加者数
R5	デザインコンペティション2023 構造部門 優秀賞(日本建設業連合会会長賞)	修了生1名
	第7回「発酵を科学する」発表	修了生1名
	舞鶴高専杯 プログラミングコンテスト 優秀賞 2名	受講生2名 修了生2名
R4	兵庫県統計グラフコンクール 特選(1位) 1名	受講生2名
	第70回統計グラフ全国コンクール (全国大会) 佳作 1名	受講生1名
	舞鶴高専杯 プログラミングコンテスト 優秀賞 3名、日立造船株式会社舞鶴工業長賞 1名 インフォニック特別賞 1名	受講生9名 修了生1名
	全日本小中学生ロボット選手権小学生部門 京都府予選2位	受講生1名
R3	舞鶴高専杯 プログラミングコンテスト 優秀賞 1名、アイデア部門賞 2名、ゲーム部門賞 1名	受講生7名
	全日本小中学生ロボット選手権中学生部門 決勝大会 ドリーム大賞	受講生1名
R1	スペースロボットコンテスト16 クラシック部門 決勝トーナメント進出・ベスト8	受講生1名

5. 事業終了後の地域の人材育成

令和6年度は、4つのテーマについて公開講座のコースを用意することで地域の理系人材育成を継続して実施した。さらに令和7年度からは、選抜による受講生の受け入れを再開し、今後も地域での次世代理系人材の育成を継続していく予定である。

最後に、5年間の育成プログラムの担当教員、招待講演講師を表5に記載する。

(上杉 智子)

表5 各年度の育成プログラム担当教員

年度	内容	担当教員
R1	第一段階 講座	村上 信太郎、井上 泰仁、七森 公碩、 上野 卓也、尾上 亮介、四蔵 茂雄、 推進会議構成員
	招待講演	大阪工業大学教授 真貝寿明氏
R2	第一段階 講座	村上 信太郎、井上 泰仁、七森 公碩、 藤司 純一、尾上 亮介、四蔵 茂雄、 金山 光一(名誉教授)、推進会議構成員
	招待講演	大阪大学准教授 南 裕樹氏
	第二段階 指導	谷川 博哉、内海 淳志、藤司 純一、 尾上 亮介、四蔵 茂雄、喜友名 朝也、 熊谷 大雅、宝利 剛
R3	第一段階 講座	篠原 正浩、村上 信太郎、井上 泰仁、 七森 公碩、高木 太郎、尾上 亮介、 金山 光一(名誉教授)、推進会議構成員
	招待講演	九州大学准教授 山本 薫氏
	第二段階 指導	谷川 博哉、篠原 正浩、小林 洋平、内海 淳志、 藤司 純一、若林 勇太、尾上 亮介、 加登 文学、熊谷 大雅、宝利 剛
R4	第一段階 講座	西山 等、村上 信太郎、山田 耕一郎、 井上 泰仁、七森 公碩、尾上 亮介、 金山 光一(名誉教授)、推進会議構成員
	招待講演	熊本大学教授 高橋 慶太郎氏
R5	第二段階 指導	谷川 博哉、篠原 正浩、小林 洋平、 内海 淳志、石川 一平、尾上 亮介、 加登 文学、熊谷 大雅、宝利 剛
	第一段階 講座	村上 信太郎、井上 泰仁、七森 公碩、 尾上 亮介、金山 光一(名誉教授)、 推進会議構成員
	招待講演	株式会社キカガク会長 吉崎 亮介氏
	第二段階 指導	室巻 孝郎、篠原 正浩、小林 洋平、 内海 淳志、石川 一平、尾上 亮介、 馬越 春樹、奥村 昌司、宝利 剛、小島 広孝



舞鶴高専公式マスコットキャラクター「コウちゃん」

資料編

行事概要

舞鶴高専の学生生活を楽しく充実させる年間行事。本校では、一年を通じて多彩なイベントを開催しています。

幅広い年代の学生が集うキャンパスで、仲間と交流を深め、精一杯取り組むイベントは、一人一人が大きく成長する機会でもあり、これらの経験はかけがえのない思い出になります。

定期試験や特別授業をはじめ体育大会や高専祭など、学校行事の年間予定表やイベントカレンダーは以下のURLをご覧ください。

URL <https://www.maizuru-ct.ac.jp/campuslife/schedule/>



本科教育課程表（平成27年度～令和6年度）

準学士課程では、各学科のディプロマ・ポリシー（卒業認定の方針）に掲げた能力を育成するために、次のような「教育課程の編成・実施方針」等に基づいて教育を実施しています。人文科学や自然科学などを学ぶ学科共通の「一般科目」に対して、工学の専門分野を学ぶ学科ごとの「専門科目」をくさび型に配置し、一般科目および専門科目に科目群を設定して教育課程を編成し実施します。

各年度の教育課程表は以下のURLをご覧ください。

URL https://www.maizuru-ct.ac.jp/introduction/public_information/



専攻科教育課程表（平成27年度～令和6年度）

専攻科課程では、ディプロマ・ポリシー（修了認定の方針）に掲げた能力を育成するために、一般科目群および融合複合領域に対応したコース共通の科目群と、高度な専門分野に対応したコース別の科目群を開設しています。具体的には、ディプロマ・ポリシーと対応させて、一般科目、専門共通科目、専門コース科目に分けて教育課程を編成しています。

各年度の教育課程表は以下のURLをご覧ください。

URL https://www.maizuru-ct.ac.jp/introduction/public_information/



年度別学生総数

[illegible]

年度別学生総数

[illegible][illegible][illegible]

注意：女子学生数を内数で示す。

日本学生支援機構(旧 日本育英会) 奨学生数

年度	一般奨学生	特別奨学生	第一種奨学生	合計
60	51	108	81	240
61	8	40	132	180
62	1	0	184	185
63			172	172
元			208	208
2			180	180
3			179	179
4			159	159
5			174	174
6			185	185

年度	第一種奨学生	第二種奨学生	給付奨学生	合計
7	182			182
8	164			164
9	143			143
10	132			132
11	132			132
12	138			138
13	150	1		151
14	154	1		155
15	144	4		148
16	135	4		139
17	113	5		118
18	105	7		112
19	120	7		127
20	116	7		123
21	131	7		138
22	128	19		147
23	134	14		148
24	114	10		124
25	95	13		108
26	84	13		97
27	75	11		86
28	62	9		71
29	59	4		63
30	57	5	2	64
元	46	10	4	60
2	40	10	32	82
3	31	9	42	82
4	23	5	30	58
5	19	5	39	63
6	16	7	40	63

研修旅行実施状況

年度	日 程	学 科	行 先
27	11.10～11.4	機 械	タイ湖、文廟、玉山祠、ENKEI VIETNAM、タンロン城遺跡 (ベトナム)
		電 気	セイコーエプソン千歳事業所、さくらインターネット、NHK札幌放送局 (北海道)
		制 御	国立聯合大学、台湾森永製菓、九份、国立故宮博物院、中正記念堂 (台湾)
		建 設	ニャッタン橋、国立ハノイ建設大学、タンロン城遺跡、文廟、ホーチミン廟 (ベトナム)
28	11.8～11.12	機 械	忠烈祠、国立聯合大学、台湾デンソー、国立故宮博物院、中正記念堂 (台湾)
		電 気	昌徳宮、水原華城、南ソウル大学、富士ゼロックスコリア (韓国)
		制 御	文廟、玉山祠、ENKEI VIETNAM、タンロン城遺跡 (ベトナム)
		建 設	国立高雄第一科技大学、九份、国立故宮博物院 (台湾)
29	11.14～11.18	機 械	ホーチミン廟、国立ハノイ交通通信大学、タンロン城遺跡 (ベトナム)
		電 気	忠烈祠、龍山寺、国立聯合大学、九份 (台湾)
		制 御	国立高雄第一科技大学、ULVAC、国立故宮博物院、九份 (台湾)
		建 設	ニャッタン橋、国立ハノイ建設大学、タンロン城遺跡 (ベトナム)
30	11.13～11.17	機 械	国立聯合大学、ヤマハモーター台湾 (台湾)
		電 気	マレーシア日本国際工科院、日本電気硝子マレーシア法人 (マレーシア)
		制 御	国立ハノイ交通通信大学、ENKEI VIETNAM (ベトナム)
		建 設	国立高雄第一科技大学、国立台中国家歌劇院、国立公共情報図書館、国立故宮博物院 (台湾)
31	11.12～11.16	機 械	日本電気硝子、バトゥケイプ、マレーシア日本国際工科院 (マレーシア)
		電 気	パナソニックアプライアンス社、国立ハノイ交通通信大学 (ベトナム)
		制 御	台湾デンソー、国立聯合大学 (台湾)
		建 設	ニャッタン橋、国立ハノイ建設大学 (ベトナム)
R2		機 械	コロナ禍のため中止
		電 気	
		制 御	
		建 設	
3		機 械	コロナ禍のため中止
		電 気	
		制 御	
		建 設	
4	10.4～10.7	機 械	三菱重工高砂製作所、DMG 森精機・伊賀事業所、兵神装備、中部大学 (関西・愛知)
		電 気	東京スカイツリー、日本科学未来館、ANA Blue Hanger Tour、筑波宇宙センター、JERA川崎火力発電所 (関東)
		制 御	軍艦島、九州工業大学、マツダミュージアム (九州)
		建 設	国立西洋美術館、国立土木研究所、国立建築研究所、筑波宇宙センター、東京スカイツリー、WHAT MUSEUM (関東)
5	10.3～10.6	機 械	沖縄電力具志川火力発電所、琉球大学、北谷浄水場・海水淡水化センター、MRO JAPAN、新糸満造船所 (沖縄)
		電 気	チームラボ、チームラボプラネッツ TOKYO、東京電力 (関東)
		制 御	筑波大学、サイエンス・スクエアつくば、サイバーダインスタジオ、デンソー本社ギャラリー、名古屋工業大学 (関東・愛知)
		建 設	東京都現代美術館、TOTO ギャラリー・間、防災科学技術研究所、東京大学 (関東)
6	10.8～10.11	機 械	沖縄電力具志川火力発電所、沖縄科学技術大学院大学、琉球大学、MRO JAPAN、新糸満造船所 (沖縄)
		電 気	調和技研、クリプトン・フューチャー・メディア、さくらインターネット (北海道)
	10.8～10.12	制 御	TOTOミュージアム、九州大学、東京エレクトロン、JASM、堀場エステック 阿蘇工場 (九州)
	10.8～10.11	建 設	赤坂迎賓館、東京都立大学、首都高速【東品川周辺】、国立新美術館 (関東)

就職状況

■ 本 科

			合 計									
			27 年 卒 業	28 年 卒 業	29 年 卒 業	30 年 卒 業	令和元年 卒 業	2 年 卒 業	3 年 卒 業	4 年 卒 業	5 年 卒 業	6 年 卒 業
卒 業 者 数			131	135	149	145	136	130	147	138	147	146
就 職 希 望 者 数			69	73	96	90	75	78	88	85	90	84
求 人 数			2770	2886	3282	3582	3519	3579	3120	3286	3562	3421
求 人 倍 率			40.1	39.5	34.2	39.8	46.9	45.9	35.5	38.7	39.6	40.7
就 業 決 定 者	業 種	建 設	8	12	7	6	13	10	10	11	11	6
		食 料 品 ・ 飲 料 ・ た ば こ ・ 飼 料	1	2	1	0	2	2	2	4	2	3
		織 維	0	0	1	1	1	0	0	0	0	1
		印 刷 関 連	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0
		化 学 ・ 石 油 ・ 石 炭	5	2	4	2	2	1	1	3	1	2
		鉄 鋼 ・ 非 鉄 金 属 ・ 金 属 製 品	2	2	1	2	1	0	3	0	0	1
		はん用・生産用・業務用機械器具	12	17	21	14	15	14	18	21	23	14
		電子部品・デバイス・電子回路	0	0	6	10	3	6	7	6	8	4
		電 気 ・ 情 報 通 信 機 械	14	3	8	15	5	3	9	4	6	9
		輸 送 用 機 械	8	7	7	7	5	6	6	3	3	2
		そ の 他 製 造	1	1	3	0	1	3	1	0	3	4
		電 気 ・ ガ ス ・ 熱 供 給 ・ 水 道 業	3	2	4	3	0	4	3	3	3	5
		情 報 通 信 業	6	6	11	8	9	5	8	8	13	12
	定 別	運 輸 ・ 郵 便	2	3	3	3	3	4	1	1	1	4
		卸 売 ・ 小 売	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
		金 融 ・ 保 険	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不 動 産 ・ 物 品 賃 貸 業	0	2	2	1	2	3	1	1	0	4
		学 術 ・ 専 門 ・ 技 術 サ ー ビ ス	4	7	8	12	8	10	9	10	11	8
		宿 泊 ・ 飲 食 サ ー ビ ス	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		生 活 関 連 サ ー ビ ス ・ 娯 楽 業	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
		教 育 ・ 学 習 支 援 業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		医 療 ・ 福 祉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		そ の 他 サ ー ビ ス	1	3	2	2	1	3	3	3	2	1
		官 公 庁	2	4	7	4	3	3	6	4	3	3
			計	69	73	96	90	75	78	88	84	90
進 学 希 望 者			61	57	53	52	58	51	54	52	55	60
そ の 他 (含 自 営)			1	5	0	3	3	1	5	1	2	2

■ 専攻科

			合 計									
			27 年 修了	28 年 修了	29 年 修了	30 年 修了	令和元 年 修了	2 年 修了	3 年 修了	4 年 修了	5 年 修了	6 年 修了
修了者数			16	19	22	19	14	16	27	19	18	15
就職希望者数			11	13	16	13	10	9	19	13	11	12
求人数			1583	1663	1851	2063	2000	2075	1772	1858	2055	1860
求人倍率			143.9	127.9	115.7	158.7	200.0	230.6	93.3	142.9	186.8	155.0
就職 決定 者	業 種	建設	3	0	0	1	2	1	2	2	2	2
		食料品・飲料・たばこ・飼料	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		繊維	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		印刷関連	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		化学・石油・石炭	0	0	1	0	4	0	0	0	1	1
		鉄鋼・非鉄金属・金属製品	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
		はん用・生産用・業務用機械器具	1	7	2	3	0	3	3	2	2	1
		電子部品・デバイス・電子回路	0	0	2	1	1	0	2	3	1	0
		電気・情報通信機械	2	2	3	3	1	2	6	2	0	1
		輸送用機械	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
		その他製造	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		電気・ガス・熱供給・水道業	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0
		情報通信業	0	2	0	1	0	1	3	1	1	2
	別 者	運輸・郵便	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
		卸売・小売	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		金融・保険	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		不動産・物品賃貸業	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
		学術・専門・技術サービス	4	0	5	1	1	1	1	0	1	0
		宿泊・飲食サービス	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		生活関連サービス・娯楽業	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
		教育・学習支援業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		医療・福祉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		その他サービス	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		官公庁	1	1	3	1	0	1	2	1	2	1
		計	11	13	16	13	10	9	19	13	11	12
進学希望者			5	6	5	6	4	7	7	6	6	3
その他（含自営）			0	0	0	0	0	0	1	0	1	0

進学状況

卒業年度	出身学科	大 学	入学者数	専攻科	入学者数
27	機械	大阪大学	1	舞鶴高専専攻科	5
		岡山大学	2	奈良高専専攻科	1
		岐阜大学	1	近大高専専攻科	1
		京都工芸繊維大学	1		
		滋賀大学	1		
		筑波大学	1		
		名古屋工業大学	1		
	電気	金沢大学	1	舞鶴高専専攻科	5
		千葉大学	1		
		徳島大学	1		
		豊橋技術科学大学	3		
		長岡技術科学大学	2		
		福井大学	1		
		同志社大学	2		
		立命館大学	1		
	制御	大阪大学	1	舞鶴高専専攻科	6
		岡山大学	1		
		金沢大学	1		
		豊橋技術科学大学	3		
		長岡技術科学大学	4		
		和歌山大学	1		
		立命館大学	1		
	建設	岐阜大学	2	舞鶴高専専攻科	6
		京都工芸繊維大学	1		
		豊橋技術科学大学	3		
		長岡技術科学大学	1		
		北海道大学	1		
		和歌山大学	1		
		首都大学東京	1		
28	機械	金沢大学	1	舞鶴高専専攻科	1
		岐阜大学	2		
		九州工業大学	1		
		東北大学	1		
		豊橋技術科学大学	3		
		三重大学	1		
		立命館大学	1		
	電気	岡山大学	1	舞鶴高専専攻科	9
		京都工芸繊維大学	1		
		豊橋技術科学大学	4		
		長岡技術科学大学	2		
		福井大学	1		
		室蘭工業大学	1		

卒業年度	出身学科	大 学	入学者数	専攻科	入学者数
28	制御	岡山大学	1	舞鶴高専専攻科	2
		金沢大学	1	近大高専専攻科	1
		九州工業大学	1		
		首都大学東京	1		
		豊橋技術科学大学	2		
		長岡技術科学大学	5		
		宮崎大学	1		
	建設	京都工芸繊維大学	1	舞鶴高専専攻科	3
		千葉大学	1		
		徳島大学	1		
		豊橋技術科学大学	2		
		長岡技術科学大学	2		
		宮崎大学	1		
		立命館大学	1		
29	機械	岐阜大学	1	舞鶴高専専攻科	4
		京都工芸繊維大学	1		
		豊橋技術科学大学	2		
		長岡技術科学大学	2		
	電気	大阪大学	1	舞鶴高専専攻科	4
		岡山大学	1		
		京都工芸繊維大学	1		
		筑波大学	1		
		東北大学	1		
		豊橋技術科学大学	6		
		新潟大学	1		
	制御	千葉大学	1	舞鶴高専専攻科	1
		筑波大学	1		
		豊橋技術科学大学	3		
		長岡技術科学大学	2		
		福井大学	2		
	建設	京都工芸繊維大学	2	舞鶴高専専攻科	5
		神戸大学	1		
		信州大学	2		
		千葉大学	2		
		長岡技術科学大学	4		
		立命館大学	1		
30	機械	岡山大学	1	舞鶴高専専攻科	4
		京都工芸繊維大学	1		
		豊橋技術科学大学	1		
		長岡技術科学大学	1		
		三重大学	1		
		立命館大学	1		

卒業 年度	出身 学科	大 学	入学 者数	専攻科	入学 者数
30	電気	岡山大学	1	舞鶴高専専攻科	6
		京都大学	1		
		豊橋技術科学大学	4		
		立命館大学	1		
	制御	岡山大学	1	舞鶴高専専攻科	2
		千葉大学	1		
		電気通信大学	1		
		東北大学	1		
		豊橋技術科学大学	3		
		長岡技術科学大学	4		
		和歌山大学	2		
	建設	金沢大学	1	舞鶴高専専攻科	4
		岐阜大学	2		
		九州大学	1		
		豊橋技術科学大学	3		
		長岡技術科学大学	1		
		福井大学	1		
		和歌山大学	1		
令和 1	機械	金沢大学	1	舞鶴高専専攻科	8
		九州大学	1		
		岐阜大学	1		
		佐賀大学	1		
		信州大学	1		
		静岡大学	1		
		豊橋技術科学大学	2		
	電気	大阪大学	1	舞鶴高専専攻科	7
		九州大学	1		
		京都工芸繊維大学	1		
		豊橋技術科学大学	2		
		高知工科大学	1		
	制御	大阪大学	1	舞鶴高専専攻科	5
		岡山大学	1		
		京都工芸繊維大学	1		
		豊橋技術科学大学	4		
		長岡技術科学大学	1		
		和歌山大学	1		
	建設	岐阜大学	1	舞鶴高専専攻科	6
		豊橋技術科学大学	1	近大高専専攻科	1
		長岡技術科学大学	2		
		福井大学	1		
		横浜国立大学	1		
		滋賀県立大学	1		
		京都造形芸術大学	1		

卒業 年度	出身 学科	大 学	入学 者数	専攻科	入学 者数
2	機械	金沢大学	1	舞鶴高専専攻科	3
		岐阜大学	1		
		京都工芸繊維大学	1		
		豊橋技術科学大学	3		
		長岡技術科学大学	1		
	電気	愛媛大学	1	舞鶴高専専攻科	7
		岐阜大学	1	近大高専専攻科	1
		京都工芸繊維大学	1	松江高専専攻科	1
		神戸大学	1		
		豊橋技術科学大学	1		
		山梨大学	1		
	制御	岡山大学	1	舞鶴高専専攻科	4
		京都工芸繊維大学	1		
		豊橋技術科学大学	4		
		長岡技術科学大学	1		
		福井大学	1		
		北海道大学	1		
	建設	岐阜大学	1	舞鶴高専専攻科	4
		京都工芸繊維大学	1		
		千葉大学	1		
		豊橋技術科学大学	2		
		長岡技術科学大学	2		
		滋賀県立大学	1		
		立命館大学	1		
3	機械	岡山大学	1	舞鶴高専専攻科	3
		岐阜大学	1	奈良高専専攻科	1
		九州大学	1	近大高専専攻科	1
		長岡技術科学大学	2		
		立命館大学	1		
	電気	大阪大学	1	舞鶴高専専攻科	4
		岡山大学	1		
		京都工芸繊維大学	1		
		佐賀大学	1		
		豊橋技術科学大学	1		
		長岡技術科学大学	3		
		広島大学	1		
		三重大学	1		
		新潟大学	1		
		福知山公立大学	1		
		近畿大学	1		
	制御	豊橋技術科学大学	5	舞鶴高専専攻科	3
		長岡技術科学大学	1		
		東北大学	1		
		立命館大学	1		
		サイバー大学	1		

卒業年度	出身学科	大 学	入学者数	専攻科	入学者数
3	建設	金沢大学	1	舞鶴高専専攻科	6
		岐阜大学	1		
		豊橋技術科学大学	2		
		長岡技術科学大学	1		
		福井大学	1		
		立命館大学	1		
		神戸芸術工科大学	1		
4	機械	豊橋技術科学大学	5	舞鶴高専専攻科	2
		長岡技術科学大学	3		
		立命館大学	1		
	電気	大阪大学	1	舞鶴高専専攻科	3
		岡山大学	1		
		九州工業大学	1		
		九州大学	1		
		京都工芸繊維大学	2		
		電気通信大学	1		
		三重大学	1		
	制御	大阪大学	1	舞鶴高専専攻科	3
		岡山大学	1		
		熊本大学	1		
		福井大学	1		
		豊橋技術科学大学	2		
		長岡技術科学大学	4		
		関西大学	1		
		立命館大学	1		
	建設	愛媛大学	1	舞鶴高専専攻科	5
		岐阜大学	1		
		豊橋技術科学大学	3		
		長岡技術科学大学	1		
		和歌山大学	1		
		神戸芸術工科大学	1		
5	機械	立命館大学	2		
		岡山大学	1	舞鶴高専専攻科	3
		香川大学	1		
		金沢大学	1		
		京都工芸繊維大学	2		
		島根大学	1		
		豊橋技術科学大学	4		
		三重大学	1		
	電気	岡山大学	1	舞鶴高専専攻科	4
		岐阜大学	1		
		京都工芸繊維大学	1		
		熊本大学	1		
		筑波大学	1		
		東北大学	1		
		豊橋技術科学大学	1		

卒業年度	出身学科	大 学	入学者数	専攻科	入学者数
5	制御	大阪大学	1	舞鶴高専専攻科	3
		京都工芸繊維大学	1		
		信州大学	1		
		福井大学	1		
		豊橋技術科学大学	3		
		長岡技術科学大学	1		
		立命館大学	1		
	建設	熊本大学	1	舞鶴高専専攻科	6
		千葉大学	1		
		東京大学	1		
		豊橋技術科学大学	1		
		奈良女子大学	1		
		長岡技術科学大学	2		
		福井大学	1		
		東京都立大学	1		
		北九州市立大学	1		
		立命館大学	1		
6	機械	岐阜大学	1	舞鶴高専専攻科	3
		佐賀大学	1		
		豊橋技術科学大学	4		
		三重大学	1		
		兵庫県立大学	1		
		東京都市大学	1		
	電気	大阪大学	1	舞鶴高専専攻科	5
		京都工芸繊維大学	1		
		千葉大学	1		
		奈良女子大学	1		
		福井大学	1		
		立命館大学	2		
	制御	大阪大学	1	舞鶴高専専攻科	9
		九州工業大学	1		
		豊橋技術科学大学	1		
		長岡技術科学大学	1		
		北海道大学	1		
		和歌山大学	1		
	建設	岐阜大学	1	舞鶴高専専攻科	3
		熊本大学	1		
		高知大学	1		
		東北大学	1		
		豊橋技術科学大学	4		
		長岡技術科学大学	3		
		名古屋大学	1		
		奈良女子大学	1		
		広島大学	1		
		福井大学	1		
		三重大学	1		
		琉球大学	1		
		大阪芸術大学	1		

■ 専攻科修了生大学院進学状況

修了 年度	専攻	進学先	人数
平成 27	電気・制御システム工学専攻	九州工業大学大学院	1
		神戸大学大学院	2
		奈良先端科学技術大学院大学	1
		兵庫県立大学大学院	1
28	電気電子システム工学コース	大阪大学大学院	1
		北陸先端科学技術大学院大学	1
	機械制御システム工学コース	奈良先端科学技術大学院大学	1
		北陸先端科学技術大学院大学	1
		兵庫県立大学大学院	1
	建設工学コース	京都府立大学大学院	1
29	電気電子システム工学コース	北陸先端科学技術大学院大学	1
	機械制御システム工学コース	大阪大学大学院	2
		九州工業大学大学院	1
	建設工学コース	京都工芸繊維大学大学院	1
30	電気電子システム工学コース	豊橋技術科学大学大学院	1
		大阪府立大学大学院	1
	機械制御システム工学コース	九州工業大学大学院	1
		神戸大学大学院	1
	建設工学コース	九州大学大学院	1
		東京大学大学院	1
令和 1	電気電子システム工学コース	奈良先端科学技術大学院大学	1
	機械制御システム工学コース	大阪大学大学院	1
		京都工芸繊維大学大学院	1
	建設工学コース	大阪市立大学大学院	1
2	電気電子システム工学コース	神戸大学大学院	1
		筑波大学大学院	1
		奈良先端科学技術大学院大学	3
	建設工学コース	大阪大学大学院	1
		和歌山大学大学院	1
3	電気電子システム工学コース	奈良先端科学技術大学院大学	1
		兵庫県立大学大学院	1
	機械制御システム工学コース	神戸大学大学院	1
		奈良先端科学技術大学院大学	1
		北陸先端科学技術大学院大学	1
		兵庫県立大学大学院	1
	建設工学コース	滋賀県立大学大学院	1

修了 年度	専攻	進学先	人数
令和 4	電気電子システム 工学コース	奈良先端科学技術大学院大学	2
		長岡技術科学大学大学院	1
		北陸先端科学技術大学院大学	1
	機械制御システム 工学コース	兵庫県立大学大学院	1
	建設工学コース	名古屋工業大学大学院	1
5	電気電子システム 工学コース	神戸大学大学院	1
		筑波大学大学院	1
		名古屋工業大学大学院	1
		大阪公立大学大学	1
	機械制御システム 工学コース	豊橋技術科学大学大学院	1
		奈良先端科学技術大学院大学	1
6	電気電子システム 工学コース	東北大学大学院	1
		大阪公立大学大学院	1
	建設工学コース	大阪公立大学大学院	1

年度別卒業生・修了者数

年度	年	回	機械 (女子)	電気 (女子)	電気情報 (女子)	土木 (女子)	制御 (女子)	建設 (女子)	計 (女子)	備考	累計 (女子)	専 ES (女子)	専 CM (女子)	専 MS (女子)	専 CA (女子)	計 (女子)	累計	
44	45.3.18	1	71	35					106		106							
45	46.3.16	2	78	38					116		222							
46	47.3.16	3	71	32	1				103	1	325	1						
47	48.3.16	4	73	40	1				113	1	438	2						
48	49.3.14	5	76	30					106		544							
49	50.3.18	6	66	37		28			131		675							
50	51.3.16	7	66	39		35			140		815							
51	52.3.15	8	64	40		38			142		957							
52	53.3.14	9	57	35		38			130	C2 (3.15)	1087							
53	54.3.16	10	63	32	2	33			128	2	1215	4						
54	55.3.17	11	71	32		33			136	C4 (3.24)	1351							
55	56.3.17	12	61	36	1	31			128	1 M3 (3.20)	1479	5						
56	57.3.17	13	72	37		30			139	M2 (3.24)	1618							
57	58.3.17	14	64	40		32			136		1754							
58	59.3.16	15	69	36	1	29			134	1	1888	6						
59	60.3.15	16	61	40	2	39			140	2 M4 (3.20) E1 (3.30)	2028	8						
60	61.3.14	17	72	32		36			140		2168							
61	62.3.13	18	61	36	3	32	1		129	5 C1 (3.20)	2297	13						
62	63.3.16	19	74	37	1	40	5		151	6	2448	19						
63	元 3.15	20	61	38	1	31			130	1	2578	20						
元	2.3.14	21	72	33	1	27	1		132	3	2710	23						
2	3.3.14	22	66	39	2	32	2		137	4	2847	27						
3	4.3.14	23	73	38	1	39	2		150	3	2997	30						
4	5.3.15	24	72	41	1	31	1		144	2	3141	32						
5	6.3.17	25	64	38	3	32	1		134	4 M1.E 1 (3.23)	3275	36						
6	7.3.16	26	42	36	1	43	1	41	162	4 M1 (3.24) C1 (3.29)	3437	40						
7	8.3.15	27	42	37	1	35	1	37	151	4	3588	44						
8	9.3.14	28	38	42	1	35	2	40	155	3 M1.C1 (3.27)	3734	47						
9	10.3.13	29	37	35		34	1	41	147	4 S1 (3.20) C2 (3.26)	3890	51						
10	11.3.12	30	36	32	2			38	135	14	4025	65						
11	12.3.14	31	33	39	4			42	148	16 M1 (3.31)	4173	81						
12	13.3.14	32	40	34	3			29	136	9	4309	90						
13	14.3.14	33	40	40	7			37	154	11	4463	101	13			22	22	
14	15.3.14	34	41	37	8			41	158	22	4621	123	11		9	20	42	
15	16.3.12	35	32	40	14			38	145	27 C1 (3.24) C 1 (3.26)	4766	150	7		9	16	58	
16	17.3.16	36	37	37	9			42	152	17	4918	167	14		11	25	83	
17	18.3.16	37	32	35	4			38	139	7	5057	174	12		13	25	108	
18	19.3.16	38	40	36	6			40	148	13 M1C1 (3.22)	5205	187	15	2		27	135	
19	20.3.14	39	47	35	6			37	153	16 M1 (3.25)	5358	203	13	2		28	163	
20	21.3.13	40	43		35	6		37	144	12 M1 (3.25)	5502	215	11	1		20	183	
21	22.3.12	41	47		33	6		43	149	18 C2 (3.19) E1 (3.26)	5651	233	11		12	23	206	
22	23.3.11	42	43		32	1		41	149	14 S2 C4 (3.29)	5800	247	8	1		15	221	
23	24.3.16	43	44		37	5		31	156	15 M1 (3.19) M5S2C4 (3.26)	5956	262	9	2		20	241	
24	25.3.15	44	36		32	4		30	131	15 M2 S3 C6 (3.26)	6087	277	10			17	258	
25	26.3.14	45	40		41	6		37	155	18 M3 C12 (3.26)	6242	295	10			17	275	
26	27.3.13	46	26		33	3		37	125	8 S1 C5 (3.27)	6367	303	8	1		15	290	
27	28.3.11	47	39		39	4		33	146	14 M5 E1 C9 (3.28)	6513	317	10			16	306	
28	29.3.17	48	31		31	1		35	135	9 M1 C9 (3.28)	6648	326	11		6	2	19	
29	30.3.16	49	37		47	5		27	149	20 C1 (3.28)	6797	346	11		5	6	22	
30	31.3.15	50	37		35	4		37	145	13	6942	359	13		2	4	19	
R元	R2.3.13	51	40		32	7		28	136	21 S1 C1 (3.23)	7078	380	4		5	5	14	
2	3.3.19	52	25		36	4		34	130	22 E1 (3.25)	7208	402	8		4	4	16	
3	4.3.18	53	33		45	6		31	147	19 M1 S2 C1 (3.25) M1 E1 (3.31)	7355	421	10		12	2	27	
4	5.3.17	54	32		40	4		30	138	19	7493	440	11		4	1	19	
5	6.3.15	55	36		31	6		38	147	29 S1 (3.19) M1 E1 S1 (3.26)	7640	469	8		4	6	18	
6	7.3.14	56	34		36	7		39	146	23	7786	492	6		4	5	15	
			2858	1426	615	79	813	18	1129	74	7786	492	244	10	144	1	46	3

年度別入学者数卒業者数

入学年度	学 科	入学者数	卒業者数	卒業年
40	機械工学科	88	71	45
	電気工学科	44	35	
	計	132	106	
41	機械工学科	80	78	46
	電気工学科	40	38	
	計	120	116	
42	機械工学科	80	71	47
	電気工学科	40	32	
	計	120	103	
43	機械工学科	80	73	48
	電気工学科	40	40	
	計	120	113	
44	機械工学科	80	76	49
	電気工学科	40	30	
	計	120	106	
45	機械工学科	80	66	50
	電気工学科	40	37	
	土木工学科	40	28	
46	機械工学科	80	66	51
	電気工学科	40	39	
	土木工学科	39	35	
47	機械工学科	73	64	52
	電気工学科	40	40	
	土木工学科	40	38	
48	機械工学科	68	57	53
	電気工学科	40	35	
	土木工学科	40	38	
49	機械工学科	80	63	54
	電気工学科	39	32	
	土木工学科	39	33	
50	機械工学科	76	71	55
	電気工学科	38	32	
	土木工学科	38	33	
51	機械工学科	78	61	56
	電気工学科	40	36	
	土木工学科	40	31	
52	機械工学科	80	72	57
	電気工学科	40	37	
	土木工学科	40	30	
53	機械工学科	79	64	58
	電気工学科	40	40	
	土木工学科	40	32	
54	機械工学科	80	69	59
	電気工学科	40	36	
	土木工学科	40	29	
55	機械工学科	80	61	60
	電気工学科	39	40	
	土木工学科	40	39	
	計	159	140	

入学年度	学 科	入学者数	卒業者数	卒業年
56	機械工学科	80	72	61
	電気工学科	40	32	
	土木工学科	40	36	
57	機械工学科	83	61	62
	電気工学科	42	36	
	土木工学科	40	32	
58	機械工学科	80	74	63
	電気工学科	41	37	
	土木工学科	40	40	
59	機械工学科	80	61	平成元
	電気工学科	40	38	
	土木工学科	40	31	
60	機械工学科	80	72	平成2
	電気工学科	40	33	
	土木工学科	40	27	
61	機械工学科	80	66	平成3
	電気工学科	40	39	
	土木工学科	40	32	
62	機械工学科	80	73	平成4
	電気工学科	40	38	
	土木工学科	40	39	
63	機械工学科	80	72	平成5
	電気工学科	40	41	
	土木工学科	40	31	
平成元	機械工学科	80	64	平成6
	電気工学科	42	38	
	土木工学科	40	32	
平成2	機械工学科	40	42	平成7
	電気工学科	40	36	
	電子制御工学科	41	41	
平成3	機械工学科	41	42	平成8
	電気工学科	40	37	
	電子制御工学科	41	37	
平成4	機械工学科	40	38	平成9
	電気工学科	40	42	
	電子制御工学科	40	40	
平成5	機械工学科	40	37	平成10
	電気工学科	41	35	
	電子制御工学科	42	41	
	計	163	147	

年度別入学者数卒業者数

入学年度	学 科	入学者数	卒業者数	卒業年
平成 6	機械工学科	40	36	平成 11
	電気工学科	39	32	
	電子制御工学科	40	38	
	建設システム工学科	40	29	
	計	159	135	
平成 7	機械工学科	40	33	平成 12
	電気工学科	42	39	
	電子制御工学科	42	42	
	建設システム工学科	41	34	
	計	165	148	
平成 8	機械工学科	41	40	平成 13
	電気工学科	41	34	
	電子制御工学科	40	29	
	建設システム工学科	41	33	
	計	163	136	
平成 9	機械工学科	42	40	平成 14
	電気工学科	42	40	
	電子制御工学科	41	37	
	建設システム工学科	42	37	
	計	167	154	
平成 10	機械工学科	41	41	平成 15
	電気工学科	42	37	
	電子制御工学科	41	41	
	建設システム工学科	42	39	
	計	166	158	
平成 11	機械工学科	41	32	平成 16
	電気工学科	42	40	
	電子制御工学科	41	38	
	建設システム工学科	42	35	
	計	166	145	
平成 12	機械工学科	43	37	平成 17
	電気工学科	43	37	
	電子制御工学科	41	42	
	建設システム工学科	43	36	
	計	170	152	
平成 13	機械工学科	41	32	平成 18
	電気工学科	40	35	
	電子制御工学科	41	38	
	建設システム工学科	41	34	
	計	163	139	
平成 14	機械工学科	43	40	平成 19
	電気工学科	42	36	
	電子制御工学科	41	40	
	建設システム工学科	42	32	
	計	168	148	
平成 15	機械工学科	39	47	平成 20
	電気工学科	41	35	
	電子制御工学科	42	37	
	建設システム工学科	38	34	
	計	160	153	
平成 16	機械工学科	44	43	平成 21
	電気情報工学科	44	35	
	電子制御工学科	45	37	
	建設システム工学科	43	29	
	計	176	144	

入学年度	学 科	入学者数	卒業者数	卒業年
平成 17	機械工学科	43	47	平成 22
	電気情報工学科	43	33	
	電子制御工学科	41	43	
	建設システム工学科	42	26	
	計	169	149	
平成 18	機械工学科	43	43	平成 23
	電気情報工学科	43	32	
	電子制御工学科	42	41	
	建設システム工学科	45	33	
	計	173	149	
平成 19	機械工学科	42	44	平成 24
	電気情報工学科	42	37	
	電子制御工学科	41	31	
	建設システム工学科	45	44	
	計	170	156	
平成 20	機械工学科	41	36	平成 25
	電気情報工学科	41	32	
	電子制御工学科	42	30	
	建設システム工学科	42	33	
	計	166	131	
平成 21	機械工学科	42	40	平成 26
	電気情報工学科	43	41	
	電子制御工学科	42	37	
	建設システム工学科	40	37	
	計	167	155	
平成 22	機械工学科	37	26	平成 27
	電気情報工学科	39	33	
	電子制御工学科	43	37	
	建設システム工学科	42	29	
	計	161	125	
平成 23	機械工学科	42	39	平成 28
	電気情報工学科	42	39	
	電子制御工学科	44	33	
	建設システム工学科	41	35	
	計	169	146	
平成 24	機械工学科	41	31	平成 29
	電気情報工学科	43	31	
	電子制御工学科	39	35	
	建設システム工学科	45	38	
	計	168	135	
平成 25	機械工学科	41	37	平成 30
	電気情報工学科	41	47	
	電子制御工学科	38	27	
	建設システム工学科	42	38	
	計	162	149	
平成 26	機械工学科	41	37	平成 31
	電気情報工学科	42	35	
	電子制御工学科	43	37	
	建設システム工学科	41	36	
	計	167	145	

入学年度	学 科	入学者数	卒業生数	卒業年
平成 27	機械工学科	44	40	令和 2
	電気情報工学科	39	32	
	電子制御工学科	42	28	
	建設システム工学科	39	36	
	計	164	136	
平成 28	機械工学科	40	25	令和 3
	電気情報工学科	45	36	
	電子制御工学科	41	34	
	建設システム工学科	42	35	
	計	168	130	
平成 29	機械工学科	41	33	令和 4
	電気情報工学科	43	45	
	電子制御工学科	44	31	
	建設システム工学科	43	38	
	計	171	147	
平成 30	機械工学科	42	32	令和 5
	電気情報工学科	44	40	
	電子制御工学科	40	30	
	建設システム工学科	42	36	
	計	168	138	
平成 31	機械工学科	41	36	令和 6
	電気情報工学科	41	31	
	電子制御工学科	42	38	
	建設システム工学科	41	42	
	計	165	147	
令和 2	機械工学科	43	34	令和 7
	電気情報工学科	42	36	
	電子制御工学科	40	39	
	建設システム工学科	42	37	
	計	167	146	
令和 3	機械工学科	40		令和 8
	電気情報工学科	38		
	電子制御工学科	38		
	建設システム工学科	34		
	計	150		
令和 4	機械工学科	41		令和 9
	電気情報工学科	41		
	電子制御工学科	41		
	建設システム工学科	42		
	計	165		
令和 5	機械工学科	41		令和 10
	電気情報工学科	41		
	電子制御工学科	42		
	建設システム工学科	40		
	計	164		
令和 6	機械工学科	41		令和 11
	電気情報工学科	41		
	電子制御工学科	41		
	建設システム工学科	40		
	計	163		
合計	機械工学科	3,428	2,858	
	電気工学科	1,580	1,426	
	電気情報工学科	878	615	
	電子制御工学科	1,445	1,129	
	土木工学科	957	813	
	建設システム工学科	1,285	945	
	合計	9,573	7,786	

※平成 6～平成 9 年の建設システム工学科の卒業生数は
土木工学科の卒業生数

※平成 16～平成 19 年の電気情報工学科の卒業生数は
電気工学科の卒業生数

入試・入学生の状況

■ 入試倍率の推移

入試年度	機械	電気情報	電子制御	建設システム	総合
平成 27	1.70	1.28	1.53	1.70	1.55
平成 28	1.28	1.35	1.63	1.50	1.44
平成 29	1.45	1.18	1.48	1.28	1.34
平成 30	1.33	1.70	1.70	1.35	1.52
平成 31	1.38	1.65	1.68	1.65	1.59
令和 2	1.15	1.20	1.38	1.33	1.26
令和 3	1.03	1.05	1.08	0.88	1.01
令和 4	1.05	1.55	1.05	1.33	1.24
令和 5	0.90	1.45	1.10	1.05	1.13
令和 6	1.28	1.10	1.08	1.05	1.13

■ 推薦入試（特別選抜）の志願者数の推移

入試年度	機械	電気情報	電子制御	建設システム	総合
平成 27	36	17	23	25	101
平成 28	14	25	35	32	106
平成 29	27	24	28	24	103
平成 30	27	28	28	28	111
平成 31	34	40	37	44	155
令和 2	19	26	35	41	121
令和 3	23	27	21	19	90
令和 4	39	54	41	50	184
令和 5	35	51	37	40	163
令和 6	48	38	41	41	168

■ 編入学生

入学年度	学科	学生数
平成 27	機械工学科	0
	電気情報工学科	2
	電子制御工学科	1
	建設システム工学科	1
	計	4
平成 28	機械工学科	2
	電気情報工学科	2
	電子制御工学科	1
	建設システム工学科	0
	計	5
平成 29	機械工学科	0
	電気情報工学科	0
	電子制御工学科	2
	建設システム工学科	0
	計	2
平成 30	機械工学科	0
	電気情報工学科	1
	電子制御工学科	0
	建設システム工学科	0
	計	1
平成 31	機械工学科	0
	電気情報工学科	2
	電子制御工学科	0
	建設システム工学科	0
	計	2
令和 2	機械工学科	0
	電気情報工学科	1
	電子制御工学科	0
	建設システム工学科	0
	計	1

入学年度	学科	学生数
令和 3	機械工学科	0
	電気情報工学科	0
	電子制御工学科	0
	建設システム工学科	0
	計	0
令和 4	機械工学科	0
	電気情報工学科	0
	電子制御工学科	0
	建設システム工学科	0
	計	0
令和 5	機械工学科	0
	電気情報工学科	0
	電子制御工学科	0
	建設システム工学科	0
	計	0
令和 6	機械工学科	0
	電気情報工学科	0
	電子制御工学科	0
	建設システム工学科	0
	計	0
令和 7	機械工学科	0
	電気情報工学科	0
	電子制御工学科	0
	建設システム工学科	0
	計	0
合計	機械工学科	2
	電気情報工学科	8
	電子制御工学科	4
	建設システム工学科	1
	計	15

■ 専攻科

平成27年度

専攻名	入学 定員	志願 倍率	志願者	合格者	入学者	入学者の出身高専別内訳
電気電子システム工学コース			12	11 (1)	10	本 校 10
機械制御システム工学コース			10	10 (3)	6	本 校 6
建設工学コース			5	3	3	本 校 3
合 計	16	1.7	27	24 (4)	19	本 校 19 他高専 0

() 内は辞退者

平成28年度

専攻名	入学 定員	志願 倍率	志願者	合格者	入学者	入学者の出身高専別内訳
電気電子システム工学コース			17 【1】	11	11	本 校 11
機械制御システム工学コース			17	6 (1)	5	本 校 5
建設工学コース			8	6	6	本 校 6
合 計	16	2.6	42 【1】	23 (1)	22	本 校 22 他高専 0

【 】内は社会人

() 内は辞退者

平成29年度

専攻名	入学 定員	志願 倍率	志願者	合格者	入学者	入学者の出身高専別内訳
電気電子システム工学コース			20 {1}	14 (1)	13	本 校 10 奈良 2 福 井 1
機械制御システム工学コース			8	3 (1)	2	本 校 2
建設工学コース			4	3	3	本 校 3
合 計	16	2.0	32 {1}	20 (2)	18	本 校 15 他高専 3

{ } は途中失格

() 内は辞退者

平成30年度

専攻名	入学 定員	志願 倍率	志願者	合格者	入学者	入学者の出身高専別内訳
電気電子システム工学コース			7	7 (2)	5	本 校 5
機械制御システム工学コース			6	5	5	本 校 4 岐 阜 1
建設工学コース			6 {1}	5	5	本 校 5
合 計	16	1.2	19 {1}	17 (2)	15	本 校 14 他高専 1

{ } は途中失格

() 内は辞退者

平成31年度

専攻名	入学 定員	志願 倍率	志願者	合格者	入学者	入学者の出身高専別内訳
電気電子システム工学コース			13	10 (2)	8	本 校 7 奈 良 1
機械制御システム工学コース			8	5	5	本 校 5
建設工学コース			6	5 (1)	4	本 校 4
合 計	16	1.7	27	20 (3)	17	本 校 16 他高専 1

() 内は辞退者

令和2年度

専攻名	入学 定員	志願 倍率	志願者	合格者	入学者	入学者の出身高専別内訳
電気電子システム工学コース			17	14	10	本校 9 明石 1
機械制御システム工学コース			23	19	11	本校 11
建設工学コース			10	6	6	本校 6
合 計	16	3.1	50	39	27	本校 26 他高専 1

令和3年度

専攻名	入学 定員	志願 倍率	志願者	合格者	入学者	入学者の出身高専別内訳
電気電子システム工学コース			22 (1)	13	11	本校 10 奈良 1
機械制御システム工学コース			8 (2)	4	4	本校 4
建設工学コース			9 (1)	5	4	本校 4
合 計	16	2.4	39 (4)	22	19	本校 18 他高専 1

() 内は辞退者

令和4年度

専攻名	入学 定員	志願 倍率	志願者	合格者	入学者	入学者の出身高専別内訳
電気電子システム工学コース			8	8	8	本校 6 群馬 1 呉 1
機械制御システム工学コース			7	5 (1)	4	本校 4
建設工学コース			10	6	6	本校 6
合 計	16	1.6	25	19 (1)	18	本校 16 他高専 2

() 内は辞退者

令和5年度

専攻名	入学 定員	志願 倍率	志願者	合格者	入学者	入学者の出身高専別内訳
電気電子システム工学コース			12	12	6	本校 5 長野 1
機械制御システム工学コース			6 (1)	5	4	本校 3 奈良 1
建設工学コース			5	5	5	本校 5
合 計	16	1.4	23 (1)	22	15	本校 13 他高専 2

() 内は辞退者

令和6年度

専攻名	入学 定員	志願 倍率	志願者	合格者	入学者	入学者の出身高専別内訳
電気電子システム工学コース			11 (1)	10	6	本校 6
機械制御システム工学コース			13 (3)	10	4	本校 4
建設工学コース			8 (1)	7	6	本校 6
合 計	16	2.0	32 (5)	27	16	本校 16 他高専 0

() 内は辞退者

■ 外国人留学生年度別・学科別入学者数一覧

入学年度	学 科	国 籍	備 考
平成 27	建設システム工学科	モンゴル	第 3 学年編入
28	電子制御工学科	タイ	
29	電子制御工学科	マレーシア	
	建設システム工学科	ルワンダ	
30	機械工学科	モンゴル	
	建設システム工学科	ラオス	
31	電気情報工学科	モンゴル	
令和 2	なし		
3	電気情報工学科	モンゴル	
	建設システム工学科	マレーシア	
4	電気情報工学科	モンゴル	
5	建設システム工学科	カンボジア	
6	電気情報工学科	モンゴル	
	電子制御工学科	フィリピン	

R 7 . 1 . 1 現在

在職者一覧

校 長 工学博士		林 康裕		事務部		事務部長 牧野 弘史	
名 誉 教 授		人文科学部門		総務課		教育研究支援センター	
野口 一	萩野 文丸	教 授	修(文) 藤田 憲司	総務課長	大西 智之	センター長(併)	谷川 博哉
			博(文) 牧野 雅司	課長補佐	芦田 康弘	技術長	北代 浩次
田中 裕	牧野 州秀	准 教 授	修(文) 大内真一郎	専門員	大石 徹	技術専門職員	眞柄 賢一
五十嵐安雄	川勝 邦夫		博(文) 荻田みどり	専門員	由良 耕士	技術専門職員	畑 亮次
木村作治郎	竹内 敬治		博(文) 山根 秀介	総務係長	中嶋 智範	技術専門職員	能勢 嘉朗
西村永太郎	武田 八郎	講 師	博(文) 武田 悠希	総務係主任	上原 和美	技術専門職員	石井 貴弘
杉本 修一	伊藤 直人		修(文) 平尾 恵美	総務係主任	三浦 幸代	技術専門職員	櫻井 一樹
中谷喜久治	北原 紀之	助 教	学(人) 岡下 朋世	総務係員	川西 祐子	技術専門職員	西村 良平
東 慎之介	岡本 寛昭		博(法) 竹内 大樹	総務係員	小野 萌夏	技術専門職員	榎田 勲
奥野 純平	小野 紘一		博(文) 任 雅楠	事務補佐員	小林 薫里	技術職員	高本 優也
竹内 正	川合 茂	自然科学部門		地域連携・研究推進係長(併)	芦田 康弘	技術職員	蔭山海一郎
水渡 英二	太田 泰雄	教 授	博(理) 上杉 智子	地域連携・研究推進係主任	石丸 真那	技術職員	足立 正人
山本 孟	三川 譲二		博(理) 奥村 昌司	事務補佐員	佐野 幸	技術職員	依藤 遼
村井良多加	松井 信義		博(理) 岡田 浩嗣	財務係長(併)	大西 智之	技術補佐員	植田 邦明
戸祭 武	村上美登志	准 教 授	修(体) 木村 健二	財務係主任	池澤 拓史	社会基盤メンテナンス教育センター	
四方 進	新池 一弘		博(理) 宝利 剛	財務係主任	吉田 紘輔	センター長(併)	玉田 和也
藤村 重美	荒川 吉孝		博(工) 小島 広孝	財務係員	藤原 佳代	特命准教授	嶋田 知子
高木 靖一	宮野 敏男		博(数) 喜友名朝也	財務係員	吉岡 真生	事務補佐員	芦田 洋子
新國 誠	垂谷 茂弘	講 師	博(理) 熊谷 大雅	財務係員	高雄めぐみ	事務補佐員	大田 誠
阿波屋義照	金山 光一		助 教	博(理) 馬越 春樹	用度係長	渡邊 彰宏	事務補佐員
多田 利雄	平地 克也	嘱託教授	教育学士 小野伸一郎	用度係主任	池澤 容子	事務補佐員	田谷 友美
若林 二郎	金森 満	機械工学科		事務補佐員	中村 実香	事務補佐員	山本 清美
福本 嶺生	齋藤 福栄	教 授	博(工) 篠原 正浩	施設係長	岩見 遼平	技術補佐員	山崎 邦子
田中 洋	亀谷 睦		博(工) 谷川 博哉	技術補佐員	今安 守	スタートアップ人材育成センター	
高田 雄次	背戸柳 実		博(工) 豊田 香	技術補佐員	浅田 清三	センター長(併)	片山 英昭
柴田 和作	中川 重康		博(工) 山田耕一郎	技能補佐員	中田 安秋	技術補佐員	植田 邦明
白石 成人	田村 修一	准 教 授	博(工) 小林 洋平	技能補佐員	河田 敏一	学生相談室	
市村憲太郎	西山 等		博(工) 村上信太郎	技能補佐員	川崎 清美	室長(併)	木村 健二
小西 経男	四蔵 茂雄		博(工) 室巻 孝郎	学生課		特命教授	後野 文雄
上田 和彦	内海 康雄	助 教	修(工) 中村 丞	学生課長	西村雄二郎	特命助教	橋本 茂
坪根 治廣	小野伸一郎	嘱託教授	博(工) 西山 等	課長補佐	富田 誠	カウンセラー	坂口なぎさ
東 邦夫	野間 正泰	電気情報工学科		教務係長	大和 健治	カウンセラー	中川 亜希
塩見 堯	井淵 弘昭	教 授	博(工) 片山 英昭	専門職員(入試担当)	住友 靖代	看護師	佐々木和子
井淵 弘昭			博(理) 竹澤 智樹	教務係主任	中道 晶子	看護師	上山 淳子
西村 萬平			博(工) 内海 淳志	教務係員	櫻井 真人	機械工学科小林洋平研究室	
			博(工) 丹下 裕	事務補佐員	宮代 由佳	技術補佐員	坂本 理恵
		准 教 授	博(工) 船木 英岳	事務補佐員	山口 光代		
			博(工) 井上 泰仁	学生支援係長	田中 智也		
			博(工) 七森 公碩	学生支援係員	森脇 優奈		
		講 師	博(シ) 森 健太郎	学生支援係員	松浦 麻衣		
			電子制御工学科		看護師	清水智苗美	
		教 授	博(工) 仲川 力	事務補佐員	森下佐世里		
			博(工) 伊藤 稔	事務補佐員	松崎 徹		
			博(工) 西 佑介	学術情報係長(併)	富田 誠		
		准 教 授	博(工) 清原 修二	事務補佐員	興邊 知穂		
			博(工) 石川 一平	事務補佐員	福村 一恵		
			博(工) 花田 研太	事務補佐員	前中ひろみ		
			博(工) 高木 太郎	事務補佐員	棕本 直子		
			博(工) 若林 勇太	寮務係長	南部 佳紀		
		助 教	博(工) 古殿 幸大	寮務係主任	上方 力		
		嘱託教授	博(工) 野間 正泰	事務補佐員	中村 綾		
		建設システム工学科		事務補佐員	成田 冬江		
		教 授	博(工) 玉田 和也	事務補佐員	小田佳代美		
			博(工) 山崎 慎一	事務補佐員	田邊美津子		
			博(芸) 尾上 亮介	学生寮指導員	池田 誠		
			博(工) 加登 文学	学生寮指導員	田村 清		
			博(工) 徳永 泰伸	学生寮指導員	西木 孝好		
		准 教 授	博(工) 渡部 昌弘	学生寮指導員	上山 淳子		
			博(工) 中尾 尚史	学生寮指導員	矢野由紀恵		
			博(工) 毛利 聡	学生寮指導員	谷川いずみ		
		講 師	博(工) 今村友里子				
		助 教	修(情) 平子 遼				

新任者・退任者一覧

教 員

年度	新任・転入			退任・転出		
H27	校長	齋藤 福栄	国立教育政策研究所	自然科学部門	小松 幸恵	
	人文科学部門	畑 恵里子		電気情報工学科	新池 一弘	
	人文科学部門	牧野 雅司		人文科学部門	宮崎 操	再雇用期間満了
	建設システム工学科	毛利 聡				
	人文科学部門	松井 信義	再雇用			
	人文科学部門	村上 美登志	再雇用			
H28	人文科学部門	藤田 憲司		建設システム工学科	宮元 健次	
	自然科学部門	喜友名 朝也		人文科学部門	荒川 吉孝	
	人文科学部門	山根 秀介		自然科学部門	宮野 敏男	
	自然科学部門	木村 健二		人文科学部門	松井 信義	再雇用期間満了
H29	人文科学部門	荒川 吉孝	再雇用	校長	齋藤 福栄	文部科学省
	建設システム工学科	今村 友里子		人文科学部門	垂谷 茂弘	
				機械工学科	生水 雅之	
				機械工学科	須田 敦	奈良高専
				電子制御工学科	奥村 幸彦	
				建設システム工学科	三輪 浩	
				電気情報工学科	金山 光一	
				電気情報工学科	平地 克也	
				電子制御工学科	金森 満	
H30	校長	内海 康雄	仙台高専	人文科学部門	畑 恵里子	
	自然科学部門	高倉 克人	鈴鹿高専	自然科学部門	亀谷 睦	
	自然科学部門	宝利 剛		自然科学部門	高倉 克人	鈴鹿高専
	電気情報工学科	七森 公碩		電気情報工学科	竹澤 智樹	高専機構本部 事務局(タイ派遣)
	電子制御工学科	若林 勇太		人文科学部門	荒川 吉孝	再雇用期間満了
	人文科学部門	垂谷 茂弘	再雇用			
	電気情報工学科	金山 光一	再雇用			
	電気情報工学科	平地 克也	再雇用			
	建設システム工学科	上野 卓也				
H31	人文科学部門	荻田 みどり		自然科学部門	梅垣 浩二	
	人文科学部門	大内 真一郎		人文科学部門	吉永 進一	
	人文科学部門	KHAN SAMIA HASEEB	任期付き	人文科学部門	KHAN SAMIA HASEEB	任期満了
	電気情報工学科	廣芝 伸哉	任期付き	機械工学科	野毛 宏文	
	電子制御工学科	藤司 純一		電子制御工学科	町田 秀和	
				電気情報工学科	金山 光一	再雇用期間満了
				電気情報工学科	平地 克也	再雇用期間満了
R2	人文科学部門	平尾 恵美		人文科学部門	垂谷 茂弘	再雇用期間満了
	自然科学部門	小島 広孝		建設システム工学科	高谷 富也	病没
	自然科学部門	熊谷 大雅		人文科学部門	KAY JONATHAN-DAVID ROBERT	
	電気情報工学科	森 健太郎		自然科学部門	背戸柳 実	
	機械工学科	山本 昌平		自然科学部門	宮崎 昭仁	
	電子制御工学科	西 佑介		電気情報工学科	中川 重康	
				電気情報工学科	廣芝 伸哉	任期満了
				建設システム工学科	上野 卓也	

年度	新任・転入			退任・転出		
R3	電気情報工学科	竹澤 智樹	高専機構本部事務局	電子制御工学科	藤司 純一	
	人文科学部門	Aames Jimmy		機械工学科	山本 昌平	
	自然科学部門	背戸柳 実	再雇用			
	電気情報工学科	中川 重康	再雇用			
	建設システム工学科	岩木 真穂	任期付き			
	人文科学部門	岡下 朋世				
R4	自然科学部門	馬越 春樹		校長	内海 康雄	
	建設システム工学科	中尾 尚史		人文科学部門	田村 修一	
				人文科学部門	Aames Jimmy	
				機械工学科	西山 等	
				電気情報工学科	芦澤 恵太	
				電子制御工学科	川田 昌克	北九州高専
				建設システム工学科	四蔵 茂雄	
				建設システム工学科	岩木 真穂	任期満了
				自然科学部門	背戸柳 実	再雇用期間満了
R5	校長	林 康裕	京都大学	人文科学部門	児玉 圭司	
	建設システム工学科	山崎 慎一	高知高専	自然科学部門	小野 伸一郎	
	建設システム工学科	平子 遼	任期付き	電子制御工学科	野間 正泰	
	人文科学部門	田村 修一	再雇用	人文科学部門	田村 修一	再雇用期間満了
	機械工学科	西山 等	再雇用			
	機械工学科	中村 丞	任期付き			
R6	人文科学部門	武田 悠希		人文科学部門	山根 秀介	
	人文科学部門	竹内 大樹		機械工学科	西山 等	再雇用期間満了
	人文科学部門	任 雅楠				
	電子制御工学科	花田 研太				
	電子制御工学科	古殿 幸大				
	自然科学部門	小野 伸一郎	再雇用			
	電子制御工学科	野間 正泰	再雇用			

※ 任期付き採用について、継続して任期なし採用となった場合もしくは博士号取得により任期の定めがなくなった場合、最初の採用日のみ掲載した。

職員

年度	新任・転入			退任・転出		
H27	学生課長	松梨 英輔	富山高専	事務部長	吉永 祥二	奈良高専
	総務課課長補佐(総務・企画)	平野 彰人	京都大学	学生課課長補佐	橋本 豊	
	総務課総務係長	山崎 友顕	京都大学	総務課施設係	吉川 峻介	京都大学
	総務課財務係長	千葉 崇博	京都大学	教育研究支援センター	森内 基隆	再雇用期間満了
	総務課総務係	芦田 康弘	京都大学	教育研究支援センター	福村 一実	再雇用期間満了
	教育研究支援センター	畑 亮次	沖縄高専	教育研究支援センター	中田 良平	再雇用期間満了
	総務課施設係	荒賀 順一				
H28	事務部長	桑原 豊	奈良先端科学技術 大学院大学	総務課長	藤元 高德	鳥取大学
	総務課施設係	丸井 寧子	山口大学	総務課課長補佐	平野 彰人	京都大学
	学生課教務係	中村 仁美		総務課総務係長	山崎 友顕	京都大学
	学生課学術情報係	中川 清光		総務課財務係長	千葉 崇博	京都大学
				総務課財務係	吉川沙也加	国立民族学博物館
				総務課用度係	大谷 康祐	京都大学
H29				総務課施設係長	荒賀 順一	
	総務課長	窪田 仁	和歌山高専	学生課寮務係	南 圭祐	京都大学
	総務課課長補佐(財務)	吉田 善弘	京都大学	総務課施設係	丸井 寧子	京都大学
	総務課課長補佐(施設)	岸脇 智英	滋賀医科大学	教育研究支援センター	西川 隼人	福井工業大学
	総務課総務係	藤原 佳代		教育研究支援センター	古林 達哉	明石高専
	総務課財務係	田中 智也		総務課財務係	古川 朋子	任期満了
	学生課寮務係	南 圭祐				
	総務課施設係	荒賀 順一	再雇用			
	総務課財務係	古川 朋子	任期付き			
	総務課用度係	上方 力				
H30	学生課教務係	金丸 亮太				
	総務課施設係	杉山 喜廣	北陸先端科学技術 大学院大学	総務課財務係	大谷 利佳	
				学生課教務係	山崎 基史	高専機構本部事務局
	教育研究支援センター	井谷 武史	明石高専	学生課長	松梨 英輔	
	教育研究支援センター	高本 優也		総務課課長補佐(財務)	吉田 善弘	京都大学
	総務課施設係	岩見 遼平		学生課教務係	中川 清光	
H31	総務課財務係	古川 朋子	任期付き	学生課学術情報係長	松宮 正明	
				教育研究支援センター	植田 邦明	
				学生課寮務係	中道 晶子	再雇用期間満了
				学生課	嵯峨 信子	雇用期間満了
	学生課教務係	井上 周		学生課教務係	中村 仁美	
	学生課寮務係	中道 晶子		学生課学生支援係長	荻野 弘貴	明石高専
	学生課学術情報係	松宮 正明	再雇用	事務部長	桑原 豊	
	教育研究支援センター	植田 邦明	再雇用	総務課長	窪田 仁	鈴鹿高専
	総務課総務係	石丸 真那		総務課課長補佐(施設)	岸脇 智英	奈良先端科学技術 大学院大学
	学生課学生支援係	上原 和美	任期付き			
R2	総務課用度係	森下 達也		総務課施設係	杉山 喜廣	和歌山大学
	総務課専門職員	中嶋 智範		学生課教務係	本多 祐子	兵庫教育大学
				学生課寮務係長	半田 健	
	事務部長	佐良 俊久	神戸大学	総務課財務係	増田 智仁	阿南高専
	総務課長	室溪 浩	北陸先端科学技術 大学院大学	学生課教務係	井上 周	
				総務課長	室溪 浩	高専機構本部事務局
	学生課長	山口 秀朗	京都教育大学	教育研究支援センター	井谷 武史	明石高専
	総務課総務係	三浦 幸代		学生課学生支援係	北山 あさ	任期満了
	総務課施設係	南 圭祐	京都大学			
	総務課財務係	吉田 紘輔				
	学生課教務係	宮川 麻美				
	学生課寮務係長	上羽 直樹				
	学生課学生支援係	北山 あさ	任期付き			

年度	新任・転入			退任・転出		
R3	総務課長 学生課学生支援係 教育研究支援センター 総務課専門職員	増永 武夫 北山 あさ 蔭山 海一郎 大石 徹	福井高専 京都大学	総務課施設係 総務課用度係 学生課寮務係長 学生課長 教育研究支援 センター技術長 総務課施設係	南 圭祐 北山 あさ 上羽 直樹 山口 秀朗 福井 繁雄 荒賀 順一	 国際日本文化研究センター 再雇用期間満了
R4	学生課長 教育研究支援センター 学生課学生支援係	下元 利之 足立 正人 森脇 優奈	徳山高専	事務部長 総務課総務係 総務課財務係	佐良 俊久 上原 和美 古川 朋子	 任期満了 任期満了
R5	事務部長 総務課総務係 学生課財務係 学生課寮務係 総務課財務係	寒川 真光 小野 萌夏 上原 和美 成田 冬江 吉岡 真生	津山高専 任期付き	学生課教務係 学生課学術情報係 事務部長 総務課長 学生課長 学生課教務係 学生課寮務係 教育研究支援センター	宮川 麻美 松宮 正明 寒川 真光 増永 武夫 下元 利之 金丸 亮太 成田 冬江 植田 邦明	 奈良高専 富山高専 新居浜高専 任期満了 再雇用期間満了
R6	事務部長 総務課長 学生課長 学生課教務係 総務課財務係 教育研究支援センター 学生課学生支援係	牧野 弘史 大西 智之 西村 雄二郎 櫻井 真人 高雄 めぐみ 依藤 遼 松浦 麻衣	大阪教育大学 自然科学研究機構 国立天文台 滋賀医科大学 任期付き	総務課用度係 事務部長 総務課専門員（施設） 総務課財務係	森下 達也 牧野 弘史 大石 徹 高雄 めぐみ	奈良高専 奈良高専 任期満了

教員（教官）構成人員の移り変わり

昭和60年の教官構成人員			平成16年の教員構成人員			平成26年の教員構成人員			令和6年の教員構成人員		
一般科目	教授 助教授 講師	10 9 1	一般科目	教授 助教授 講師	6 12 4	一般科目	教授 准教授 特任准教授	10 8 1	一般科目	教授 准教授 講師 助教	5 7 3 4
機械工学科	教授 助教授 講師 助手	5 8 3 3	機械工学科	教授 助教授 講師 助手	5 5 0 2	機械工学科	教授 准教授 講師 助教	4 4 1 2	機械工学科	教授 准教授 講師 助教	4 3 0 1
電気工学科	教授 助教授 講師 助手	4 3 2 2	電気情報工学科	教授 助教授 講師 助手	4 2 1 2	電気情報工学科	教授 准教授 講師 助教	5 6 0 0	電気情報工学科	教授 准教授 講師 助教	4 3 1 0
			電子制御工学科	教授 助教授 講師 助手	4 2 3 0	電子制御工学科	教授 准教授 講師 助教	4 5 0 1	電子制御工学科	教授 准教授 講師 助教	3 5 0 1
土木工学科	教授 助教授 講師 助手	3 3 2 2	建設システム工学科	教授 助教授 講師 助手	4 4 0 2	建設システム工学科	教授 准教授 講師 助教	5 3 0 1	建設システム工学科	教授 准教授 講師 助教	5 3 1 1
合計		60	合計		62	合計		60	合計		54

欠員2

欠員1

欠員4

事務構成人員の移り変わり

昭和60年の事務構成人員			平成16年の事務構成人員			平成26年の事務構成人員			令和6年の職員構成人員		
事務部長		1	事務部長		1	事務部長		1	事務部長		1
庶務課	課長	1	庶務課	課長	1	総務課	課長	1	総務課	課長	1
	係長	3		専門職員	1		課長補佐(総務・企画)	1		課長補佐・専門員	3
	事務官	6		係長	3		課長補佐(財務)	1			
	技能補佐員	4		係員(主任含む)	4		係長	4		係長	3
	守衛(事務官)	1		事務補佐員	5		係員(主任含む)	8		係員(主任含む)	11
							事務補佐員	8		事務補佐員	3
小計		15	小計		14					技術補佐員	2
会計課	課長	1	会計課	課長	1					技能補佐員	3
	係長	4		専門職員	1						
	事務官	10		係長	4						
	文部技官	4		係員(主任含む)	8						
	文部技官(運転手)	1		事務補佐員	2						
	文部技官(ボイラー)	1		技能補佐員	2						
小計		21	小計		18	小計		23	小計		26
学生課	課長	1	学生課	課長	1	学生課	課長	1	学生課	課長	1
	係長	3		専門職員	1		課長補佐	1		課長補佐	1
	事務官	9		係長	3		係長	3		係長・専門職員	4
	文部技官(看護婦)	1		係員(主任含む)	7		係員(主任含む)	7		係員(主任含む)	5
	文部技官(栄養士)	1		事務補佐員	3		事務補佐員	8		看護師	1
	文部技官(寮)	1		看護師	1		看護師	1		事務補佐員	12
							再雇用職員	1		学生寮指導員	6
	文部技官(電算機センター)	1				小計		22	小計		30
	文部技官(化学・視聴覚)	1				教育研究支援センター			教育研究支援センター		
	実習係長	1		技術長	1	技術専門員	1		技術長	1	
	文部技官(実習)	13		技術職員	11	技術専門職員	7		技術専門職員	7	
小計		32	小計		28	技術職員	4		技術職員	4	
合計		69	合計		61	再雇用技術職員	3		技術補佐員	1	
						小計		15	小計		13
						合計		61	社会基盤メンテナンス教育センター		
									特命准教授	1	
									事務補佐員	5	
									技術補佐員	1	
									小計		7
									合計		77

役職教員一覧

	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度
校長	齋藤 福栄	齋藤 福栄	齋藤 福栄	内海 康雄	内海 康雄
副校長(大学COC事業副プロジェクト長)	平地 克也	平地 克也			
教務主事	金森 満	金森 満	高谷 富也	高谷 富也	高谷 富也
学生主事	谷川 博哉	谷川 博哉	小野伸一郎	小野伸一郎	小野伸一郎
寮務主事	仲川 力	仲川 力	仲川 力	仲川 力	仲川 力
専攻科長	三輪 浩	三輪 浩	三輪 浩	川田 昌克	川田 昌克
学 部 門 長					
機械工学科長	生水 雅之	生水 雅之	谷川 博哉	谷川 博哉	篠原 正浩
電気情報工学科長	中川 重康	竹澤 智樹	竹澤 智樹	片山 英昭	片山 英昭
電子制御工学科長	川田 昌克	川田 昌克	川田 昌克	野間 正泰	野間 正泰
建設システム工学科長	四蔵 茂雄	四蔵 茂雄	四蔵 茂雄	加登 文学	加登 文学
人文科学部門長	垂谷 茂弘	垂谷 茂弘	垂谷 茂弘	児玉 圭司	児玉 圭司
自然科学部門長	小野伸一郎	小野伸一郎	背戸柳 実	背戸柳 実	背戸柳 実
情報科学センター長	野間 正泰	野間 正泰	片山 英昭	片山 英昭	
図書館長	垂谷 茂弘	尾上 亮介	尾上 亮介	尾上 亮介	
学術情報センター長					片山 英昭
教育研究支援センター長	西山 等	西山 等	篠原 正浩	篠原 正浩	高谷 富也
地域共同テクノセンター長	平地 克也	平地 克也	平地 克也	玉田 和也	玉田 和也
国際交流センター長	荒川 吉孝	荒川 吉孝	竹澤 智樹	竹澤 智樹	藤田 憲司
進路指導委員長	玉田 和也	篠原 正浩	豊田 香	豊田 香	芦澤 恵太
学生相談室長	田村 修一	田村 修一	田村 修一	児玉 圭司	児玉 圭司
安全衛生委員会委員長	四蔵 茂雄	四蔵 茂雄	児玉 圭司	事務部長	事務部長

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
校長	内海 康雄	内海 康雄	内海 康雄	林 康裕	林 康裕
教務主事	川田 昌克	川田 昌克	川田 昌克	加登 文学	加登 文学
学生主事	小野伸一郎	片山 英昭	片山 英昭	山田耕一郎	山田耕一郎
寮務主事	豊田 香	豊田 香	児玉 圭司	児玉 圭司	藤田 憲司
総務担当副校長		小野伸一郎	小野伸一郎	片山 英昭	片山 英昭
専攻科長	加登 文学	加登 文学	加登 文学	内海 淳志	内海 淳志
学 部 門 長					
機械工学科長	山田耕一郎	西山 等	西山 等	篠原 正浩	谷川 博哉
電気情報工学科長	中川 重康	内海 淳志	内海 淳志	竹澤 智樹	丹下 裕
電子制御工学科長	野間 正泰	野間 正泰	野間 正泰	伊藤 稔	伊藤 稔
建設システム工学科長	尾上 亮介	尾上 亮介	尾上 亮介	尾上 亮介	玉田 和也
人文科学部門長	田村 修一	田村 修一	藤田 憲司	藤田 憲司	牧野 雅司
自然科学部門長	奥村 昌司	奥村 昌司	上杉 智子	上杉 智子	奥村 昌司
学術情報センター長	伊藤 稔	伊藤 稔	伊藤 稔	伊藤 稔	伊藤 稔
教育研究支援センター長	谷川 博哉	谷川 博哉	谷川 博哉	谷川 博哉	谷川 博哉
地域共同テクノセンター長	玉田 和也	玉田 和也	玉田 和也	玉田 和也	玉田 和也
国際交流センター長	藤田 憲司	藤田 憲司	藤田 憲司	藤田 憲司	大内真一郎
進路指導委員長	芦澤 恵太	芦澤 恵太	芦澤 恵太	片山 英昭	尾上 亮介
学生相談室長	児玉 圭司	児玉 圭司	岡田 浩嗣	岡田 浩嗣	木村 健二
安全衛生委員会委員長	事務部長	事務部長	事務部長	事務部長	事務部長

後援会役員

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	平成 31 年度
会 長	吉岡 正巳	笠飯 幸代	雲 文彦	番場 隆史	日下勢津子
副 会 長	笠飯 幸代	雲 文彦	番場 隆史	日下勢津子	平島 浩
	鰻田 明弘	新治 慎人	花籠 一江	山口 元	渡邊 好広
監 査	蛭子 義隆	黒田 建一	遊里道真吾	近江 光雄	矢野 憲治
	尾崎由三子	大當 裕史	保田 美生	矢野 憲治	四方 英治
	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度
会 長	荻野 悦生	樅木 和穂	松井 恵子	藤田美有紀	椎野矢征史
副 会 長	樅木由利子	末次 伸一	守田登志恵	椎野矢征史	竹原貴美子
	矢野 憲治	松井 恵子	藤田美有紀	細見美由紀	小野 哉美
監 査	小田 忍	三宅真由美	山本 孝一	蘆田 千春	横江 智子
	草間 佳子	藏内 晶代	澤里 美紀	横江 智子	野中 昭義

科学研究費一覧

科研費は、人文学、社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」（研究者の自由な発想に基づく研究）を格段に発展させることを目的とする「競争的研究費」であり、ピアレビューにより、豊かな社会発展の基盤となる独創的・先駆的な研究に対する助成を行うものです。本校では、科研費獲得に向けた科研費獲得説明会、査読体制の構築および機構本部支援ツールを活用等、科研費獲得支援活動を実施しています。

URL <https://www.maizuru-ct.ac.jp/introduction/publications/>



公開講座一覧

主に近隣の小中学生等を対象に本校の教職員を派遣して体験型の授業を実施する出前授業と本校教職員が企画し募集して実施する公開講座を行っています。高専ならではの知識や専門性を生かした講座や授業を行っており、難しそうな授業も対象者に合わせてわかりやすい内容で用意しています。

また、多くの授業・講座が自分の手で何かを作るといった体験型で楽しい内容となっております。そのような体験を通して子供達の探求心や観察力をはぐくみ、ものづくりのよろこびや感動を与えていきたいと考えています。

URL https://www.maizuru-ct.ac.jp/contribution/open_seminar/



施設・財政等の状況

■ 土 地 Land

敷地総面積	内 訳	
Land Area 126,695 m ²	校 舎 敷 地 College Building	49,674 m ²
	学 寮 敷 地 Dormitory	23,555 m ²
	運 動 場 敷 地 Ground	47,933 m ²
	実 験 実 習 地 Practice Workshop	754 m ²
	艇 庫 敷 地 Boathouse	453 m ²
	職 員 宿 舎 (浜) Lodging house for members of the staff (at Hama)	666 m ²
	職 員 宿 舎 (行永) Lodging house for members of the staff (at Yukinaga)	3,600 m ²

■ 建 物 Building

区分	名 称	構造	面積 (m ²)	完成年 (改修年等)
校 舎	管理部及び一般教科棟	Administration & General Subjects	RC-4	3,719 昭和41年 (平成14年)
	専攻科棟	Building for Advanced Faculty	RC-3	911 平成14年
	機械工学科棟	Building for Department of Mechanical Eng.	RC-3	3,039 昭和42年 (平成14年)
	電気情報工学科棟	Building for Department of Electrical and Computer Eng.	RC-3	1,448 昭和42年 (平成14年)
	電子制御工学科棟	Building for Department of Control Eng.	RC-3	785 平成5年
	建設システム工学科棟	Building for Department of Civil Eng.	RC-4	2,554 昭和46年 (平成15年) (令和5年)
	共通講義棟	Building for General Lecture	RC-3	670 昭和56年
	T棟 地域共同テクノセンター	Building for Human and Natural Science Studies, Regional Collaborative Technocenter	RC-4	1,854 平成12年
	情報科学センター	Information and Computer Science Center	RC-1	300 昭和49年 (令和4年)
	機械工学科実習工場	Machine Practice Workshop	S-1	356 昭和42年 (令和2年)
	機械工学科実習工場	Machine Practice Workshop	S-1	317 昭和42年
	社会基盤メンテナンス教育センター (教室)	Infrastructure Maintenance Educational Center (for Study)	S-1	37 平成26年
	社会基盤メンテナンス教育センター (展示)	Infrastructure Maintenance Educational Center (for Exhibition)	S-1	53 平成26年
	図書館	Library	RC-3	1,653 昭和48年
	第1体育館	Gymnasium No.1	S-1	1,718 昭和42年
	第2体育館	Gymnasium No.2	S-2	906 昭和55年
	武道館	Kendo and Judo Training Hall	S-1	531 昭和44年
	弓道場	Kyudo Hall	W	40 平成31年
	青葉会館	Aoba Hall	RC-2	699 昭和57年
	体育器具庫	Warehouse	B-1	59 昭和42年
	トレーニングセンター	Training Room for Physical Fitness	S-1	129 昭和52年
	車庫	Garage	RC-1	149 昭和42年
	ものづくりラボ	Manufacturing Lab	S-1	215 昭和42年
	クラブハウス	Club House	S-1	200 昭和51年
	体育施設開放管理室	Administration Room for Physical Facilities Open to Citizens	RC-1	128 昭和56年
	艇庫	Boathouse	S-1	92 昭和51年
	その他	Others		410 昭和51年
	計 Total		22,972	
学 寮	1号館	Dormitory, Bld1	RC-4	1,454 昭和41年 (平成10年)
	2号館	Dormitory, Bld2	RC-3	568 昭和42年 (平成28年)
	3号館	Dormitory, Bld3	RC-3	1,590 昭和42年 (平成28年)
	2・3号館 (留学生)	Dormitory, Bld2・3 (for foreign students)	RC-3	112 昭和42年 (平成28年)
	4号館	Dormitory, Bld4	RC-3	1,193 昭和44年 (平成31年)
	5号館	Dormitory, Bld5	RC-3	1,610 昭和46年 (令和4年) (令和5年)
	6号館	Dormitory, Bld6	RC-4	2,399 昭和59年
	7号館	Dormitory, Bld7	RC-4	1,655 平成26年
	管理棟	Administration Bldg.	RC-2	191 昭和55年
	管理棟	Administration Bldg.	RC-4	191 昭和54年
	食堂・浴室	Dining Hall-Bathroom	RC-4	1,033 昭和44年
	計 Total		11,996	

区分	名 称	構造	面積 (㎡)	完成年 (改修年等)
職員 宿 舎	1号棟(浜) Lodging house,Bld1 (at Hama)	R-2	149	昭和61年
	2号棟(浜) Lodging house,Bld2 (at Hama)	R-2	149	昭和61年
	1号棟(行永) Lodging house,Bld1 (at Yukinaga)	R-5	677	昭和57年
	2号棟(行永) Lodging house,Bld2 (at Yukinaga)	R-5	1,354	昭和57年
	その他(行永)(ポンプ室等) Others		18	
計 Total			2,347	

■ 図書館蔵書構成

(単位:冊)

	平成27年度 (2015年度)		平成28年度 (2016年度)		平成29年度 (2017年度)		平成30年度 (2018年度)		平成31年度 (2019年度)	
	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書
000 総記	13,663	143	13,863	143	14,063	143	14,269	145	14,480	145
100 哲学	3,797	226	3,829	226	3,848	226	3,874	226	3,883	227
200 歴史	5,614	87	5,669	87	5,683	87	5,698	87	5,807	87
300 社会科学	6,735	446	6,980	446	7,035	446	7,080	446	7,102	447
400 自然科学	12,563	2,581	12,613	2,581	12,697	2,582	12,791	2,583	12,848	2,584
500 工学	21,481	1,832	21,661	1,833	21,850	1,833	22,037	1,835	22,151	1,838
600 産業	808	13	830	13	839	13	852	13	858	13
700 芸術	3,207	60	3,241	61	3,260	61	3,291	61	3,353	61
800 語学	3,027	1,789	3,057	1,821	3,134	1,848	3,169	1,878	3,198	1,900
900 文学	9,961	1,191	10,005	1,192	10,053	1,195	10,149	1,197	10,186	1,201
	80,856	8,368	81,748	8,403	82,462	8,434	83,210	8,471	83,866	8,503

	令和2年度 (2020年度)		令和3年度 (2021年度)		令和4年度 (2022年度)		令和5年度 (2023年度)		令和6年度 (2024年度)	
	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書
000 総記	14,640	146	14,817	146	14,952	146	15,018	146	15,109	144
100 哲学	3,917	227	3,989	238	4,008	238	4,015	238	4,022	238
200 歴史	5,818	87	5,826	87	5,839	87	5,844	87	5,855	87
300 社会科学	7,169	447	7,214	448	7,240	448	7,246	448	7,271	454
400 自然科学	12,956	2,588	13,063	2,590	13,174	2,595	13,199	2,599	13,197	2,599
500 工学	22,243	1,844	22,389	1,844	22,521	1,850	22,551	1,850	22,466	1,841
600 産業	864	13	869	13	872	13	876	13	882	13
700 芸術	3,373	61	3,402	62	3,428	63	3,432	63	3,473	63
800 語学	3,240	1,914	3,280	1,923	3,325	1,929	3,340	1,929	3,347	1,931
900 文学	10,216	1,201	10,304	1,201	10,325	1,201	10,332	1,202	10,364	1,203
	84,436	8,528	85,153	8,552	85,684	8,570	85,853	8,575	85,986	8,573

■ 決算の記録

収 入 額 (自己収入)

(単位:千円)

科目 \ 年度	H26	H27	H28	H29	H30	H31/R1	R2	R3	R4	R5
授業料及び入学検定料	208,420	211,858	209,142	210,021	208,845	206,277	211,902	211,720	206,108	204,999
学 校 財 産 処 分 収 入										
雑 収 入	13,347	13,548	15,451	17,387	18,321	15,839	16,024	15,227	17,659	20,541
合 計	221,767	225,406	224,593	227,408	227,166	222,116	227,926	226,947	223,767	225,540

支 出 額 (産学連携等研究経費・補助金・寄附金事業費等を除く)

(単位:千円)

科目 \ 年度	H26	H27	H28	H29	H30	H31/R1	R2	R3	R4	R5
人 件 費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
物 件 費	296,320	365,342	299,519	280,264	327,904	373,180	323,029	286,264	326,260	395,624
施 設 整 備 費	16,285	349,586	0	35,078	20,266	67,910	681,943	173,109	140,443	279,798
合 計	312,605	714,928	299,519	315,342	348,170	441,090	1,004,972	459,373	466,703	675,422

編集後記

舞鶴高専は本年、創立60周年という大きな節目を迎えました。このたび、皆様のご支援とご協力のもと、「舞鶴高専創立60周年記念誌」を発刊できましたことを、編集委員会一同、心より嬉しく思っております。

本誌は、10年前に刊行された「舞鶴高専創立50周年記念誌」の続編として、本校のこの10年間の歩みを中心にまとめたものです。教育・研究活動はもとより、学生の活躍、地域との連携など、この10年間の舞鶴高専の活動を記録し、次代へと受け継ぐことを目指しました。また、前回ご好評をいただいた旧教職員の回想、本校卒業生である教職員による寄稿も掲載し、本校の歴史を語るうえで欠かせない声を収めております。

創立以来60年、本校を取り巻く環境は大きく変化し続けておりますが、地域に根ざす高等教育機関としての使命と責任は、今後ますます重要になるものと感じております。本校がこれからも変化を恐れず、教育・研究に邁進し、次なる10年間へと歩みを進めていけるよう、引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりますが、本誌の編集にあたり、原稿執筆・資料提供等、多大なるご協力を賜りました皆様に、編集委員会一同、心より御礼申し上げます。

創立60周年記念事業委員会

舞鶴高専 創立60周年記念誌

2025年9月30日 発行

発	行	舞鶴工業高等専門学校
		〒625-8511 京都府舞鶴市字白屋234番地
		TEL：0773-62-5600(代) FAX：0773-62-5558
編	集	創立60周年記念事業委員会
印刷・製本		阿部印刷工業株式会社



独立行政法人国立高等専門学校機構
舞鶴工業高等専門学校
National Institute of Technology (KOSEN), Maizuru College